博 多 190

― 博多遺跡群第221次調査報告(1) ―

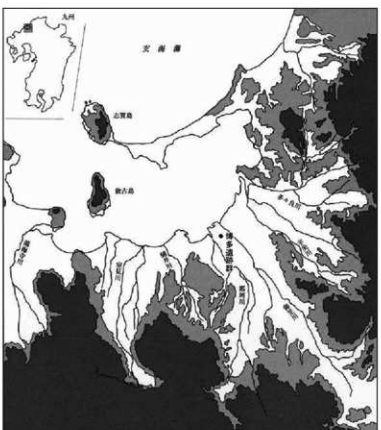
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1467集

2023

福 岡 市 教 育 委 員 会

博多190

— 博多遺跡群第221次調査報告(1) —



遺跡略号　HKT－221
調査番号　1805

2023

福岡市教育委員会

1．Ⅰ区全景・第２・３面（南から）

2．SX31 検出状況（南から）

３．SX31 動物遺体出土状況（南から）

４．SX36 動物遺体出土状況（北から）

５．221 次調査区全景（北東から）

６．Ⅱ区全景・第２面（北東から）

７．Ⅱ区全景・第２面（西から）

８．Ⅱ区石積遺構検出風景（南から）

１．花卉双蝶文鏡（鏡背）
２．花卉双蝶文鏡（鏡面・Ⅱ区 SX141）
３．半円形石製品（Ⅱ区 SX141）
４．大乗の墨書のある碗（Ⅰ区・SX32）

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも博多湾に面する那珂川から御笠川一帯には、古代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の都市化により失われる文化財を保護し、後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、学校跡地整備事業にともなう博多遺跡群第221次発掘調査について報告するものです。この調査では中世の港湾施設である護岸の石積遺構を検出するとともに、白磁や青磁など中国などからもたらされた陶磁器類や国産の瓦、動物遺体などの貴重な遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明するためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。

令和５年３月23日

福岡市教育委員会
教育長　石橋　正信

例　言

1．本書は福岡市が学校跡地整備事業に伴い、博多区上川端町で発掘調査を実施した博多遺跡群第221次調査の報告書である。本書は、平成30年度の調査内容である。
2．発掘調査および整理報告書作成は、合達事業として実施した。
3．実測図作成および写真撮影の実施は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、井上 繭子、三浦 萌、藤野 雅基、名取 さつき
遺構写真撮影	常松、井上、三浦
遺物実測図作成	山崎 龍雄、山崎 賀代子、林田 憲三、平田 春美、久富 美智子、櫻町 陽子、野村 美樹、池田 晃子、平川 敬治
遺物写真撮影	常松、写測エンジニアリング
製図	常松、井上、山崎 龍雄、山崎 賀代子、林 由紀子、野村 美樹

4．本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
5．本文中に掲載した方位は、座標北を示す。
6．本書に使用した国土地理院データは福岡市WEBGISの情報をもとに作成したものである。
7．本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下のとおりである。
　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　P：柱穴　SX：その他の遺構
8．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
9．調査・および報告書作成にあたり、多くの方々のご支援、ご協力を賜った。遺物写真は、写測エンジニアリングに委託。地質については下山 正一氏（佐賀大学理工学部）、動物考古学については新美 倫子氏（名古屋大学博物館）、保存科学的調査については比佐 陽一郎氏（福岡市文化財活用課）に特論を執筆していただいた。
10．221次調査の関連調査として博多遺跡群２次、14次、34次、54次の調査内容について収録した。
11．本書の執筆は常松（Ⅰ区）、井上（Ⅱ区）、三浦（Ⅲ章）、池崎 謙二（史跡整備活用課 調査指導員）、山崎 龍雄、下山 正一、新美 倫子、比佐 陽一郎が行い、個別の遺構や遺物については文末に執筆者名を記した。
12．本書の編集は、井上と協議のうえ常松が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	221次	調査略号	HKT-221
調査番号	1805	分布地図図幅名	049天神	遺跡登録番号	0121
調査地	福岡市博多区上川端97-1地内			平成30年度調査面積	700㎡
調査期間	平成30（2018）年４月26日～平成31（2019）年３月31日				
整理期間	平成31（2019）年４月１日～令和４（2022）年３月31日				

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1．遺跡の立地と環境 …… 3
　2．遺跡の歴史 …… 3
　3．221次調査、および付近の調査について …… 6

Ⅲ　調査の記録 …… 7

Ⅳ　Ⅰ区の調査 …… 10
　1．調査区の概要 …… 10
　2．北壁土層 …… 10
　3．遺構と遺物 …… 12
　（1）遺構の変遷 …… 12
　（2）第1・2面 …… 14
　①SX34 …… 14
　②SX20・SX21・SK22 …… 18
　③SX31 …… 21
　（3）第3面の調査 …… 25
　①SX27 …… 25
　②SX28 …… 25
　③SX32 …… 30
　④SX33 …… 30
　（4）第4面の調査 …… 32
　（5）第5面の調査 …… 34
　（6）井戸SE01・26・38・47 …… 36
　（7）木製品 …… 41
　（8）検出面出土遺物 …… 41
　（9）下層出土遺物 …… 44
　（10）金属器 …… 44
　4．小結 …… 48

Ⅴ　Ⅱ区の調査 …… 53
1．調査の概要 …… 53
2．土層 …… 58
3．遺構と遺物 …… 58
（1）第1面 …… 58
①集積遺構・石積土坑 …… 58
②井戸 …… 64
③土坑 …… 70
（2）第1面下 …… 72
①集積遺構 …… 72
（3）第2面 …… 80
①集積遺構 …… 80
②井戸 …… 89
③土坑・ピット …… 90
④池状遺構SK147 …… 96
⑤獣骨集積SK184・185 …… 130
（4）土器溜 …… 133
（5）包含層出土遺物 …… 137
4．小結 …… 146

Ⅵ　博多遺跡群第221次調査区周辺の調査 …… 173
1．博多遺跡群第2次調査 …… 181
2．博多遺跡群第14次調査 …… 183
3．博多遺跡群第34次調査 …… 219
4．博多遺跡群第54次調査 …… 229

Ⅶ　自然科学分析報告 …… 233
1．博多遺跡群第221次調査北側壁面の自然層所見 …… 233
2．博多遺跡群221次・14次調査出土の動物遺体 …… 239
3．博多遺跡群出土資料の保存科学的調査について …… 265

Ⅷ　まとめ …… 271

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市博多区上川端所在の旧冷泉小学校は、平成10（1998）年度に実施されていた博多部（冷泉、奈良屋、御供所、大浜）４小学校の統合に伴い、平成13（2001）年４月に廃校となった。

これまで旧冷泉小学校跡地（約8,800㎡）内に、川端通り側に平成17（2005）年４月に知的障がい児通所施設（約1,100㎡）、平成18（2006）年４月に冷泉公民館・老人いこいの家（約900㎡）が建設された。そして平成23（2011）年４月には旧冷泉公民館を改修した「はかた伝統工芸館」が整備された。一方運動場および体育館は、教育委員会の学校施設開放事業により地域団体等の利用に供されてきた。このような中、平成27年12月に跡地活用の検討に関連して、教育委員会教育環境部施設課から埋蔵文化財の事前審査願い（事前審査番号27-1-122）が埋蔵文化財課に提出され、跡地活用を含めた埋蔵文化財の対応について具体的な協議を開始した。

博多校区冷泉自治協議会は、平成28（2016）年６月７日に、歴史や賑わい、地域コミュニティの場としての有効活用を願う地域の総意として「旧冷泉小学校の跡地利用に関する要望書」を市に対して提出し、耐震強度不足から使用を中止していた既存校舎については解体をすすめることで理解を示した。その動向をうけて、教育委員会と住宅都市局は、既存校舎の解体実施にむけて連携して地域と協議を行い、平成29（2017）年３月末に体育館を除く校舎棟の解体が完了した。

一方で、教育委員会施設課と埋蔵文化財課は、埋蔵文化財の取り扱いにおける協議を本格化し、解体時に合わせた確認調査の進め方を検討した。

校舎棟の解体後、平成29（2017）年５月に校舎跡部分について確認調査を行ったところ現地表面下250㎝ほどで、ほぼ全面に遺構や遺物（中世の遺跡）が遺存していることが確認された。埋蔵文化財課は、これまでの協議で、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから、開発が埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は発掘調査を行うとしてきた。運動場部分の確認調査の内容をふまえて、遺構の保全に関して教育委員会と協議を行った。その結果、跡地活用を推進するにあたっては、埋蔵文化財への影響は回避できない可能性が高く、学校跡地、約6,300㎡について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。この際、はかた伝統工芸館は当面存続することとなったため、それを除外した範囲について発掘調査を行うこととなった。

平成30（2018）年４月26日から旧校舎があった北西端をⅠ区（350㎡）として調査に着手した。10月から東側のⅡ区（353.5㎡）の発掘調査に着手した。Ⅱ区の第２面で中世の港湾施設と考えられる石積遺構を検出した。この石積遺構については、「博多191」で詳細を報告する。Ⅰ区及びⅡ区の上面の発掘調査成果については、平成31年度以降、出土品や測量成果などの資料整理を行い、調査成果について報告書作成作業を実施することとなった。

平成31（2019）年４月以降、体育館が解体され、「はかた伝統工芸館」は、令和３（2021）年３月末に閉館し、解体された。引き続きそれぞれの跡地の発掘調査を行い、令和３年２月にすべての発掘調査が終了した。整理作業については、発掘調査と並行しながら令和４（2022）年度も継続して行っている。

ここでは、Ⅰ区及びⅡ区上面について報告を行う。

2．調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成30年度・資料整理：平成31年度～令和４年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課　課長　大庭　康時（平成30年度）
菅波　正人（平成31年度～）
同課調査第１係長　吉武　　学（平成30年度～令和２年度）
本田浩二郎（令和３年度～）
同課調査第２係長　大塚　紀宜（平成30～31年度）
藏冨士　寛（令和２～３年度）
井上　繭子（令和４年度）

調査庶務：文化財活用課　松原加奈枝（平成30年度～令和２年度）
井出　瑞江（令和３年度）
内藤　　愛（令和３年度～）

事前審査：埋蔵文化財課　事前審査係長　本田浩二郎（平成30年度～令和２年度）
田上勇一郎（令和３～４年度）
事前審査係文化財主事　吉田　大輔（平成30年度）
中尾　祐太（平成30～31年度）
松﨑　友理（平成31年度～令和２年度）
神　　啓崇（令和２～３年度）
比嘉えりか（令和４年度）

調査・報告担当：埋蔵文化財課　主任文化財主事　常松　幹雄
主任文化財主事　井上　繭子（平成30年度）
（平成31 年度～令和３年度：史跡整備活用課主査
令和４年度：埋蔵文化財課調査第２係長）
文化財主事　三浦　　萌

調査報告にあたっては、多くの機関および分野の方々から指導、助言をいただいた（順不同敬称略）。
機関：東京国立博物館
佐伯弘次（九州大学名誉教授）山内晋次（神戸女子大学教授）小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）下山　正一氏（佐賀大学理工学部非常勤講師）磯　望（西南学院大学名誉教授）新美倫子（名古屋大学博物館准教授）伊藤信二（東京国立博物館　博物館教育課長）石黒ひさ子（明治大学兼任講師）桃崎祐輔（福岡大学教授）村木二郎（国立歴史民俗博物館准教授）田中克子（アジア水中考古学研究所理事）中島圭一（慶応義塾大学教授）鈴木康之（県立広島大学教授）榎本　渉（国際日本文化研究センター准教授）小出麻友美（千葉県立中央博物館研究員）池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）降矢哲男（京都国立博物館研究員）坪根伸也　長　直信（大分市教育委員会）江上智恵（久山町教育委員会）木村幾多郎（大分市歴史資料館元館長）　所属等は調査当時。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地と環境

博多遺跡群は福岡平野を流れる御笠川と那珂川、そして博多湾内の海流の作用によって形成された砂丘上に位置している。博多浜といわれる砂丘は箱崎遺跡などが立地する箱崎砂堆の東端部であった。

砂丘は並行する三つの砂丘によって形成されており、内陸から砂丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと称されている（小林・磯・佐伯・高倉1998）。現在の明治通りから海側の砂丘Ⅲは「息浜」、内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」に相当する。まず「博多浜」が形成され、つづいて「息浜」は陸化し、11世紀前半頃から南側を中心として集落がみられるようになる。その後、両者は陸橋によってつながることとなる。

2．遺跡の歴史

博多遺跡群内では縄文時代晩期の遺物が検出されているが、明確な遺構は発見されていない。遺構として最も古いものは遺跡の西端で発見された弥生時代前期の甕棺墓となる（大庭2019）。弥生時代の遺構は砂丘Ⅰ上と砂丘Ⅱ南部の高まりに多く見られる。中期前半になると竪穴住居址や甕棺墓がみられるようになり、砂丘上で集落が営まれていたことがわかっている。

古墳時代の遺構は弥生時代と同様に砂丘Ⅰと砂丘Ⅱ上にみられる。前期では博多浜の内陸側で集落が形成されるようになり、近畿・東海・山陰など九州外からの土器が発見されている。また中期になると全長56m以上の前方後円墳（博多１号墳）が築造されている（市報147・150・1270集）。博多１号墳の他にも109次調査（市報629集）でも中期後半の前方後円墳の可能性が高い遺構が発見されている。このことから古墳時代の博多遺跡群は、那珂川下流域の首長墓がつくられ、交易の拠点としてもさまざまな地域の集団を受け入れて繁栄していたものと考えられる。

７世紀後半以降は「筑紫館」やそれを前身とした「鴻臚館」を拠点として、９世紀以降は唐や北宋など中国商人との貿易が行われた。その後「大宋国商客宿坊（房）」が永承二（1047）年に放火された事件が『扶桑略記』に記されている。この「大宋国商客宿坊（房）」は筑紫鴻臚館と考えられており、この放火事件後に鴻臚館は衰退したものとされている。一方の博多では、古代に入ると官衙的な性格を持つ区画溝や石帯、帯金具、瓦類などの遺物が発見されるようになり、11世紀後半になると遺構や遺物（特に中国産陶磁器の出土）が劇的に増加している。このことから今まで鴻臚館が担っていた貿易の要所としての機能が、中世には博多へと移ったとされている。

中世になると砂丘Ⅲの「息浜」上にも遺構が多くみられるようになる。前述したように鴻臚館から交易の中心が博多へと移り、宋の商人らによって宋人街いわゆる「唐房」が作られる。遺跡からは貿易陶磁や甕や木製の結桶といったコンテナ代わりの大型容器類、釉が溶けて接合したままの合子とといった状態の陶磁器、貿易陶磁の大量一括廃棄遺構、墨書陶磁器などが出土するようになり、博多が日宋貿易の主要な中継地となったことがうかがえる（大庭2019）。13世紀後半には元が襲来した「元寇」がある。文永の役では息浜に本陣が置かれ、博多も戦場となり、現在の博多小学校のあたりに石塁（石垣）が築かれた（111次調査・市報711集）。石塁（石垣）はその後の息浜の町割に影響をあたえたようである。13世紀末に置かれた鎮西探題は、鎌倉幕府の衰退とともに滅亡した。息浜はその鎮西探題の滅亡以降に発展している。その後も室町幕府によっておかれた九州探題をめぐる問題で、博多はしばしば戦火に見舞われることとなる。またこの時期の博多は、戦国時代の古文書から博多浜側を大内氏が、息浜側を大友氏が支配していたとされる。その後大内氏の滅亡により、博多の街は大友氏の支配下となる。フロイスの『日本史』には永禄２（1559）年に大友氏の配下であった筑紫惟門が叛起する事件が記されており、博多の利権を求めた争いは熾烈をきわめていたことが記されている。ところで『筑前国続風土記』によると、比恵川は以前、博多の南側を流れていたものの、治水事業として大友氏の家臣であった臼杵安房守鑑続によって、博多湾へ直接流れ込むように北側へと開削され、流れ

図1　博多遺跡群の立地（1/40,000）■ 221 次調査地点

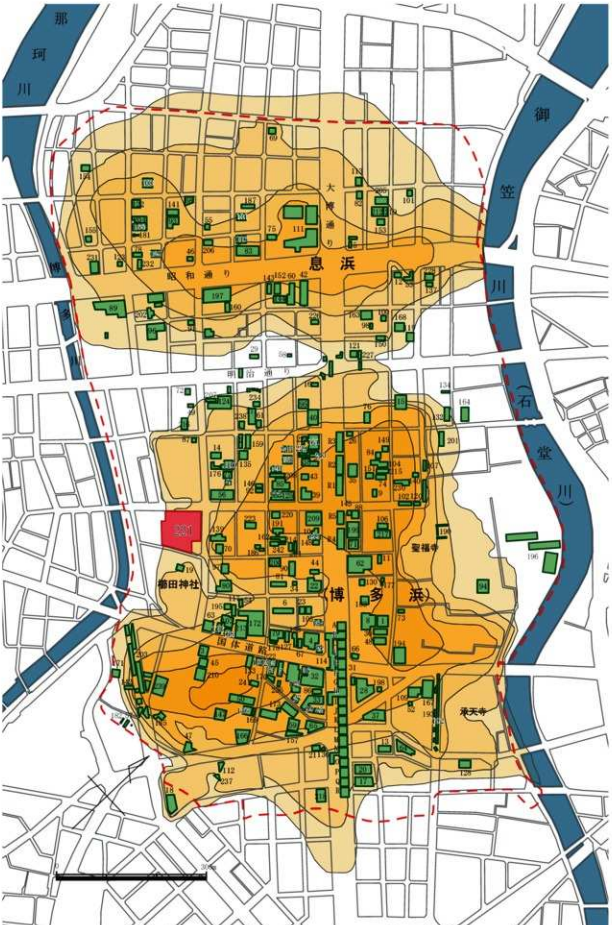


図２　博多遺跡群における調査地点

を変えられたことがわかっている。これが現在の石堂川である。また同様に臼杵鑑続により南部の防衛のためとして東西方向へ堀が造られている。これが現在房州堀とよばれるものである。天正年間には龍造寺氏、続いて島津氏と相次いで戦火に見まわれて焦土と化している。その後天正15年に豊臣秀吉による太閤町割とよばれる復興事業によって、博多の町の現在の区画の原型が成立した。「息浜」と「博多浜」の谷部で行われた29次調査（市報148集）では埋立遺構が発見されている。この埋立遺構は報告書によると「現街区（太閤町割）に沿った計画的なものである事・客土中の遺物の上限が若干の混入も認められるが16世紀末～17世紀前半である事・多量の火熱を受けた瓦を使用し、埋立が２度にわたって行われている状況が『石城志』の記述と符合する事から慶長５（1600）年の小早川秀秋・慶長18（1613）年の黒田長政の埋立による可能性が高い」とされている。

３．221次調査、および付近の調査について

さて、今回行われた221次調査地点は櫛田神社と冷泉公園の間に位置しており、旧冷泉小学校の跡地である。この地にはかつて亀山上皇の発願による大乗寺が建立されていたとされている。同敷地内には亀山上皇の勅願石、県指定考古資料である地蔵菩薩板碑、碇石が集められている。221次調査地周辺の調査をみると、当調査地の東側では基盤砂丘面が徐々に上昇しつつ確認されていることがわかる。また都市計画図の等高線や発掘による基盤砂丘面、及び最下層面の遺構年代から中世（石組遺構の年代である12世紀前後）の海岸線を推定するとⅧ章まとめの図のようになり、221次調査地も海岸線の水際に位置することがわかる。なお161次調査地（市報1038集）と176次調査地（市報1043集）では基盤砂丘面は確認できていないものの、12世紀代の埋め立て跡が確認できているため、地図上では一部内陸と判定している。

過去に行われた周辺の調査では、主に中世前半の遺物や遺構が発見されている。北東側で行われた第14次調査（本報告書内にて報告）では白磁のまとまった出土がみられた。白磁が出土した土坑は当時の海岸線付近であることから、荷揚げの際に破損した白磁を廃棄したものと考えられる。第56次調査でも土坑（SK0281）から陶磁器がまとまって出土した（市報326集）。この陶磁器も破損がみられることから、14次調査で検出された白磁と同様の廃棄遺構と考えられ、またその出土状況から一辺１ｍ前後の木箱に割れた陶磁器を投げ棄てたものと考えられている。また56次調査地点は基盤砂丘面が確認されていることなどから、14次調査地点よりも内陸にあったものと考えられる。

【参考文献】

大庭康時2019『博多の考古学』高志書院
小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰1998『福岡平野の古環境と遺跡立地』（財）九州大学出版会

Ⅲ　調査の記録

平成30年度の発掘調査は、学校跡地の北側、冷泉公園側から着手した。運動場は、学校施設開放事業で年度途中まで団体等の利用が行われていたため、仮囲いフェンスが設けられた校舎跡地の西側からⅠ区、Ⅱ区を設定した。

試掘調査によって校舎跡地は、現地表面から１～２ｍ程度の深さまでは攪乱をうけていたが、それ以下は中世の生活面が遺存しているとみられた。Ⅰ区、Ⅱ区とも上層の攪乱層及び近現代層を除去した面を第１面とした。

Ⅰ区

第１・２面は　おおむね標高1.0～1.2m、そこから30cm程度掘り下げた標高0.7～0.9mを第３・４面、その下の標高0.6m前後の灰黄褐色粗砂層上面を第５面とした。

Ⅱ区

標高1.5～1.9mの暗茶褐色土上面を第１面、標高1.3～1.5mを第２面、石積遺構の前面粗砂を除去した標高1.0mの面を第３面とした。

北側の通用門に近い北西部の350㎡をⅠ区として４月26日からバックホーによる掘削を開始した。学校跡地は、冷泉公園と櫛田神社をむすぶ土井通り側から川端通り側の旧校庭に向かって緩斜面をなしていた。これは巻頭図版３の上段にある博多川にかかる橋、その延長上に位置する旧校庭が那珂川（博多川）の氾濫原にあたり浸食をうけたことを示している。

Ⅰ区の試掘トレンチの所見では、旧河川とみられる粗砂層にシルト層が互層をなした状況である。およそ一カ月におよぶ表土掘削と遺構検出でⅠ区西側において石組土坑SX20や瓦組の井戸SE01（近代）が検出された。さらに粗砂とシルトの互層を掘り下げ遺構検出を行う過程で、崇寧通宝や洪武通宝などの中国貨幣や唐草文軒平瓦や丸瓦が出土した。陶磁器類は細片が多い。

７月にかけての調査では、上層で石組遺構１基、石・瓦組遺構１基のほか土坑４基が検出された。遺構はおよそ東西方向に軸をもつもの４基とそれらと直交する南北方向に軸をもつ土坑を確認した。また西北側の溝で砂岩製の板碑（弥勒の種字）が出土した。

Ⅰ区上面の第２面は、中世後半の14･15世紀頃にあたる小祠や板碑などが配されていたとみられる。石・瓦組遺構は祠跡であった可能性がある。７月末に調査事務所のユニットハウスが組まれ、水、電気も８月初めまでに整備された。

８月に入り作業員を約15名増員。西北側の板碑が出土した溝（SX27）は東西方向の溝（SX28）と関連する区画溝として機能したとみられる。その上面の中世後半の石積や瓦積の基礎を検出した段階で全景写真を撮影した（巻頭図版１）。Ⅰ区で出土した「大乗」の墨書がある天目碗は、大乗寺に関連する資料として注目される。大乗寺は西大寺末の律宗寺院で亀山法皇の勅願寺と伝えられる。

調査区東側の窪地状の遺構（SX34）では多量の瓦や陶磁器類が検出された。軒丸瓦の型式から17世紀代に比定される。

９月から主任文化財主事１名を増員。中層の遺構として桶組井戸２基を検出、竹製の繊維が40×60cmの範囲で確認された。調査区東側では南北にならぶ杭列（径10cm）が検出された。

調査区東側の17世紀後半の窪地状の遺構（SX34）からの出土物に一字一石経３点（河・山・尼）、頂部三角形の板に「六道弥陀地蔵尊」の墨書がみられた。

粗砂が堆積する下層について湧水点まで掘削を行う。この時点で下山正一氏を招聘し調査区の堆積物について教示をうける。下山氏による堆積環境を要約すると、大礫混じり粗粒砂層と成層した砂層は河川河口域に達した洪水性堆積物、細礫混じり粗粒砂層は海成堆積物だが、潮間帯中部付近の干潟堆積物、泥混じり砂層も海成堆積物で、潮間帯上部付近の干潟堆積物と考えられる。泥混じり砂層上

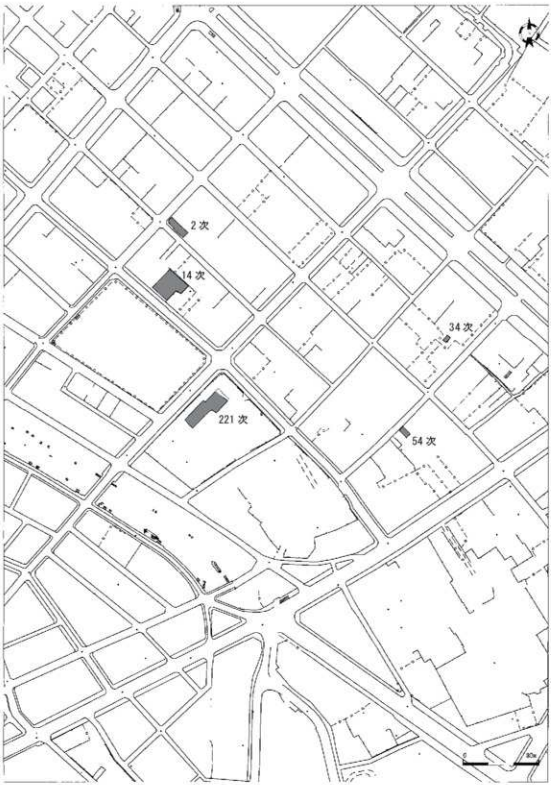


図３　博多遺跡群 221 次および本書掲載の調査区（1/4,000）

限付近では墓類の根茎のほか、人の踏み抜き痕が存在するので、干潮時に長時間干上がるような場所であったと推定されるとのことである。生活空間を広げるため、干潟を埋めて盛土を行ったと考えられる（詳細はⅦ章下山氏の論考参照）。

10月９日からⅠ区の東側調査区Ⅱ区（400㎡）を掘削し、遺構検出に着手した。

上層の遺構として中世後半の土坑（廃棄土坑）のほか石組遺構や近世の土坑・井戸などを検出した。石組に供養塔や石塔が使われていることも注目される。

11月中旬になり文化財主事１名を増員。これまでの掘削で上面の遺構（標高1.8m）として中世後半の土坑のほか石組遺構や近世の土坑・井戸などを検出。11月３週目に入り粗砂層に沿って西面するように構築された石積遺構を確認。石積は、南北12mにわたる規模でさらに延伸すると見込まれる。石積は上部の標高が1.6mほど、根石の上面で1.3mをはかる。護岸を目的とするものか。さらに土層観察をしながら、石積遺構の位置および構造を明らかにすることにした。

Ⅱ区では石積遺構とその西側で玉縁口縁の白磁のほか糸切底の土師皿が出土。石積遺構の西南の141遺構で八花鏡（径7.2cm）１面が出土。花弁双蝶文鏡であることが判明。このほか「櫛田宮」の文字のある瓦が出土した。

12月から１月にかけて石積遺構の検出と石積遺構西側の緩斜面について掘削を継続した。

平成31年２月８日、中世の港湾遺跡について知見の広い小野正敏氏、日宋貿易の研究をすすめてこられた山内晋次氏が石積遺構を視察。石積遺構の先進性と重要性について評価を得ることができた。

年度末にかけて遺構実測をすすめ、石積遺構については調査区の西と住宅供給公社の屋上から全景撮影を実施し、平成30年度の調査の区切りとした。

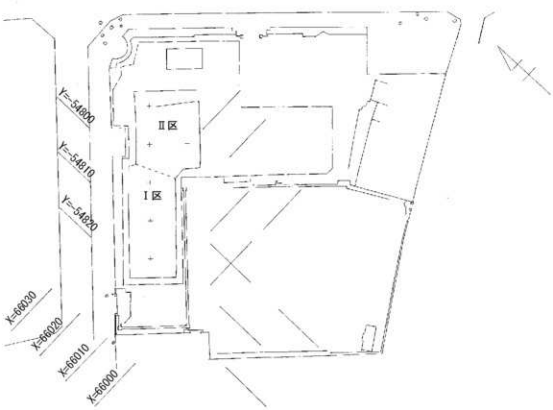


図４　博多遺跡群221次Ⅰ・Ⅱ調査区（1/1,000）

Ⅳ　Ⅰ区の調査

1．調査区の概要

Ⅰ区は北側通用門の南東に設定した360㎡（東西30m、南北12m）の調査区である。昭和40年代はじめ校庭の北西に建てられたRC造校舎の跡地にあたる。もともと校庭は那珂川の支流である博多川の氾濫原にあたり、東側の土井通り側から60cmほど低くなっており、その高低差は学校敷地内の東西の境目にあるスロープや階段としてあらわれていた。

2．北壁土層（図５）

Ⅰ区の土層は上面で29.5m、下面で24.0mほどである。地表面の標高は、東側地表面で3.9m、西端で約15cm低くなっている。建物の基礎杭など深い構造物は確認されていない。地表から1.8～2.0mは建物の解体後に真砂土で埋められた。

約2.0mの客土を除去した後に人力による遺構検出を開始し標高1.5mから1.3mで第１・２面(近代、近世・中世後半）の遺構を検出した。

Ⅰ区北側の土層図をもとに調査区の立地について解説する。

地表面（標高3.9m～3.7m）から1.5mまでは旧校舎の解体に伴う攪乱である。最下層の粗砂層は東側で標高0.5m、西端で標高0mほどで那珂川に向かって緩く傾斜している。これは旧況の氾濫原の名残である。

真砂土直下の標高2.0m前後に褐色土や暗灰色の土層の堆積が認められ、その下に厚さ60～80cmで暗茶灰色土層が覆っている。標高1.5m付近に堆積した暗茶灰色土層は中世（後半）の埋め土（人工堆積土層）で、石積土坑や瓦を再利用した遺構、土坑は主軸方向を同じくすることから中世（後半）の時期とみなすことができる（第２面)。

第２面下で検出されたSX27・SX28は東西と南北の区画溝の一部であり、SX28の東に接するSX32では「大乗」の墨書がある国産天目碗の底部が出土した。「大乗」は13世紀後半以降に創建された大乗寺に関連するもので、これまで版木による寺名が軒丸や軒平の瓦で確認されていた。区画溝を構成する遺構は標高1.2m～1.3mで第２面の遺構との切り合い関係からSX27・SX28・SX32などの区画溝が埋まったのは14世紀代後半頃と推定される（第３面)。

第３面直下は黒色土層が互層状に堆積しており、この厚さ50～70cmの堆積土から動物遺体や植物遺体が検出された。この層は下山論考で泥混じり砂層と表現されており、潮流停止時に沈泥（がた）となって堆積したもので海水感潮域を示唆する堆積状況とされている。この泥混じり砂層と第５面との間の成層した細粒砂層はその連続性から鍵層とみなされている（第４面)。

第４面の基盤となるのが標高50cm以下の黄色の粗粒砂層で、上面は細礫、下面は大礫を含んでいる。下山論考では細礫混じり粗粒砂層、粗礫混じり粗粒砂層と表現されている。細礫混じり粗粒砂層スナモグリノ巣穴とみられるパイプ状生痕が多く観察されている。下面の大礫を含む粗粒砂層は砂礫層に近く、下山氏はボーリングで確認された数十cm下の粘土質の締まった地層の存在から厚さ60cm程度と推定している（第５面)。

東側のⅡ区で検出された石積の護岸は上部で1.6m程度、基底部で1.3mであり、護岸の西側にあたるⅠ区にむかって緩やかに傾斜していたことが今回の土層観察によって看取できた。

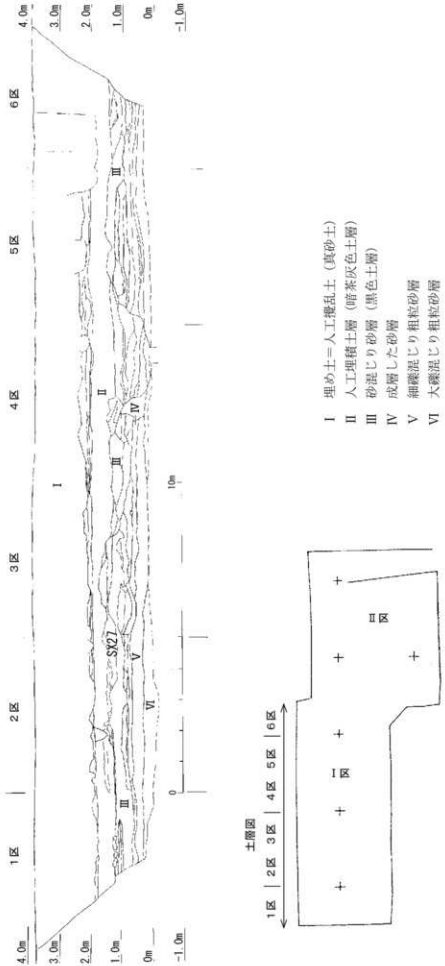


図5　Ⅰ区北壁土層図（1/125）

3．遺構と遺物

（1）遺構の変遷（巻頭図版1・図6・7）

1・2面（標高1.4～1.5m）

西端で石積土坑SX20の基底部の礫が観察された。SX20と主軸方向が共通するSX21、SX22などは標高1.4～1.6mで検出されている。Ⅰ区東端で馬の下顎骨や祭祀的性格のある木製品が出土したSX31は標高1.0mで検出された。また桶組の井戸SE38は標高0.8mで掘り方が確認され-0.5mで桶の下端が確認された。これらは中世後半の区画溝が機能を失ったのちに掘削されたとみられる。Ⅰ区東では東西8m、南北4mの隅丸長方形の大型土坑が検出された。16世紀～17世紀代の遺物が主体をしめている。

3面（標高1.3m）

中世後半の区画溝SX27とSX28は標高1.3mで遺構の掘りこみが確認された。SX27とSX28は、14世紀前半の北側にのびる区画溝の一部とみられる。SX28の東に接するSX32もほぼ同時期の土坑である。SX27では板碑、SX28では13世紀から14世紀代の軒平瓦、SX32では「大乗」の墨書のある天目碗が検出された。北側に向かって

4面（標高0.9～1.0m）

区画溝の下面で検出された馬などの動物遺体は、その前段の陸地化する過程で遺棄されたものとみられる。動物遺体が検出された標高1.0～1.2mは黒色粘質土層の堆積であり、植物皮を編み込んだ有機質の製品も西側の標高0.9mほどの面で検出されている。13世紀代以後、植物が繁茂する時期を経て陸地化がすすむ様子がうかがえる。

5面（標高0～0.6m）

4面の下は黄白色砂質土層を挟んで、標高0.6mから0mにかけて粗砂層の堆積が確認できる。それ以下のレベルはバックホーによる掘削で氾濫原の堆積は湧水のため粗砂層はさらに1.5m以上続いていることが確認できた。

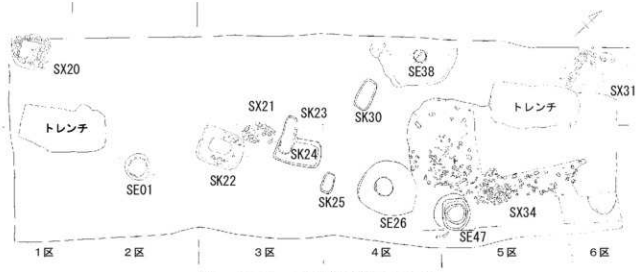


図6　Ⅰ区1・2面遺構配置図（1/150）

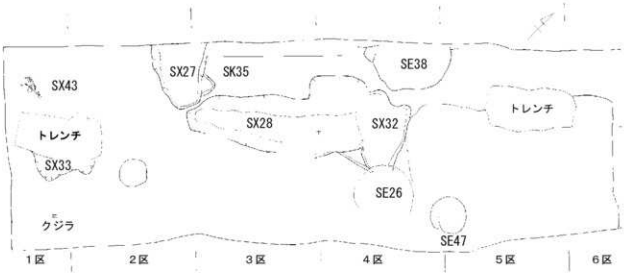


図7　Ⅰ区3面遺構配置図（1/150）

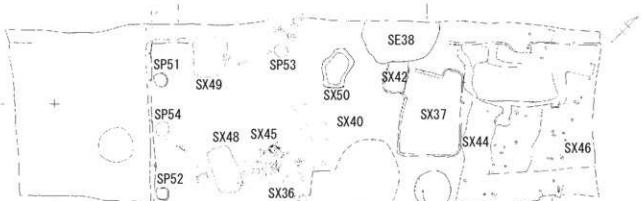


図8　Ⅰ区4面遺構配置図（1/150）

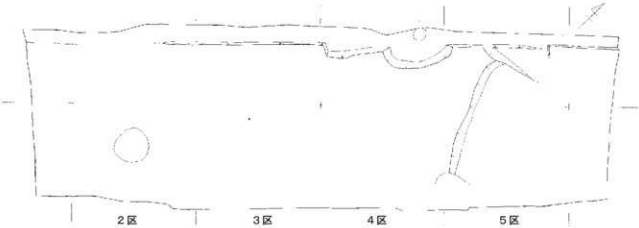


図9　Ⅰ区5面遺構配置図（1/150）

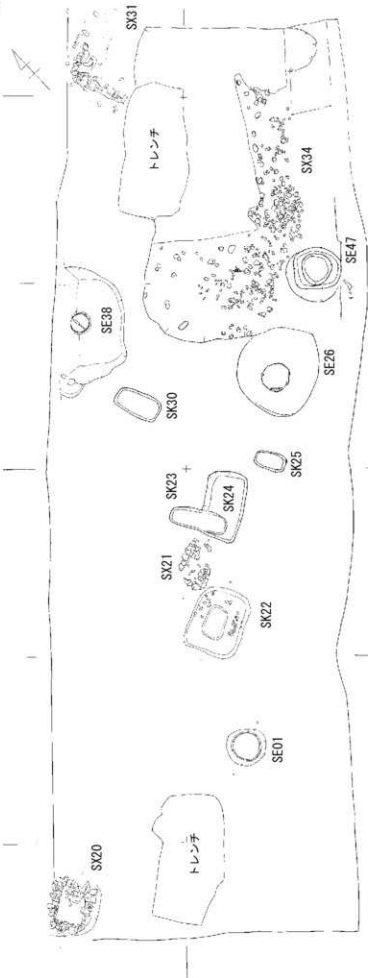


図10　Ⅰ区1・2面遺構配置図（1/100）

（2）第1・2面

①SX34（図10・11）

SX34はⅠ区東で検出された東西8m、南北4m、深さ30～40cmの隅丸長方形の土坑である。埋土は黒色の粘質土で瓦や陶磁器類、礫が全体的にまとまった状態で検出された。瓦類の型式や陶磁器の構成から16世紀～17世紀にかけての遺物が主体を占め、12世紀代の陶磁器や瓦器椀は下層に堆積したものが混入したとみられる。

大乗寺は亀山法皇の勅願寺と伝えられ、法皇山宝珠院と号した奈良西大寺末の律宗寺院とされている。永禄八（1565）年頃に浄土宗、寛永二一（1644）年福岡藩二代藩主黒田忠之が真言宗（京都仁和寺末）に改めた。寺地は東西五二間余・南北四十間と広大であった。門は初め東側大乗寺前町にあったが、天明6（1786）年御霊屋・観音堂の造替に際し堂宇を西向きとし、表門を新川端町の方に設けられた。大正九（1920）年に現中央区大手門一丁目の長宮院境内に合併・移転された。現在は、康永四（1345）年六月二四日銘がある地蔵菩薩像板碑や蒙古碇石が残っており、これらは福岡県指定文化財になっている。

「福岡県の地名」『日本歴史地名大系』第41巻、2004平凡社

SX34は、主体となる遺物の時期や206の「六道弥陀地蔵尊」の札に密教的な信仰を見出すのであれば真言宗に改められた17世紀代に埋没した可能性がたかい。

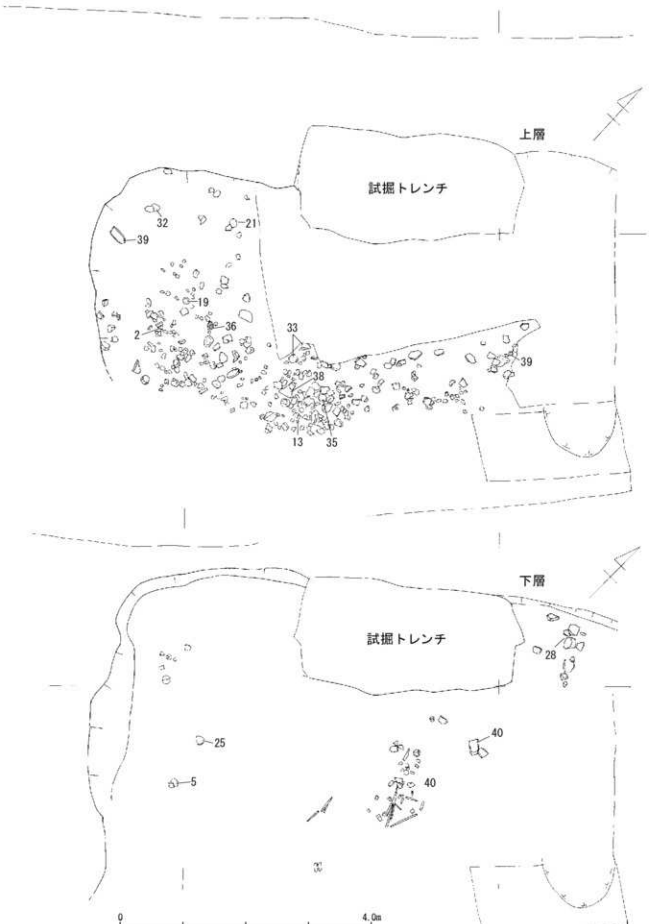


図 11　Ⅰ区 SX34 遺構実測図（1/60）

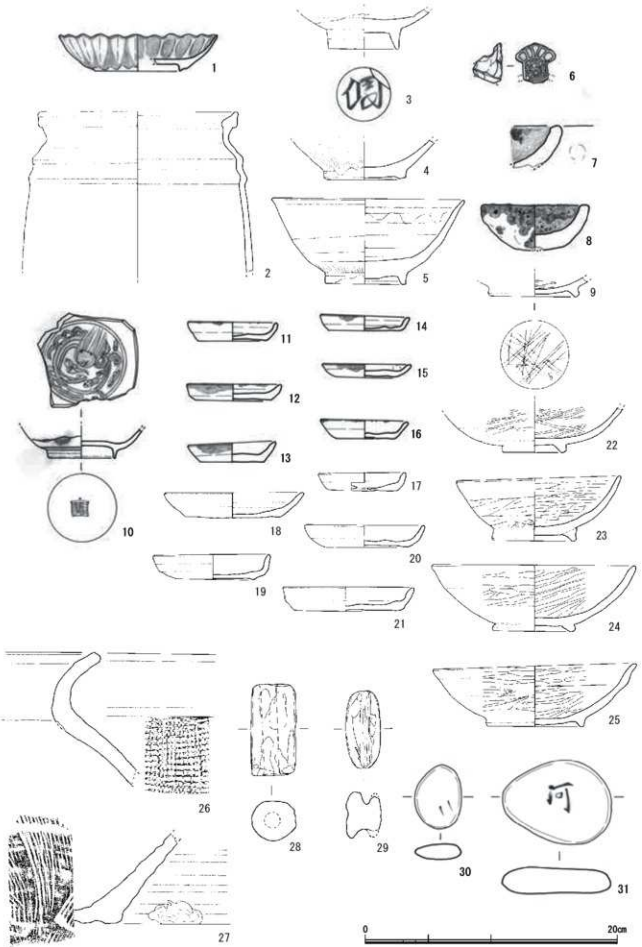


図 12　Ⅰ区 SX34 出土遺物実測図 1 (1/3)

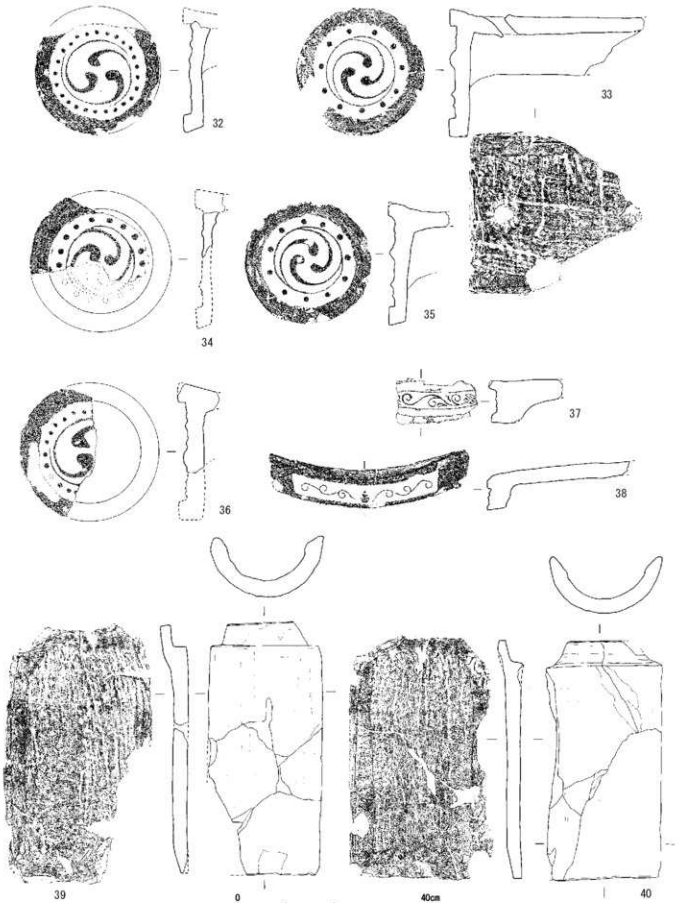


図 13　Ⅰ区 SX34 出土遺物実測図 2（1/4）

出土遺物（図12・13・37）

1は青磁の菊皿、16世紀中頃の景徳鎮産。2は褐釉壺、華南産か。3は「綱」の墨書のある白磁碗、12世紀中頃～後半の閩江窯（福建省）産。4はⅣ類の白磁碗、閩江窯産。5はⅣ類の白磁碗、11世紀後半～12世紀前半の閩江窯産。6は白磁水注の頸部に付された本来対になる装飾。12世紀代、閩江下流域。7・8は取瓶である。両面に火を受けており、内面に滓を付している。本調査地は、近世の大乗寺前町にあたる。『続風土記附録』に「鋳工磯野五左衛門と云者あり」、『続風土記拾遺』には「鋳工磯野七平と云者あり」の記述がある。また入定寺蔵の鋳造弘法大師座像銘（文政８・1825年）には「大乗寺前町　大崎正右衛門友永」とあることから、鋳工の活動がさかんだったとみられる。取瓶は近世の鋳造関連遺物の可能性がある。「福岡県の地名」『日本歴史地名大系』第41巻、2004平凡社

9は瓦器椀の底部で外底部に縦横の線刻がみられる。10は16世紀代の明青花碗の底部付近。11～21は糸切り底の土師皿である。口縁部に燈明皿に用いた際に黒変したものがある。22～25は瓦器椀、いずれも畿内からもたらされたとみられる。26は須恵質の大型甕。27は擂鉢の底部。28は筒形の土錘。29の土錘は漁網に緊縛するための筋状の溝が両面に通っている。30・31の一字一石経には扁平な自然石が用いられている。30はかすかに墨の跡があり、31には「河」の墨書がみられる。

32～36は三巴文軒丸瓦である。32の珠文は25、36も同程度とみられる。34の珠文は17、33・35の珠文はともに11である。また巴文の尾部は32・36では繋がっていないが、33・34・35では尾部がつながり、圏線状を呈している。

37は蓮華唐草文軒平瓦の中央からやや左寄りの部位である。14世紀前半に比定される。38は宝珠唐草文軒平瓦で、顎貼り付け技法がとられている。中央の半肉彫風の宝珠文を中心に唐草文が均整にのびる。

39の丸瓦は内面に布圧痕がみられ外面には縦方向の調整がみられる。全長26.5㎝で両側面と下端部に削りによる面とりが行われている。燻しにより黒灰色を呈している。40の丸瓦は内面に布圧痕がみられ外面には縦方向の調整がみられる。全長24.8㎝で両側面と下端部に削りによる面とりが行われている。燻しにより黄灰色を呈している。色調は39と異なるが、質感は近いものがある。

②SX20・SX21・SK22（図10・14）

SX20は調査区の北西隅、標高1.5m付近で検出された石積遺構である。板石を上方向に積重ねて空間を確保する構造で、内法は90×70㎝、高さ30㎝程度である。床面は粗砂層の上に暗褐色シルト層で整地されている。

SX21は調査区のやや西寄り中央の標高1.5m付近で検出された板石に瓦を組み合わせて積み上げた遺構である。攪乱をうけているが内法は90×60㎝ほどである。遺構の長軸方向はSX20やSK22と近似していることから、築造時期など相互に関連する可能性がある。

SK22はSX21の南西で検出された深さ30㎝ほどの二段掘りの土坑である。土坑は上部で180×145㎝、下部で90×55㎝をはかる。動物遺体や共伴遺物は検出されなかった。遺構の長軸方向がSX20やSX21と近いことから、関連遺構の可能性があるとみなした。

出土遺物（図15）

41は青灰色の刷毛目のある碗で朝鮮王朝時代に比定される。42は古代の須恵器の蓋。43は明代の染付の小片である。SX20は、北壁土層に接しており遺物は混入品の可能性がある。

SX21の出土遺物は、厚手の丸瓦と平瓦で、胎土の色調は44～49は赤褐色で50～53は暗灰色である。44は、厚さ３㎝・硬質の丸瓦で上方に斜方向の切り込みがあることから道具瓦に分類される。外面には縦方向の縄目、内面は布圧痕が観察される。削りをうけた下端部の幅は1.5㎝をはかる。

45は厚さ３㎝・硬質の平瓦で、上面はナデ、下面は拓本に示した左下がりに弧をえがく調整痕がみられる。46は、丸瓦上部の破片で玉縁の箇所で折損している。外面は縄目痕、内面には４条の吊り紐痕が観察される。47は厚さ２㎝・硬質の平瓦で、粗い礫を多く含む。上面は拓本に示した左下がりに

弧をえがく調整痕がみられ、下端は削りにより厚さ1.2cmほどとなる。下面も左下がりに弧をえがく調整痕があったとみられるが、二次焼成により器面には荒れがみられる。48は厚さ2㎝・硬質の平瓦で、粗い礫を多く含む。上面はナデ、下面は拓本に示した左下がりに弧をえがく調整痕がみられる。49は平瓦で上面は縦方向右下がりのナデ、下面の器表には荒れがみられる。50は厚さ3㎝、暗灰色で部分的に燻しがかかった硬質の平瓦である。内面は縦方向のナデ痕がみられる。外面はナデ調整である。51の平瓦の上面は剥離が顕著で、下面の拓本では右下がりのナデが観察される。52は丸瓦上部で玉縁の部分が剥離している。外面は縄目痕、内面には布目痕が観察される。53の平瓦の上面は縦方向のナデ、下面の器表は荒れがみられる。

以上SX21で出土した瓦は12世紀末から13世紀はじめに比定される。すべて再利用されたもので、遺構の築造時期と直接結びつくものではないが13世紀後葉の元寇が瓦類の使用中断の契機となった可能性が想定される。

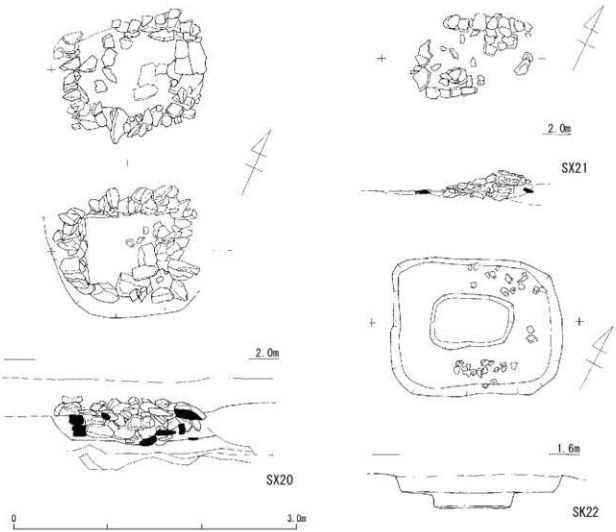


図14　Ⅰ区 SX20・SX21・SX22 遺構実測図（1/40）

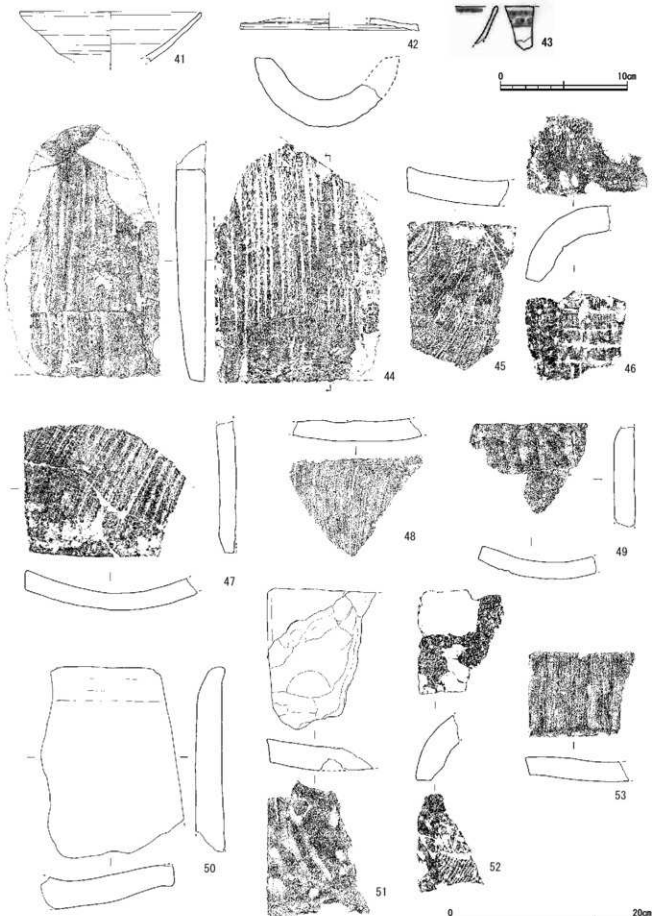


図 15　Ⅰ区 SX20 ・SX21・ SX22 出土遺物実測図（1/3・1/4）

③SX31（板囲い遺構　巻頭図版１・２・図16・17・18）

SX31は、Ⅰ区北東隅の標高１m付近で検出された板囲い遺構である。遺物の分布から規模は東西2.2m、南北1.7m で、南端は試掘トレンチにより削平を受けている。

北西部で縦方向に連なる板列が杭で固定された状態で検出された。板状の木製品をまとまりごとに検出した結果、約30cmの厚みで板材や木製品の堆積が確認された。最下層の第６面で粗砂層に達し、馬の下顎骨がまとまって検出された。図では第１面から第６面まで層位ごとに６段階の図を示した。

板囲いは、北西部で遺存度がよく、最下面は粗砂層である。この板列は雑然と並んでおり、径６～８cmの木杭と半裁した竹などで挟むように固定されているが、板列そのものは粗砂層まで達していない。

第６面の図では右下の板囲い遺構の北西隅に馬の下顎骨が置かれている（動物遺体についてはⅥ章の新美氏の論考を参照）。馬の下顎骨は成獣の左下顎骨と若獣の左右の下顎骨（同一個体）とされる。このうち成獣下顎骨には穿孔のあるもの１点が含まれている。馬の下顎骨を最下層に置く行為は板囲い遺構が置かれた当初になされており、祭祀的な性格の遺構であることを示唆している。その後棒状の木片や陶磁器類が堆積し、その厚みは約30cmに達している。最上層にあたる第１面で板の両面に焼成痕のある板状木製品（60）が検出された。

出土遺物（図18）

54は初期高麗の青磁碗である。見込みと底部に４か所の目痕がみられる。12世紀代前半。55は関清義窯の白磁碗の底部。外底部に墨の痕がみられる。56は白磁碗の底部で、本来玉縁の口縁がつく。

57は緑釉陶器の口縁部の小片である。58・59は畿内からもたらされた瓦器椀。

60は焼成痕のある柾目の板で、全長33cm、最大幅6.7cmをはかる。焼けた火箸状のものをあてて黒変させているが、A面は５つを単位とする櫛状の先端（約2.0cm幅）を短軸方向に押し当てているのに対して、B面は５つを単位とする櫛状の先端（約2.5cm幅）を長軸方向に４列押し当てている。祭祀的な意味合いがつよい。

61は木葉形木製品。板目取りで全長8.9cm、最大幅3.0cmをはかる。62は匙状木製品。柾目取りで全長9.8cm、最大幅1.9cmをはかる。63は棒状木製品で長軸にそって面取りを行い、下部に削りを加えて尖らせている。全長14.2cmをはかる。

64は連歯下駄である。現存長15cmで、かなり使い込まれている。足圧によるくぼみが顕著である。65は箆状木製品の先端部。現存長8.2cm、最大幅1.9cmをはかる。66は不明木製品、硬質の木を削り出している。現存長15.7cm。67は箆状木製品の一部。現存長15.0cm、幅1.4cmをはかる。68は薄い板材の一部。1.0×1.2cmの臍穴がある。69は幅6.7cm、厚さ1.0cm弱の板材の一部。左上に円孔があり、図の頂部はわずかに右方向に傾斜する。

板囲い遺構の時期は、共伴する陶磁器の時期は12世紀代前半頃に集中している。ただ中世前半の時期はⅡ区で検出された石積遺構の供用時期と重なっている。Ⅱ区は汀線に近く、船や物資の往来を考慮すると遺構の新設には不向きでとみられることから板囲い遺構は陶磁器の時期より遅れる12世紀後半頃を上限とする。またSX20・SX21・SK22などの石組や土坑と遺構の軸方向が近いことから下限は中世後半の14・15世紀頃とする。板囲い遺構の時期については祭祀具の類例や馬の下顎骨の埋納事例などをふまえて検討したい。

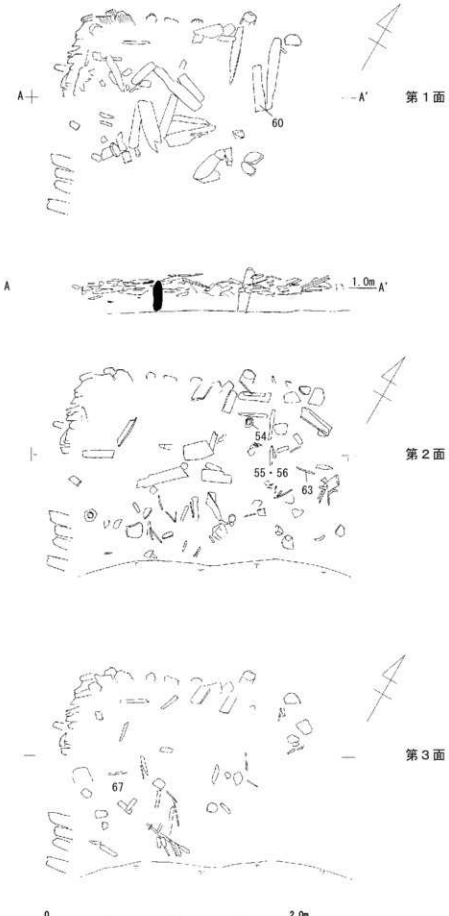


図 16　Ⅰ区 SX31 遺構実測図１（1/30）

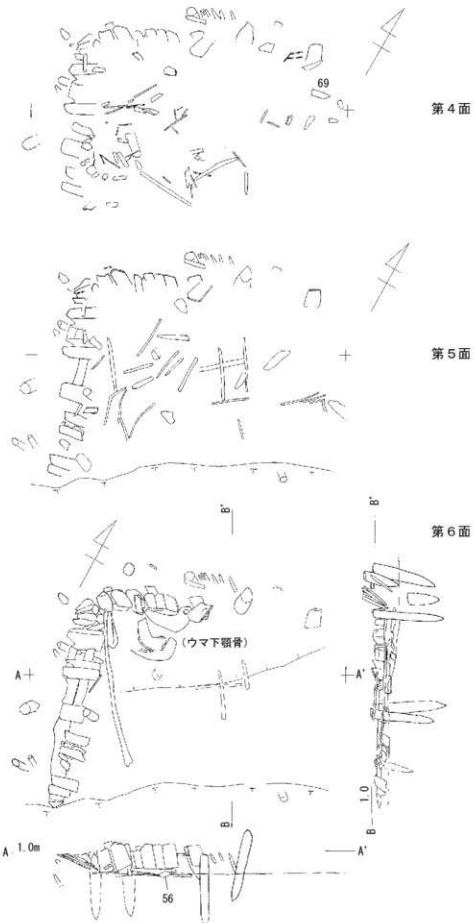


図 17　Ⅰ区 SX31 遺構実測図２（1/30）

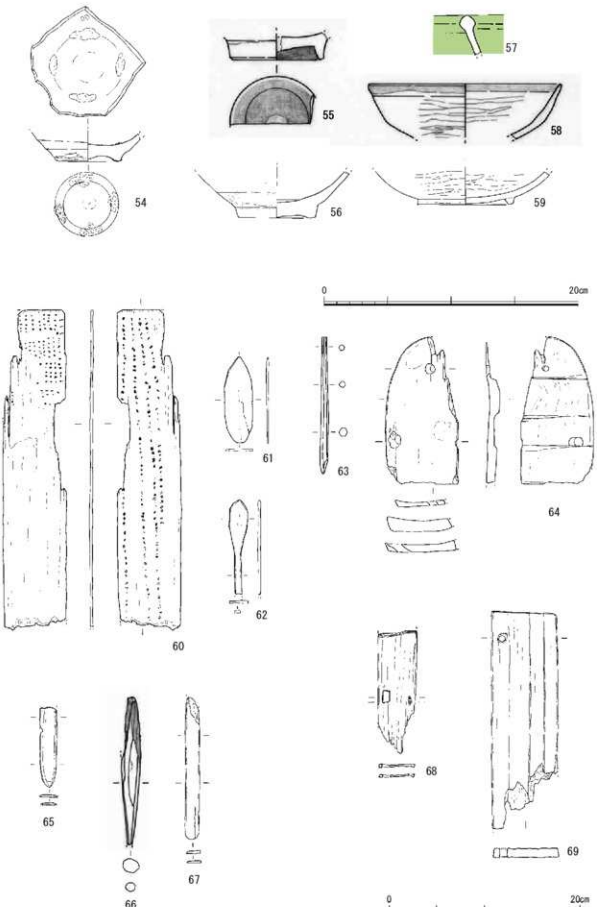


図18　Ⅰ区SX31出土遺物実測図（1/3・1/4）

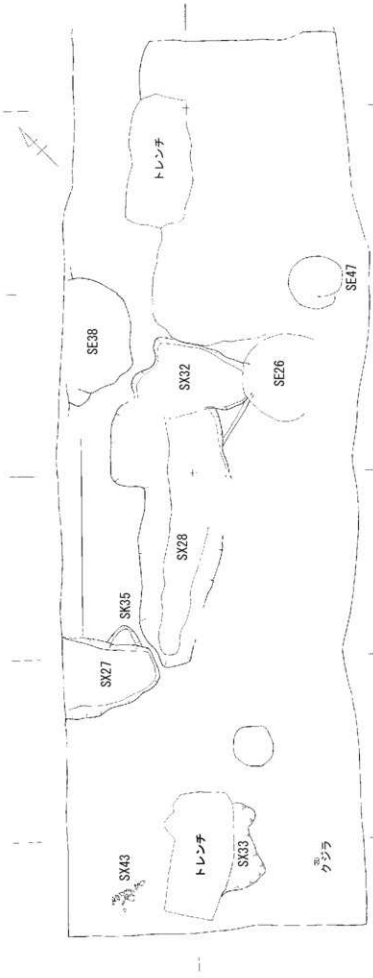


図19　Ⅰ区3面遺構配置図（1/100）

（3）第3面の調査

第3面は標高1.3mで検出された遺構面である。北側からのびるSX27と直交するSX28は位置関係から区画を構成する土坑である。SX28は、1・2面で検出されたSK22・SK23・SK24との切り合い関係から、SX28・SX27と直交するSX28・SX32は、先行する時期の遺構とみられる。

Ⅰ-1区でクジラ類椎骨1点が出土した（Ⅶ章参照）。

①SX27（図19・20）

SX27は北側の道路方向にのびる区画溝の一部である。標高1.2～1.3mで深さ15～20cm程度の窪みとなっている。掘削時に目をひいたのは遺構の中央部で検出された板碑の頂部の破片である。遺構の南側で火を受けた粘土が検出された。

出土遺物（図21）

70は同安窯系青磁の碗である。12世紀後半。71は龍泉窯の蓮弁文のある碗である。13世紀前半～中頃。72は関清義窯の白磁碗の口縁から胴部にかけての破片である。73は白磁の托で景徳鎮産とみられる。74は景徳鎮産の白磁皿である。12世紀前半。75は土師皿で回転糸切り痕がある。76は中国陶器の大甕の底部。77～80は瓦玉といわれるものである。77は上部に布目痕がみられる。

81は軒丸瓦の瓦当部の破片である。外区内縁の珠文がのこる。本来珠文は20ほどで径14.6cmに復元される。82は板碑の頂部の破片である。現存長19.6cm、幅17.8cm、厚さ7.3cmをはかる。中央に胎蔵界大日如来の梵字が彫られている。砂質の凝灰岩。

②SX28（図20）

SX28はSX27と直交する区画溝の一部である。標高1.2～1.3mで深さ15～30cm程度の窪みとなっている。東側でSX32の掘方に切られている。

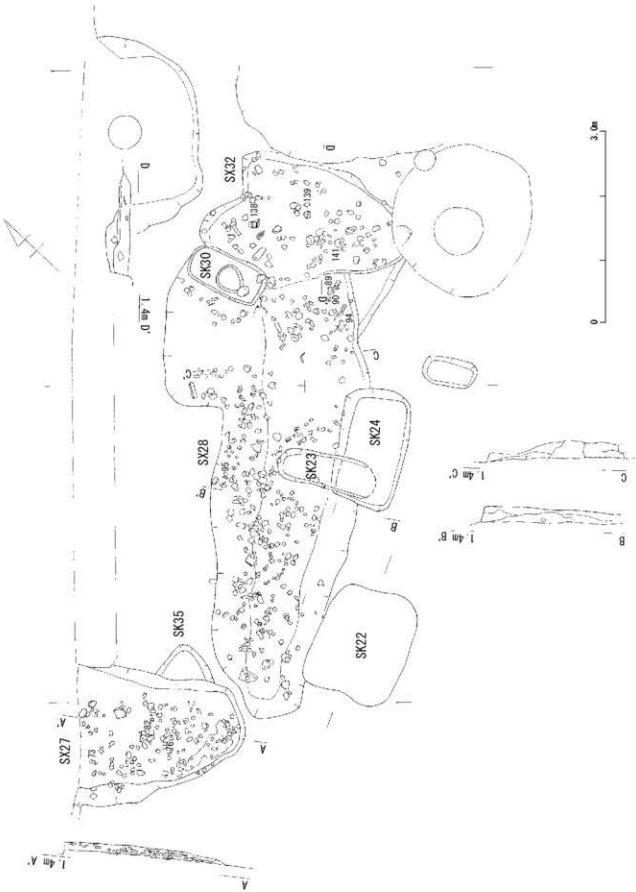


図 20　Ⅰ区 SX27・SX28・SX32 遺構実測図（1/60）

SX28 出土遺物（図 22）

83 は華南産の褐釉陶器の壺の口縁部である。84 は潮州窯産の白磁碗の上半部の破片である。85 は閩清義窯の白磁碗の口縁から胴部にかけての破片である。86 は龍泉窯系の香炉の底部付近とみられる。87 は瀬戸美濃産の天目碗である。88 は龍泉窯系青磁の碗である。12 世紀後半から 13 世紀初頭。89 は閩清義窯の白磁碗の底部。90 は陶器壺の底部。底径 12.6 ㎝。91 は閩清義窯の白磁碗の底部。92 は閩江下流産の天目碗。93 は灰青釉陶器の皿。13 世紀代。94・95 は白磁底部の破片。96 は明青花の碗。15 世紀後葉から 16 世紀前葉。97 は土師質の土器の脚部。98 は青磁碗の底部を加工した円盤状加工品。99 ～ 101 は瓦玉とされるものである。102 は一字一石経。中央に墨書がみられる。103・104 は糸切底の土師皿。105 は石製台座の破片である。106 は軒平瓦。瓦当部はほぼ完全な状態である。中央に蓮華文を配し、左右に非対称の唐草文を配している。最大幅 27 ㎝、顎部はヘラ状工具によるナデを施す。13 世紀末。107 は軒平瓦。瓦当部の唐草文の一部のみ遺存している。

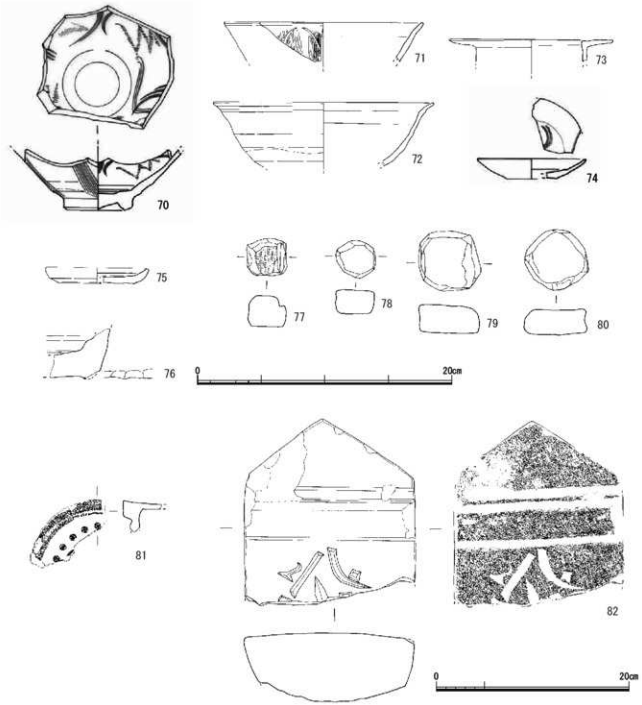


図 21　Ⅰ区 SX27 出土遺物実測図（1/3・1/4）

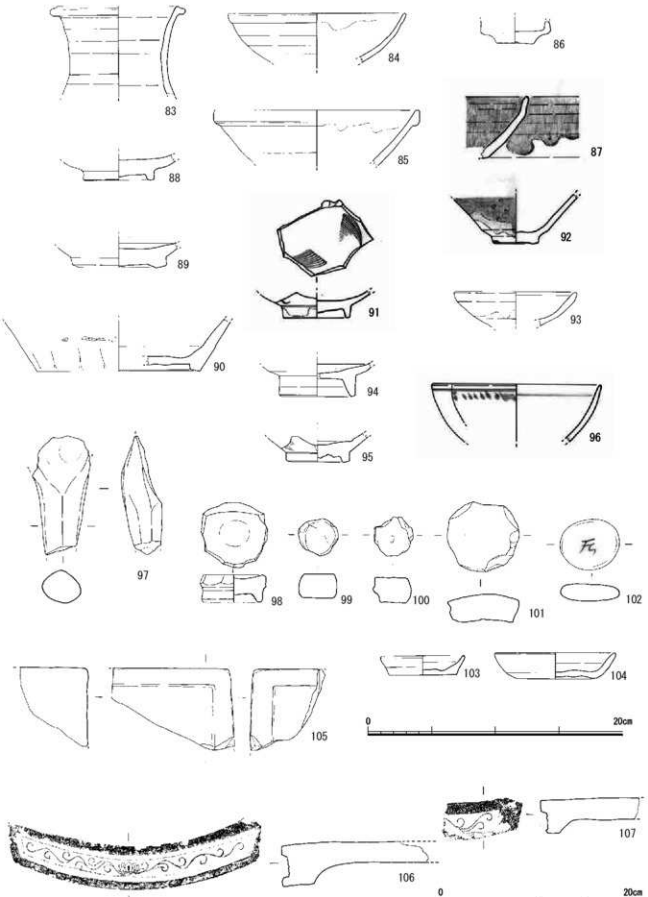


図 22　Ⅰ区 SX28 出土遺物実測図（1/3・1/4）

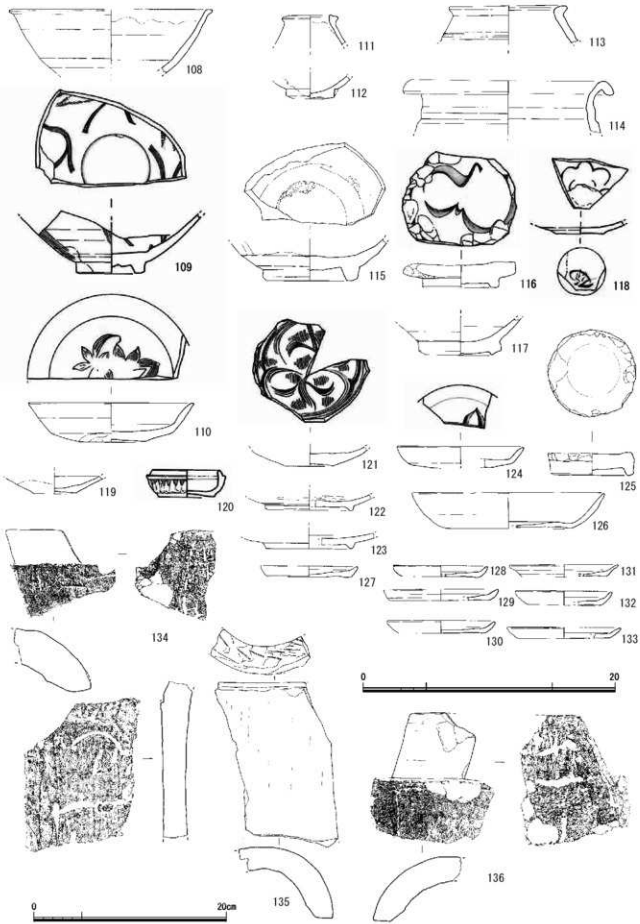


図 23　Ⅰ区 SX27・28 出土遺物実測図（1/3・1/4）

SX27・28 出土遺物（図 23）

SX27・28 の遺構検出時に出土した遺物。108 は白磁碗の上部破片。109 は同安窯系青磁碗の下半部。12 世紀後半～ 13 世紀。110 は見込みに花弁文を配した白磁皿。景徳鎮産。111 は青釉壺。陶器 B 群に分類される。112 は宋代の福建天目の底部。113 は褐釉四耳壺の口縁部、13 世紀前半。114 は潮州窯産の四耳壺の口縁部。115 は輪状釉剥碗、福建産で 12 世紀中頃から後半。116 は龍泉窯青磁碗の底部。117 は閩清義窯の白磁碗の底部。118 は潮州窯産の白磁皿の破片。底部に墨書がみられる。119 は白磁皿の底部。120 は青白磁合子の身である。121 は白磁皿の底部。122・123 は高台付底部。124 は龍泉窯青磁皿。125 は青磁碗の底部の円盤状加工品。126 は土師器の坏。底部は回転糸切。127 ～ 133 は土師器の皿。底部は回転糸切。134 ～ 136 は丸瓦の破片。

③ SX32 出土遺物（巻頭図版 5 ・図 24・37）

SX32 は SX28 に東接する不整形の土坑である。137 はミニュチュア碇石。折損しているが木錨を装着するための溝が彫られている。138 ～ 141 は土師器の皿。底部は回転糸切。142 は国産の天目碗の底部である。外底部に「大乗」の墨書がある。143 は国産の片口の褐釉碗。144 は瓦器椀の上部。145 は須恵質の片口土器である。

④ SX33 出土遺物（図 25）

SX33 は調査区の西側で検出された不整形の土坑である。漆器や木製品がまとまって出土した。146 は黒漆塗りの皿である。見込みに朱塗りで花弁が描かれている。147 ～ 149 は加工木製品。150 の板状木製品は両面に刃物による使用痕がみられることから俎板とみられる。図の上部の孔は吊り下げのための紐通しとみられる。151 は刃物による使用痕がある板。152 は下駄の歯。153 は加工木製品。154 は竹の節の部分を加工したもの。155 ～ 160 は板金剛とよばれる履物の芯の部分である。161 ～ 177 は棒状の木製品である。

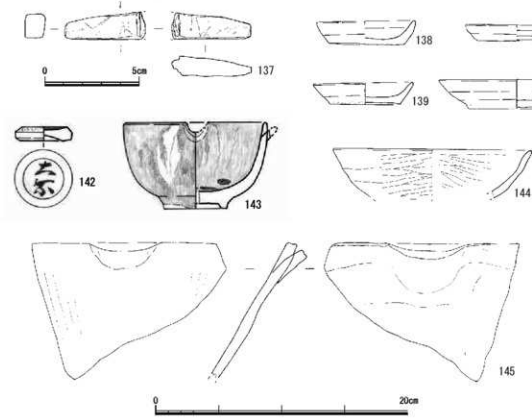


図 24　Ⅰ区 SX32 出土遺物実測図（1/2・1/3）

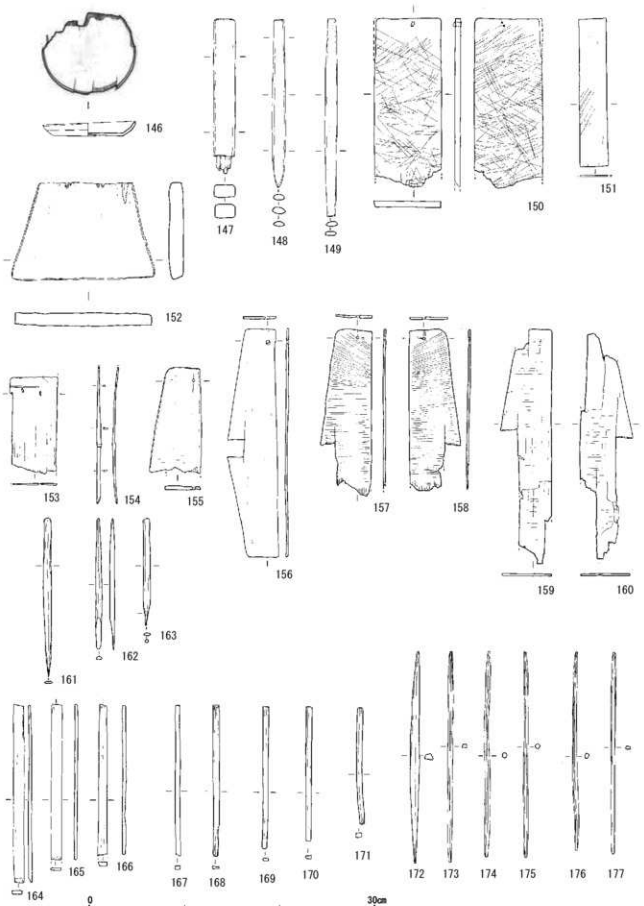


図 25　Ⅰ区 SX33 出土木製品実測図（1/4）

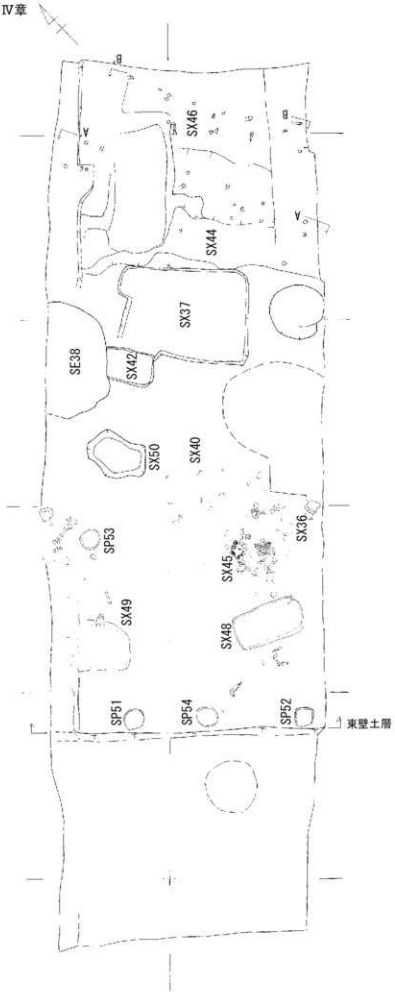


図26　Ⅰ区4面遺構配置図（1/100）

（4）第4面の調査（図26・27）

第4面は標高1.0～1.2mで検出された遺構面である。調査区の東側ではSX34の下層で地形の落際に沿って杭列SX44・46が検出された。杭の先端のレベルは0.3～0.4m付近で一定している。埋め立ての痕跡となる杭に直交する土留め板などは検出されていない。

調査区中央部のウマなどの動物遺体は標高1.0～1.2mの黒色粘質土層の堆積中で検出された。13世紀代以後、葦などの植物が繁茂する時期を経て陸地化がすすむ様子がうかがえる。SX36（巻頭図版2）やその付近の動物遺体はⅠ区が陸地化する過程で遺棄されたものとみられる。SX45は黒色粘質土層の上面で検出された。植物繊維を編みこんだ製品の下から木製品、下層から白磁碗や白磁皿が検出された（図35・36・37図版4）。

SX37は粗砂を隅丸方形状に掘り下げた浅い落ちである。

西側は木製品がかたまって出土したSX33以外では遺構がみられない。図29の土層図はSP51・52・54の柱穴の直下で観察したものである。

SX44・46（北から）

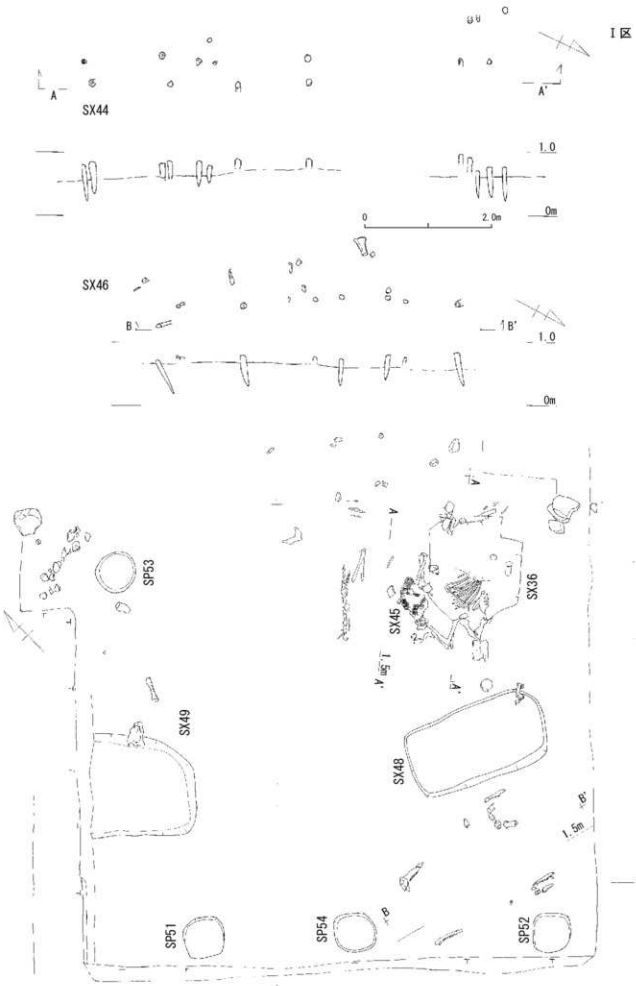


図27　I区4面動物遺体出土状況実測図（1/60）

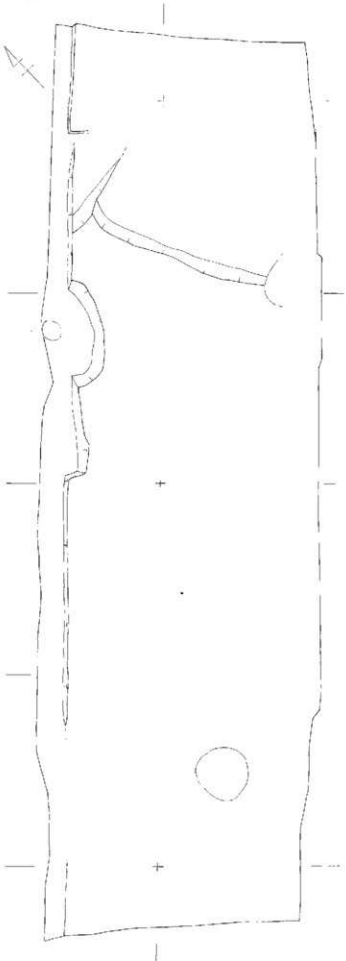


図 28　Ⅰ区５面最下層遺構配置図（1/100）

（５）第５面の調査（図 28）

第５面は標高 0.3 ～ 0.6m 付近で検出された遺構面である。灰褐色砂質土と黄白色粗砂層からなる面で、東側で南北方向の河道が確認された。井戸の掘り方以外顕著な遺構はみられなかった。

４面の下は黄白色砂質土層を挟んで、標高 0.6m から 0m にかけて粗砂層の堆積が確認できる。それ以下についてはバックホーによる掘削を行った。

氾濫原の堆積は湧水のため粗砂が続くと確認できた。粗砂は下層にゆくにつれて大型の礫を含む傾向がある。また出土遺物はローリングをうけていたが古段階の遺物として弥生中期の甕の底部や古式土師器などが確認できた。

東壁土層（図29）

図29は、第４面で観察した東壁の土層である（図26）。

1　黒色粘質土層
2　灰褐色砂質土　黄白色粗砂を含む。
3　灰褐色砂質土
4　白黄色砂質土
5　暗灰褐色砂質土
6　灰褐色砂質土＋黄白色粗砂層
7　灰褐色～黄白色粗砂層　細礫を含む（湧水面）
8　粗砂層　礫混じりの粗粒砂層

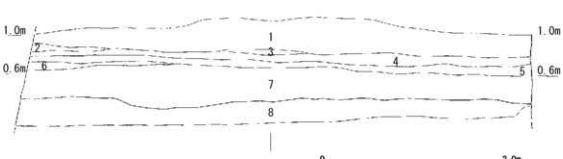


図29　Ⅰ区１－２区東壁土層図（1/40）

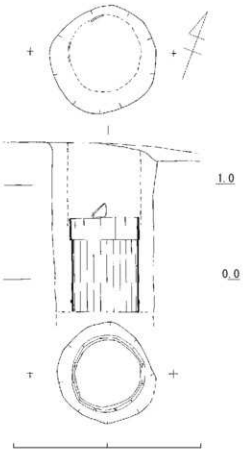


図30　Ⅰ区SE01遺構配置図（1/40）

（6）井戸SE01・26・38・47

SE01（図30・37）

Ⅰ-2区第1面で検出された。埋土の上面には煉瓦が混入していたことから近代に埋まった井戸である。井筒の上部は瓦組井戸で、径72㎝に12分割の井戸瓦を配している。瓦の多くは抜き取られていたが6段目は全周を確認できた。標高0.4m以下は桶組が確認された。桶は径65㎝で高さは72㎝。下方で箍が巻かれていた。

また掘方と構造物の間には玉石が裏込めとされていた。

SE26（図31・37）

Ⅰ-2区第3面で検出された。掘方は上面で径2.3m、中世後半のSX32を切っている。中心部で径75㎝の桶組の井筒が確認された。湧水が多く標高0m付近までの掘削にとどまったため桶の構造は把握できなかった。

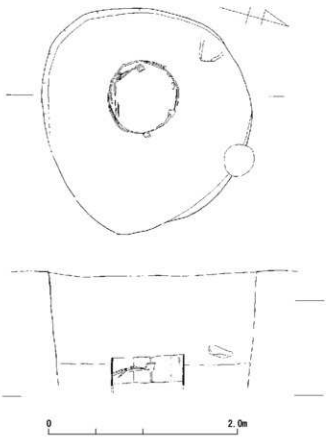


図31　Ⅰ区SE26遺構配置図（1/40）

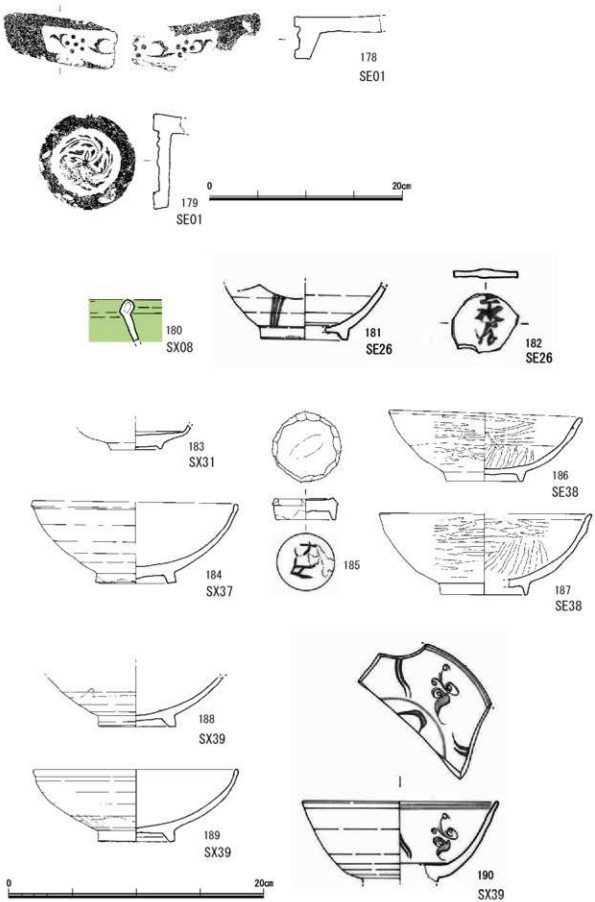


図 32　Ⅰ区 SE01・SX08・SE26・SX37・SX38・SX39 出土遺物実測図（1/3・1/4）

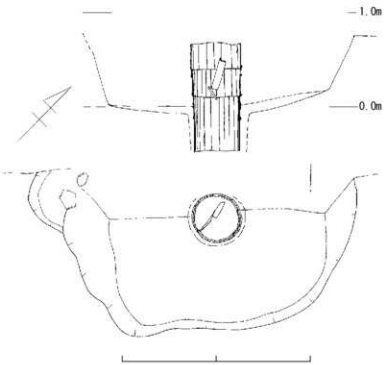


図 33　Ⅰ区 SE38 遺構図（1/40）

SE38（図33）

Ⅰ-4区第３面で検出された。掘方は上面で径3.1m、北側は北壁土層となる。中心部の標高0.7mで径53cmの桶組の井筒が確認された。

標高0.4mが湧水レベルで－0.5mまでで３段の桶組が確認された。桶の柄は上段で32cm、中段で36cm、下段で57cmが確認された。また上段で１カ所、中段で３カ所、下段で２カ所の箍を確認した。中世後半の区画となる土坑SX27やSX28・SX32が機能を終えてから掘削されたものか。

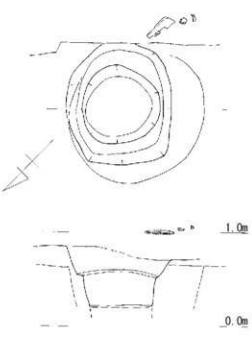


図 34　Ⅰ区 SE47 遺構図（1/40）

SE47（図34）

Ⅰ-4・5区第３面で検出された。掘方上面の南側でウマの上顎骨が出土した。掘方は上面で径1.1～1.3m、下面で0.75mが確認された。標高０m付近まで掘り下げたが桶組など井筒の構造は明らかでない。

SE01・SX08・SE26・SX37・SE38・SX39 出土遺物（図 32）

178 は軒平瓦。三つの梅花文を配しその間を唐草文様で埋める。179 は外径 10.1 cmの軒丸瓦。藤巴文を配している。180 は緑釉陶器の口縁部である。181 は白磁の底部破片である。182 は青磁碗の底部破片で永□の墨書がある。183 は白磁の皿で景徳鎮産とみられる。184 は潮州窯産の白磁碗。185 は潮州窯産の白磁碗底部を円盤状に加工したものである。186・187 は瓦器椀。188・189 は潮州窯産の白磁碗。190 は龍泉窯青磁の碗で 12 世紀代後半から 13 世紀代初めに比定される。

191 は糸切底の土器碗である。192 は閩清義窯の白磁碗。193 は白磁の皿で見込みに輪状釉剝がみられる。底部に「王」の墨書がみられる。12 世紀中頃。194 は龍泉窯青磁の碗で 12 世紀代後半から 13 世紀代初めに比定される。195 は高台付の皿で東銭湖窯産、五代から北宋前半に比定される。196 は白磁の底部で底に墨書がみられる。197 は青磁の皿で底部には焼成時の砂目がみられる。198 は古代の平瓦で格子目に「賀」の文字がみえる。199 は緑釉陶器の口縁部である。200 は青白磁の合子の蓋で表面に浅浮彫で細密な文様が施されている。

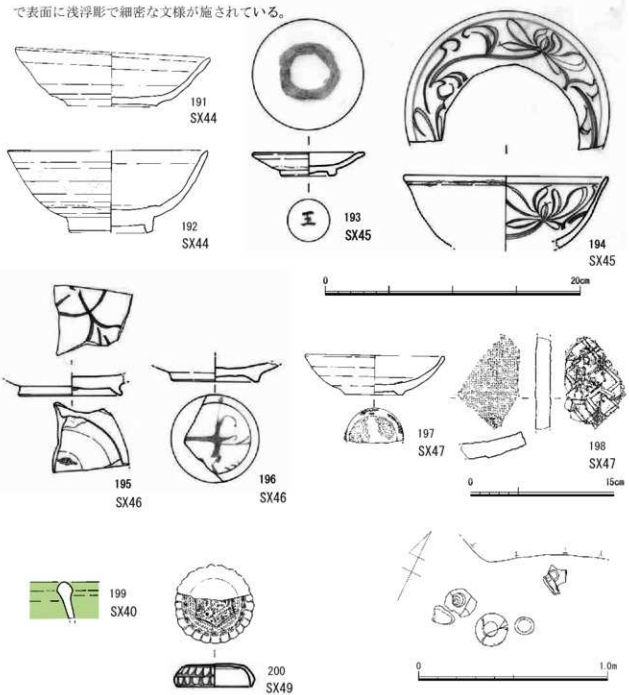


図 35　Ⅰ区 SX44 ～ 49 出土遺物実測図（1/3・1/4）

図 36　Ⅰ区 SX45 遺構図（1/40）

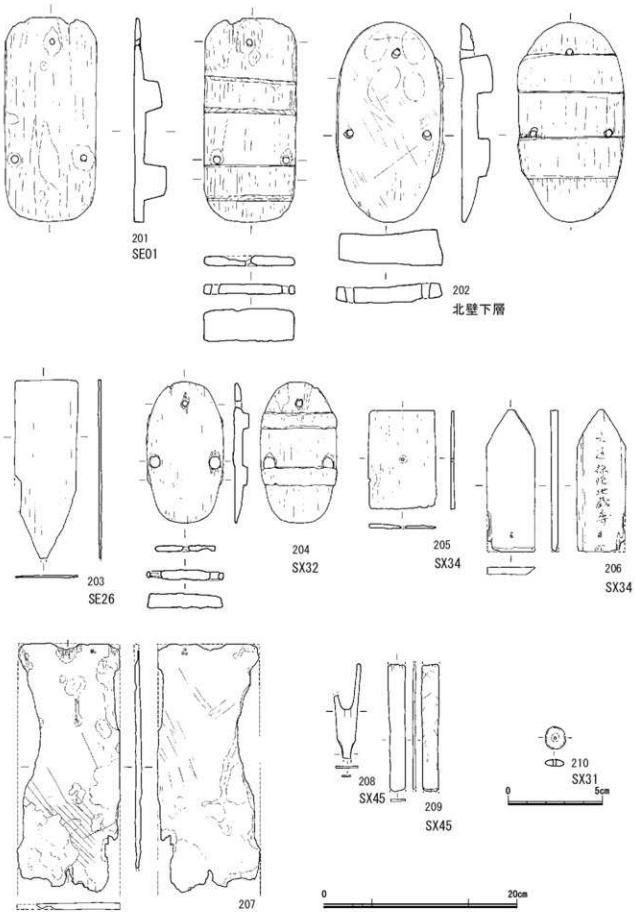


図 37　Ⅰ区出土木製品実測図（1/2・1/4）

（7）木製品

Ⅰ区出土の木製品（図37）

201は隅丸方形の下駄で一本の木から彫り出した連歯下駄に分類される。全長21.5㎝をはかり、前方の歯の減りが顕著である。202は長楕円形の連歯下駄である。全長21.2㎝をはかり、後方の歯の減りが顕著である。203は板状木製品である。204は長楕円形の連歯下駄である。全長15.0㎝をはかり、前後とも均一に歯がすり減っている。205は板状の木製品で中央に孔がみえる。206は近世土坑で出土した頂部が三角を呈する木札である。一方の面に「六道弥陀地蔵尊」の墨書がみえる（SX34）。

207の板状木製品は両面に刃物による使用痕がみられることから俎板とみられる。図の上部にのこる金属片は吊り下げるための金具とみられる。208の木製品は薄い板材を加工したものである。用途は不明である。209は板状の木製品である。210は穿孔のある扁平な木製品である。

（8）検出面出土遺物

Ⅰ区検出面出土の遺物（図38・39）

211の崇寧通寶は、径3.5㎝の大型銭である。徽宗崇寧年間（1102-1106）に鋳造された。212は関清義窯の白磁碗の底部。「□荘綱司」の墨書がある。213は龍泉窯系青磁碗の底部。「周□」の墨書がある。214は広東、潮州窯産の白磁碗。「綱」の墨書がある。215は龍泉窯系青磁碗の底部。墨書がある。216は潮州窯産の白磁碗。「陳」の墨書か。217は龍泉窯系青磁の皿。底部に墨書がある。218は関清義窯の白磁碗。底部に墨書がある。219は白磁碗。底部内面に墨書を書いたのち墨壺とされたようである。220は関清義窯の白磁碗の底部付近。底部に「十」の墨書がある。221・222・223は一字一石経。扁平な礫に墨書がみられる。224は格子叩きのある平瓦。225は「大」の文字周りに楷書で「大乗寺」の三文字を配する軒丸瓦である。226は藤巴文の軒丸瓦。227は中央に宝珠文を配した軒平瓦。228は草葉唐草文の軒平瓦。17世紀前葉。229は砥石の破片で、上部が折損し、下面は剥離している。

230は輪花の青磁碗。231は動物を象った土製品。232～236は土錘である。232は全長4.1㎝で重さ7.0gをはかる。233は中央部で折損している。234は全長4.4㎝で重さ3.5gをはかる。235は全長3.6㎝で重さ3.0gをはかる。236は全長4.6㎝で重さ5.5gをはかる。237は磁竈窯系の緑釉陶器の盤底部の破片。13世紀。238は緑釉陶器の底部。内外面に施釉がみられる。239は扁平な礫。黒色を呈している。碁石か。240は網用の有溝土錘。4面に溝がある。全長7.8㎝で102gをはかる。241は有溝土錘。断面は方形に近い。全長6.5㎝で101.5gをはかる。242は龍泉窯系青磁碗の底部である。243は白磁碗底部の円盤状加工品である。244は瓦玉で上面に縄目痕がみえる。245は石球か。径5.5㎝をはかる。頂部に敲打痕がみられる。246は越州窯系青磁碗の底部で、外底部に目跡がみられる。五代～北宋前半。247は瀬戸焼の瓶の肩部。248はスタンプ文のある壺の肩部。仏山奇石窯。249は天目碗。関江下流の産とみられる。250は青白磁の合子の蓋である。型打ちにより細密な花文様をあらわす。251は瓦質の三足釜の小品。近畿からの搬入か。252はスタンプ文のある壺の肩部。仏山奇石窯産。釉は灰色がかったオリーブ色で、黄褐色の釉が垂れている。253は関清義窯の白磁碗。254は瓦器椀。内外面に太い横方向の磨き調整がある。255は高台付の須恵器の坏である。256は回転糸切り痕のある土師皿。2か所に焼成後の穿孔がある。257は東播系須恵器の捏鉢。口径26.8㎝、底径11.5㎝で器高は12㎝をはかる。258は白磁小壺の蓋である。径3.0㎝。259は交趾の合子の身。本来八角形で褐色の釉が施されている。

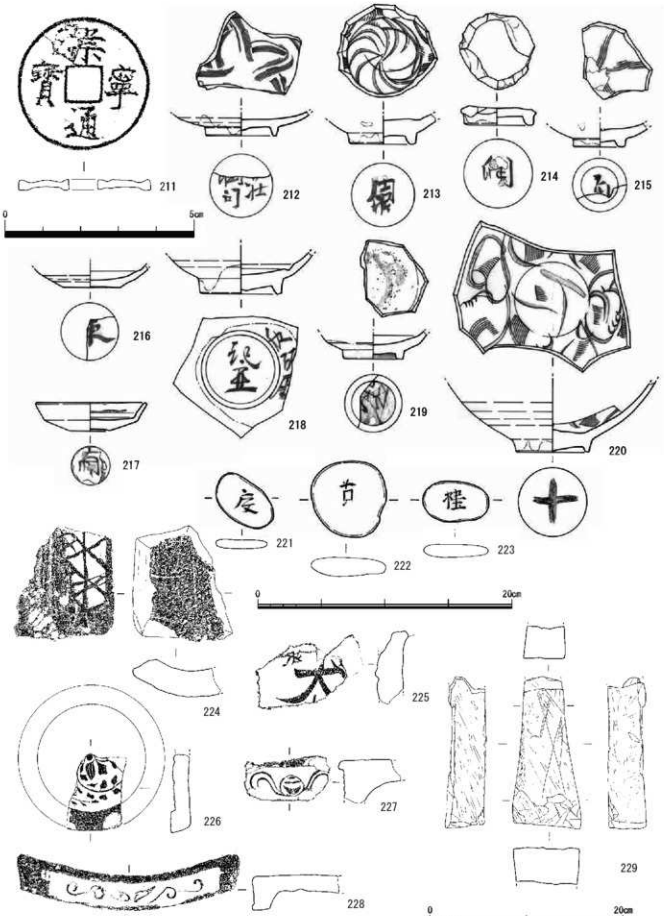


図 38　Ⅰ区検出面出土遺物実測図 1 （1/1・1/3・1/4）

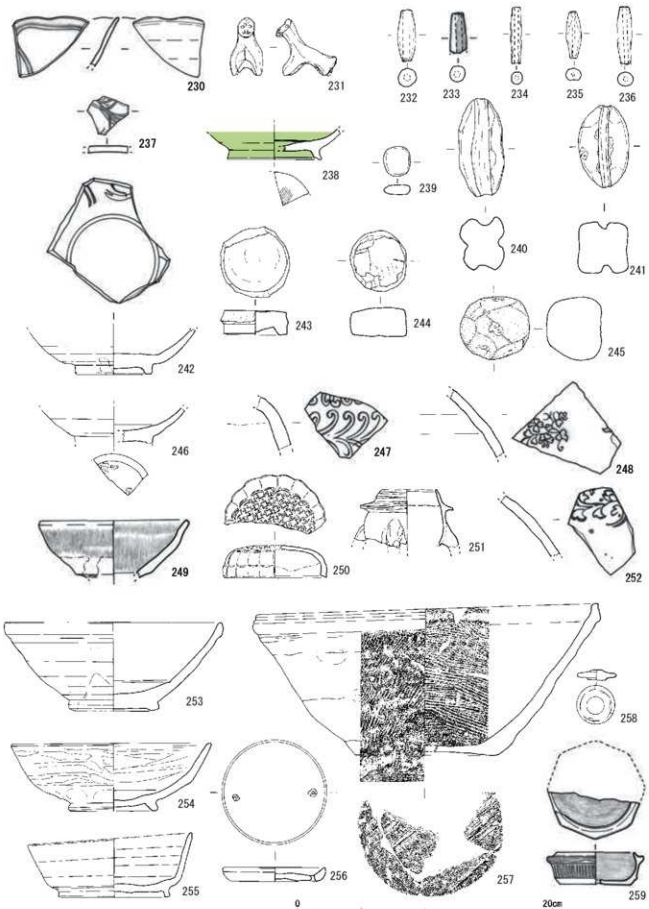


図 39　Ⅰ区検出面出土遺物実測図２（1/3）

（9）下層出土遺物

Ⅰ区下層出土の遺物（図 40）

260 は白色の扁平な礫である。261 は紡錘形の土錘。全長 3.55 ㎝で重さ 3.5g をはかる。262 は古代の須恵器甕の口縁部。下部に自然釉を付す。263 は緑釉陶器の底部。内外に施釉がみられる。264 は古代の須恵器の蓋である。低い摘みの下に「七」の墨書がある。265 は古代の須恵器の蓋。径 25.0 ㎝。266 は古代の須恵器の壺の胴部下半の破片である。267 は須恵器の破片、沈線と列点文による区画が観察できる。268 は二重口縁壺の頸部である。頸部にハケ目工具の木口による施文がある。山陰・山陽方面からの搬入か。269 は土師器の甕の口縁部である。頸部は「く」字状で左下がりの叩きの後右下がりのハケ目を加えている。古墳時代初頭の庄内式に分類される。270 は二重口縁甕の頸部である。やや大型の山陰系の器種であろう。271 は古代の甕の口縁部である。口縁直下に竈に設置する際の鍔状のせり出しがめぐる。272 は弥生中期の甕の底部である。表面はローリングをうけて摩滅が著しい。273 は扁平な石器で両面に敲打痕跡がある。最大長 14.1 ㎝、868g をはかる。274 は格子叩きのある古代瓦である。格子中に＊の図がある。

（10）金属器

Ⅰ区出土の金属器（図 41）

275 は、有文の飾り金具で、北壁の土層観察時に採集された。径 2.0 ㎝、幅 0.58 ㎝、厚さ 0.1 ㎝をはかる。主文様は偏向の唐草文様でその間に蕨手状の渦文を配している。唐草文および蕨手状文には鏨状工具による細密な調整が加えられ、珠文が連なっているようにみえる。

276 景徳元寶は、眞宗景徳元（1004）年始鋳。277 元豊通寶は、神宗景徳元（1004）年始鋳。278・279 は洪武通寶。太祖洪武元（1368）年始鋳。

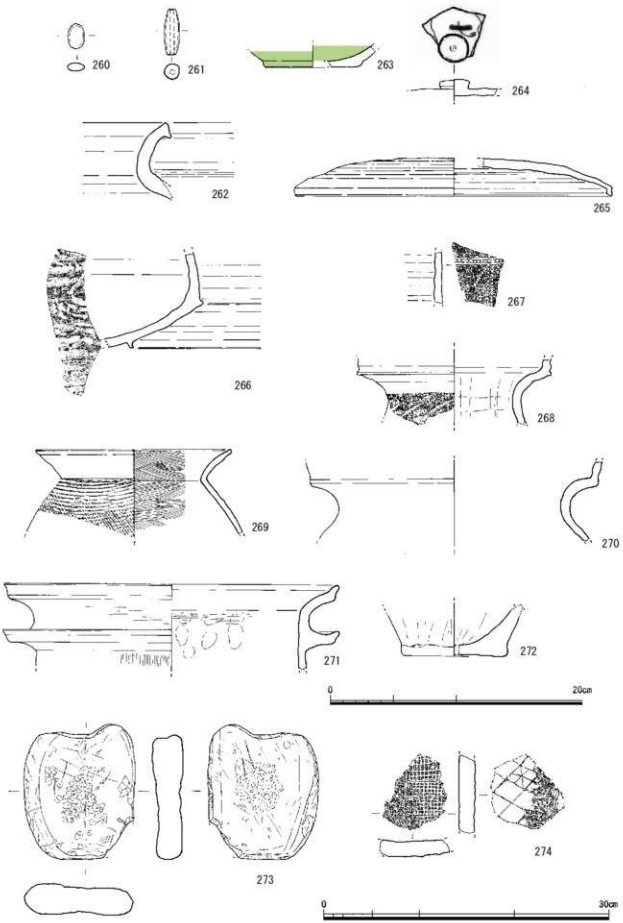


図 40　Ⅰ区下層出土遺物実測図（1/3・1/4）

材質調査（図41・42）

指輪とみられる装飾のある環状金属製品について、蛍光X線分析による材質調査を行った。事前に行った顕微鏡観察では、表面が広範囲に紫灰色の腐食生成物に覆われるが、腐食を免れた部分は、やや黄色味を帯びた銀光沢を有している。

材質分析は腐食の少ない部分（point1）と腐食生成物部分（point2）を対象に行った※。腐食の少ない部分では、銀（Ag）の強いピークと、銅（Cu）のピークが明瞭に検出された。そのほか、マグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、鉄（Fe）といった元素もみられるが、これらは土壌由来で、埋蔵環境下にあったことに起因するものと考えられる。また臭素（Br）も検出されるが、これは銀の腐食生成物（臭化銀）に関与する元素である。紫灰色の腐食生成物では、臭素や土壌由来元素のピークが高くなり、相対的に銅が低くなっている。なお、標準資料を使わない形でpoint1について銀と銅の定量値を算出すると、銀98.5%、銅1.5%となっている。

以上の結果、本資料は銅を僅かに含む銀製品であった。表面の状態は出土銀製品として違和感のあるものではない（比佐陽一郎）。

※分析条件

エネルギー分散型微少部用蛍光X線分析装置（AMETEK・EDAX Orbis）：対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：50kV・電流値：1000μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜／測定時間180秒

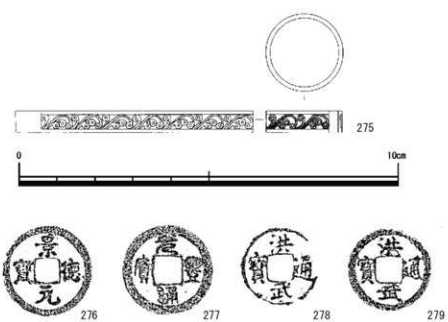
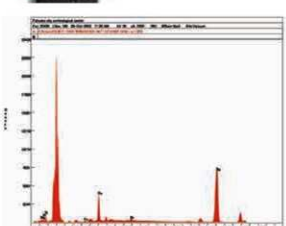


図41　Ⅰ区出土金属器実測図（1/1）

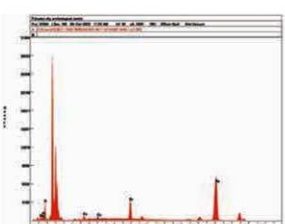
point1

point2

Ⅰ区出土金属器（指環）のデジタルマイクロスコープ画像



221 次調査出土指環 point1



221 次調査出土指環 point2

図 42　Ⅰ区出土金属器（指環）の画像と分析結果（XRF）

4．小結　221次Ⅰ区

Ⅰ区は北側通用門の南東部に設定した350㎡の調査区である。標高3.8mの地表から約2mをバックホーで掘削し、遺構検出を行った結果、5面の調査を実施した。

1・2面　西端で石積土坑SX20の基底部の礫が観察された。SX20と主軸方向が共通するSX21、SK22などは標高1.4～1.6mで検出された。Ⅰ区東端で馬の下顎骨や祭祀的性格のある木製品が出土した。Ⅰ区東では東西8m、南北4mの隅丸長方形の大型土坑SX34から16世紀後葉～17世紀代の遺物が出土した。

3面　中世後半の区画溝SX27とSX28は標高1.3mで遺構の掘りこみが確認された。SX27とSX28は、14世紀前半の北側にのびる区画溝の一部とみられる。SX28の東に接するSX32もほぼ同時期の土坑である。SX28では13世紀から14世紀代の軒平瓦、SX32では「大乗」の墨書のある天目碗が検出された。

4面　4面で検出された馬などの動物遺体は、その前段の陸地化する過程で遺棄されたものとみられる。動物遺体が検出された標高1.0～1.2mは黒色粘質土層の堆積であり、13世紀代以後、植物が繁茂する時期を経て陸地化がすすむ様子がうかがえる。

5面　4面の下は黄白色砂質土層を挟んで、標高0.6mから0mにかけて粗砂層の堆積が確認された。それ以下も粗砂層はさらに1.5m以上続いていることが確認された。

Ⅰ区は11世紀後半から12世紀代にかけて築かれたⅡ区の石積遺構の那珂川寄りの氾濫原にあたる。13世紀の元寇を経て、調査地付近には大乗寺が創建された。SX27やSX28・32は、14世紀初めの時期の北側に展開する区画溝であり、大乗寺創建時に関連する遺構とみられる。

区画溝が機能を失ったのちは、SX20、SX21などの石組やSX22のような土坑など方向性が近い小規模な遺構がつくられた。ここでは割石や瓦を使用した祭祀にかかわる遺構が並んでいたとみられる。

「大乗」の墨書のある天目碗が出土したSX32では、ミニュチュア碇石（137）が出土した。全長2～3mの碇石が浚渫工事などで見つかるのにたいして、小型の石製品は発掘調査でなければ認知できない。棒状の石製品に木錨を挟むための段状の凹みが確認されると、石錘や砥石とされた滑石製品のなかにミニュチュアの碇石が含まれていることがわかってきた。それらは碇石の特徴を忠実にうつしたⅠ式と、断面が方形や扁平な棒状となるⅡ式とに分類される。船の模型の付属品とする説もあるが木錨を装着するための溝が彫られたものは、碇石を模したことは確かである。出土地の一覧をそえることでⅠ区の結びとする。

博多遺跡群出土のミニュチュア碇石

	出土地	町名	次数	遺物番号	報告書	材質	型式
1	博多浜	店屋町	39 次	880604067	229 集	滑石	Ⅰ式
2	博多浜	御供所町	71 次	911150724	450 集	滑石	Ⅰ式
3	博多浜	祇園町	99 次	963300153	560 集	滑石	Ⅱ式
4	博多浜	祇園町	127 次	0646 ——	1039 集	滑石	Ⅰ式（溝なし）
5	沖の浜	古門戸町	165 次	064200270	993 集	滑石	Ⅰ式
6	博多浜	冷泉町	172 次	070500900	1086 集	滑石	Ⅱ式
7	博多浜	御供所町	183 次	081520001	1088 集	滑石	Ⅰ式
8	博多浜	御供所町	183 次	081520002	1088 集	滑石	Ⅰ式
9	博多浜	上川端町	221 次	180503003	本報告	滑石	Ⅰ式

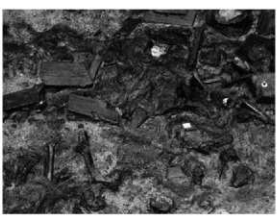
１．SX27・SX28・SX32 全景（南から）

２．SX27 遺物出土状況（西から）

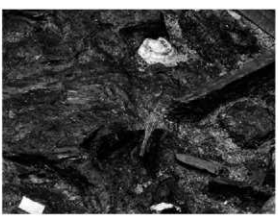
３．SX28 遺物出土状況（東から）

４．SX34 全景（北から）

５．SX31 全景第１面（南から）



６．SX31 第２面遺物出土状況１（南から）



７．SX31 第２面遺物出土状況２（西から）

８．Ⅰ区全景・下層（西から）

９．Ⅰ区全景・下層（南から）

10．SK22・SX21（南から）

11．SX20 下層（西から）

12．４面３区動物遺体（南東から）

13．SX36（北から）

14．SE38（南から）

15．SE38 井筒（東から）

16．SX45（南から）

17．SX45 部分（南から）

18．SX45 下層（南から）

Ⅴ　Ⅱ区の調査

１．調査の概要

Ⅰ区の調査を終了したのち、Ⅱ区の調査に着手した。Ⅰ区の調査区を北側に拡張してⅡ区とし、任意のグリッドを図のように設定した。Ⅰ区の調査成果をもとに、現地表面から1.5m下、標高1.6～2.0mの暗褐色土上面で第１面を設定した。遺構検出を試みたところ、土師器集積遺構、石積土坑、井戸、土坑、柱穴等が確認された。12ないし13世紀～近世の時期の遺構と考えられる。第１面調査後、30～40cm包含層を掘り下げると、小礫の広がりが検出された。標高約1.3～1.7mである。この小礫群以外には明確な遺構が少なかったため、第１面下とした。この小礫群は、後述する第２面で検出された石積遺構に由来する一部と考えられる。また、小礫群の広がりの南側では遺物を含む土器溜が広がる（巻頭図版３・４）。

小礫群の広がりが東－西方向に帯状で確認されたため、その下層に溝や護岸等の遺構の存在が想定された。慎重に掘り進めていくと積み重なった石列が見え始め、東西方向の直線状に延びていることが確認された。これを石積遺構とした。さらに、この石積遺構の南側には、瓦、木片、石製品、その他遺物を多く含む暗褐色の粘質土層が広がっていた。粘性が強く、水性堆積に由来する土壌と思われ、この土壌範囲を池状遺構（SK147）とした。また、石積遺構南東側に鏡、土師器を配置した集積遺構が検出された。これらの遺構の検出面を第２面とした。第２面は標高1.3m前後である。第２面では先に述べた石積遺構、池状遺構、集積遺構の他、獣骨の集積遺構、白磁の集積遺構、井戸等が検出されている。これらの遺構は便宜的に同一面としているものの、石積遺構とその他のすべての遺構が同時に営まれていたわけではない。

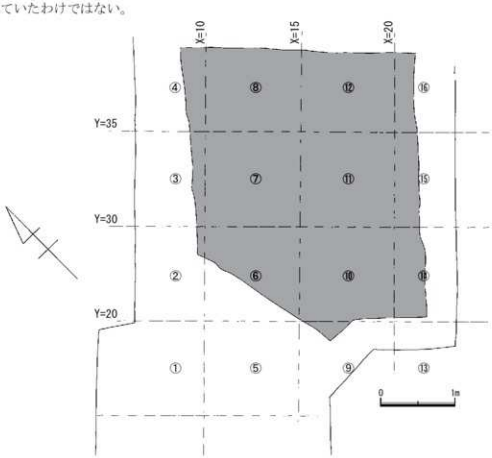


図１　Ⅱ区グリッド（1/200）

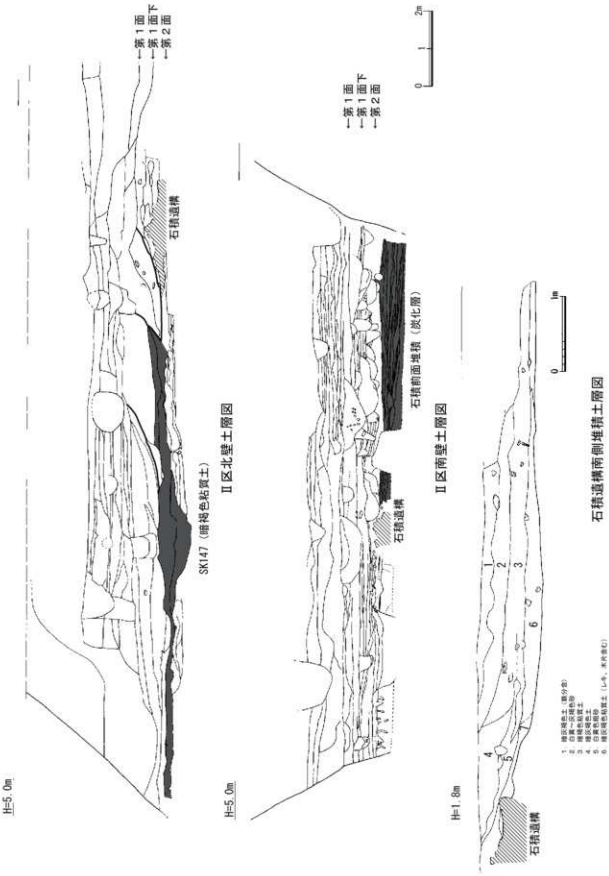


図２　Ⅱ区土層図（1/100，1/50）

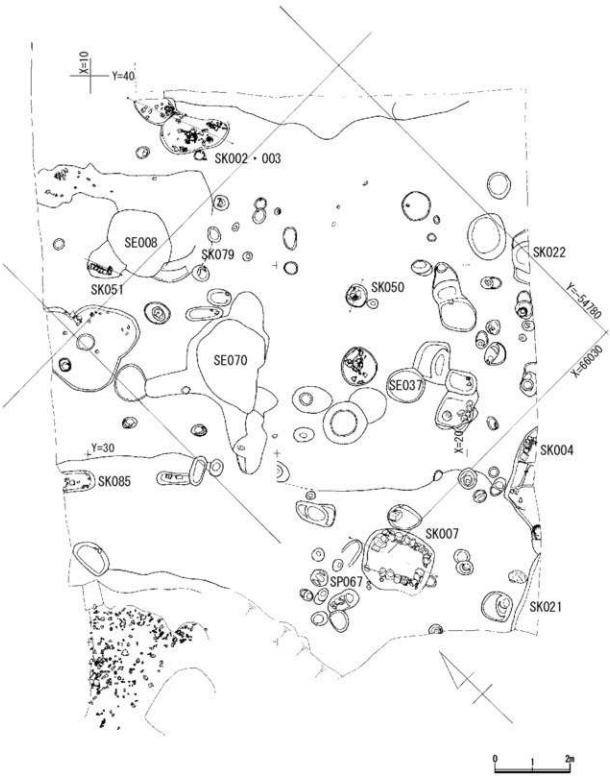


図3　Ⅱ区第1面遺構平面図（1/100）

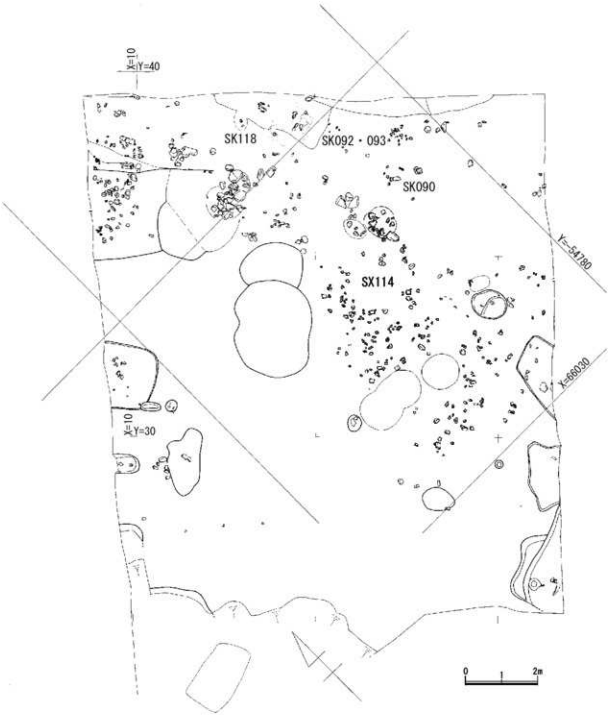


図4　Ⅱ区第1面下遺構平面図（1/100）

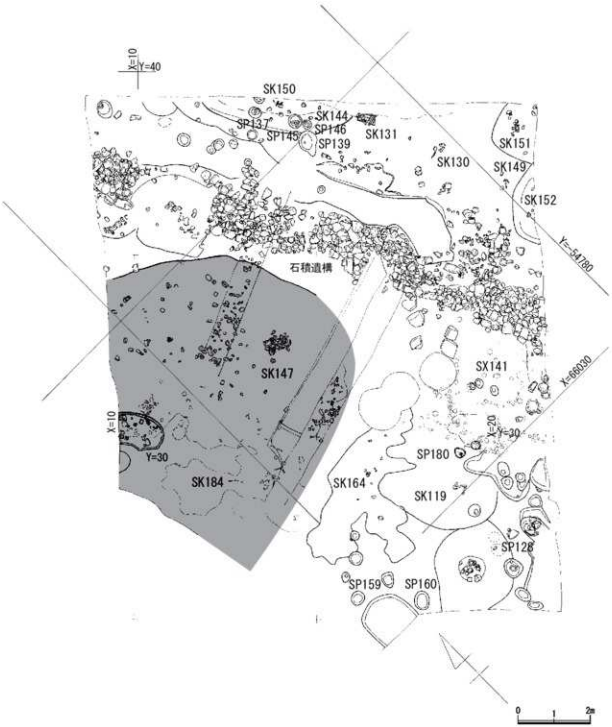


図５　Ⅱ区第１面下遺構平面図（1/100）

石積遺構については、「博多191」の報告で詳述する。この報告では、石積遺構以外の遺構について記述していく。

２．土層（図２）

現地表から標高2.6mまでは小学校校舎建築のための盛土である。第１面の標高1.6～2.0mまでは近現代の盛土が堆積する。北壁土層で確認すると、後述するSK147にかかる粘性の強い暗～黒褐色土の堆積は標高1.5mで確認される。基本的に、暗灰～茶褐色の土層が続き、最下層は暗灰～灰白色粗砂層となる。南壁土層では、石積遺構の南側に縞状の黒褐色土の堆積が続くが、これは石積遺構前面南側に広がる潟に係る堆積層である。

３．遺構と遺物

（１）第１面（図３）

①集積遺構・石積土坑（図６）

SK002・003（図６）

第１面北側に位置する。土師器と瓦の集積遺構である。掘方は明確でないが、長軸２m、短軸1.3mの平面楕円形と長軸1.4m、短軸１m以上の楕円形土坑が２基連結している形だが、本来一連のものであろうと考える。13世紀ごろ。

出土遺物（図７・１～17）

１～３は002出土。１は土師器坏で口径14.0cm、器高2.8cm、底径9.4cm。糸切底で板圧痕がつく。２は土師器皿。口径9.0cm、器高1.9cm、底径6.4cm。糸切底。３は白磁碗の口縁部。４～16は003出土の土師器。４～11は坏。口径14.0～16.4cm、器高2.8～3.9cm、底径8.8～11.0cm。すべて糸切底。12～16は小皿。口径6.7～11.0cm、器高2.0～2.8cm、底径5.2～7.4cm。すべて糸切だが、12は板圧痕が残る。17は軒平瓦。唐草文。

SK004（図６）

第１面南東壁際に位置する石積土坑の残骸である。残存長は1.5m。

出土遺物（図７・18～25）

18は瓦質土器の鉢。内面はハケ、外面はナデ調整。19は坩堝。復元口径は9.0cm。内面に緑青が付着しており、青銅を溶かしたものと考えられる。20は土師器の小皿。口径8.1cm。糸切底。21は須恵器高坏脚部。22は滑石製石鍋の転用品。穿孔がある。23は鉄製釘。残存長は4.1cm。24、25は丸瓦。いずれも縄目痕が残る。

SK051（図６）

調査区の北寄りに位置する、石積土坑の一部である。底部はやや大きめの礫を用いるが、上部は平瓦と板状の割石で積み重ねて構成する。残存長は1.2mである。

出土遺物（図８～10）

26、27は白磁碗。26は復元口径15.6cm。内外面ともに灰白色の釉がかかる。口縁端部はやや外反する。27は底部。灰白色の釉がかかるが、底部外面は露胎となる。底径7.2cm。28は黒褐色を呈する陶器の甕の底部。底径11cm。底部は露胎となる。29は土師器小皿。口径5.9cm。底部はケズリ調整で板圧痕が残る。京都系土師器。30～32は土師器小皿。口径6.2～6.4cm、器高0.6～0.9cm、底径2.3

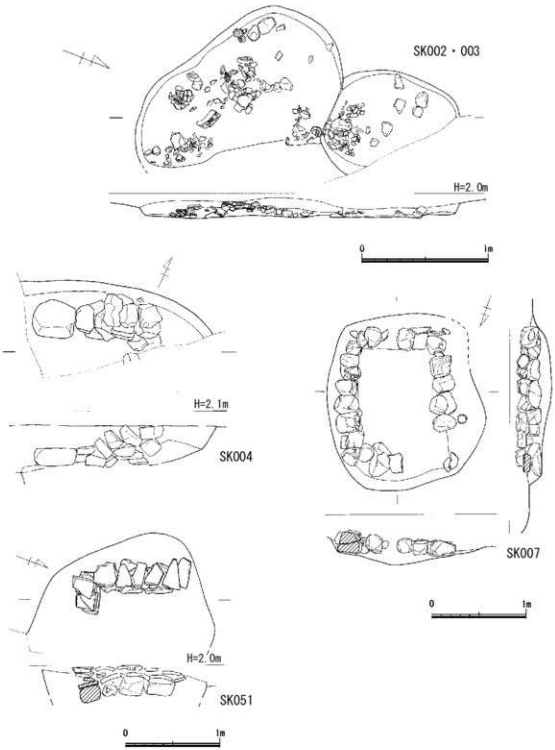


図６　第１面集積遺構・石積土坑実測図（1/30，1/40）

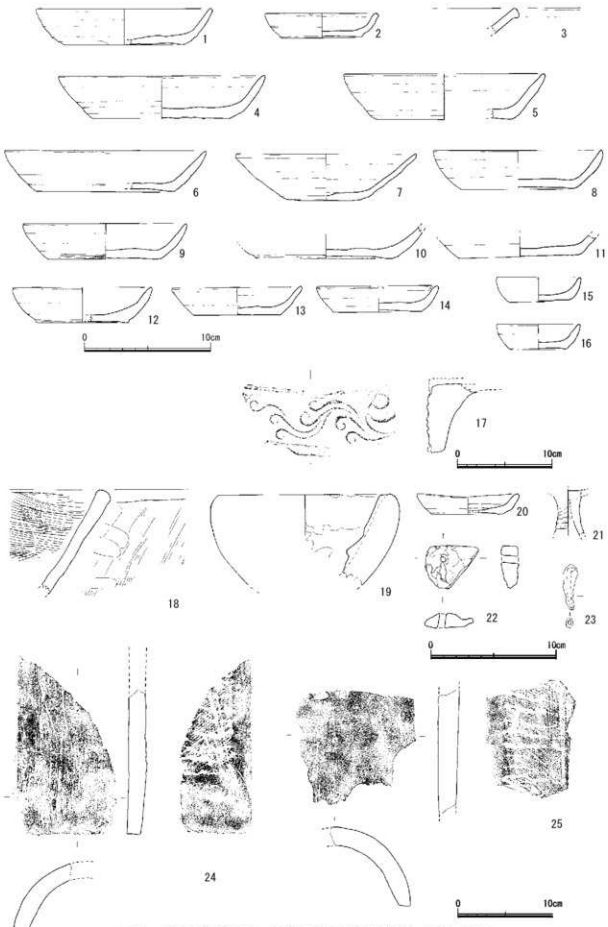


図７　第１面集積遺構・石積土坑出土遺物実測図（1/3，1/4）

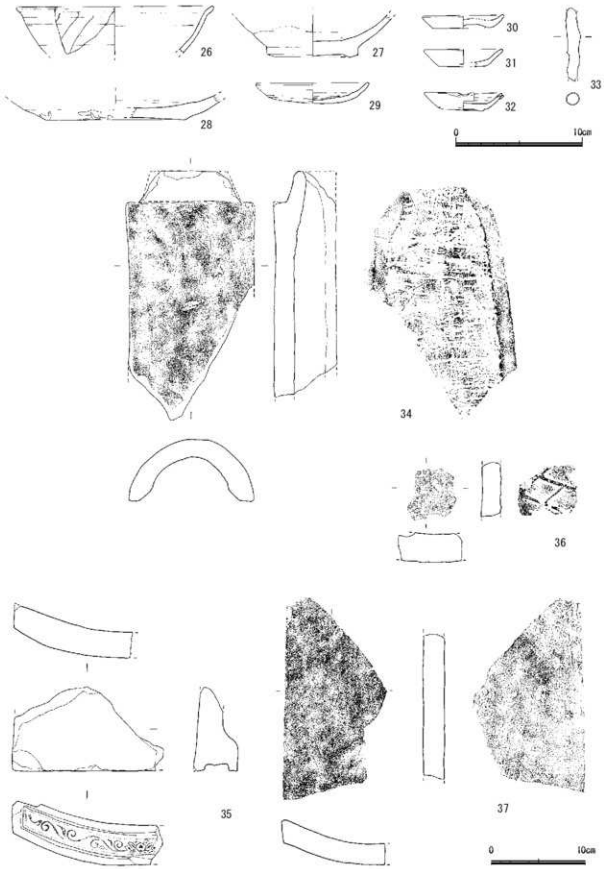


図８　第１面石積土坑出土遺物実測図（1/3，1/4）

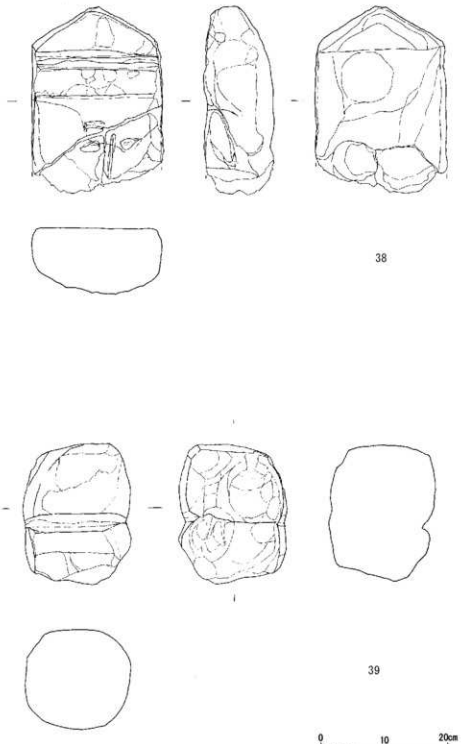


図９　第１面石積土坑出土遺物実測図２（1/6）

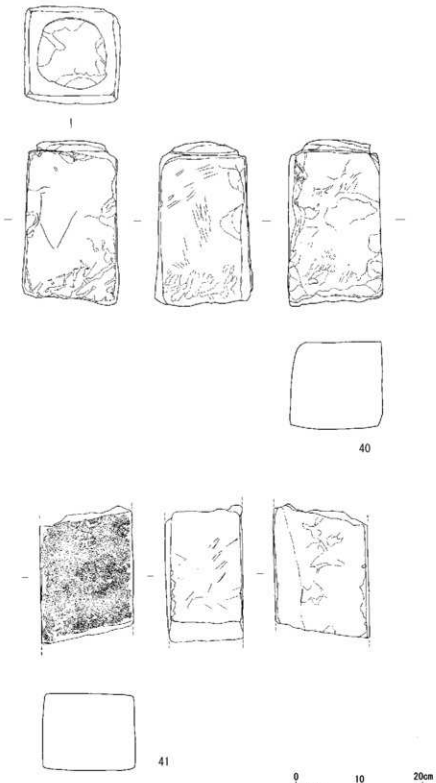


図10　第1面石積土坑出土遺物実測図3（1/6）

～3.0㎝。すべて糸切底。33は鉄製釘。残存長は5.7㎝。34は丸瓦。凸面に条痕が残る。35は唐草文の軒平瓦。36、37は軒平瓦。36は格子目文が入る。38～41は石積に用いられていた石材である。38は花崗岩製の石塔の一部。上部は三角形を呈し、下半には文字が刻まれている。39も花崗岩製の石塔。上半部は塔身、下半部は基壇を呈する。境目に溝が刻まれる。40は砂岩製の石塔。地輪の部分と思われる。41も砂岩製の石塔。「光」の文字が刻まれている。

②井戸（図11）

SE008（図11）

調査区の北側寄りに位置する。底部までの掘削は行っておらず、掘方のみの確認である。掘方の径は1.9m。出土遺物から17世紀以降の時期と考える。

出土遺物（図12・42～46）

42は白磁転用の瓦玉。43、44は備前焼の擂鉢。43は復元口径32.8㎝。内面に9条の摺り目が入る。44は口縁部のみ。内面には5条の摺り目が入る。46は三巴文の軒丸瓦。

SE037（図11）

調査区の中央東寄りに位置する。掘方の径は0.6m で底部に結物の井筒が掘えられている。肥前系の陶磁器の出土から17世紀以降と考える。

出土遺物（図12・47～55）

47、48は白磁碗の底部。49、50は肥前系の白磁皿。49の底径は10.0㎝、50は復元口径12.6㎝、底径は7.0㎝。51は陶器の向付。復元底径は7.0㎝。底部外面は露胎であるが、内外面に暗灰褐色の釉がかかる。52は土師器碗。復元底径は6.5㎝。外底にヘラ記号のような沈線が刻まれる。53、54は土師器皿。口縁部に打ち欠きがある。口径は10.0、9.0㎝。53の底部は糸切底、54はヘラ切りで板圧痕が残る。55は桟瓦で鉄釘が残る。

SE070（図11）

調査区中央付近に位置する。第1面で掘方を検出したが、不明瞭であった。掘方は少なくとも長軸2.0m、短軸1.6mの平面楕円形を呈する。下層で結桶の箍の部分のみ検出された。掘方の上層では陶磁器や瓦片、礫が多量に出土している。埋没時期は近世。

出土遺物（図13～16）

56～72は上層出土。56は白磁碗の底部。底径は7.0㎝。外底は露胎となる。57は瓦質土器の火舎。口径は38.8㎝で口縁部に刻み目が巡る。58は瓦質の不明製品。残長は8.2㎝で横断面はかまぼこ型の形状になる。瓦か。59～61は丸瓦。いずれも両面に縄目が残る。62、63は伏間瓦か。縄目が残る。64は陶器の壺。内外面に施釉される。65は土師器の小皿。底径6.0㎝で糸切底。66は瓦質の火舎。口縁部に刻み目が入る突帯が巡る。内外面ともに工具によるナデとミガキ調整がなされ丁寧に成形される。

67～73は一字一石経。67、68の文字は不明。梵字か。69は「會」、70は「昔」、72は「善」、73は「呼？」。71は不明。

74～77は2層から3層出土。74、75は瓦玉。74は瓦、75は白磁の加工品。74は径が4.9㎝、75は径が4.4㎝。76は陶器の甕か壺の胴部。内外面に施釉され、外面にはうろこ状の文様が施される。77は一字一石経。花崗岩製で、文字は不明。

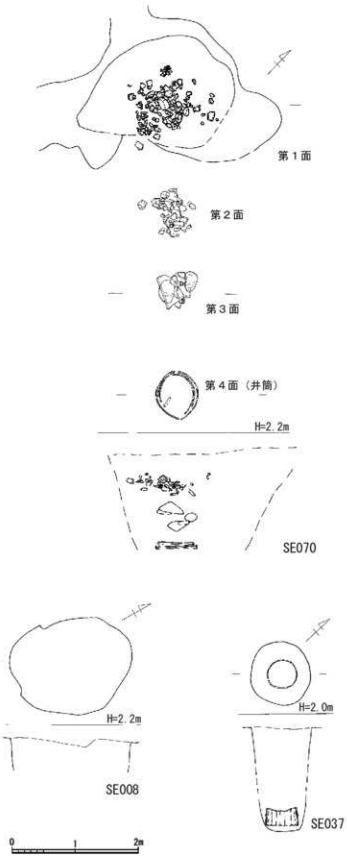


図 11　第 1 面井戸実測図（1/60）

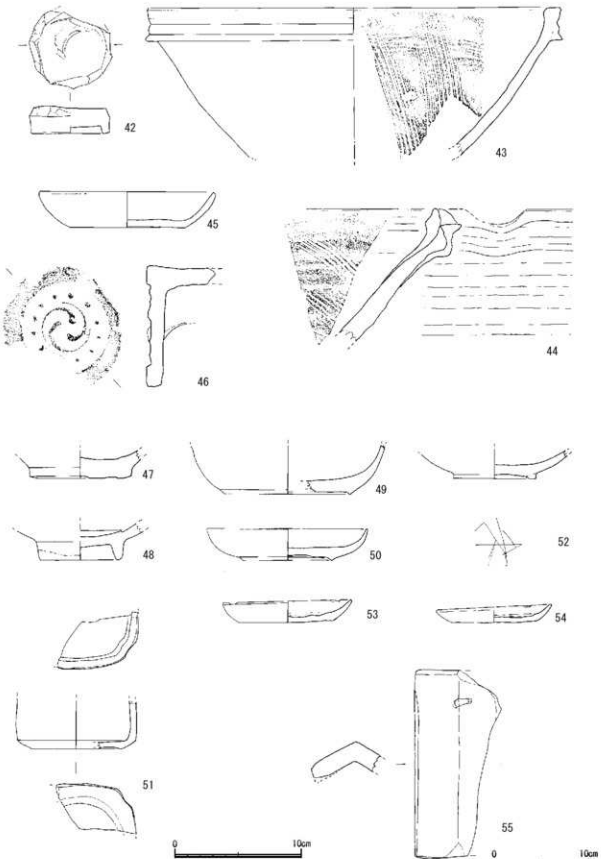


図12　第1面井戸出土遺物実測図1（1/3，1/4）

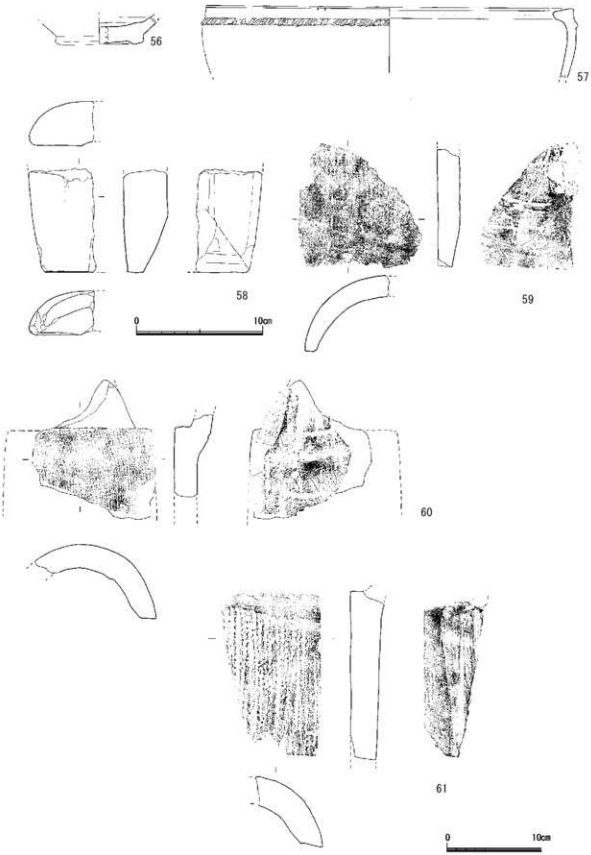


図 13　第 1 面井戸出土遺物実測図 2 （1/3，1/4）

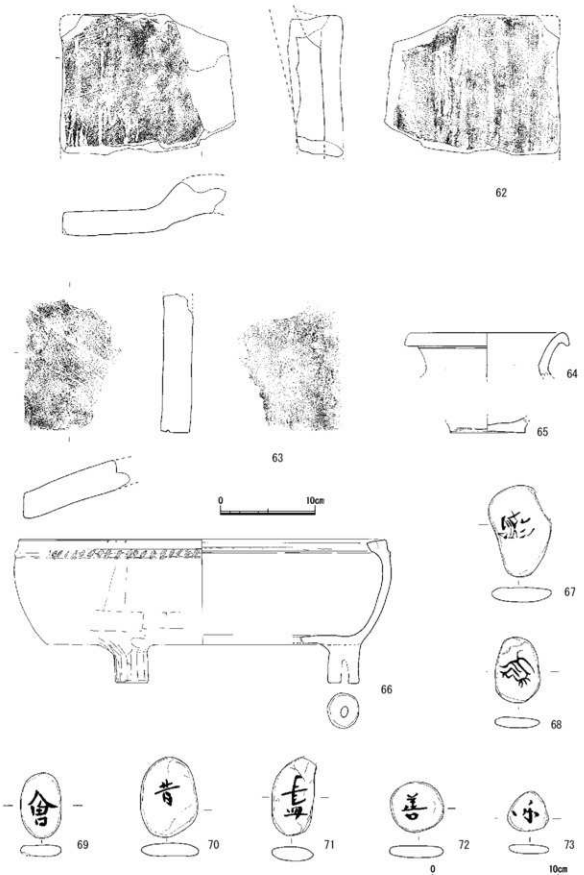


図14　第1面井戸出土遺物実測図3（1/3，1/4）

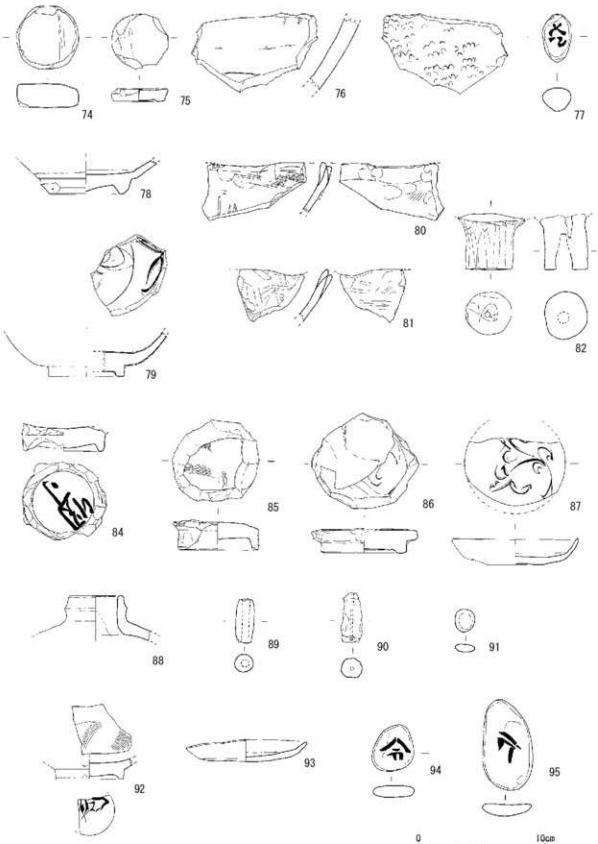


図 15　第 1 面井戸出土遺物実測図 4 (1/3)

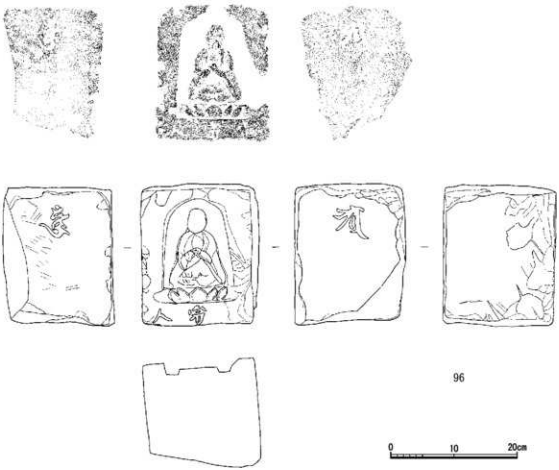


図16　第1面井戸出土遺物実測図5（1/6）

78～91はSK070内の出土遺物。78は白磁碗底部。底径は5.9㎝。79は龍泉窯系の青磁碗底部。復元底径は6.0㎝。80、81は瓦質土器の擂鉢。注口部分。82は火舎の脚部。84～86は瓦玉。84、85は白磁碗の転用品。84は底部に墨書が見られる。一部は「網」の文字か。85は見込みに櫛描文が見られる。86は青磁碗底部。87は白磁皿。口径10.0㎝、底径4.2㎝。碁笥底で見込みに花文が施される。88は瀬戸焼の梅瓶。復元口径は4.4㎝。オリーブ灰色を呈する。89は土錘。90は鉄製品。91は黒の碁石。径は1.6×1.8㎝。92～96は井筒出土。92は青磁碗。底径6.3㎝。見込みには櫛描文、外底には墨書が見えるが、文字は不明。93は土師器の小皿。口径は9.6㎝。底部は回転ヘラケズリで板圧痕が残る。94、95は一字一石経。94は「令」、95は文字不明。96は砂岩製の石塔の一部。残存法量は長22.3㎝、幅18.8㎝、厚さ14.8㎝。正面には仏像が彫刻され、背面には梵字が刻まれる。

③土坑（図17）

SK021（図17）

調査区の南東角に位置する土坑。獣骨が出土している。調査区に切られているので詳細は不明だが、井戸の掘方の可能性もある。出土遺物を見ると、12世紀代となる。

出土遺物（図18・97～104）

97は白磁碗。底径は6.6㎝。98は陶器の甕。灰赤～黒褐色の釉がかかる。外面と内面で異なる種類の釉がかかる。99は須恵器の坏底部。底径は10.8㎝。100、101は瓦器碗。100は外面はミガキ、内面はナデによる調整がなされる。口径16.0㎝、器高5.5㎝、底径6.3㎝。底部には一部板圧痕が残る。

101は口径15.6cm。内外面はミガキ調整が残る。102、103は土師器小皿。102は口径8.8cm、底径7.0cm。底部はヘラ切り。103は口径8.7cm、底部は板状圧痕が残る。104は土錘。残長は3.7cm。獣骨は、小型シカの距骨、イヌ上顎骨、ウマ臼歯が出土している。

SK022（図17）

調査区の南東端に位置する土坑。調査区に切られているが、長軸は1.9mを測る。16世紀代まで下る。

出土遺物（図18・105～108）

105は土鍋。内外面はハケメ調整で煤が付着する。106、107は土師器。106は坏で、口径11.0、底径7.2cm。糸切底。107は小皿。口径7.8、底径6.0cm。底部に板圧痕が残る。108は丸瓦。内面に布目痕が残る。

SK050（図17）

調査区の北側中央寄りに位置する。径1.1mほどの平面円形の土坑。肥前系の大皿、陶器の壷、土

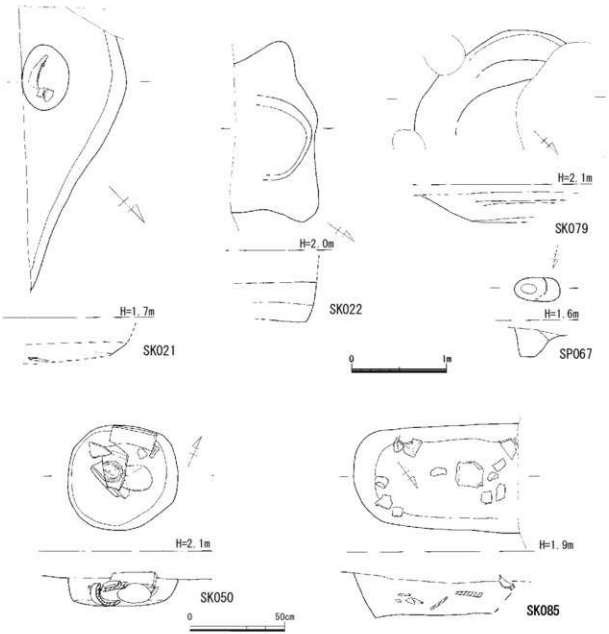


図17　第1面土坑実測図（1/40，1/20）

師器小皿、鉄釘、丸瓦、礫が埋納されているような状態で検出された。近世。

出土遺物（図19）

109は肥前系の染付大皿。内面に二重圏線と樹木が描かれている。残存の径は30.0㎝、底径は10.0㎝を測る大型の皿である。110は陶器の壷。口径は12.0㎝、残高7.2㎝。浅黄橙色を呈する。111は土師器小皿。口径9.0㎝、底径7.5㎝。112は鉄釘。長さ4.5㎝。113は丸瓦、114は平瓦。113はほぼ完形で、凸面に布目痕が残る。114は縦半分が残っている状態。

SK079（図17）

SE008に切られている。井戸の掘り方の可能性があるが、今回の調査では下まで掘り下げていない。

出土遺物（図20・115～124）

115、116は白磁碗。115は底径5.2㎝。内面に櫛描文が見られる。116は底径7.4㎝。外面の底部付近は棒状の工具痕が残る。117は白磁碗の瓦玉。口径は5.0㎝で内面に花文が施される。118は青磁碗。内面に片切掘りの連弁文が施される。119は同安窯系の青磁皿。内面に櫛描文が施される。口径11.0㎝、底径5.0㎝。120は瓦質の火舎。口縁部に刻み目が入る突帯が巡る。121は土鍋。内面にハケメ調整が入る。122は土師器小皿。口径7.3㎝、底径6.0㎝。糸切底。123は滑石製石鍋の転用品。方形になるように割り、紐をまく刻み目が入っていることから石錘に利用されたと考える。約5.5×4.0㎝大。124も滑石製の石鍋転用石錘。こちらは紡錘形に整形したもの。

SK085（図17）

調査区の南西側壁に切られている平面長方形の土坑。礫が散布していた。残存している長軸の長さは1.7m、幅1.1m。

出土遺物（図20・125）

125は青磁碗。口径11.3、器高7.3、底径5.0㎝。高台には目跡が残る。

SP067（図17）

調査区南端に位置する。長軸の長さが50㎝ほどのピットではあるが、土師器坏が２個体出土している。

出土遺物（図20・126、127）

126、127は土師器坏。口径は13.0、11.9㎝、器高2.4、2.9㎝、底径8.0㎝を測る。いずれも糸切底。

（２）第１面下

第１面を30㎝程掘り下げると、小礫群の散布が見られたためここで面を設定した。ただ、第１面の掘り残しが多いため、第１面下とした。

①集積遺構（図21）

SK090（図21）

調査区北東端に位置する礫、獣骨の集積遺構。

出土遺物（図22・128）

128は白磁碗の底部。底径7.5㎝で、見込みに目跡が残る。

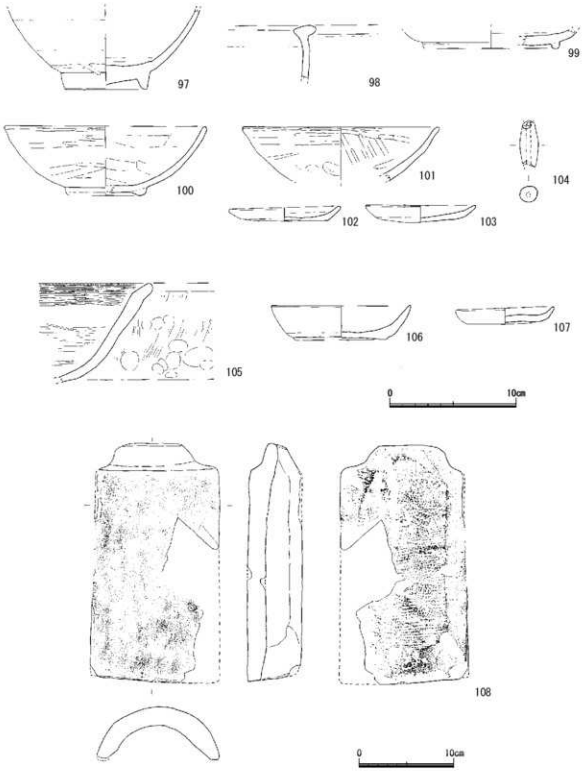


図 18　第 1 面土坑出土遺物実測図 1 （1/3，1/4）

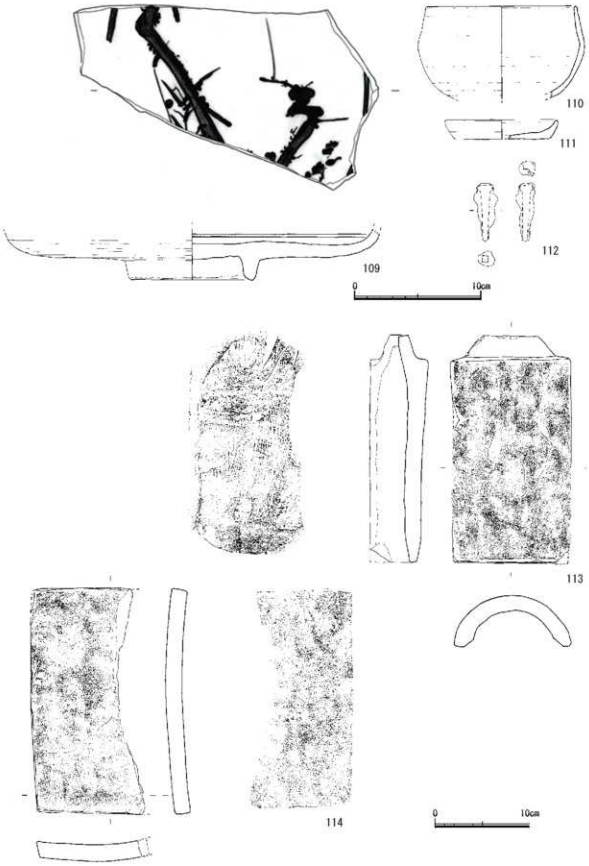


図 19　第 1 面土坑出土遺物実測図 2 （1/3，1/4）

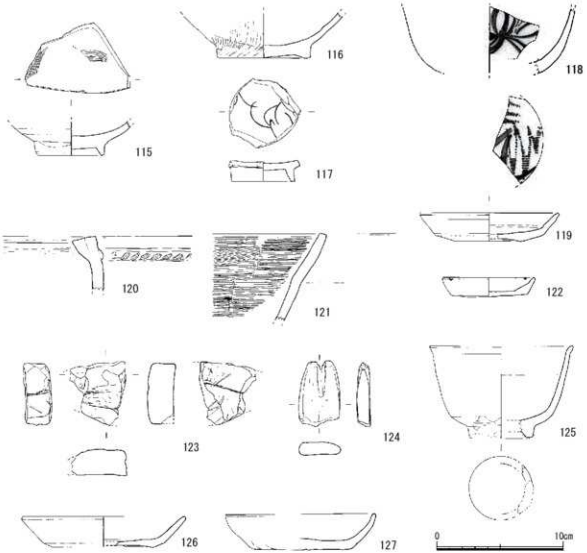


図 20　第 1 面土坑出土遺物実測図 3（1/3）

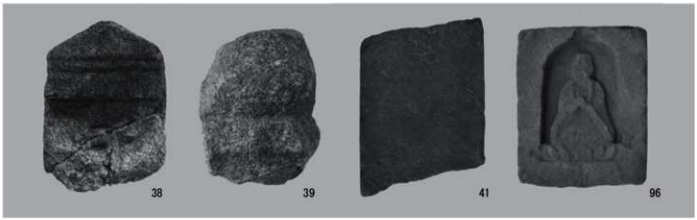


写真 1　石塔類

SK093・094（図21）

SK090の西側に位置する集積遺構。土鍋、土師器皿、瓦が散布している。

出土遺物（図22・129～143）

129は陶器壷の頸部。外面にオリーブ褐色の釉がかかる。130は陶器盤の口縁部。口縁端部にはオリーブ黄色の釉がかかる。131は黒色土器の坏底部。底径6.8cmで高台がつく。ミガキ調整がなされる。132～134は土師器坏。132は口径11.7cm、底部にかけて丸みを帯びる器形。133は口径16.4cm、器高4.0cm、底径10.0cm。糸切底。134は口径13.2cm、器高2.4cm、底径9.7cm。糸切底。135～138は土師器小皿。135は底径8.0cm136～137は口径6.4～7.1cm、器高1.3～1.5cm、底径4.4～5.5cm。すべて糸切底。139, 140は土鍋。いずれも半分以上残存して、つぶれた状態で出土した。139は口径33.7cm、器高16.1cm。外面はハケメのちナデ調整。内面はハケメ調整。煤が付着する。140は口径27.0cm、器高13.0cm、内外面はハケメ調整がなされる。外面に煤が付着する。141、142は平瓦。143は鉄製釘。

SK118（図21）

調査区北端に位置する土坑。白磁碗が出土している。12世紀前後。

出土遺物（図22・144、145）

144、145は白磁碗。144は玉縁口縁で、口径16.4cm、底径7.6cm。高台底部は露胎になるが、内外面は灰白色の釉がかかる。145は胴部から口縁にかけて緩く湾曲して立ち上がる器形。底部付近は露胎となるが、内外面に灰白色の釉がかかる。

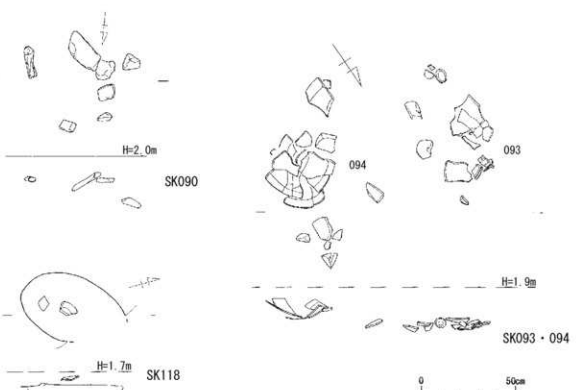


図21　第1面下集積遺構実測図（1/20）

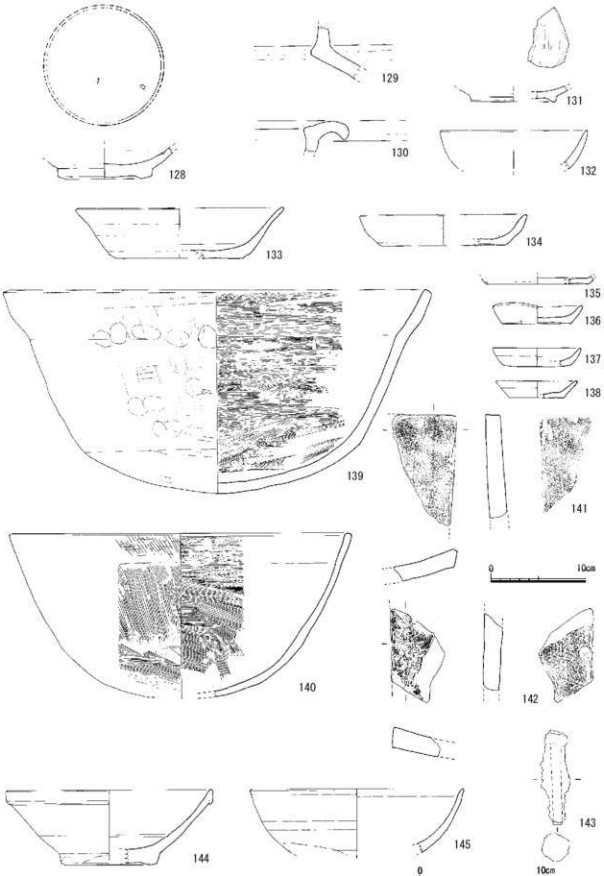


図 22　第 1 面下集積遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

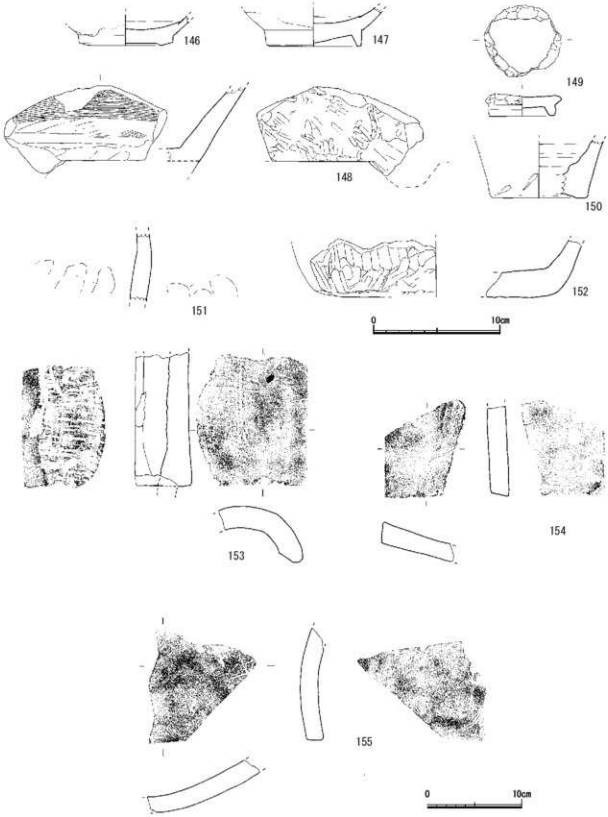


図 23　第 1 面下集積遺構出土遺物実測図 2（1/3，1/4）

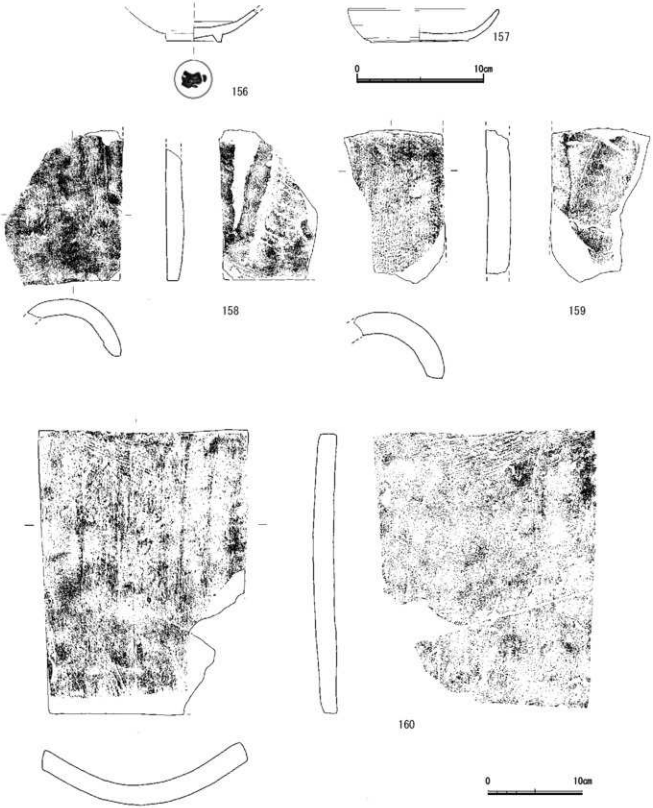


図 24　第 1 面下集積遺構出土遺物実測図 3（1/3，1/4）

SX114（図４）

調査区の中央から北西寄りに散布する礫群。下面の第２面で検出した石積遺構にかかる礫が散布した状態と思われる。

出土遺物（図23、24）

146、147は白磁碗。高台付近まで灰白色の釉がかかる。いずれも底径7.6㎝。148は火舎底部。外面はミガキ、内面はハケメ調整がなされる。149は白磁の瓦玉。150は陶器甕の底部。底径7.8㎝、灰白色を呈する。151は陶器の甕。指圧痕が残る。152は滑石製の石鍋底部。復元底径は19.0㎝。153は丸瓦。縄目と布目痕が残る。154、155は平瓦。156は白磁碗。底径は4.4㎝で、高台内に墨書が残るが、文字は不明。157は土師器坏。口径12.0㎝、器高2.5㎝、底径7.7㎝。糸切底。158、159は丸瓦。布目と縄目が残る。160は平瓦。外面にはタタキ痕が残る。

（３）第２面

第１面下を30㎝程掘り下げていくと、調査区の西側に土師器と礫を楕円形に配した遺構SX141が検出され、調査区東側には礫、瓦、木片などが散布した黒褐色粘質土層の広がりが確認された。さらに調査区北側に、北西－南東の方向に走る石積みが検出された。黒褐色粘質土層の広がりは後に池状遺構と推定されたが、石積遺構の検出と合わせて、同時に掘り下げを行い、石積遺構の前面（南側）の確認を行っていった。石積遺構の南側前面に位置する遺構は、石積遺構と同時期のものや石積遺構埋没後の時期のものもある。

①集積遺構（図25、27、28、30、31）

SX141（図５、25、27、28）

Ⅱ区の南、石積遺構南西部の緩斜面で八花鏡１面が出土した。遺構検出の結果、八花鏡の周囲で土師器の坏や皿の分布が確認された。この4.0m×3.0mの遺物包含層をSX141とした。

SX141は、標高1.7mから1.2mで埋土は粗砂層と黒色シルト層が互層をなしていた。八花鏡は、標高1.4mの地点で鏡背を上に出土した。さらに鏡の出土地点の東0.8mで赤色の半円形石製品が出土した。

花弁双蝶八花鏡（巻頭図版５・図26）

内区に鉦をはさんで蝶文と草花文を対に配した花弁双蝶八花鏡である。面径7.27㎝、重さ67ｇの小型鏡で、鏡背は青錆に覆われ、鏡面は白銅質の部分が散見される。蝶は羽を重弧文で表現し、触覚は鮮明さに差がある。草花文は、雙葉を対称的に配し、花部は４つの珠文を対置させたもの「T」字の両端に膨らみのある二種がみられる。外区には界圏から立ち上がる瑞雲文８を八花に対応するように配している。花弁双蝶八花鏡のほか、花弁双蜂八花鏡とされたこともある（保坂1986）。花形に沿った幅1.0㎝、厚さ2.0㎜にわたるバリ（矢印部）は、湯口の痕跡とみられる。地文様は素文である。

唐式鏡に分類されるが中国において同じ文様の鏡は確認されていない。中型以上の中国鏡をモデルに日本において生まれたと考えられている（杉山2003）。同型鏡は近畿をはじめ東海、関東、東北、四国で出土しており、今回の調査で分布の西限は九州北部となった。踏み返しによる鋳造で、地文様に霰地があるものとないものの２系列に分類される（杉山2003）。

表　花弁双蝶八花鏡一覧

遺跡名	出土地・所在地	地域	用途	型式
正倉院南倉38号鏡	奈良県奈良市南倉38号	近畿	—	花弁双蝶第２系列
興福寺鏡	奈良県奈良市興福寺中金堂	近畿	鎮壇具	花弁双蝶第２系列
西大寺鏡	奈良県奈良市西大寺金堂跡	近畿	鎮壇具	花弁双蝶第１系列
崇福寺鏡	滋賀県大津市滋賀里町伝崇福寺跡	近畿	鎮壇具	花弁双蝶第１系列
岩倉神社鏡	三重県紀伊長島町岩倉	東海	祭祀	花弁双蝶第１系列
八代神社鏡	三重県鳥羽市神島	東海	祭祀	花弁双蝶第１系列
半ヶ谷鏡	静岡県藤枝市下ノ郷半ヶ谷古墳	東海	副葬品	花弁双蝶第１系列
仲田鏡	長野県佐久市大字猿久保	中部	住居跡	花弁双蝶第１系列
筑波山鏡	茨城県つくば市筑波山	関東	祭祀	花弁双蝶第１系列
市川橋鏡	宮城県多賀城市市川字立石	東北	祭祀	花弁双蝶第１系列
小阿地鏡	秋田県秋田市四ッ小屋小阿地古墳	東北	副葬品	花弁双蝶第２系列
中庄東鏡	徳島県三好郡東みよし町中庄	四国	祭祀	花弁双蝶第１系列
博多221次鏡	福岡市博多区上川端町	九州	祭祀	花弁双蝶第１系列

用途については、官大寺などの鎮壇具に供されたもの、岩倉鏡や八代鏡、筑波山鏡、市川橋鏡など祭祀に用いられたもの、小阿地鏡、半ヶ谷鏡など奈良時代の墳墓に副葬されたほか、仲田鏡のように９世紀後半～10世紀初頭の住居跡で出土した例がある。

興福寺中金堂の鎮壇具は８世紀前葉の建立時に埋納されたとみられる。正倉院南倉38号鏡は、銅約80％、スズ約20％、ヒ素約１～３％からなるB群鏡、国産官営工房製鏡に近い分析値である（成瀬1999）。

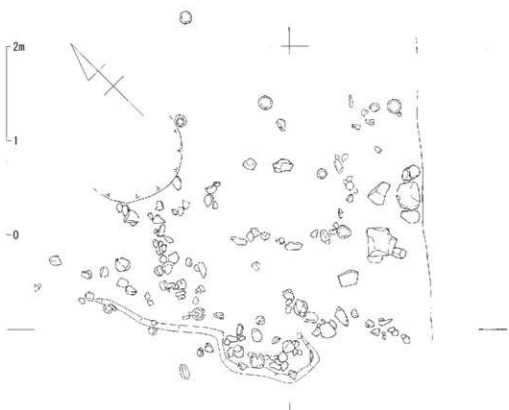


図25　SX141 実測図（1/40）

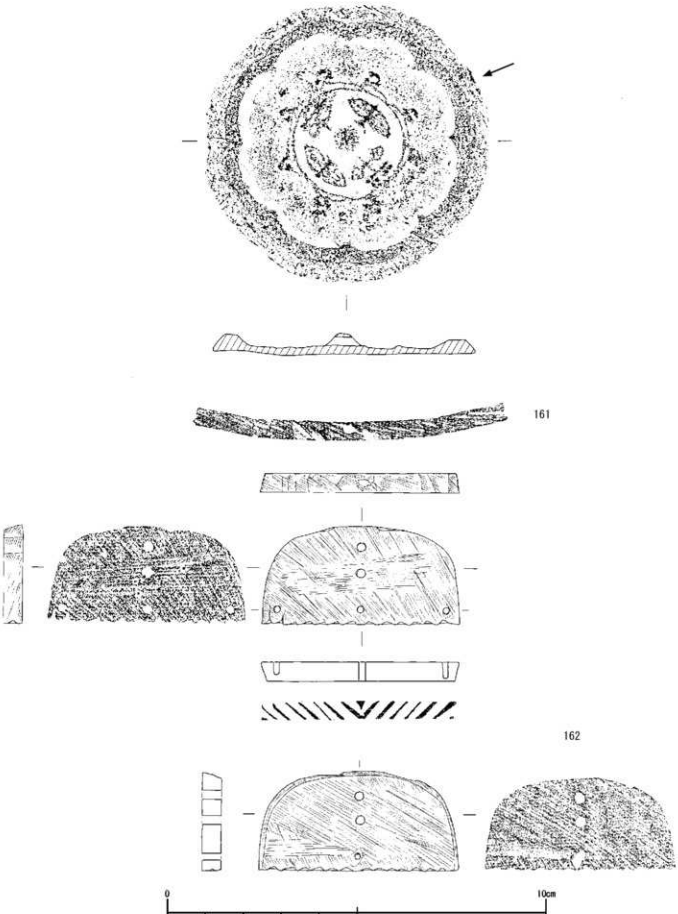


図 26　SX141 出土八花鏡、半円形石製品実測図（1/1）

図 27　八花鏡の出土状況（南より）

図 28　八花鏡と土師皿の出土状況（南より）

中庄東鏡（徳島県三好郡）は、銅、スズを主成分とし、ほかに鉛、ヒ素を少量含む成分比（パリノ・サーヴェイ2008）は、成瀬氏のC群鏡、国産私営工房製鏡に分類される（成瀬1999）。８世紀代の掘立柱建物の掘り方の最上面で検出されたことから、報告者は建物の撤去に伴う祭祀の可能性を示唆する（島田2008）。吉野川中流域の交易拠点に立地することを考慮すれば中世の河川祭祀に伴う可能性も否定できない。

博多221次鏡は、銅と鉛と若干のヒ素からなり、スズをわずかに含む第５のタイプに分類される（比佐2023）。第５タイプの分析値は、皇朝十二銭の隆平永宝（796年初鋳）との類似性が指摘されており、つづく富寿神宝（818年初鋳）の鋳造を契機に鋳潰して製作された可能性がある。以上から、本鏡の製作時期は、８世紀初頭から９世紀前半頃と推定される。

本鏡式の分布は、ながく近畿以東の地域に偏るとみられていたが、ここ20年ほどの間に東四国と九州北部の事例が追認された。博多221次鏡は11世紀後半に築かれた護岸の石積遺構に近接することから、海浜部や河川における祭祀的用途が想定される。祭祀に供されるまでの間、この種の鏡がどのような来歴をたどったかは今後解明されねばならないが、博多湾における海獣葡萄鏡など海揚がり資料（林田2016）についても海浜祭祀の観点からの検証がまたれる。

半円形石製品（巻頭図版５・図26）

カオリナイト製の石製品は長辺5.28㎝、厚さ5.0㎜で14.5ｇ。長辺正面の中央に三角形、その両側に斜方向の凹凸が削り出されている。長辺にそった径1.5㎜の３孔中、両側の２孔は貫通しない。中軸にそって径2.0㎜の２孔が穿たれている。両面の研磨は粗く、半円形の面も粗い削りが加えられた程度である。

石製品は部品の一部で、仕上げが行われたのは長辺の正面に限られている。それ以外の面は目に触れることを重視していなかったとみられる。筆者は、仏龕などに嵌められた台座に類する部品を候補としたい。仏龕であれば半円形の面は容器に接するため粗い削りでよく、長辺にそった両側の２孔が貫通しないのは小さなピンを置いて同様の石製品を重ねるためと理解できる。かりに同型式の石製品を重ねると、長辺正面の中央に菱形、その両側に無軸羽状文を配した構成となる。中軸にそった２孔は仏像などから派生した棒状の金属などを挿入するためのものと推定される。

参考資料として雷峰塔地宮出土の玉童子に付属する台座をあげる（浙江省文物考古研究所2005）。雷峰塔は杭州市西湖の南岸にある10世紀中頃に建てられた仏塔である。その地宮におさめられた玉製の童子像は下端を台座の臍穴に挿入する造りとなっている。台座の３面に須弥山、童子像の挿入部には全面に波涛が彫られている。

出土遺物（図29）

土師器の坏や皿の多くは、底部糸切りによるもので、わずかにヘラ切りの器種が含まれる。このほか東播系須恵器の片口鉢や褐釉のこね鉢、径5.2㎝の球形の石製品は砂岩質で投弾に用いられた可能性がある。硬質で薄手の平瓦は、いわゆる寧波系中国瓦である。このように土師器から陶磁器、瓦、石製品など多種にわたるが、とくに土師器の坏が遺構の全面に分散して検出されたことに注目したい。

以上から141は、12世紀後半の海浜祭祀遺構と推定される。由緒ある系譜の花弁双蝶八花鏡や単体でも目をひく半円形石製品を道具立てに用いたほか、周辺で出土した土師器類も祭祀に関連するものとみられる。出土地は博多遺跡群で唯一11世紀後半に築かれた石積遺構が確認された場所であり、この地が博多の交易拠点として重要な役割を担っていたことを傍証するものといえる（常松）。

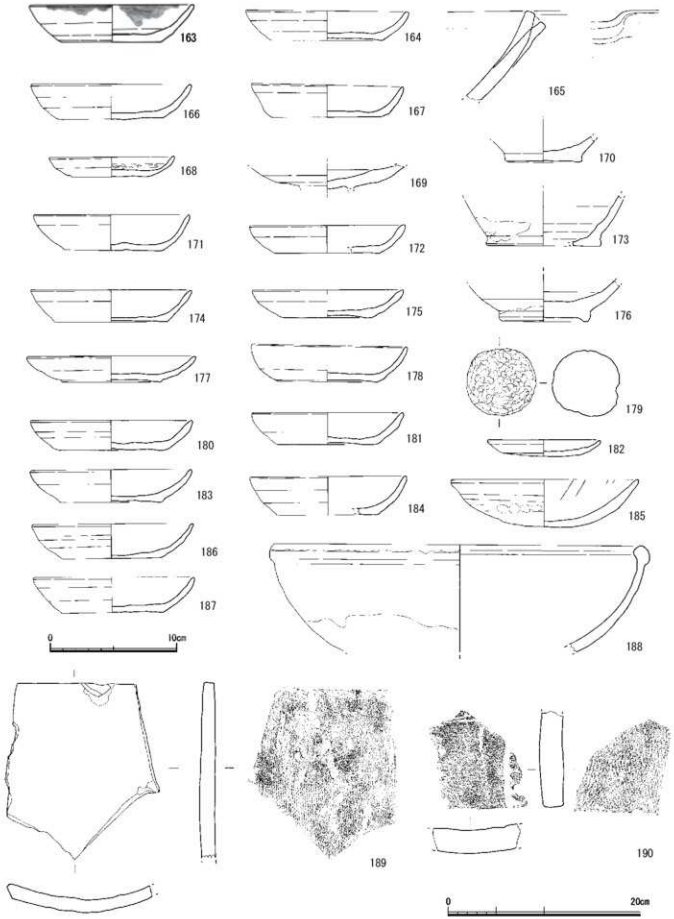


図 29　SX141 出土遺物実測図（1/3，1/4）

【註】

杉山　洋1999『日本の美術２ No.393 古代の鏡』至文堂

杉山　洋2003「花弁双蝶八花鏡」147～158頁『唐式鏡の研究』鶴山堂

花弁双蝶第１系列…背面が霰地とならないもの　花弁双蝶第２系列…背面が霰地となるもの

島田豊彰（編）2008「末石遺跡　中庄東遺跡」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第74集　徳島県教育委員会

成瀬正和1999「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『日本の美術２ No.393 古代の鏡』至文堂

パリノ・サーヴェイ2008「中庄東遺跡の自然科学分析」「末石遺跡　中庄東遺跡《第２分冊》」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第74集 徳島県教育委員会

林田憲三2016「コラム⑧　博多湾の引き揚げ遺物」802～803頁『新修福岡市史　資料編考古１』福岡市

比佐陽一郎2023「博多遺跡群出土資料の保存科学的調査について」『博多190』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1467集　福岡市教育委員会

保坂三郎1957「古鏡」創元社

保坂三郎1986「２．日本原史・奈良」『古代鏡文化の研究』雄山閣出版株式会社

浙江省文物考古研究所2005「雷峰塔遺址」文物出版社

SK119（図30）

調査区の南側に位置する。ウマの骨が検出された遺構。

出土遺物（図32・191～196）

191は白磁皿。口径12.6cm、底径4.6cm。碁笥底を呈すると思われる。内面に片切彫りで花文のような文様が施される。192は陶器の鉢か。底径3.8cmで黒色の釉がかかる。193は青磁皿。口径11.2cm、底径8.0cm。見込みに櫛描文による花文が描かれる。194は陶器の捏鉢。195は土鍋。復元口径は24.0cm。196は滑石製石鍋の加工品。石錘として使用したと思われる。

SK130（図30）

調査区の北端に位置する集積遺構。獣骨と瓦器碗が検出された。獣骨はウマの中手足骨等である。

出土遺物（図33・197）

197は瓦器碗。口径16.9cm。内外面はミガキ調整がなされる。

SK131（図30）

調査区の北端、石積遺構の北側に位置する。ウシの骨の集積である。解体したのちに埋納したものか。土器類も少量混入していた。

出土遺物（図33・198～201）

198は白磁碗底部。底径７cmで高台は露胎となる。199～201は土師器。199は坏で口径12cm、器高2.4cm、底径８cmで糸切底。200、201は高台がつく。高台径7.8cm、6.6cm。201は内面ミガキ調整がなされる。

SK144（図30）

調査区の北端に位置する。土器類、礫、骨の散布遺構である。獣骨はブタ肩甲骨とイヌ下顎骨が出土している。また、ヒトの下顎骨が検出された。出土遺物や出土状況からも墓壙とは言い難いが、後述する石積遺構に関係するものか。11世紀後半～12世紀ごろ。

出土遺物（図33・202～209）

202、203は土師器皿。口径8.9、7.8㎝、器高1.4、0.8㎝、底径7.2、6.5㎝でいずれも底部はヘラ切り。202は口縁部に打ち欠きが見られる。204は甕の底部と思われるが、穿孔が見られる。206は砂岩製で火舎と思われるが、外面に刺突痕が見られる。207は板状に仕上げた石製品で、滑石製鍋の転用品かと思われる。穿孔が見られ、形状から温石として用いられた可能性がある。208、209は平瓦。209は布目と格子目文が見られるが、割れ口に加工痕が見られ、転用品として利用されたと考えられる。

SK149（図30）

調査区東端角に位置する。ウシ橈骨が出土している。

SK164（図31）

調査区の南寄りに位置する。炭化層が不定形に３×２ｍ範囲で広がる。炭化層の中に白磁、土師器、瓦玉などが散布している。出土遺物から11世紀後半～12世紀ごろ。

出土遺物（図34、35）

210～219は白磁碗。210、211は口縁端部が玉縁に作られる。口径は16.6、15.6㎝。212～214は口縁端部がほぼ直線的に立ち上がる。口径は16.6㎝。215～218は口縁端部がやや外反する。口径は15.0～16.0㎝。216、217は器壁外面に縦方向に沈線が刻まれる。218は口縁端部が輪花となる。219は内面に回線が施される。

220～223は白磁皿。220は口径11.0㎝、底径5.0㎝。低めの高台がつく。221は底径4.6㎝。底部は碁笥底である。222、223は碁笥底で底径4.0㎝。見込みに中心で交わらせた沈線が施される。224は白磁水注の注口。

225は高麗青磁碗。底径7.0㎝。高台と見込みに目跡が残る。226は陶器の盤。底径は25.0㎝。227は無釉陶器の擂鉢。228は坩堝と思われる。

229、230は瓦器碗。229は口径14.9㎝。内外綿ともにヘラミガキが施される。230は底部に高台がつく。ヘラミガキ調整がなされる。231～234は土師器坏。231、232は口径15.0、14.0㎝。231～233はいずれも底部はヘラい切りで板圧痕が残る。234は底部に３カ所の穿孔が見られる。糸切底で底径は10.4㎝。235～238は土師器皿。口径は8.0㎝。糸切底で238は底部に穿孔が見られる。239は須恵器の壷か。240～244は瓦玉。240は白磁、他は瓦の転用。245は粘板岩製の硯か。246は滑石製石鍋片。247は丸瓦。

SK150（図31）

調査区北端に位置する。礫や染付などが出土している。

出土遺物（図36）

248は染付の皿。口径13.0㎝。249、250は須恵器の坏。249は平底で250は高台がつく器形。

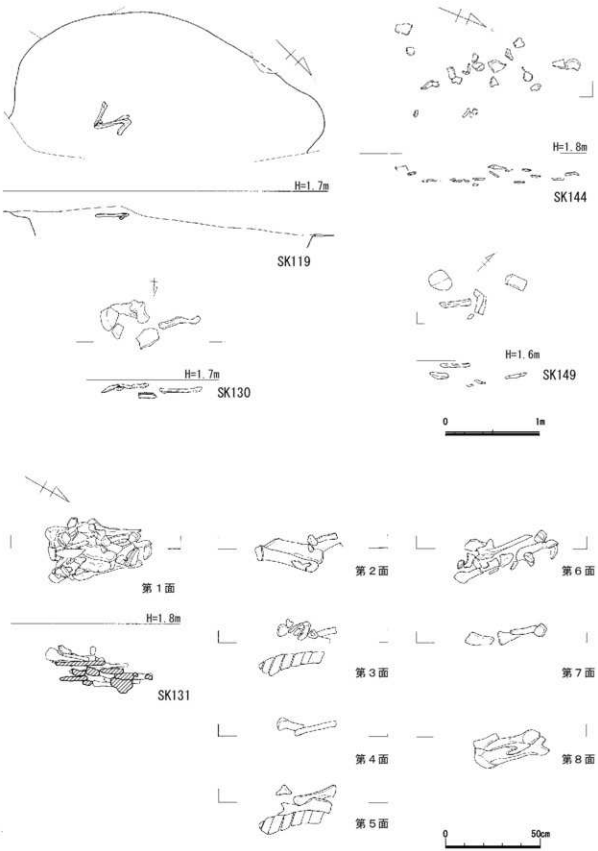


図30　第2面集積遺構実測図1（1/40，1/20）

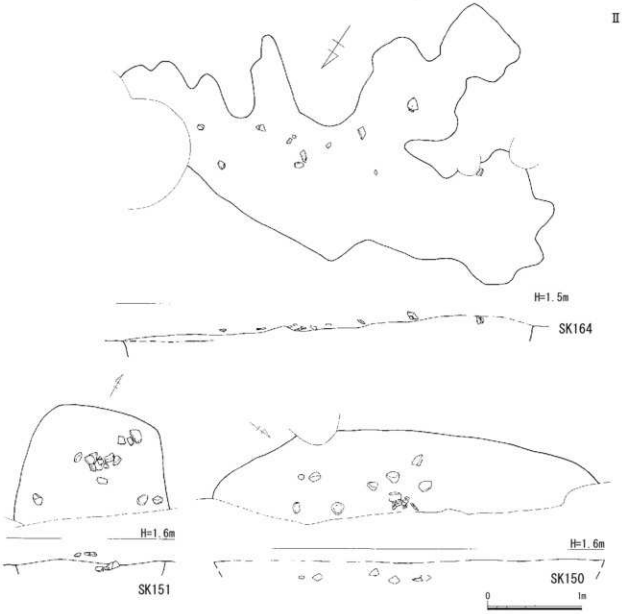


図31　第2面集積遺構実測図2（1/40）

SK151（図31）

調査区北東角に位置する。越州窯系の青磁が出土している。10世紀代。

出土遺物（図37）

251～257は青磁碗。251～254、256は輪花の口縁を呈している。252、257は口縁部が直線的に外反するが、他はゆるく内湾して立ち上がる器形。高台が残るものはいずれも高台に目跡が残る。

258、259は土師器坏。258は高台がつく器形。258はヘラ切りの底部。260～264は須恵器。260はつまみがつく蓋。261～264は坏。264のみ平底で、他は高台がつく器形。265は土錘。5.8cm。266は平瓦。格子目文と布目が残る。

②井戸

SE155（図38）

調査区の南東端で検出した井戸。井筒は結桶で比較的残りがよい。陶磁器、瓦器、土師器、須恵器が出土している。12世紀後半～13世紀ごろか。

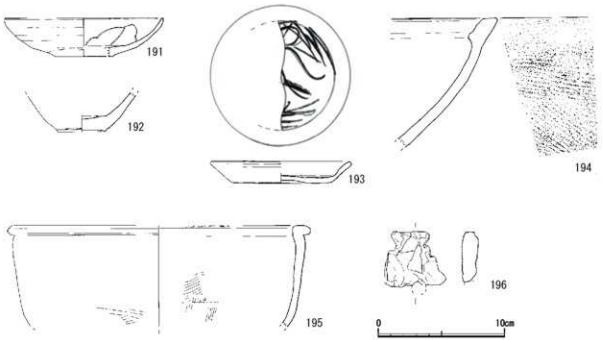


図32　第2面集積遺構出土遺物実測図1（1/3）

出土遺物（図39）

267～274は井筒、井側から出土している。267、268は玉縁口縁の白磁碗。口径15.6、15.8cm。269は青白磁碗。見込みには櫛描文が施される。高台径は6.0cm。270は緑釉陶器の壷で口径7.6cm。271は陶器碗で高台径は7.0cm。272は陶器甕。口径は19.8cmで黒褐色を呈する。273、274は土師器坏。273は径6.0cmの高台がつき、内面はヘラミガキ調整がなされる。274は糸切底で口径14.8cm、底径9.6cm。275～284は掘方内の出土。275～277は白磁碗。275は口縁部がやや外反して立ち上がる。口径は15.0cm、内面には櫛描文が施される。276は底部で、高い高台がつく。底径は6.0cm。277、280は小型の碗。277の口径は11.0cm。278の底径は4.2cm。280の高台には目跡が残る。278、279は瓦器碗。いずれもヘラミガキ調整がなされる。280は白磁の小型碗。底径は4.2cmで、高台底部に目跡が残る。281は土師質の鉢。口径は29.6cmになる。内外面ともに刷毛目調整が見られる。282は土師質の鍋か。口縁端部には太目の刻み目が施されている。283、284は須恵器壷の口縁部。口径はそれぞれ16.7cm、9.8cmとなる。

③土坑・ピット（図41）

SK152（図40）

調査区の北東端に位置する。須恵器、土師器等が出土している。12世紀代か。

出土遺物（図41・285～290）

285は陶器碗。外底中央に円形の刻線が施され、そこから放射状に刻線が入る。286～288は土師器。286、287は土師器坏。口径14.7、12.5cm。287は糸切底で板圧痕が残る。286の内面にはコテ当て痕が残る。288は小皿。口径6.9cm。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。289は須恵器坏。高台径10.0cm。290は滑石製鍋の口縁部。転用品か。

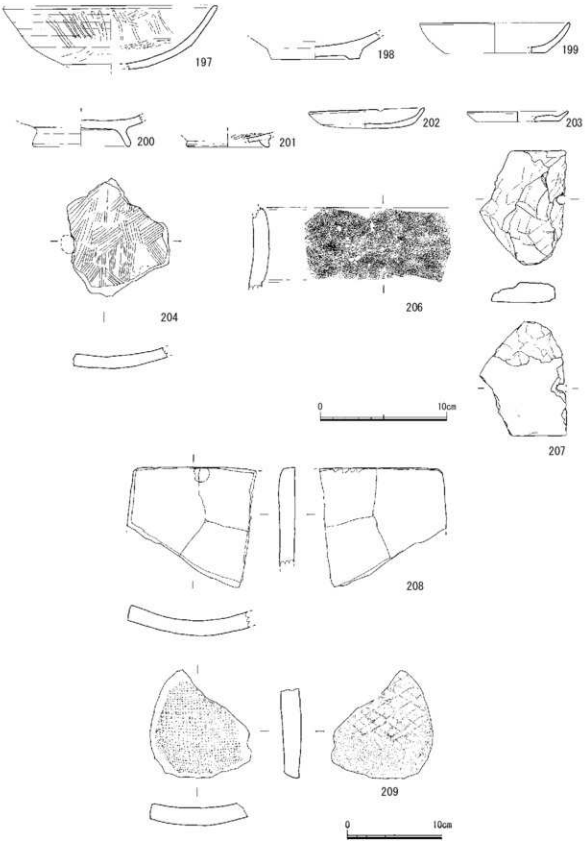


図 33　第２面集積遺構出土遺物実測図２（1/3，1/4）

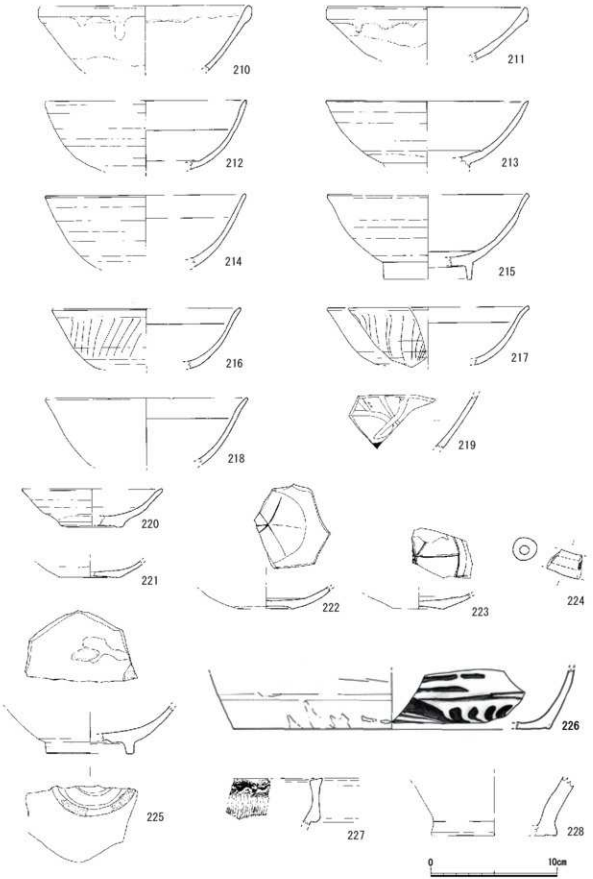


図34　第2面集積遺構出土遺物実測図3（1/3）

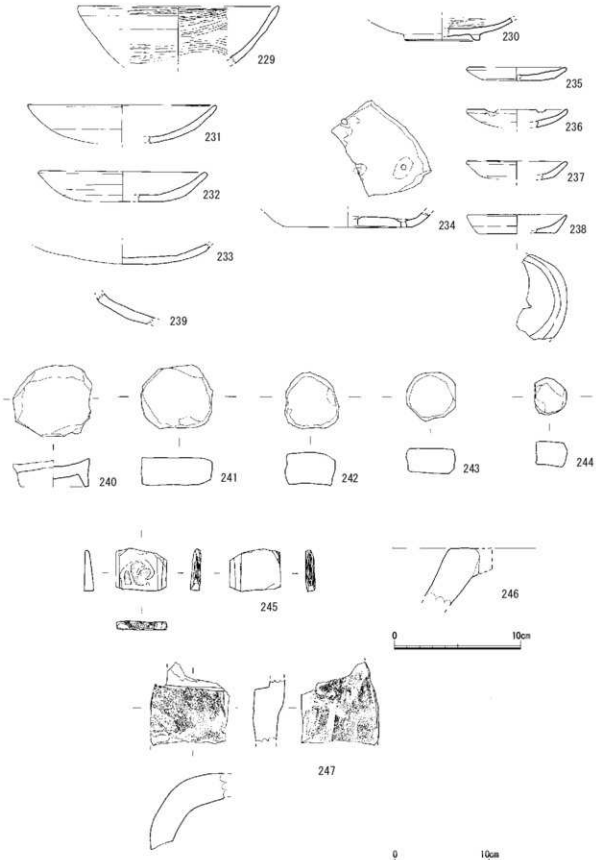


図 35　第 2 面集積遺構出土遺物実測図 4 （1/3，1/4）

図36　第２面集積遺構出土遺物実測図５（1/3）

SP128（図40）

調査区の南側に位置する。礫と土師器が出土した。

出土遺物（図41・291、292）

291は白磁碗の底部。底径4.1㎝。292は土師器皿。礫のそばに据え置かれているように検出された。口径9.2㎝で糸切底。板圧痕が残る。

SP137（図40）

調査区の北端付近に位置する。青磁碗底部が出土している。

出土遺物（図41・293）

青磁碗底部。底径6.6㎝で、外底には砂目跡が残る。

SP139（図40）

調査区北端に位置する。白磁、青磁、土師器坏が出土した。

出土遺物（図41・294～296）

294は青磁碗底部。高台径7.4㎝。全面に灰オリーブ色の釉がかかる。295は土師器坏の底部。底径10.0㎝で糸切底。296は青磁皿。口径13.5㎝、器高3.3㎝、底径5.6㎝。平底で外底は露胎となる。見込みには櫛描きで花文が施され、「元」の文字も見られる。

SP145（図40）

調査区北端に位置する。

出土遺物（図41・297、298）

297は磁器の碗胴部片。灰黒色釉がかかる。298は土師質の小鉢。口径6.8㎝、内外面はヘラミガキで調整され、口縁端部にヘラによる凹みが施される。暗褐色を呈する。

SP146（図40）

調査区北端に位置する

出土遺物（図41・299）

長さ5.9㎝の土錘。

SP159（図40）

調査区南端付近に位置する。

出土遺物（図41・300）

白磁碗。底径8.0㎝。にぶい黄橙色を呈する釉がかかる。外底は露胎。

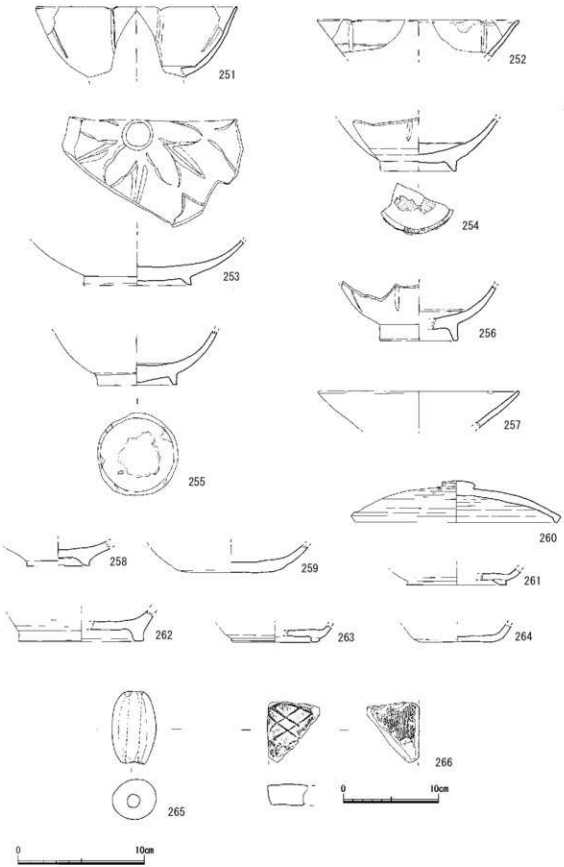


図 37　第２面集積遺構出土遺物実測図６（1/3，1/4）

SP160（図40）

調査区南端に位置する。

出土遺物（図41・301、302）

301は陶器の皿か。口径14.8㎝。褐色を呈する。302は土師器坏。口径13.8㎝で、底部はヘラ切り、板圧痕が残る。

SP180（図40）

調査区の北側に位置する。

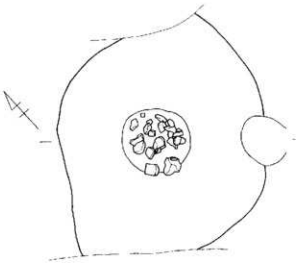
出土遺物（図41・303）

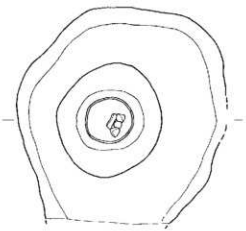
白磁碗。底径は8.0㎝。淡黄褐色の釉がかかる。外底は露胎。

④池状遺構SK147（図42～48）

第１面下から第２面を掘り下げていく過程で、調査区の西半分から礫、瓦、石製品、土器、陶磁器類の集積が検出され始めた。土質は暗～黒褐色粘質土である。粘性が高い土壌で、水性堆積の結果であると推定された。最下面で、南北に10m、東西に６ｍの範囲で広がるが、調査区外の西側にも広がっていくと考えられる。検出した遺物集積を図化し、写真撮影したのち、遺物を取り上げ、掘り下げていくという過程を繰り返し、７面まで検出面を設定した。最終面は、粗砂層の上面まで達している。

出土遺物から、大乗寺関連の池状遺構ではないかと考えられる。ここでは面ごとに出土遺物を説明する。





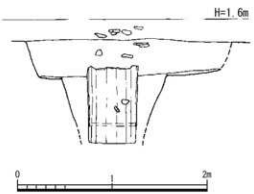


図38　SE155実測図（1/40）

第１～２面出土遺物（図49）

第１面出土は304～306。304は同安窯系青磁皿。見込みに櫛描文が施される。口径11.0㎝。305は瓦質の釜。口径14.4㎝で把手、同中央に鍔がつく。306は土師器小皿。口径8.0㎝で糸切底。

307～315は第2面出土。307は明の青花碗。308は京都系の土師器皿。口径8.8㎝で、底部はヘラ切り。309～311は瓦玉。いずれも瓦の加工品。312は軒丸瓦。瓦当面中央に「大」を刻み、その周辺に小さな文字で「大乗寺」が配される。313も軒丸瓦。瓦当面に「宮田？」の文字が刻まれる。314は丸瓦、315は軒平瓦で瓦当面に唐草文が施される。

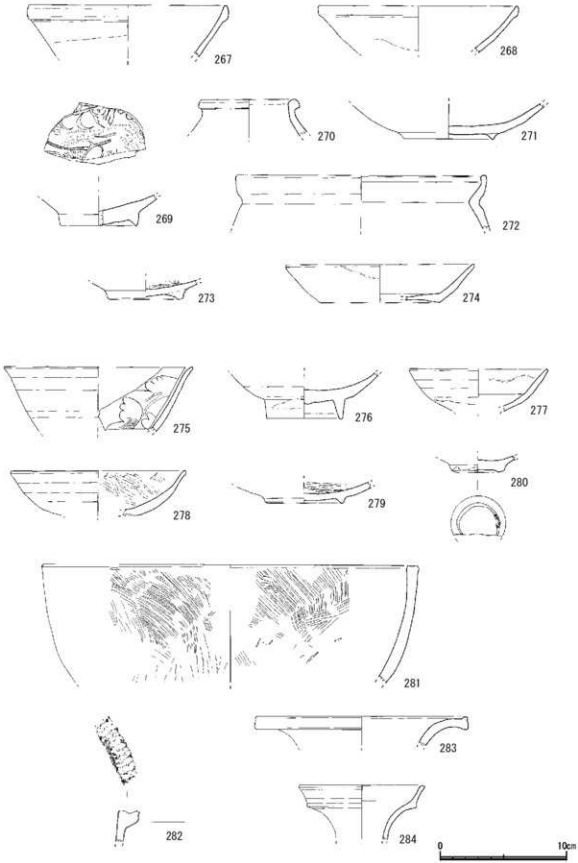


図 39　SE155 出土遺物実測図（1/3）

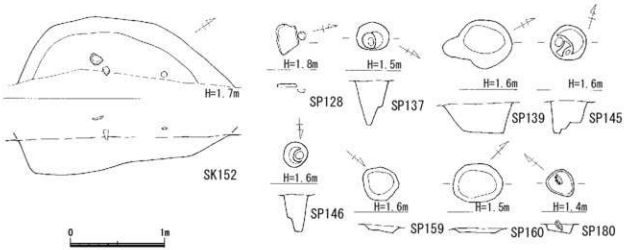


図 40　第２面土坑、ピット実測図（1/40）

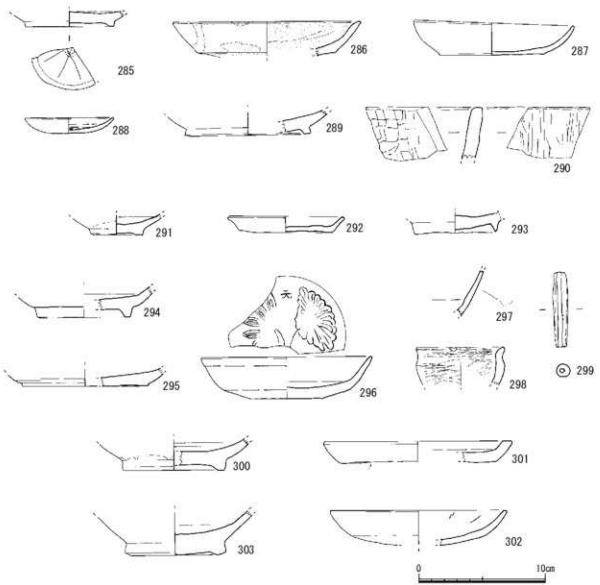


図 41　第２面土坑、ピット出土遺物実測図（1/3）

第２～３面出土遺物（図50～52）

316～318は白磁。316は碗で、底径5.4㎝。317は小型碗。口縁部は内湾する。318は壷。底径6.0㎝。内面は露胎となる。319～326は青磁。319～324は碗。319は小碗底部。底径4.3㎝。320は外面に連弁文が片切彫りされる。口径15.8㎝。321は見込みに連弁文が刻まれる。口径15.8㎝。322、323は外面に簡略化された連弁文が刻まれる。323は見込みに「金」文字が施されている。324は浅い碗。底径は6.0㎝。内面に櫛描文が施される。325は平底の皿。底径3.8㎝で見込みに花文が刻まれる。326は小碗。底径3.2㎝。

327～331は青花皿。327は口径14.0㎝。外面に文様が入る。328、329はいずれも外底に文字が見られるが、329は「洪　年　」とある。328は不明。また、329は内面に船と海が描かれる。底径は8.8、7.1㎝。330は底径8.0㎝。白磁か。331は碁笥底。外面に鄂蕾文、内面は圏線と花文が描かれる。底径3.0㎝。

332は黄褐釉陶器の盤口縁部。333、334は陶器の壷。335は朝鮮系の陶器碗。見込み及び外底に目跡が残る。全面に灰白色の釉がかかる。底径6.0㎝。336は天目碗。黒褐色を呈する。口径15.8㎝。337は陶器壷、口径10.4㎝。338、339は陶器の甕。339は底径12.2㎝。340は摺皿。内面に擂目が入る。底径7.0㎝。

341、342は陶器鉢底部。343は黒釉陶器壷。344は緑釉陶器壷。345～348は擂鉢。349は瓦質の鉢。頭部下に波状文が施される。350、351は瓦器碗。350は高台がつかず、口径15.0㎝。内外面ともにミガキが施され、灰白色を呈する。351は高台がつく。底径は7.3㎝。内外面ともにミガキが施され、暗灰色を呈する。

352は火舎の底部。内面にハケメがみられる。353も火舎か。口縁は円形でなく、方形を呈する。354は甑の把手。355は土鍋。口径25.0㎝。356～364は土師器。356、357は坏。356は胴部に穿孔が見られる。357は口径11.0㎝、底径6.6㎝。358～364は皿。口径は6.0～9.0㎝、底径は5.4～7.0㎝。358のみ底部は板圧痕で、他はすべて糸切底。365は須恵器壷。口径14.0㎝。

366～374は瓦玉。366は青磁碗を加工品、367は同安窯系の青磁皿の加工品。368は青花皿の加工品。見込みに花文、外底には「大明年造」と文字が見られる。369、370は土師器の加工品。371～374は瓦の加工品である。375は一字一石経。「通円」か。376は滑石製の石鍋転用品。石錘である。

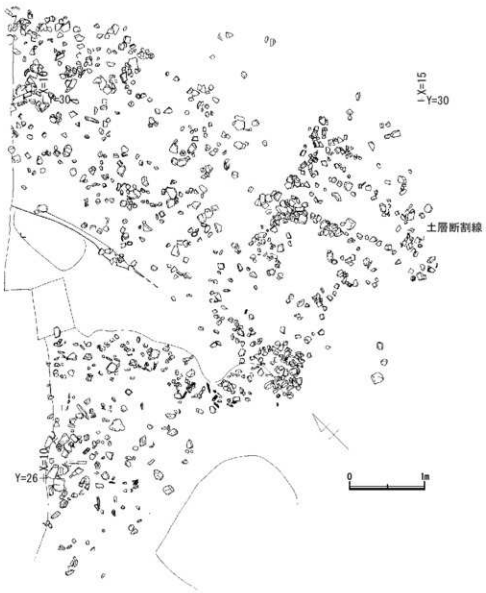
377～379は軒丸瓦。377の瓦当面には「卍」の文様が浮き彫りにされる。378は三巴文。379は瓦当面の文様は不明である。380は丸瓦。381、382は軒平瓦。いずれも唐草文が施される。383は平瓦。

第３面出土遺物（図53）

384、385は白磁碗。384は底径6.0㎝。内面に櫛描文が描かれる。385は底径7.1㎝。386は青花皿。外面には梅花文と波状文、内面には魚が描かれる。387は瓦質の釜。口径は13.6㎝で、把手が２カ所つく。388、389は土師器小皿。口径は7.0㎝、底径4.6、5.2㎝。糸切底で、口縁部に煤が付着する。390は火舎口縁部。口縁部に梅花のスタンプが巡る。391は土鍋。口径34.0㎝、器高16.1㎝。内外面ともにハケメ調整がなされ、外面には煤が付着する。392は土師器転用の瓦玉。393は土錘。394は砂岩製の石塔の一部。395は鬼瓦の一部か。396、397は軒丸瓦。396は「大」の文字が見え、おそらく「大乗寺」と刻まれていると思われる。397は三巴文。

第３～４面出土遺物（図54）

398、399は白磁碗。底径7.1、6.0㎝。400は青磁碗。内面に片切彫りの花文が施される。401、



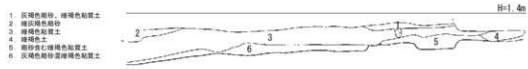


図 42　SK147 第 1 面実測図（1/50）

図 43　SK147 第 2 面実測図（1/50）

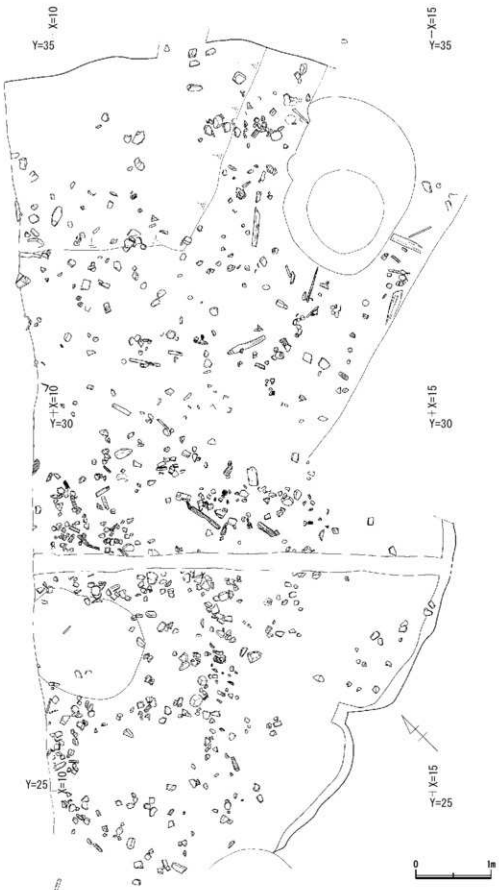


図 44　SK147 第 3 面実測図（1/50）

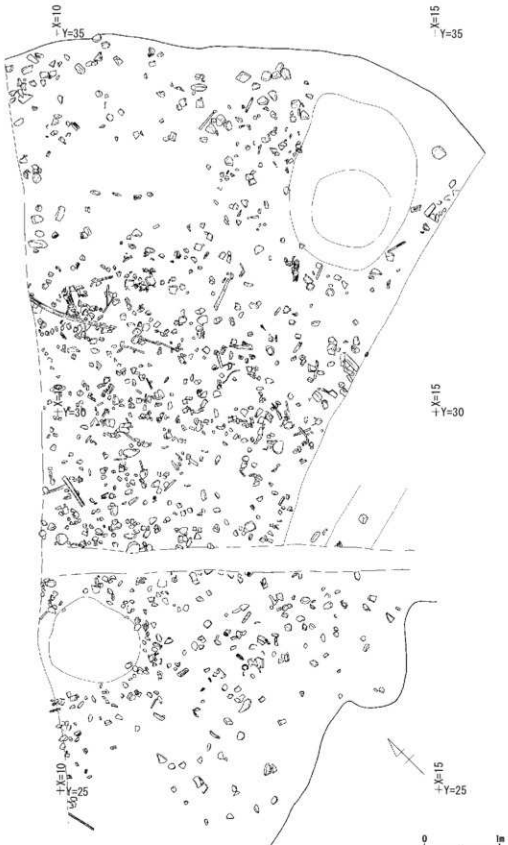


図 45　SK147 第 4 面実測図（1/50）

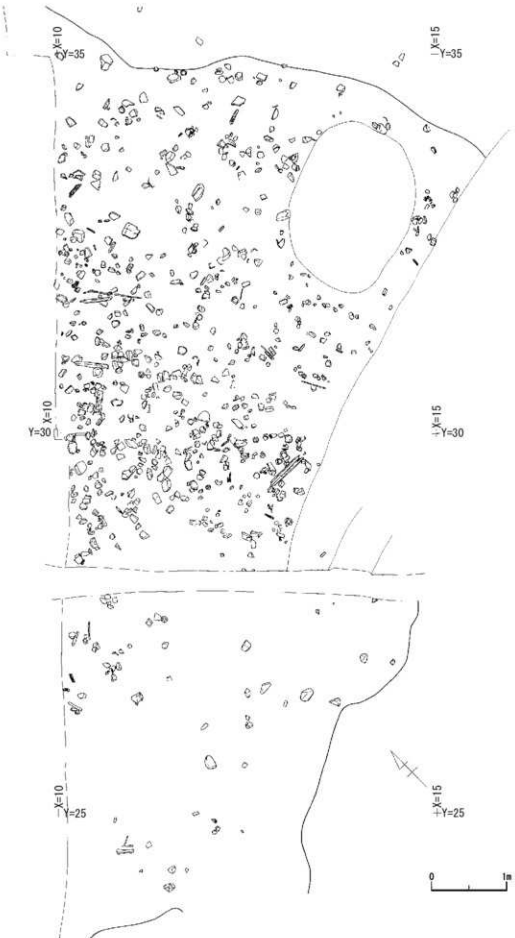


図 46　SK147 第 5 面実測図（1/50）

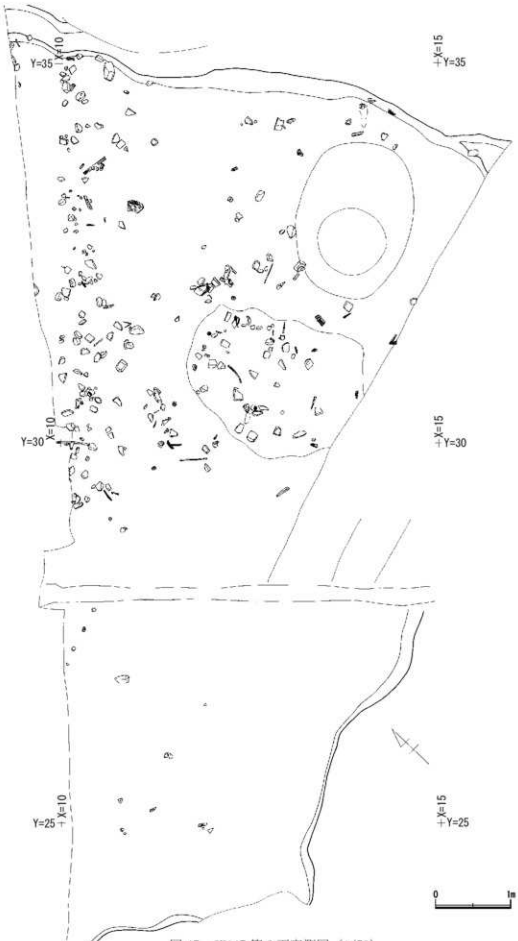


図 47　SK147 第 6 面実測図（1/50）

図 48　SK147 第 7 面実測図（1/50）

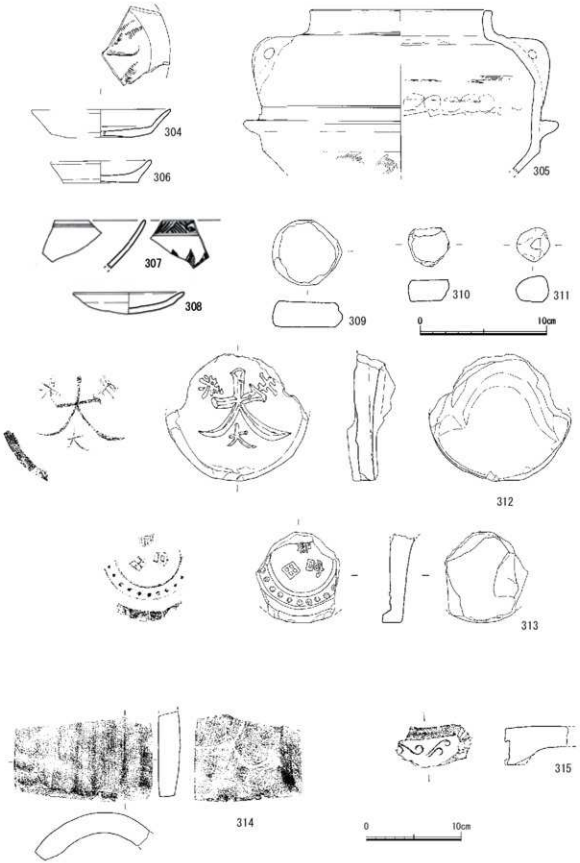


図 49　SK147 出土遺物実測図 1 （1/3, 1/4）

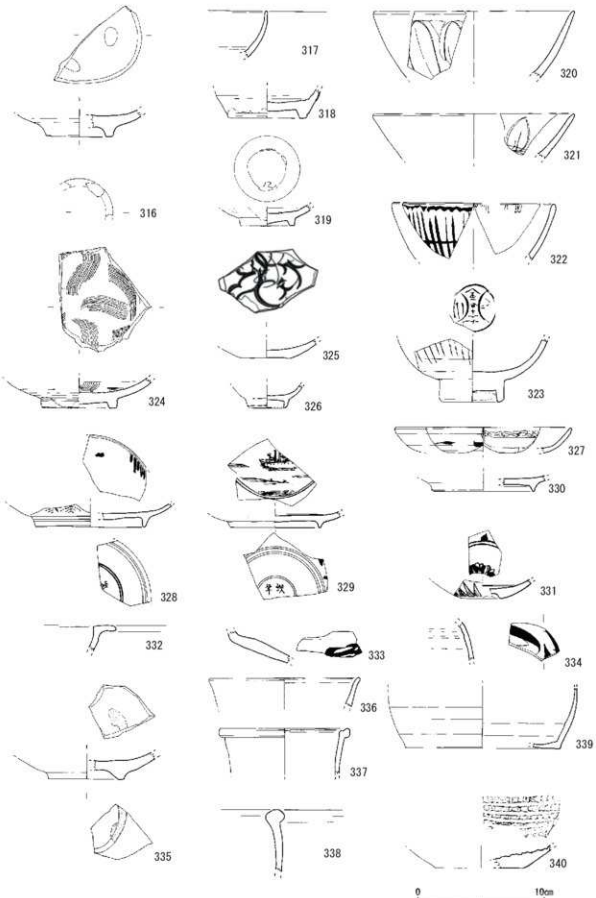


図 50　SK147 出土遺物実測図 2 （1/3）

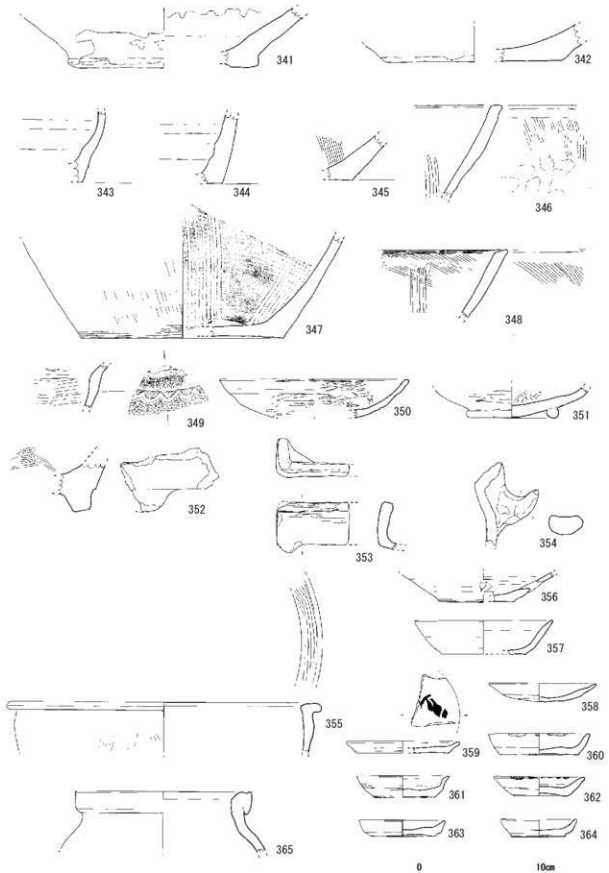


図 51　SK147 出土遺物実測図 3 (1/3)

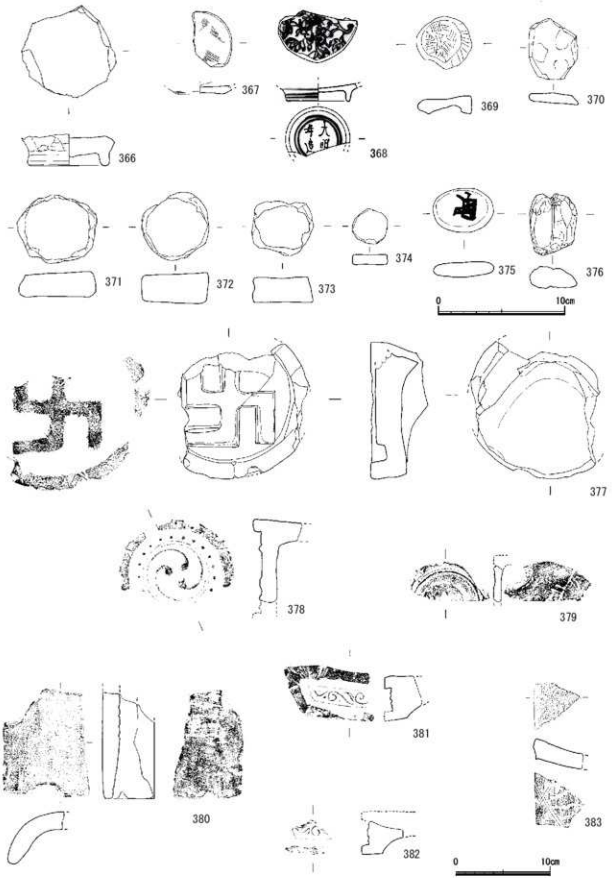


図 52　SK147 出土遺物実測図 4 (1/3)

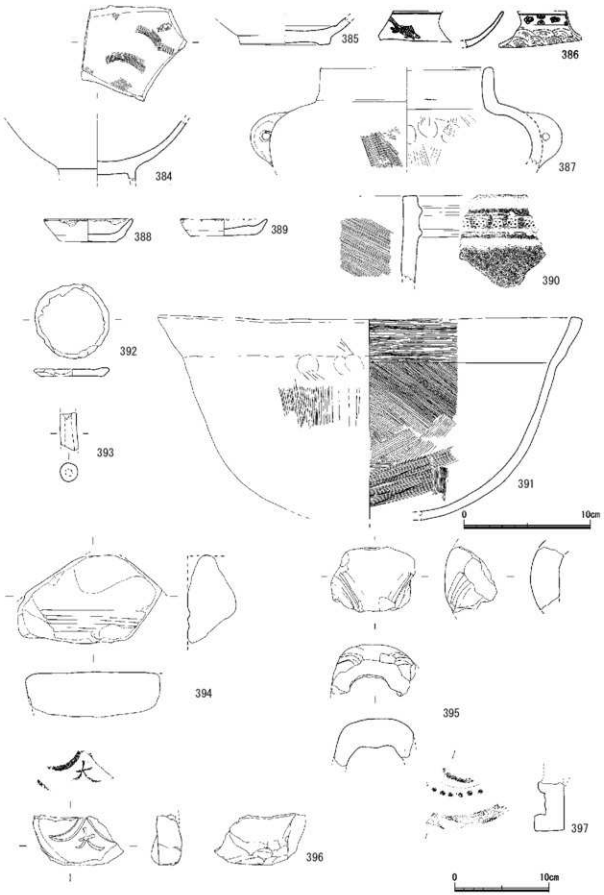


図 53　SK147 出土遺物実測図 5 (1/3)

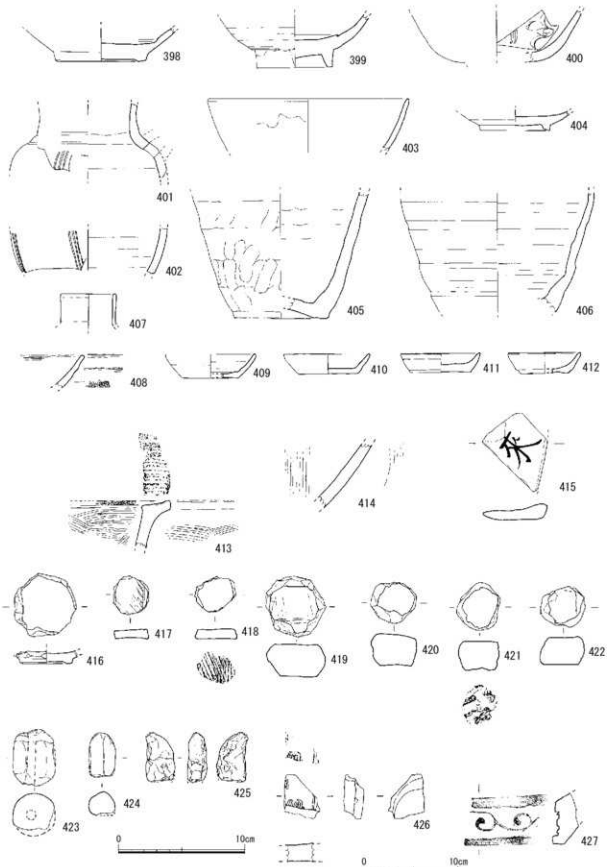


図 54　SK147 出土遺物実測図 6（1/3，1/4）

402は同一個体の可能性が高い。灰オリーブ色の釉が外面にかかり、複数の沈線が外面に縦方向に施される。越州窯系の水注と思われる。403は青磁碗。口径は15.8㎝。無紋でオリーブ色の釉がかかる。404は青磁碗。底径は5.4㎝。高台端部は釉が掻き取られる。405は小型の陶器壺。口径は4.4㎝。淡赤褐色を呈する。406、407は陶器壺胴部。

408は瓦器碗口縁部。409～412は土師器小皿。口径5.6～7.4㎝、底径3.6～4.6㎝。いずれも糸切底、411は板圧痕が見られる。413は土師器の鍋、414は土師器の捏鉢。415は墨書が見られる須恵器の坏か。「來」の文字が見られる。

416～422は瓦玉。416は青磁碗、417は土師器、418は須恵器の加工品。419～422は瓦の加工品。423は土錘。424は石製品。一辺の角を作り出す。424は滑石製の石鍋の転用品。石錘の未成品か。426は軒丸瓦。「宮」の文字が見える。427は唐草文の軒平瓦。

第４面（図55～57）

428～430は白磁碗。428は底径4.4㎝、429は7.4㎝。いずれも底部は露胎となる。428は外底に墨書が見られる。430は小型碗。口径10.0㎝、底径4.6㎝。431は青磁碗。底径6.6㎝。全面に釉がかかるが、高台の内部に砂目の跡が見られる。432も青磁碗底部。底径5.3㎝。底部は露胎となる。433は青磁皿底部。外底に墨書がある。434は越州窯系青磁碗。底径8.8㎝。435は緑釉陶器の壺。底径9.0㎝。外底は釉が掻き取られるが、目跡が残る。緑がかった褐色を呈する。436は備前焼の擂鉢。437は火舎の口縁部。外面に口を二つ重ねたようなスタンプ文を施す。438は瓦器碗底部。底径4.0㎝。439は陶器壺底部。底径12.0㎝で底部は露胎となる。褐灰色を呈する。440は瓦質の擂鉢底部。５条単位の擂目が残る。底径14.0㎝。441は甑の把手。

442～452は土師器。442～447は坏。口径10.0～15.1㎝、底径4.8～7.8㎝。いずれも糸切底。442は口縁部が大きく開く器形。448～452は皿。口径6.6～8.8㎝、底径4.4～7.0㎝。すべて糸切底だが、448は板圧痕が残る。

453～462は瓦玉。453、454は白磁の加工品、455、456は青磁の加工品、457～459は土師器の加工品、460～462は瓦の加工品である。463～466は滑石製石鍋の転用品である。463～465は形状から石錘の製品もしくは未成品であると思われる。466は４㎝四方の平面方形、厚さ2.5㎝に加工しているが、用途は不明である。468は鬼瓦の一部。469は丸瓦。外面に縄目、内面に布目痕が見られる。470、471は軒丸瓦。唐草文が施される。

第４～５面（図57）

472～493は第４～５面出土。472は白磁碗。底径6.6㎝。473は白磁合子の蓋。口径6.0㎝。474は青磁壺胴部。片切彫りで条線が入る。475は褐釉陶器壺。口径15.8㎝。476は鉄絵の陶器盤。内面に鉄絵が描かれ淡黄褐色釉がかかる。477は天目碗。478は朝鮮陶器の鉢胴部。淡灰色の釉がかかる。479は火舎の口縁部で格子目のスタンプが押される。480は黒色土器の坏。口径13.0㎝で内外面はミガキ調整がなされる。481は土師器坏。高台径6.9㎝。482は甑把手。483～485は土師器坏。口径12.0、11.7㎝、底径4.6、5.0㎝。483は内面に３条の沈線が巡る。484, 485は糸切底。486～488は土師器皿。口径6.7～7.0㎝、底径4.2～4.6㎝。糸切底。489～491は瓦玉。489は白磁の平底皿の転用、他は瓦の転用。492は一字一石経。文字は不明。493は滑石製石鍋の加工品。石錘に使用したか。

494～521は第５面出土。494～499は白磁碗。底径5.4～6.2㎝。499は高台外底に墨書が見られる。

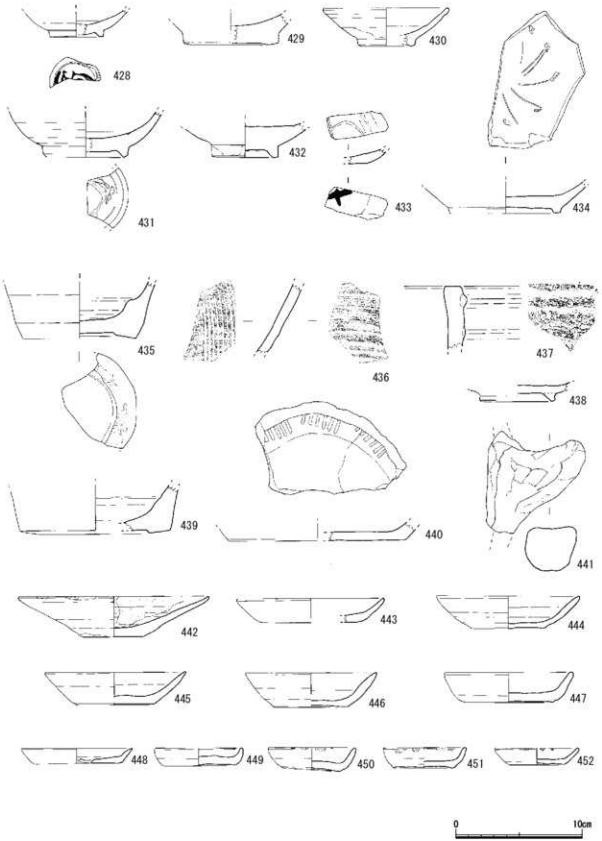


図 55　SK147 出土遺物実測図 7 (1/3)

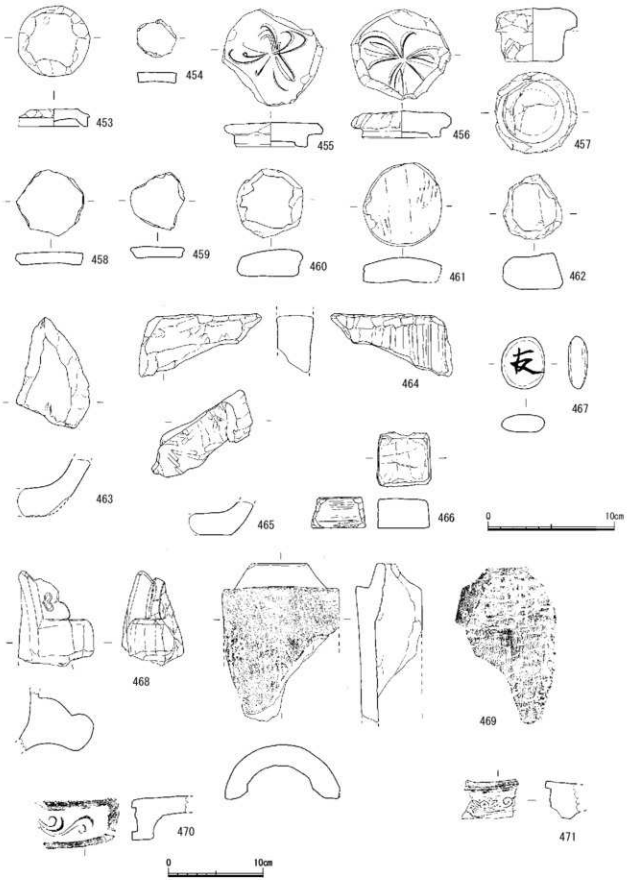


図 56　SK147 出土遺物実測図 8 (1/3, 1/4)

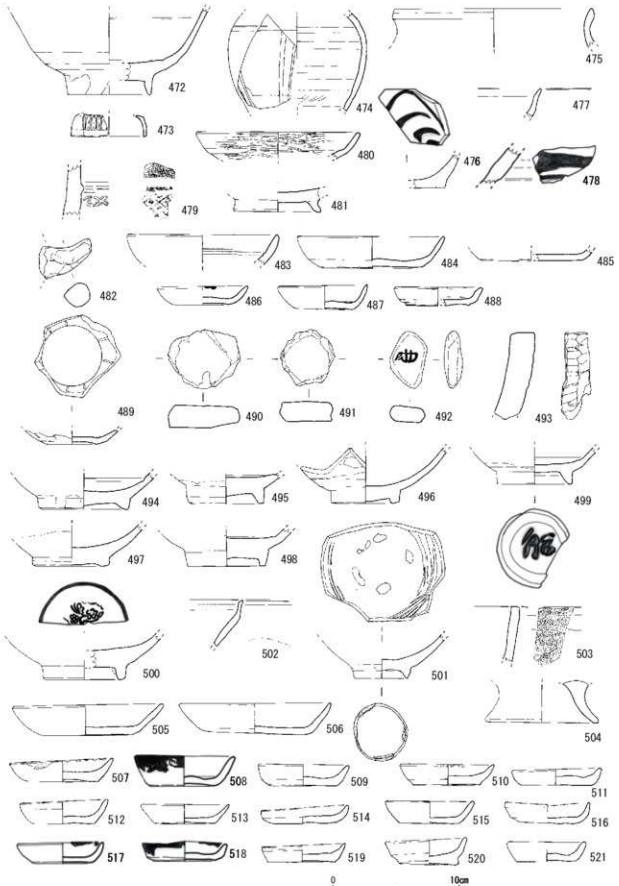


図 57　SK147 出土遺物実測図 9 (1/3)

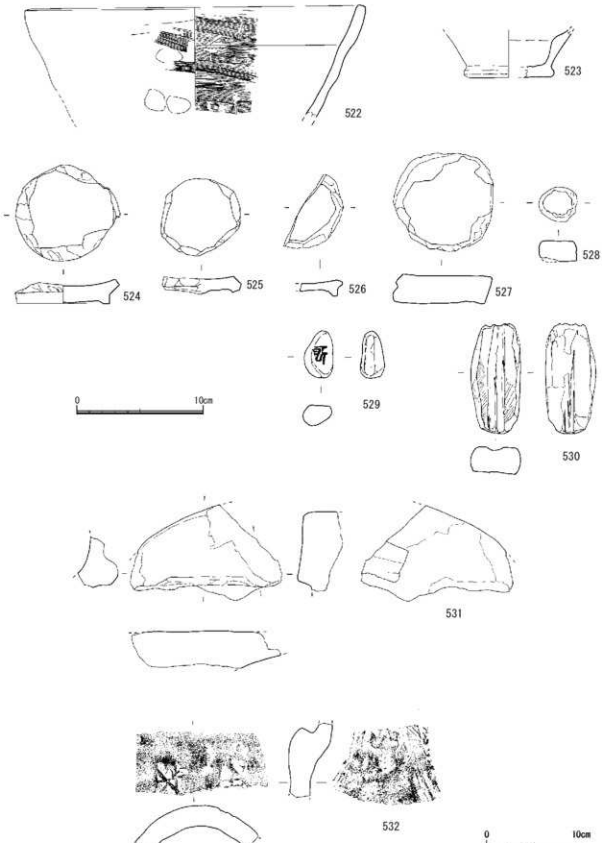


図 58　SK147 出土遺物実測図 10（1/3，1/4）

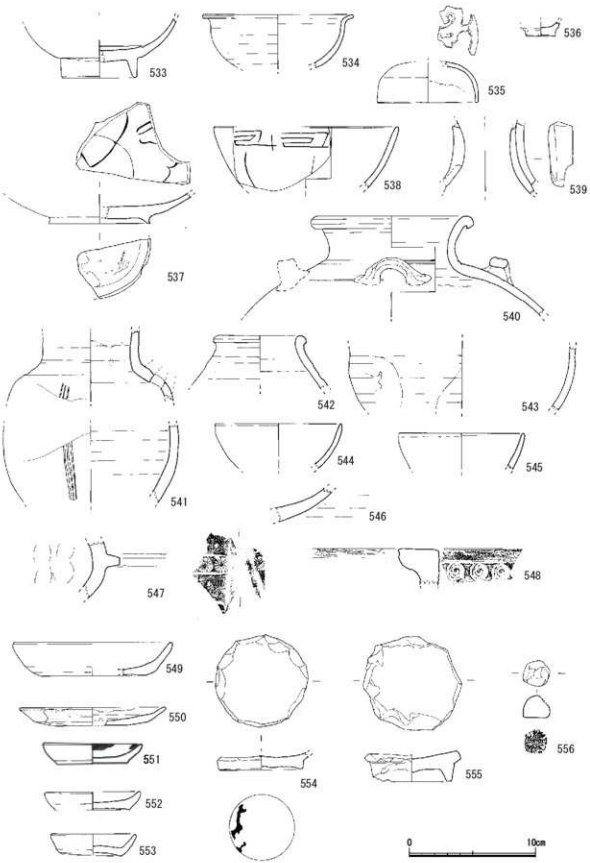


図 59　SK147 出土遺物実測図 11（1/3）

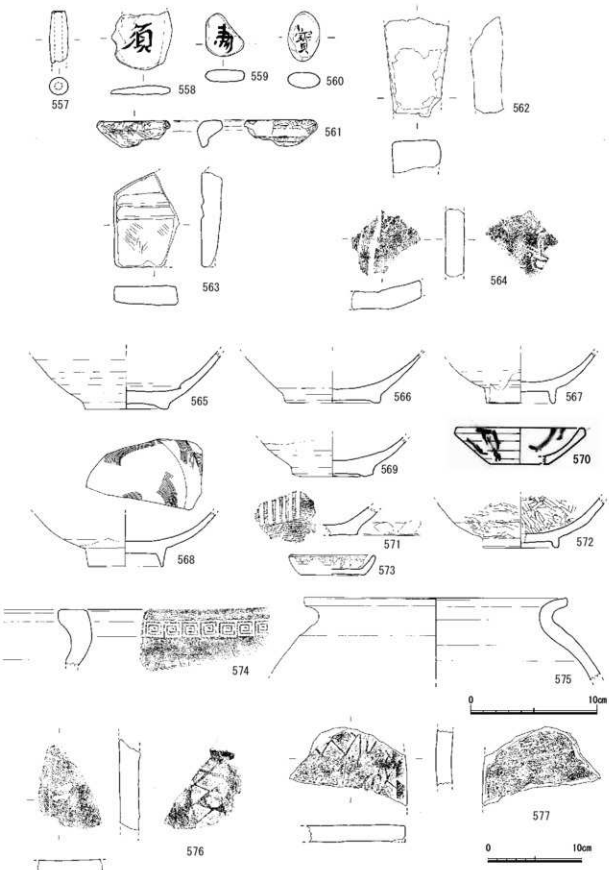


図 60　SK147 出土遺物実測図 12（1/3，1/4）

500は青磁碗。底径6.4cm。見込みには圏線内に花文が施される。501は朝鮮王朝の粉青沙器碗。底径4.0cm。見込みに白化粧土を刷毛で施す。見込みと外底に目跡が残る。502は天目碗。内外面に黒色釉がかかる。503は火舎の口縁部。外面に格子目のスタンプ文が巡る。504は土師器高坏の脚部。底径9.0cm。505～521は土師器坏、皿。505、506は坏。口径12.0、11.8cm、底径7.6、8.4cm。糸切底。507～521は小皿。口径7.9～6.2cm、底径4.6～5.8cm。すべて糸切底。

第５面（図58）

522は土鍋。口径27.0cmで内外面にハケメ調整がなされる。523は土製の鉢。524～528は瓦玉。524は白磁、525は青磁、526は瓦質土器、527、528は瓦の転用品。529は一字一石経。文字は不明。530は滑石製石鍋の転用品。石錘。531は鬼瓦片か。532は丸瓦。凸面に斜交子文が見られる。

第５～６面（図59、60）

533、534は白磁碗。533は底径6.0cm。高台は高く、細い。534は口縁部12.0cm。口縁端部は外反する。535は白磁の高炉蓋か。口径8.0cmで外面に透かし彫りが施される。536は白磁小碗。底径2.4cm。537は越州窯系青磁碗。底径8.0cm。全面に釉がかかり、外底に砂目がつく。538は青磁碗。口径14.6cm。口縁部外面に雷文が描かれる。539は青磁水注の頸部。540は陶器四耳壷。口径は12.9cm。肩部に耳がつく。541は中国陶器水注。灰オリーブ色の釉がかかる。外面には縦方向に条線が入る。542、543は陶器壷。542は口径6.5cm。黄褐色釉がかかる。543はオリーブ黒色の釉がかかる胴部。544、545は黒釉天目碗。口径は9.8～9.9cm。546は灰色釉がかかる陶器。

547、548は火舎の口縁部。547の口縁部下突帯には菊花文のスタンプが巡る。548は口縁部外面に渦文スタンプが巡る。549～553は土師器。549、550は坏。口径12.4、11.6cm、底径8.8、5.0cm。551～553は皿。口径6.6～7.6cm、底径4.6～5.6cm。いずれも糸切底で、551は板圧痕が残る。554、555は白磁碗転用の瓦玉。556は土製の球形品。557は土錘。558～560は一字一石経。558は「須」、559は「壽」、560は「寶」。561は滑石製石鍋の転用品。石錘として用いられたか。562は砥石。563は砂岩製の石塔。表面に２条の溝が刻まれる。564は平瓦。刻印があるが文字は不明。

565～577は第６面出土遺物。565～568は白磁碗。底径は5.0～6.6cm。567、568は高台が薄く、高く仕上げる。568は見込みに櫛描文が施される。569、570は青磁で、569は碗。底径は6.2cmで、灰オリーブ色の釉がかかる。底部付近は露胎。570は褐釉皿。口径10.0cm、底径4.6cm。底部を除いて暗褐色釉がかかる。571は瓦質の擂鉢か。内面の底部付近には少なくとも６条の擂目が入る。572は瓦器碗。内外面には丁寧なミガキが施される。573は土師器皿。口径6.8cm、底径5.0cm。糸切底。574は火舎口縁部。口縁部の外面に雷文のスタンプが巡る。575は須恵器甕。口径21.0cm。外面はタタキ、内面はヨコナデ調整がなされる。576、577は平瓦。格子文が見られる。

第６～７面（図61～63）

578～580は白磁碗。578、579は口径16.0cm。578は器壁に縦方向の沈線が施される。580は底部で底径8.0cm。581は白磁皿。底径5.8cm、見込みに櫛描文が施される。582は青磁碗底部。底径5.4cm。全面にオリーブ灰色の釉がかかり、外底に磁器片が付着する。583も青磁碗底部。底径8.0cm。全面にオリーブ色釉がかかるが、外底は輪状に掻き取る。高台畳付に砂目跡が残る。見込みには片切彫りの花文が施される。584も青磁碗。内面に花文が見られる。582～584は越州窯系青磁。585は龍泉窯系の青磁碗。口径16.0cm。淡灰白色の釉がかかる。586は同安窯系の青磁皿を転用した瓦玉。碁笥底

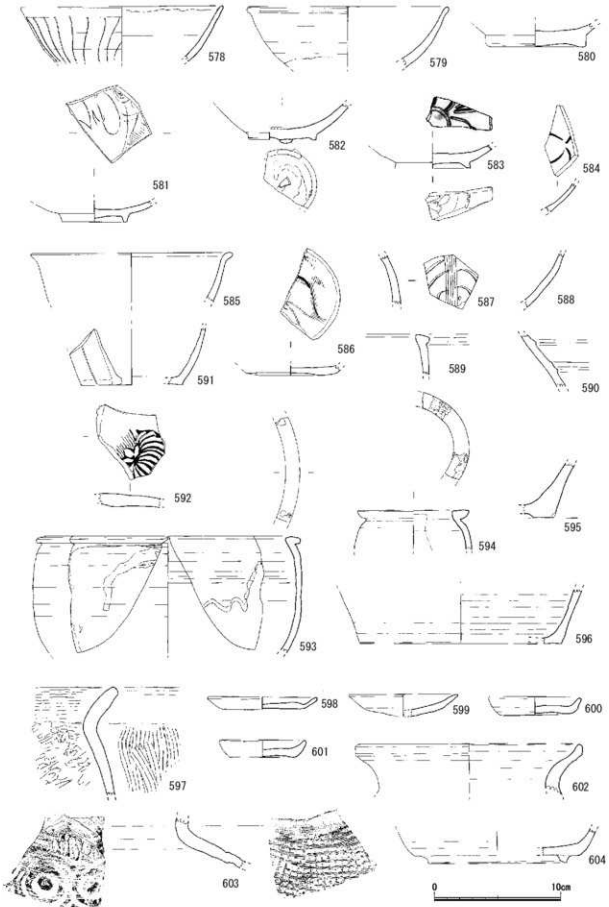


図 61　SK147 出土遺物実測図 13（1/3）

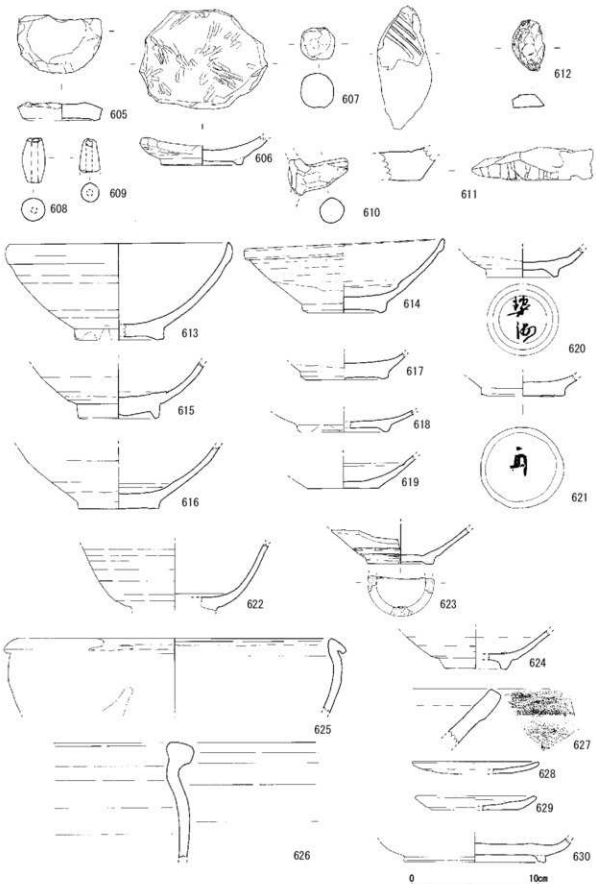


図 62　SK147 出土遺物実測図 14（1/3）

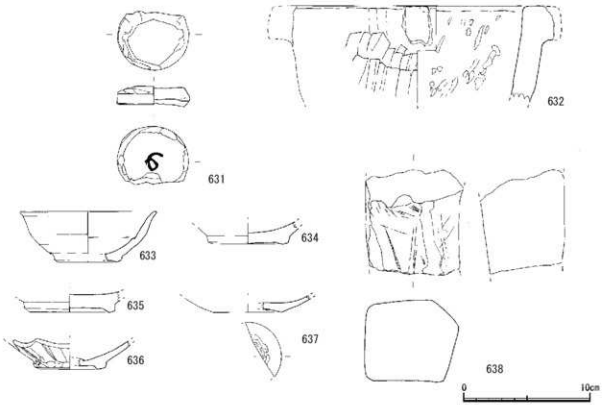


図63　SK147出土遺物実測図15（1/3）

で底径7.6cm。587は青磁の水注胴部。外面に片切彫りで沈線が施される。588は天目碗の胴部。黒色釉がかかる。589は陶器甕口縁部。590は無釉陶器壷。二条の突帯がつき、黒色を呈する。高麗系の陶器と思われる。591は緑釉陶器の壷底部で底径8.0cm。縦方向に沈線が入る。淡灰色を呈する。592は中国陶器の盤底部。オリーブ褐色の釉がかかる。内面には花文が施される。593、594は陶器甕。593の口径21.0cm。灰色の透明釉が内外面に垂れかかる。口縁端部に目跡が残る。594は口径8.8cmの褐釉陶器小壷。黄褐色釉がかかり、口縁端部に目跡が残る。595は陶器壷底部。596は壷底部。底径16.0cm。暗灰色の釉が内外面にかかり外底は露胎となる。597は土師質の甕口縁部。外面と口縁内部はハケメ調整、胴部内面はケズリとミガキ調整がなされる。598～601は土師器皿。口径6.8～8.7cm、底径5.2～6.1cm。598は板圧痕が残る底部、599はヘラ切りの底部である。他は糸切底。602～604は須恵器。602は口径18.0cmの壷、603は壷頸部で外面に格子タタキ文、内面は同心円の当具痕が残る。604は坏底部。底径11.0cm。

605、606は瓦玉。605は白磁碗転用、606は瓦器碗転用。607は土製玉。608，609は土錘。610は瓶の把手。611は滑石製石鍋の加工で石錘。612は黒曜石の剥片。

613～632は第7面出土。613～619は白磁碗。613、614は玉縁口縁。口径17.3、16.0cm、底径7.0、6.6cm。やや上げ底を呈する。615～619は底径6.4～7.2cm。616、619は平底。620、621は外底に墨書が見られる。622、623は青磁碗。623は越州窯系青磁。底径5.2cm、高台畳付に4カ所目跡が残る。624も青磁碗。底径5.0cm。見込みに目跡が残る。625は中国陶器甕。口径27.0cm。口縁部は折り返し、灰黄色の釉が全面にかかる。626も陶器甕の口縁部。外面のみ黒褐色釉がかかる。627は磁器の甕の口縁部。外面に波状文のタタキ痕が残る。灰色の釉が全面にかかる。628、629は土師器皿。口径9.6～10.0cm。629には板圧痕が残る。630は須恵器の坏。底径11.3cm。631は土師器転用の瓦玉。外底に墨書が残る。632は滑石製石鍋。口径は26.6cmで把手状の鍔が残る。

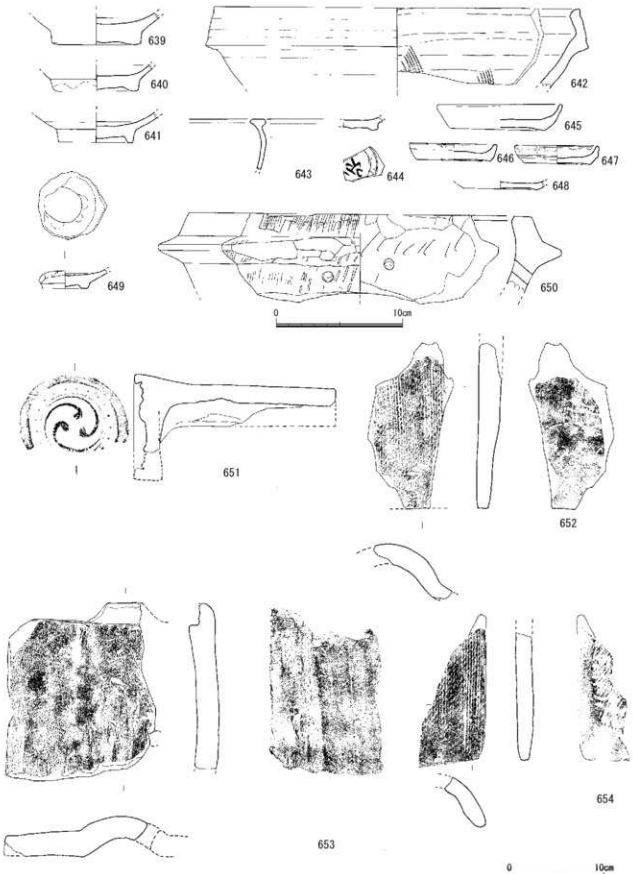


図 64　SK147 出土遺物実測図 16（1/3，1/4）

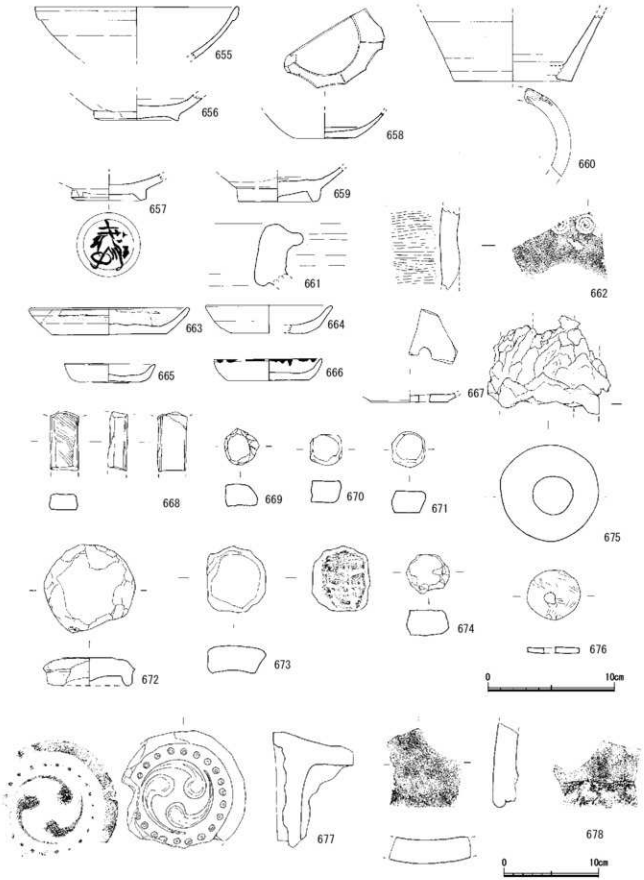


図 65　SK147 出土遺物実測図 17（1/3，1/4）

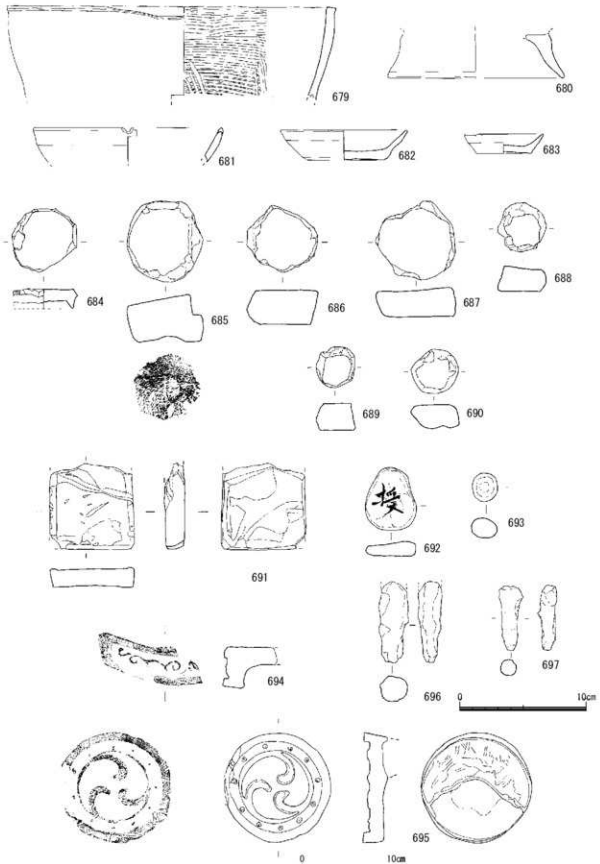


図 66　SK147 出土遺物実測図 18（1/3，1/4）

633～638は最下面出土。633～637は白磁。633は小型碗。口径10.8㎝、底径4.6㎝。口縁端部はやや外反し、平底に近い高台がつく。634、635は底径6.4、7.6㎝。636、637は皿。636は高台がつき、外面に片切彫りが見られる。底径は5.6㎝。637は碁笥底で外底に目跡が残る。638は砂岩製の砥石。

上層出土（図64）

SK147の上層から出土した遺物について述べる。639～641は白磁碗底部。底径5.8～7.0㎝。639は平底に近く、見込みに沈線が巡る。642は陶器擂鉢。6条単位の擂目が残る。口径29.0㎝。643は褐釉陶器小型鉢。茶～黒褐色釉がかかり、口縁端部に目跡が残る。644は磁器の底部で外底に墨書が残る。「永」か。645は土師器坏。口径9.6㎝、底径7.2㎝。糸切底。646、647は土師器皿。口径6.8㎝、底径6.0、6.2㎝。糸切底。648は皿底部。底径6.0㎝でやや上底。649は白磁小碗を転用した瓦玉。650は滑石製石鍋。口径27.2㎝で鍔が全面に巡る。鍔の下に穿孔が見られ、温石などに転用したものとも考えられる。651は三巴文の軒丸瓦。652、653は伏間瓦か。652は凸面に縄目が見られる。654は丸瓦。凸面に縄目がある。

トレンチその他出土（図65、66）

SK147を掘削する前に東－西方向にトレンチを設定した。トレンチ等から出土した遺物を説明する。655は白磁碗。玉縁の口縁部。口径16.0㎝。656は白磁皿底部。底径6.6㎝。657、658は白磁皿。657は外底に墨書が見られる。花押のような文字。658は平底。見込みには縦に沈線が入り、輪花を呈していたと考えられる。659は青磁碗底部。底径6.6㎝。660は陶器壷。底径9.2㎝。外底に目跡が残る。661は陶器の大型甕口縁部。オリーブ灰色の釉がかかる。662は火舎。外面には渦巻文のスタンプが入り、内面はハケメ調整。663～667は土師器。663、664は土師器坏。口径12.4、10.0㎝、底径9.0、6.0㎝。糸切底。665、666は皿。口径7.2、8.4㎝、底径5.2、6.4㎝。667は土師器底部で穿孔がある。668は瓦質土器の棒状製品。残長4.0㎝。把手の一部か。669～674は瓦玉。669～671は瓦転用。672は青磁碗転用。673、674は瓦転用、673は文字のようなものが刻まれている。675は羽口。676は滑石製の紡錘車。677は三巴文の軒丸瓦。678は平瓦。

679は土師質の擂鉢。口径26.0㎝。内面はハケメ調整で擂目が残る。680は土師器の脚付碗の脚部。底径14.0㎝。681は土師器坏。口径15.0㎝で口縁部に打ち欠きが見られる。682も土師器坏で口径10.0、底径5.9㎝。糸切底。683は土師器皿。口径6.2、底径4.4㎝。684～690は瓦玉。684は白磁碗底部の転用。他は瓦の転用。691は砂岩製の硯。半分程欠損している。裏面は砥石として使用された痕跡がある。692は一字一石経。「授」の文字が見える。693は瓦質土器の小玉。694は軒平瓦。瓦当面には唐草文が施される。695は軒丸瓦。三巴文。696、697は鉄製釘。

698～705は最下面の粗砂層から出土した。698は黒褐釉陶器壷。口径14.0㎝。699は陶器壷口縁部。口径17.6㎝で暗オリーブ色釉がかかる。700は天目碗。口径15.9㎝。茶褐～黒褐色釉がかかる。701は明の青花碗口縁部。鋸歯文が描かれる。702は瓦質土器の鉢の口縁部か。703、704は瓦転用の瓦玉。705は滑石製石鍋の加工品で石錘として利用されたと思われる。706は白磁碗底部。見込みに沈線が巡る。径7.0㎝。707は白磁皿。口径14.0㎝、底径7.6㎝。高台は露胎となる。708は青磁皿。口径14.0㎝、底径9.0㎝。709は白磁皿。口径11.0㎝、底径5.2㎝。畳付のみ露胎。710は碁笥底の青磁皿。見込みには櫛描文が施される。711も青磁皿。底径5.0㎝。見込みに沈線と櫛描文が施される。712も青磁皿。口径12.0㎝。口縁端部に刺突文が巡り、内面には口縁部下に沈線が巡り、片切彫りで文様が施される。明緑灰色の釉がかかる。胴部が屈曲し、口縁部が外反して開く器形。713は明の青花皿。

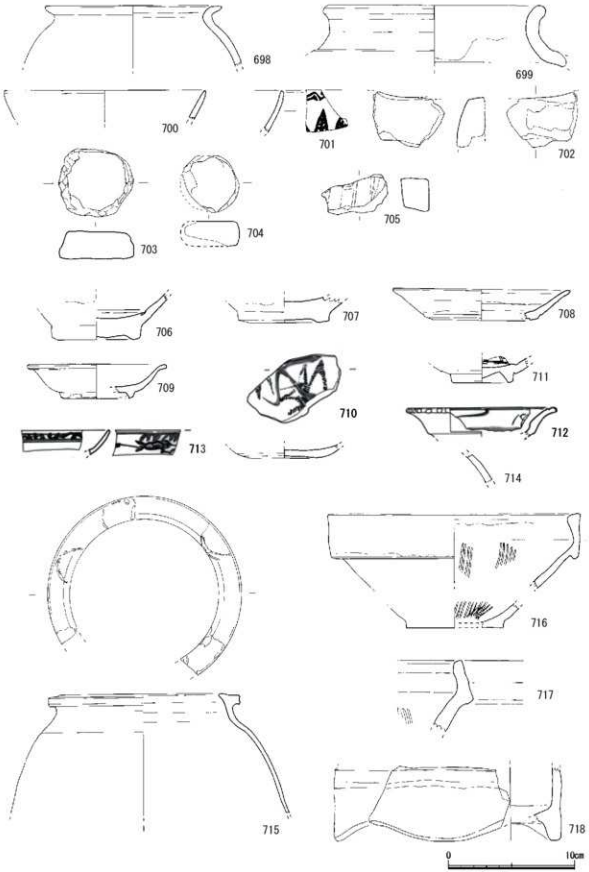


図 67　SK147 出土遺物実測図 19（1/3）

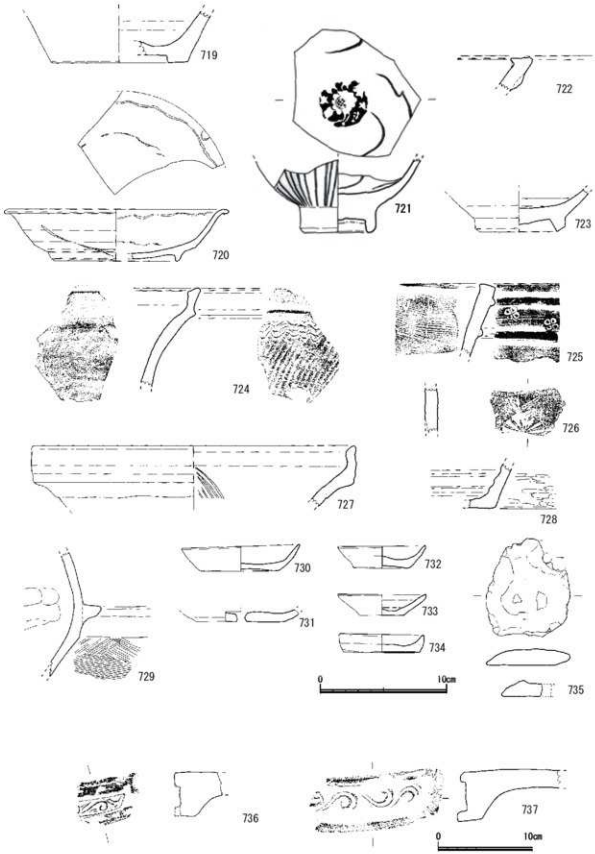


図 68　SK147 出土遺物実測図 20（1/3，1/4）

内外面に文様が描かれる。715は陶器壷。口径15.2cm。内外面に灰オリーブ色の釉がかかるが、口縁端部は露胎となり、目跡が５カ所残る。716、717は備前焼の擂鉢。716は口径20.0cm。内面に擂目が残る。718は火舎の底部。底径18.0cm。波状に成型する。719は白磁壷底部。底径10.8cm。底部は露胎となる。720は白磁皿。口径17.7cm、底径9.8cm。口縁端部は外反する。721は龍泉窯系青磁碗。底径6.0cm。内面は片切彫りの花文とスタンプ文、外面は崩れた連弁文が片切彫りされる。722は青磁の盤口縁部。口縁端部は釉は掻き取られ口縁部下にボタン状の浮文が付される。723は青磁碗底部。底径7.1cm。724は朝鮮系無釉陶器の壷口縁部。内面は当具痕をナデ消し、外面はタタキと口縁部下は波状文が残る。725は火舎の口縁部。口縁部は２条の突帯の間に４弁の花文のスタンプが押される。726も火舎口縁部。これも花文のスタンプが残る。727は備前焼の擂鉢。内面口縁部下に擂目が残る。728は瓦質土器の鉢底部。外面はミガキ調整が残る。729は土鍋。胴部に突帯が巡る。突帯の下はハケメ調整で全体に煤が付着する。730、731は土師器坏。730は口径9.3cm、底径6.0cm。糸切底。732は底径7.0cm。底部に穿孔がある。732～734は土師器皿。口径6.2～7.0cm、底径3.5～6.1cm。すべて糸切底。735は滑石製石鍋の加工品。穿孔が見られることから温石の使用が考えられる。736、737は軒平瓦。いずれも瓦当面は唐草文。

⑤獣骨集積SK184・185（図69）

SK147を掘削した底面で、獣骨の集積が検出された。当初はSK147の一部と考えたが、出土遺物から、SK147より古い時期と推定される。ウシの頭蓋骨を主体として、ウマ、シカ、イノシシの骨が出土しているが、埋納というよりは投棄された状況である。

出土遺物（図70）

738、739は白磁碗底部。底径は6.0、6.6cm。740は中国陶器の四耳壷把手。741は瓦器碗。高台径は7.0cmで内面はヘラミガキが施される。淡灰色を呈する。742は土師器坏底部。底部はヘラ切り。

743は須恵器鉢底部。底径10.0cm。744は須恵器甕胴部。内面は当具痕、外面は格子目タタキ痕が

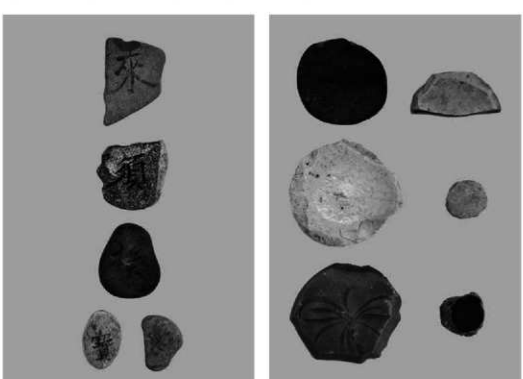


写真２　SK147出土　一字一石経　瓦玉

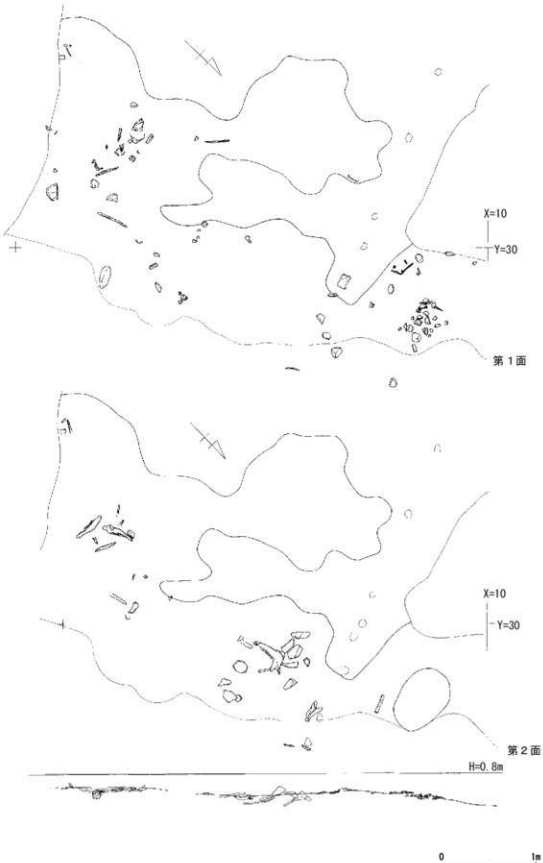


図 69　SK184 実測図（1/40）

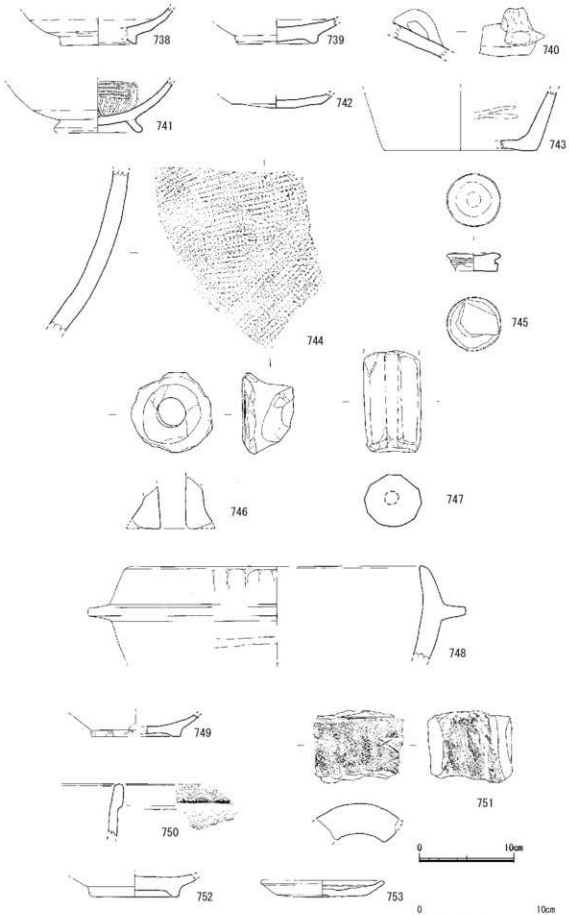


図 70　SK184 出土遺物実測図（1/3，1/4）

残る。745は須恵器蓋つまみ。746、747は羽口。748は滑石製石鍋。

749は白磁碗底部。底径7.0㎝。750は須恵質の鉢口縁部。波状文が施される。751は丸瓦。凸面に格子文が残る。752は白磁碗底部底径7.0㎝。753は土師器皿。口径9.6㎝、底径7.0㎝。

（4）土器溜

第1面下から第2面へかけて掘り下げていくSK147の上層で、調査区の中央部分に特に遺物が集中している箇所があった。主にグリッド③、⑦、⑪（図1参照）の範囲である。SK147の上層とも考えられるが、ここではSK147とは別とした。遺構としての明確なまとまりが見られなかったので、土器溜として遺物のみ記述する。

出土遺物（図71～77）

第71～73図は③、⑦出土。754は青磁皿。平底を呈する。755は象嵌青磁で、高麗陶器か。756は青花碗。底径5.5㎝。見込みには二重圏線の内側に花文が描かれる。757は灰黄色を呈する陶器碗。見込みに4カ所目跡が残る。758、759は土師器坏。底径6.0㎝。糸切底。760～762は土師器皿。口径6.2～7.4㎝、底径4.0～5.6㎝。糸切底。763は土師器の手づくね碗。764は擂鉢。底径14.0㎝で、内面に4条の摺り目が入る。765は須恵器蓋。口径は9.7㎝。766、767は瓦玉。766は青花皿、767は白磁碗の転用品。768は一字一石経。「嬉」と記される。769は滑石製石鍋の転用品。石錘として使用したか。770～773は軒平瓦。いずれも唐草文。774は丸瓦。775は穿孔のある平瓦。

第72図は第2層出土。776は白磁碗。口径16.0㎝、底径6.2㎝。777は白磁小碗。口径11.4㎝、底径3.9㎝。外面に櫛描文が施される。778も白磁小碗。高台は平底で、底径4.3㎝。779は白磁のミニチュア碗。口径4.0㎝。780は白磁の壷の頸部か。781は粉青沙器。782は高台付きの土師器坏。底径7.0㎝。783はやや高めの高台がつく土師器坏か。底径9.6㎝。784は糸切底の土師器坏。底径7.0㎝。785は土師器皿。底径5.4㎝。786、787は火舎口縁部。787は「井」字型のスタンプ文がつく。788、789は土鍋。口径33.0、30.0㎝。いずれも外面に煤が付着する。790、791は瓦玉。いずれも青磁碗の転用品。792は瓦質の把手。動物の顔が模される。793は瓦玉。794は羽口。

795～797は滑石製石鍋の転用品。795は石錘として使用されたか。796は穿孔があり、石錘もしくは温石として使用されたか。797は器状に成型されている。798～801は軒丸瓦。いずれも三巴文。802は平瓦。ハケメ様の調整が見られる。

803～815は第3層出土。803は白磁碗底部。底径7.6㎝。804はミニチュアの白磁碗。底径3.0㎝。外面に沈線が入る。805は青磁の壷。口径6.4㎝。806は瓦器碗。底径7.6㎝。内面にミガキが入る。807、808は土師器坏。807は口径11.0㎝、底径7.4㎝。808は底径7.0㎝。809は擂鉢。口径29.0㎝。内面にハケメ調整と摺り目が入る。810は須恵器坏。底径8.0㎝。811は白磁碗転用の瓦玉。812は碁笥底青花皿転用の瓦玉。813は青磁碁笥底皿転用の瓦玉。814は羽口。815は三巴文の軒丸瓦。

第74図は⑥出土。816は青磁香炉。817は陶器の壷か。底径は6.0㎝。818は陶器の小型壷。口径2.6㎝。819、820は土師器小皿。819は口径6.6㎝、底径4.4㎝。820は底径4.4㎝。いずれも糸切底。821は青磁碗底部。見込みに目跡が残る。底径5.2㎝。822は青磁皿。平底。底径4.0㎝。823は青花の壷。底径6.2㎝。824は碁笥底の青花皿。底径4.0㎝。825は土師器高坏。826は一字一石経。827は青磁碗底部。底径6.0㎝。828は陶器壷。口径12.4㎝。829は陶器鉢。口径19.0㎝。口縁部から内面にかけて釉がかかる。830は瓦質の捏鉢。口径29.0㎝。内面はハケメ調整。831は瓦質の擂鉢。内面に摺り目が入る。832、833は土師器坏。口径14.2、13.0㎝、底径8.3、9.0㎝。糸切底で、832は板圧痕がつく。834は土師器皿。口径9.6、底径6.6㎝。底部に板圧痕がつく。835～839は瓦玉。

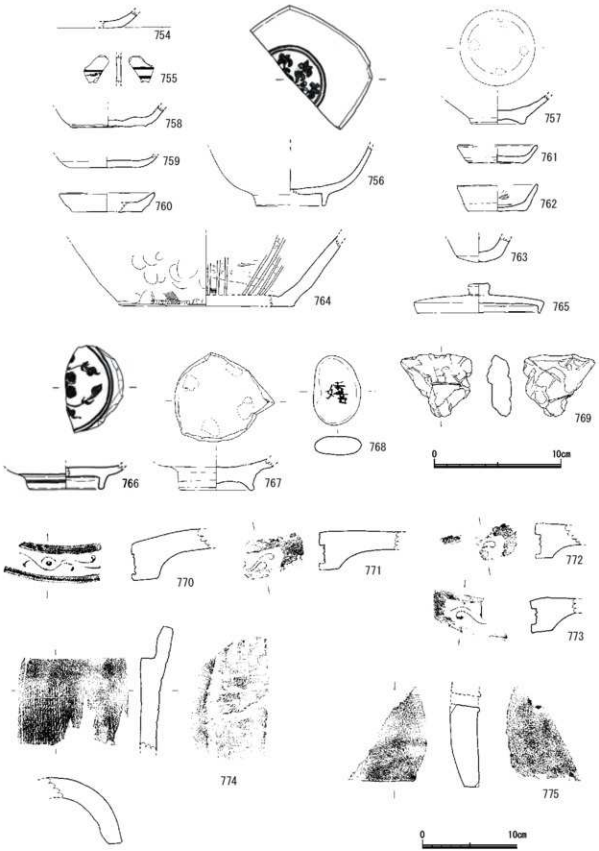


図 71　遺物溜出土遺物実測図 1 (1/3, 1/4)

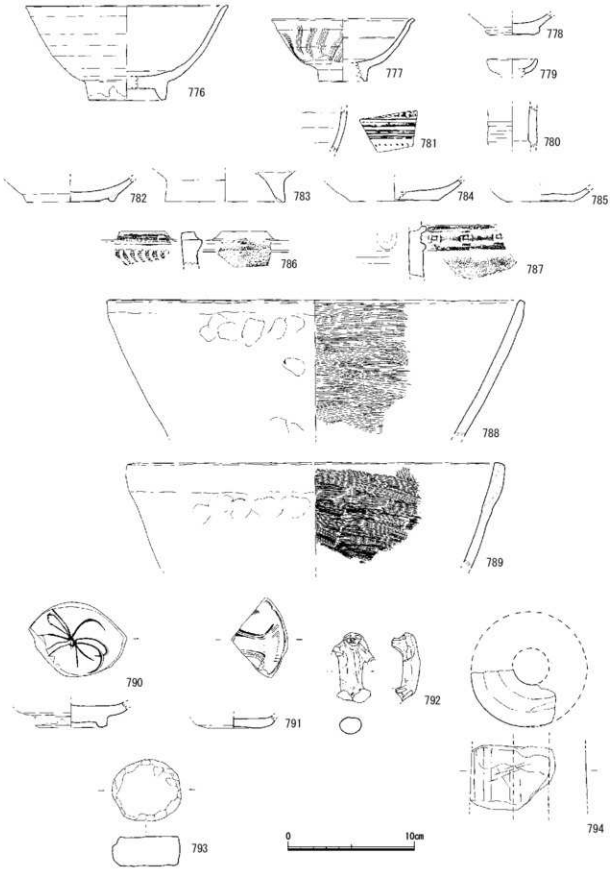


図 72　遺物溜出土遺物実測図２（1/3）

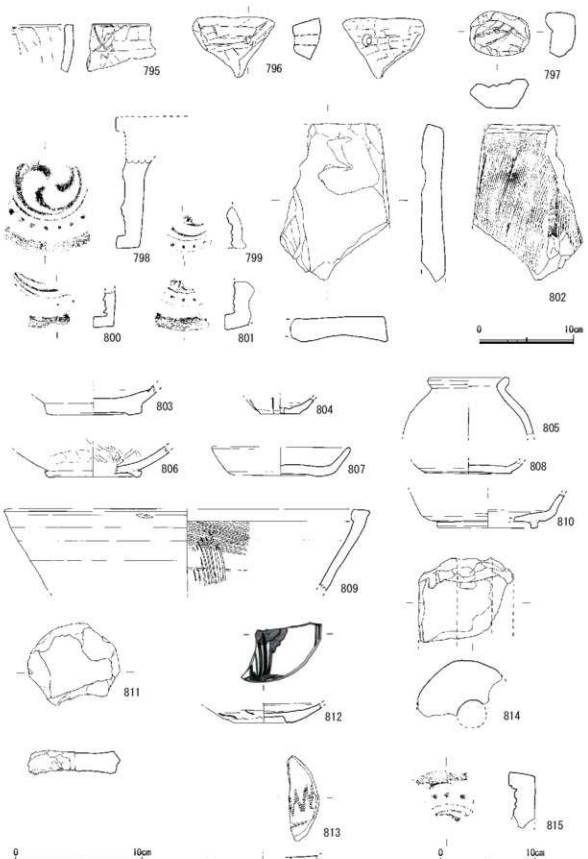


図 73　遺物溜出土遺物実測図 3（1/3，1/4）

835、836は白磁の転用品。835の外底には墨書が残る。「商」か。837～839は青磁碗転用品。

第75、76図は⑪出土。840は白磁小碗。底径4.0cm。841は白磁皿。底径3.8cm。平底で、見込みには花文様の沈線が刻まれる。842は陶器碗底部。見込み、外底に目跡が残る。底径4.8cm。843は陶器鉢底部。底径10.6cm。見込みには同心円状の沈線が施される。844、845は陶器壷底部。底径5.0、7.6cm。844は底部付近と内面は露胎となるが、845は全面釉がかかる。846は土師器坏。口径12.6cm、底径7.6cm。847は土師器皿。口径6.7cm、底径4.5cm。848は土鍋。口径34.6cm、内面はハケメ調整。849は陶器転用の瓦玉。850は滑石製石鍋転用品。穿孔があり、石錘として使用されたか。851～853は白磁碗。851は口径14.0cm、852、853は底径6.6、7.1cm。854は白磁皿。口径11.6cm、底径4.4cm。外底に墨書が見られるが、花押のようである。855は白磁小皿。口径9.4、底径5.0cm。856は白磁小壷。口径3.0cm。口縁部は立ち上がらず頸部に斜めの平行沈線が刻まれる。857、858は白磁の合子。857は蓋、858は身。口径857は6.0cm、858は5.0cm。859は白磁壷胴部か。暗文が施される。860は白磁皿。こちらも暗文が施される。861は土師器坏。底径10.0cm。862～864は土師器皿。口径6.6～8.8、底径5.9～7.1cm。862、863は板圧痕が底部に残る。865は瓦質土器の風炉。口径30.0cm、頸部に穴が開く器形。口縁部下に雷文のスタンプ文が巡る。

図76は⑪の第２層。866は土鍋。口径27.0cm。内外面にハケメ調整が入る。867は須恵器壷。868～873は瓦玉。868、879、872は瓦転用。870、873は土師器転用。871は滑石製石鍋の転用品。874は滑石製石鍋の転用品。板状に仕上げて穿孔があり、温石として使用したか。875、876は白磁碗。底径7.2、5.6cm。877は瓦器碗底部。内面にミガキ調整が残る。底径6.4cm。878は土師器坏。口径12.4cm、底径7.6cm。

879～889は⑩、⑮出土。879～881は瓦玉。879、880は白磁碗転用。880の見込みには櫛描文が施される。881は陶器碗の転用。883は滑石製石鍋の転用品。鍔の部分である。884、885は磁器の皿。884は青花で、見込みに圏線と花文様が描かれる。底径6.0cm。885は白磁。口径11.6、底径6.0cm。886は土師器坏底部。底径6.0cm。887は瓦転用の瓦玉。888は一字一石経。889は硯。

図77は土器溜内出土。890～892は瓦玉。890は瓦、891、892は土師器転用。893、894は一字一石経。893は「若」か。895は軒丸瓦。瓦当面に「大」の文字が刻まれる。896は青磁碗底部。外底に墨書が見られる。瓦玉として転用されたか。897は越州窯系青磁底部。これも外底に墨書が見られる。898、899は天目碗転用の瓦玉。900は土師器転用の瓦玉。

（5）包含層出土遺物

遺構面を掘削して出土した遺構以外の遺物については、包含層出土としてグリッド毎に取り上げた。ここではグリッド毎に説明する。

図78、79は④、⑧の第１～２面出土。901～903は白磁碗。901は口径16.7、底径7.3cm。902は底径6.3cm。904は白磁壷の頸部。905は白磁盤底部。906、907は青磁碗。同安窯系。口径17.4、15.8cm。内外面に櫛描文が施される。908は青磁小碗。口径10.0cm。909も青磁碗。見込みに目跡が残る。底径5.4cm。910は陶器壷。口径6.6cm。口縁端部は目跡が残る。911は緑釉陶器の碗。912は陶器甕口縁部。913は陶器小碗。口径10.0cm。914は青花小碗。口径6.0cm。915は土鍋。916は朝鮮系陶器の壷。917～920は土師器。917、918は土師器坏。口径11.0cm、10.6cm、底径7.2、6.8cm。919、920は土師器皿。口径6.8、7.2cm、底径4.5、5.4cm。921は陶器碗転用の瓦玉。922は土師器転用の瓦玉。

923は丸瓦。924～929は滑石製石鍋の転用品。924は瓦玉。925、927は石錘。926はミニチュアの容器状加工品。928、929は石錘の未製品か。930は石製錐。931～936は鉄製釘。

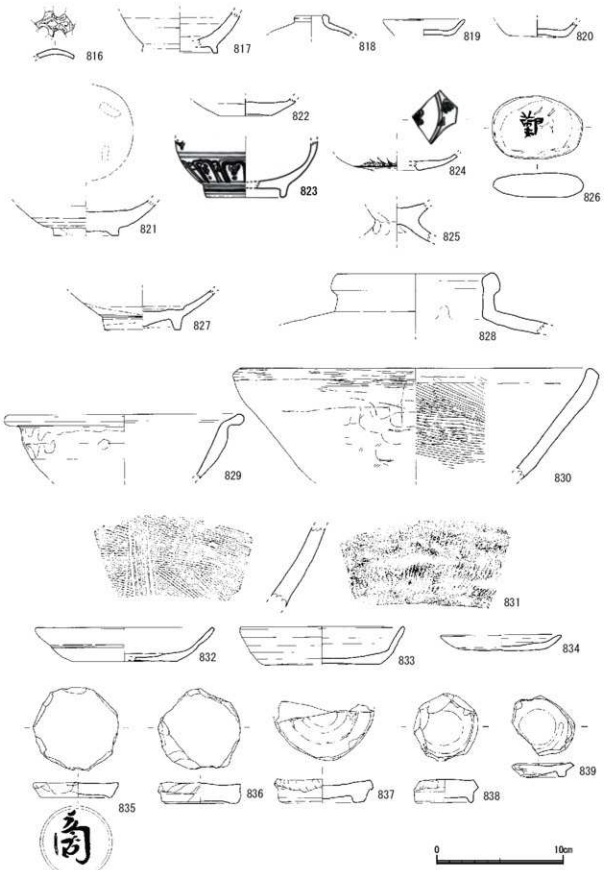


図 74　遺物溜出土遺物実測図 4 (1/3)

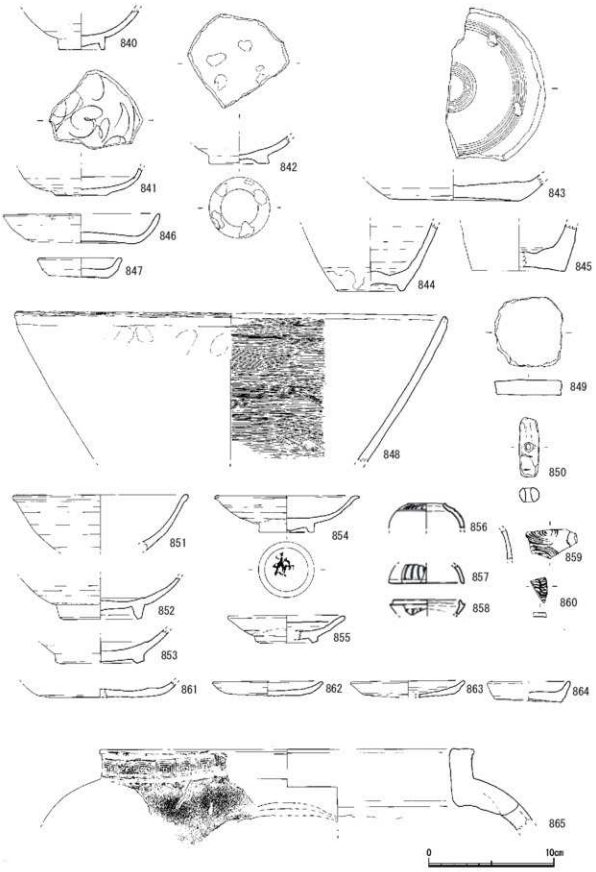


図 75　遺物溜出土遺物実測図 5 (1/3)

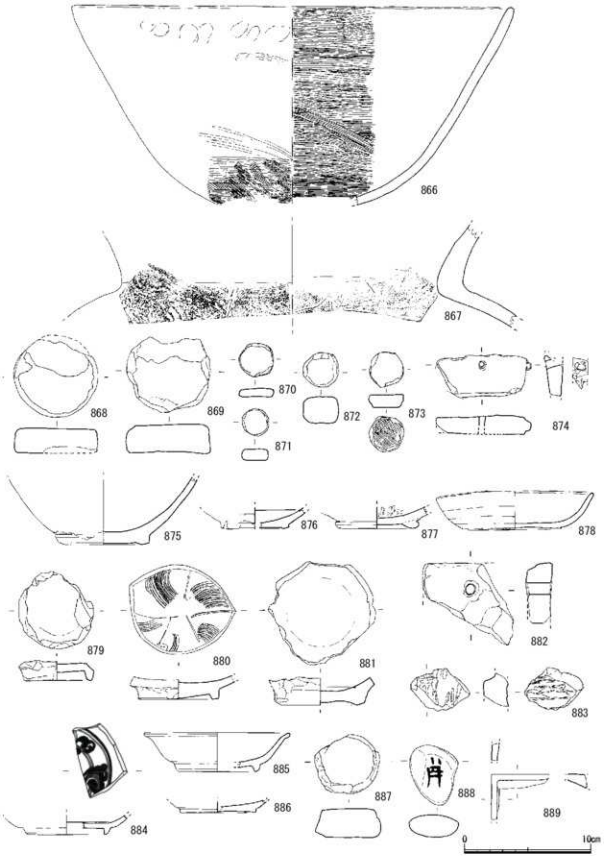


図 76　遺物溜出土遺物実測図 6 (1/3)

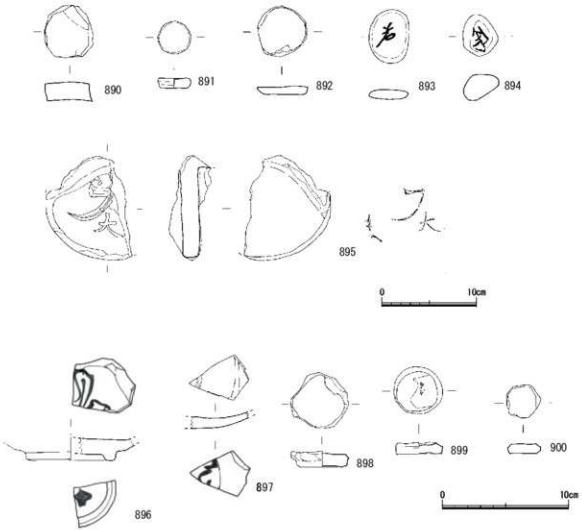


図77　遺物溜出土遺物実測図7（1/3, 1/4）

図80、81は③、⑦出土。937～939は白磁のミニチュア製品。937は皿で底径3.0cm。938は碗で底径2.2cm。939は壷で底径3.0cm。940は青磁碗。外底に墨書が残る。底径5.4cm。見込みには櫛描文が施される。941も青磁碗。平底で底径3.0cm。942は青磁盤。口縁部は波状を呈する。943は青花のミニチュア壷。底径2.0cm。944、945は青花碗。946、947は青花皿。碁笥底で946は底径3.4cm。外底に目跡が残る。948は陶器壷。949は緑釉陶器。内外面に釉がかかる。950～953は土師器。950、953は口径11.1、10.4cm、底径5.1、7.0cm。951、952は口縁部が外反した皿。口径14.0cm、底径8.6、9.7cm。954～956は火舎。954は底径24.4cm。957、958は擂鉢。958は口径14.5cm。注口と摺り目が残る。959～964は瓦玉。959は白磁転用品。外底に墨書が残る。960は青磁碗転用品。見込みに文字が暗文で施される。961は土師器皿転用品。962～964は瓦転用品。965は土錘。966、967は一字一石経。966は薄く墨書が残る。967は文字不明。

図82は②、⑥出土。968は青磁碗底部見込みに片切彫りの文様が施される。底径4.2cm。969は青磁の紅皿。口径6.6cm、底径3.4cm。970、971、974は青花皿。970、971は底径8.2、5.2cm。974は碁笥底で底径3.8cm。972、973は陶器。975は陶器捏鉢。底径14.0cm。外底に目跡が残る。976は瓦器碗。外底に沈線が刻まれる。977は土師器皿。口径7.0cm、底径4.8cm。978～982は瓦玉。978は陶器、979～982は瓦の転用品。983は土錘。984は滑石製石鍋の加工品。985、986は鉄製釘。

図83は⑫、⑯出土。987は白磁碗。外底に墨書が残る。底径7.0cm。988は白磁小皿。口径は8.0cm。989は越州窯青磁碗。底径6.9cm。底部付近に重ね焼きの跡が残る。990は青磁壷。同一個体の頭部と底部。耳がつく。底径12.0cm。991は陶器の皿。口径30.0cm。口縁部には指抑えの文様が巡る。992～999は土師器の坏、皿。992は口径15.4、底径11.4cm。993～996は口径7.0～9.0cm、底径5.6～6.6cm。993、994、996～999には底部や胴部に穿孔が見られる。1000～1005は瓦玉。1000～1003は白磁碗の転用品。1004、1005は青磁碗の転用品。1004は見込みに目跡が残る。1005は青磁皿。見込みに櫛描文が残る。1006は硯の加工品。２側面に丁寧な加工痕が残る。1008は滑石製石鍋の転用品。1009は鉄製刀子。残長は9.8cm。

図84、85は⑪、⑮出土。1010～1013は白磁。1010は碗。底径6.6cm。1011は底径4.0cm。1012はミニチュアの碗。1013は壷の耳。1014は青磁碗。口径15.0cm。崩れた連弁文が描かれる。1015は青磁碗転用の瓦玉。1016、1017は青磁皿。いずれも同安窯系。1018は葉形の青磁皿。1019は青花碗。口径12.0cm。1020は青花皿。底径4.0cm。1021は陶器盤。1022は陶器碗底部。1023は陶器甕口縁部。1024、1025は陶器壷。1024は口径11.4cm。1025は底径6.6cm。1026は陶器擂鉢口縁部。摺り目が入る。1027は火舎。頸部には縦方向の沈線が並ぶ。1028は陶器の鉢皿。1029は火舎。外面に雷文のスタンプが巡る。1030は瓦質の釜。1031も部位は不明であるが、火舎の一部か。把手の可能性がある。1032は東播系の擂鉢。

1033～1037は土師器坏。口径11.6～12.6cm、底径6.8～7.7cm。1037～1041は土師器皿。口径7.6～8.8cm、底径3.4～6.8cm。内多くは口縁部打ち欠きもしくは穿孔、底部穿孔が見られる。1042は須恵器坏。外底に「大」の墨書が見られる。1043～1047は瓦玉。1043は白磁碗、1044は青磁碗、1045、1046は陶器、1047は瓦の転用品。1048は蛸壷。口径5.8cm。1049～1052は土錘。1053、1054は平瓦。1055は滑石製石鍋。口径20.0cm。1056は滑石製石鍋底部。1057～1063は滑石製石鍋転用品。1057、1060、1062は穿孔がある。1062は形状から紡錘車として使用されたか。1061は円形の容器を二つ連結した形状で用途は不明。1063は穿孔しようとした痕跡が残る。1064～1074は鉄製釘。

図86は⑩出土。1075～1077は白磁。1075、1076は皿。底径3.8、3.0cm。1077は壷の頸部。1078は青磁皿口縁部。1079は青磁壷。1080、1081は陶器壷。1081は底径9.0cm。1082は火舎。頸部にスタンプ文が巡る。1083は瓦器碗。1084、1085は土師器坏。口径12.8、12.0cm、底径7.4、8.6cm。いずれも板圧痕が残る。1086、1087は土師器皿。口径8.0、7.8cm、底径6.1、5.4cm。1088、1089は瓦玉。1088は白磁碗、1089は陶器の転用。1090は滑石製石鍋転用品の石錘。1091、1092は一字一石経。1091は「尼」、1092は「山」の墨書が見られる。1093は滑石製石鍋転用の石錘。1094、1095は滑石製石鍋。1096は平瓦。

図87は遺構検出時出土。1097は白磁紅皿。口径4.4cm、底径1.3cm。1098、1099は緑釉陶器。1100～1108は瓦玉。1100、1105は白磁碗転用。1101、1106は青磁碗転用。1102は青花皿転用。1107は瓦転用。1108は土師器転用。1109、1110は滑石製石鍋の転用。石錘の未製品か。1111～1117は調査区西側落ち際出土。1111は瓦転用の瓦玉。1112は滑石製石鍋の加工品。1113は鬼瓦の一部。1114は青磁の水注か壷。底径8.0cm。1115は磁器の壷蓋。1116は須恵器壷。口径16.0cm。1117は滑石製石鍋の加工品。温石として使用したか。

図88はベルト、調査区壁からの出土。1118は白磁小碗。口径9.8cm、底径4.0cm。口縁部に一部打ち欠きがある。1120は土師器皿。口径6.4cm。口縁部に打ち欠きがある。1119は緑釉陶器。1121は土師器転用の瓦玉。1122、1123は瓦転用の瓦玉。1124は瓦質製品の五輪塔の風輪か。あるいは鬼瓦の一部か。1125は石製品。用途は不明。1126は白磁の水注もしくは壷の底部。底径6.4cm。1127は

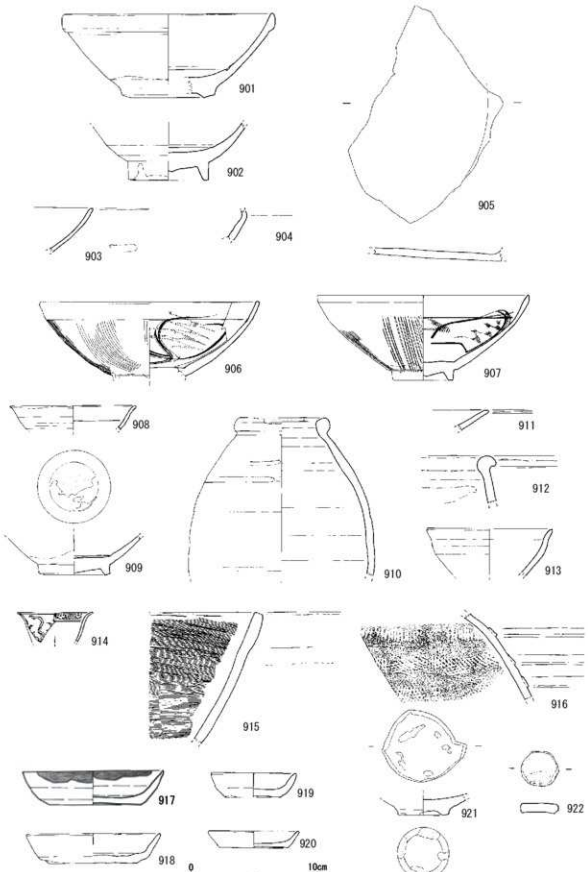


図 78　包含層出土遺物実測図 1 (1/3)

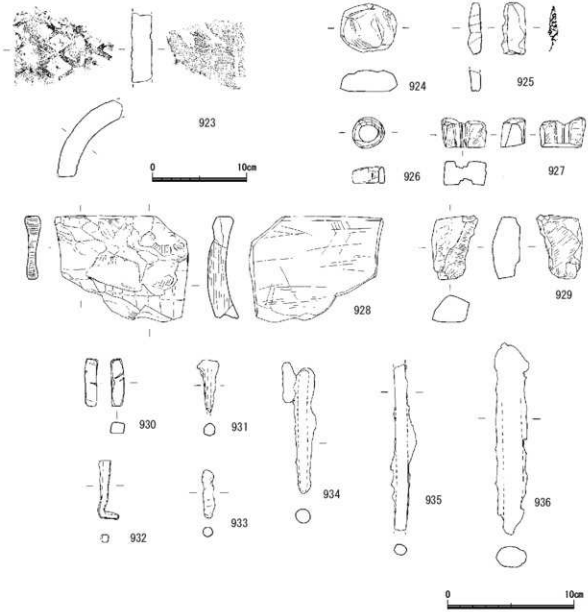


図79　包含層出土遺物実測図２（1/3）

陶器蒸器の蓋。被せる部分の口径は21.2cm。1128は土製の人形。軍人を模している。

図89は石積遺構の背面から出土した遺物である。1129～1138は白磁。1129～1135は碗。1129は口径20.0cm、1130～1135は底径7.0、6.0、7.0、7.0、6.4、5.0cm。1136～1138はやや上げ底気味の皿。いずれも底径4.0cm。1139は高麗青磁碗。見込みと外底に目跡が残る。底径7.4cm。1140は越州窯系青磁碗。見込みに目跡が残る。底径8.6cm。1141は緑釉陶器の鉢。1142は緑褐釉陶器の盤。1143は国産緑釉陶器の碗。底径7.2cm。1144は褐釉陶器の小型甕。口径7.4cm。1145は陶器甕。1146は陶器鉢。1147は土師器碗。内面はヘラミガキ調整。口径14.0cm。外面に墨書が見られる。花押か。1148は土師器皿。口径8.2cm。底部はヘラ切り。1149は須恵器蓋。口径15.6cm。1150は須恵器坏。底径8.0cm。1151は弥生時代甕。1152は土錘。1153、1154は滑石製石鍋加工品。1153は窪みが２カ所穿たれる。1061に類似する。1155は陶器盤。

図90は石積遺構近辺出土。1156は移動式竈。1157は石塔の頭部。砂岩製。頭部を三角形に削り出す。1158、1159は白磁碗。底径7.0、6.4cm。1160は白磁皿。底径4.8cm。1161は青磁水注の飾りの一部か。1162は陶器の小鉢。口径11.0cm、底径4.0cm。1163は陶器の小壷。口径4.0cm、底径3.1cm。

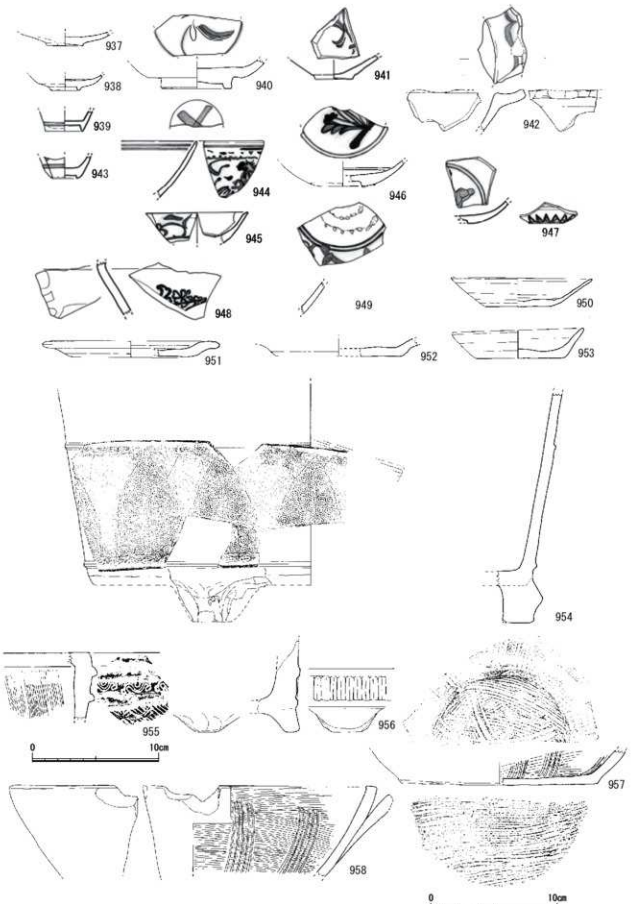


図 80　包含層出土遺物実測図 3 (1/3)

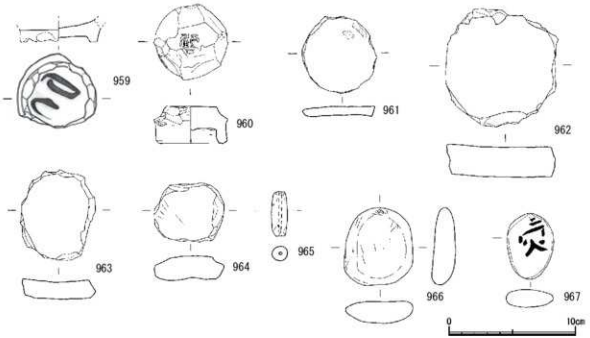


図81　包含層出土遺物実測図４（1/3）

1164は急須の把手。1165は褐釉陶器壷。口径10.0㎝。1166は坩場。内面に鉄滓の痕跡あり。

1167は板碑の一部。正面に文字が刻印される。「能首座」「十日」の文字が読み取れる。石積遺構の上層で出土している。

1168～1175は銅銭。

４．小結

Ⅱ区は、標高1.3m前後（第２面）から標高1.6～2.0m（第１面）まで最大70㎝の深度の生活面が確認された。

ここで確認された最も古い時期は弥生時代である。ただ、遺物のみの出土で、遺構としては確認されていない。続けて古墳時代の須恵器も出土しているが、同じく遺物のみであり、これらは周辺からの流れ込みであると考えられる。

遺構として明確に確認できたのは、10世紀に入ってからである（SK151）。越州窯系青磁や須恵器が出土している。この土坑は、石積遺構の背面、陸地の部分での検出であり、石積遺構が築かれた時期よりも以前の時期である。当該時期の遺物は他の遺構からも出土するが、明確な遺構としてはSK151のみと考える。

時代が下って現れるのが、11世紀後半～12世紀前半の時期である石積遺構である（巻頭図版３・４）。調査区の北半分に北西－南東の方向に延びる。この遺構については、「博多191」の報告で詳述するが、当該時期に湾に沿って築かれた港湾施設である。この時期における石積遺構の前面南側で検出された同時期における遺構は船の着岸に関係するものであると考えられる。この中で、石積遺構に最も近い時期の遺構の一つは、石積遺構の南側に広がる炭化層で白磁碗や土師器が散布していたSK164である。石積遺構が機能していた段階で、何らかの事情で散布してしまった器物であると考えられる。沖から積み替えている段階で廃棄されたか落下した荷物であろうか。また、SK147の下面のSK184では散布した獣骨が検出されたが、解体した動物遺体を廃棄したものであろうか。

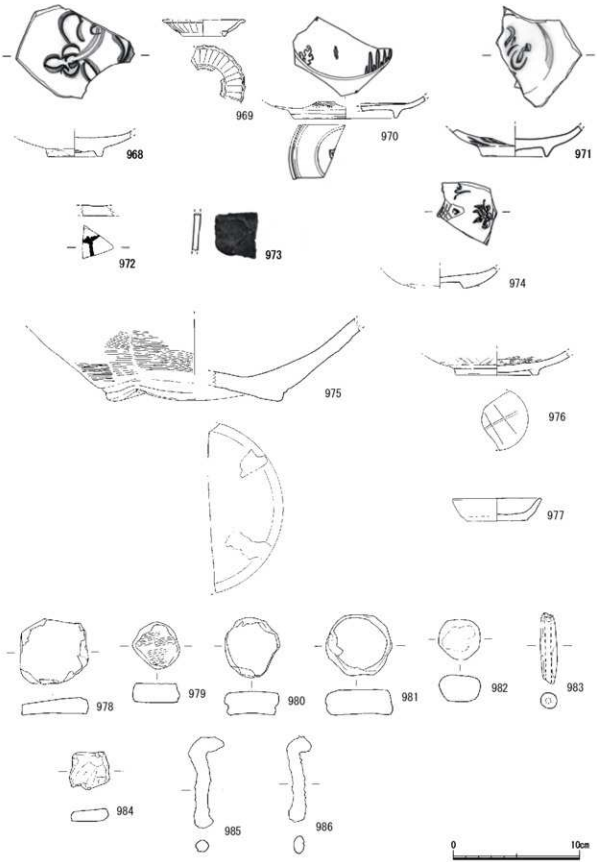


図 82　包含層出土遺物実測図 5 (1/3)

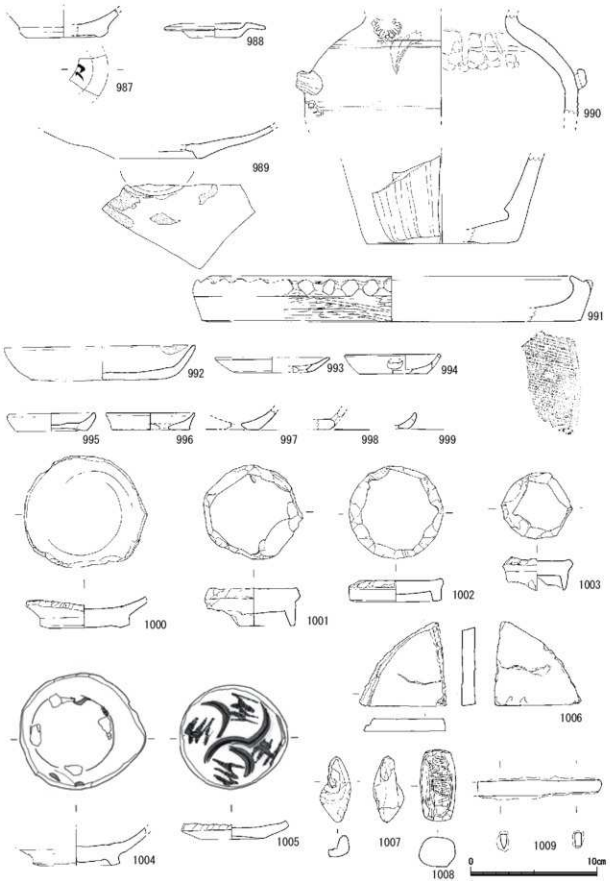


図 83　包含層出土遺物実測図６（1/3）

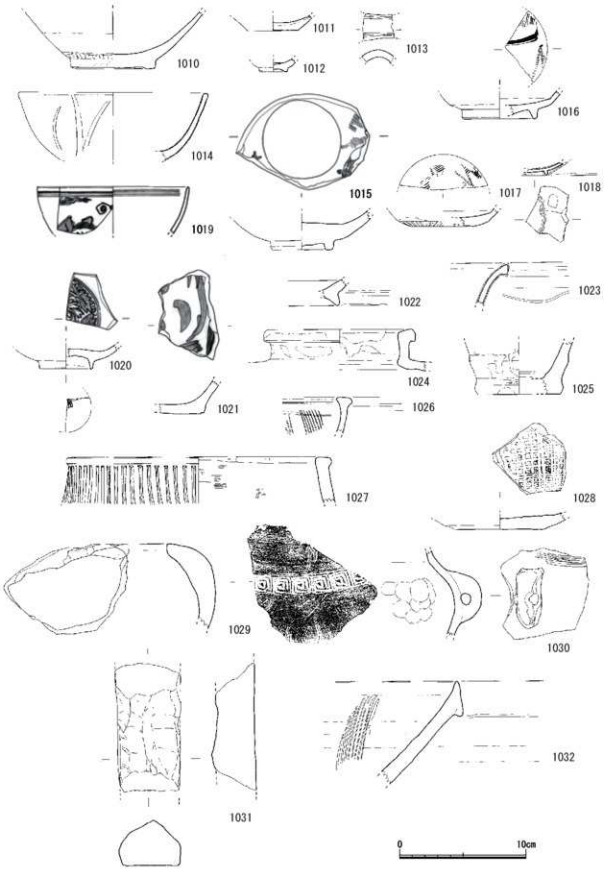


図 84　包含層出土遺物実測図 7 (1/3)

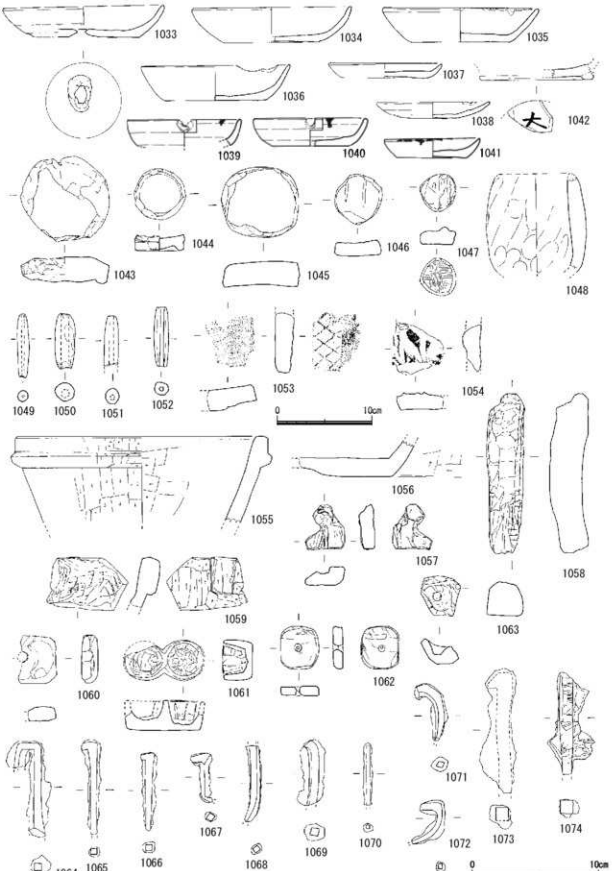


図85　包含層出土遺物実測図8（1/3，1/4）

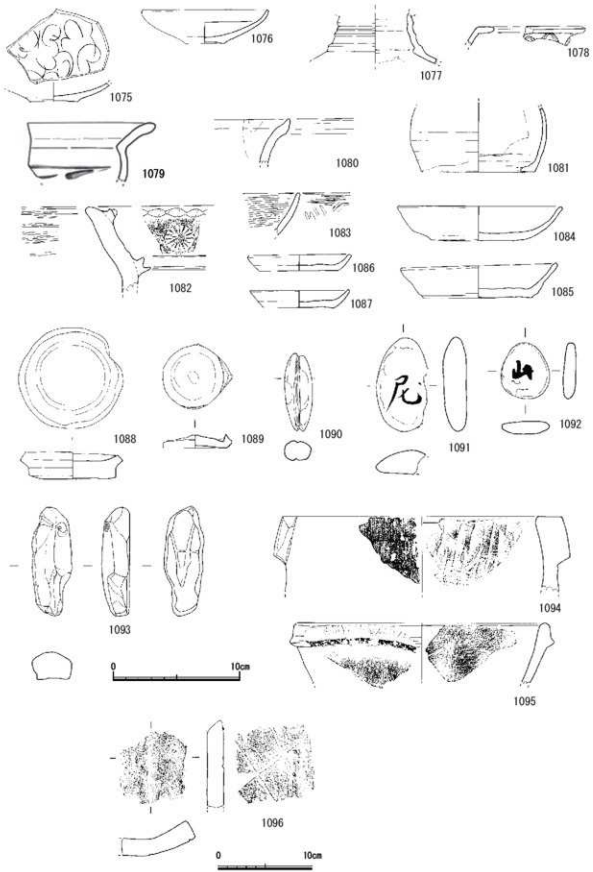


図86　包含層出土遺物実測図9（1/3，1/4）

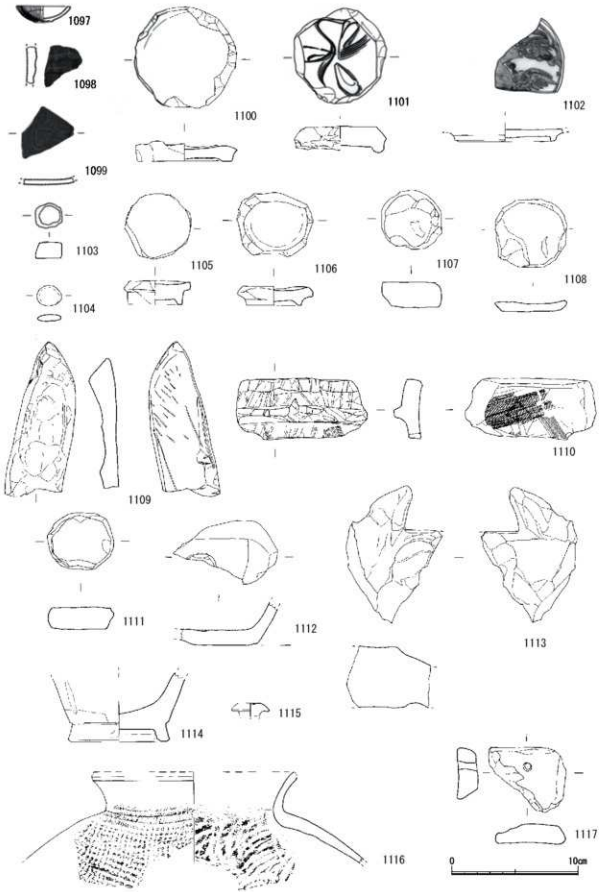


図 87　包含層出土遺物実測図 10（1/3）

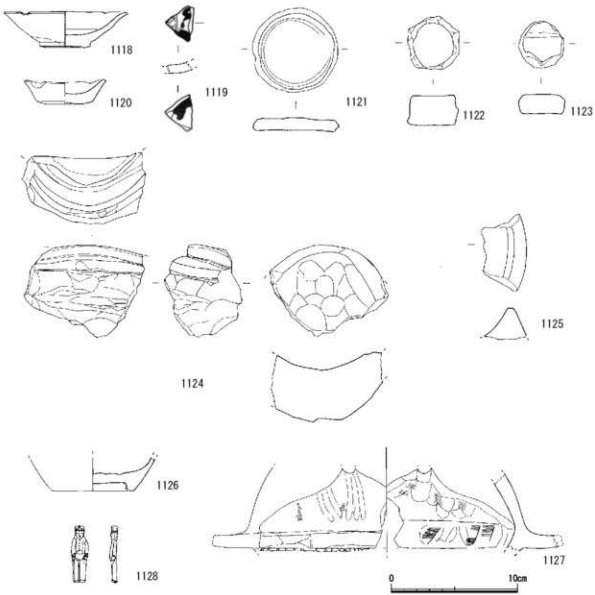


図88　包含層出土遺物実測図11（1/3）

また、遺物が少なく明言はできないが、石積遺構の北側で検出されたウシの骨の集積であるSK131は同時期のものではないかと考える。Ⅲ区側で検出された石積遺構の上面に設置されたウシの頭蓋骨の例（「博多191」参照）と同様の行為であろう。そうすると、石積遺構である港湾施設の荷解き場で行われた、港湾施設にかかる祭祀と考えられる。また、ヒトの骨が入ったSK144も同様の性格であろうか。

石積遺構は12世紀前半以降、洪水により埋没した（「博多191」参照）。石積遺構の廃絶後の時期の遺構がSX141である。石積遺構の南側、調査区の東壁付近で検出された。土師器坏が配置され、花弁双蝶八花鏡と半円形石製品が出土している。遺物の内容や出土状況から海浜祭祀遺構と思われる。遺物から12世紀後半の時期であること、検出レベルが石積遺構前面南側の上層であることから、石積遺構が廃絶した後の祭祀であるととらえられる。SE155、SK118、SK021、SK152もこれと前後した時期であり、石積遺構埋没後に掘削されたものであろう。

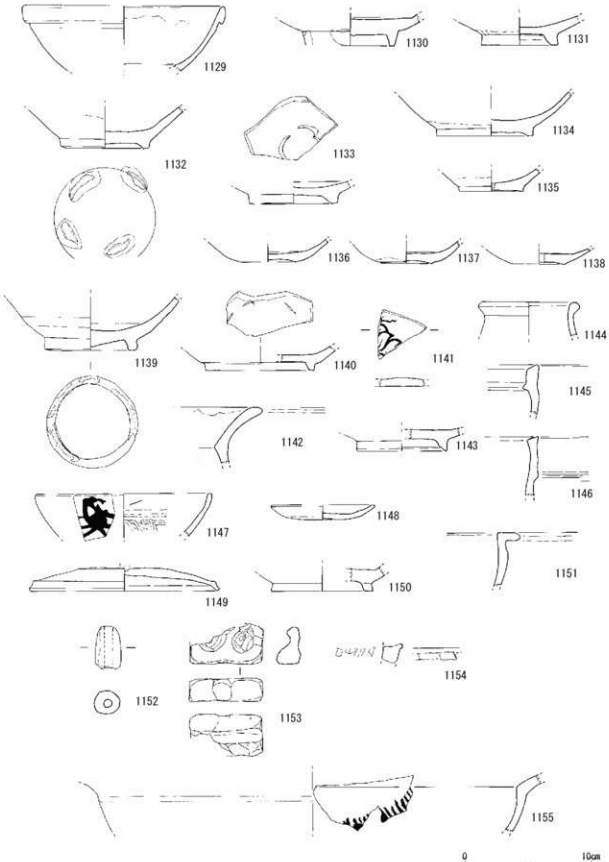


図 89　包含層出土遺物実測図 12（1/3）

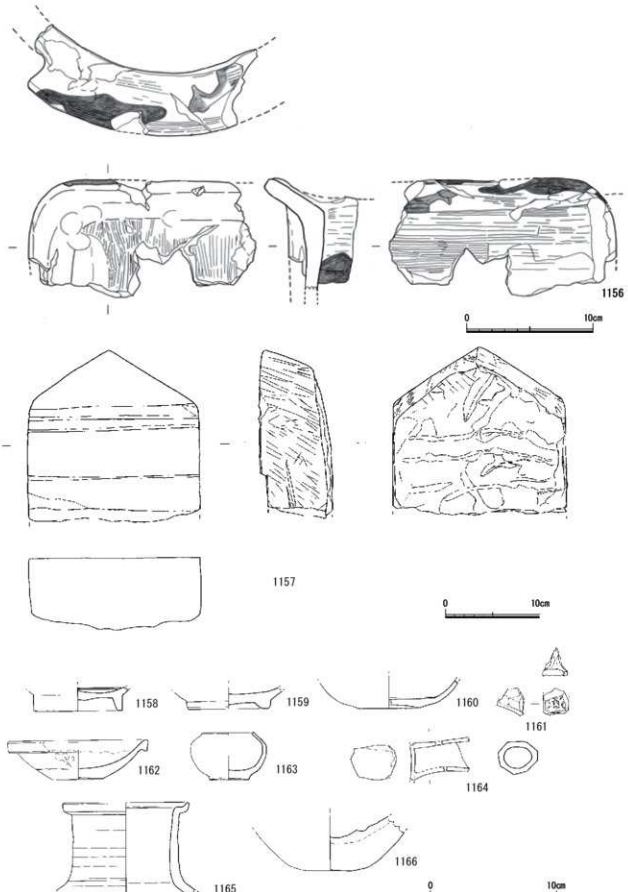


図 90　包含層出土遺物実測図 13（1/3，1/4）

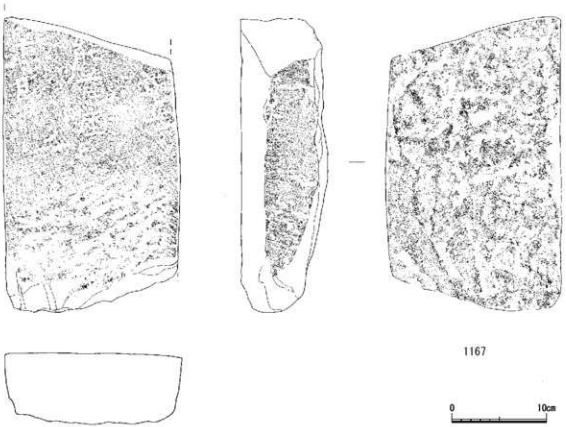
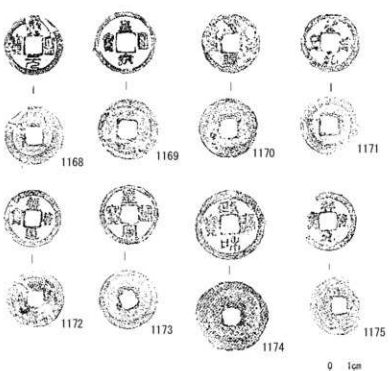


図91　包含層出土遺物実測図14（1/4）



1168　熙寧元宝
1169　皇宋通宝
1170　大開通宝？
1171　聖宋元宝
1172　祥符通宝
1173　皇宋通宝
1174　政和通宝
1175　祥符元宝

図92　出土銭貨拓影（2/3）

その後さらに生活面である土壌の堆積が進んでいく。第１面で検出されたSK002・003は13世紀ごろであるが、少なくともこの時期には石積遺構は完全に埋没し、安定した陸地となっていたことになる。遺構の検出では前後になるが、第１面下から第２面に掘り下げていく段階で池状遺構SK147が検出された。もともと海浜であった場所であるから、埋め立てたり土壌が堆積したりしても自然の窪地のようになっていたのかもしれない。出土した遺物から、少なくとも17世紀の時期が下限と考えられる。このSK147から出土した遺物は、白磁や青磁、青花、陶器の碗、壷、鉢、皿、土師器などの食器、火舎、土鍋、擂鉢、捏鉢などの調理用品や生活用品、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、平瓦、丸瓦などの瓦類や多くの一字一石経、瓦玉等である。これらは11世紀後半ごろの石積遺構時代のものから近世にかかる頃まで幅広い時期にわたる。古い時期の遺物については、石積遺構の時期のものが混入しているものである。

調査地点は、「大乗寺」の跡とされているところであり、調査前から大乗寺関連の遺構の検出が想定されていた。SK147はおそらくこの大乗寺に関わる池状遺構と推測される。出土した瓦の中に「大乗寺」の文字が浮き彫りにされた軒丸瓦が複数点あることや、「卍」の文様が浮き彫りされた軒丸瓦、多数の一字一石経からも推定される。ここで特筆すべきは多量に出土した瓦玉である。SK147だけでも60点近い数が確認されている。瓦玉の種類は多岐にわたるが、多いのは白磁、青磁、青花、土師器、瓦の転用である。数少ないが、滑石製石鍋の転用も見られた。寺院建立の際に採集されたと思われる白磁や青磁を用いて加工したものや、身近に使っていた陶磁器や土師器、瓦の破損品を転用したものもあるだろう。これだけの多量の瓦玉を寺院で遊具に使用していたのか、あるいは別の用途があったか想像が広がる。

この池状遺構（SK147）は自然に埋没していった段階もあろうが、土層に植物由来の生痕が見られないことから、ある段階で人為的に埋め立てられたと考えられる。17世紀の前半ごろであろう。この暗褐色粘質土層のさらに上層で掘り込まれたような土層が確認されることから、数回掘り直しがあったと考えられる。遺構としての確認はできなかったが、土器溜としたものがSK147の上層部分であった可能性もある。

SK147の埋没後にSE008、SK079、SE070、SK085が掘り込まれている。いずれも近世に入っての時期である。井戸は陶器擂鉢、土師器、火舎、瓦、一字一石経、瓦が出土しており、寺院関係の遺構ではないかと思われる。その他、石積土坑は３基ともに軸線がそろっていることから同時期と思われる。また、石積土坑の石には板碑や石塔、石仏などが一部用いられており、寺院内の構築物を転用したことが窺える。

以上の状況を時系列で見ると、石積遺構構築前の10世紀ごろに生活が営まれ始め、11世紀代から12世紀前半ごろにかけて港湾施設としての機能が営まれた。その後港湾施設の廃絶や潟の陸地化が進み、港に係る祭祀が営まれた。13世紀ごろには安定した陸地となるが、この前後に大乗寺の寺院域に取り込まれ、寺院の池が築かれる。池が埋没した後も寺院域として継続していったのであろう。大乗寺は寺伝によると大同元（806）年空海による開基といわれる。健治３（1277）年奈良西大寺の叡尊が再興し、亀山上皇の勅願寺となった。永禄８（1565）年に浄土宗、正保元（1644）年に福岡藩二代藩主黒田忠之が再興し真言宗に転じたといわれる。以上からも、13世紀、17世紀での転機が見られ、遺跡の事象とも合致すると思われる。

このように、Ⅱ区では、11世紀後半から12世紀前半の港湾施設、その後の大乗寺の寺院域と様相を変えていった状況が窺える。

１．SK002・003（南東から）

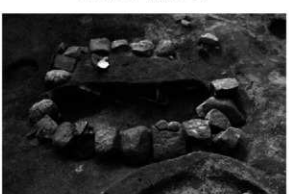
２．SK002（南東から）

3．SK002・003 瓦出土状況（北から）

４．SK004（西から）

５．SK004（南西から）

６．SK007（東から）

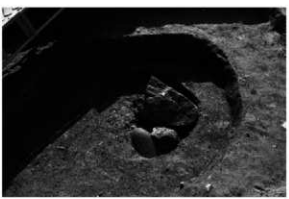


７．SK051（東から）

８．SK051（北から）

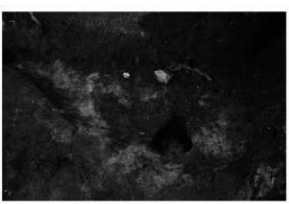
１．SE070・１面（西から）

２．SE070・２面（北から）



３．SE070・３面（西から）

４．SE070・４面（東から）



５．SK021（西から）

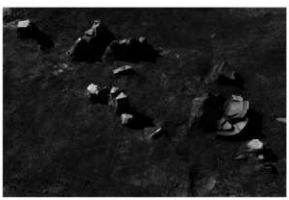
６．SK021 内獣骨出土状況（南から）

７．SK050（東から）

１．SK090（北から）

２．SK093（西から）

３．SK093（北から）



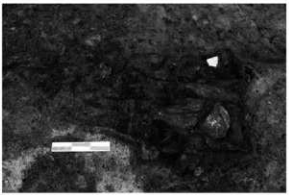
４．SK093　土鍋、礫出土状況（北から）

５．SK119 獣骨出土状況（西から）

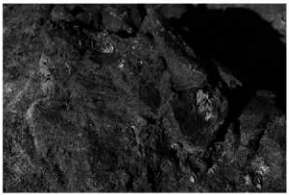
６．SK119 白磁碗出土状況（東から）

７．SK144（西から）

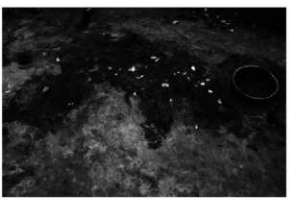
８．SK144 人骨出土状況（西から）



１．SK131（西から）



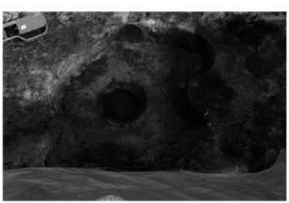
２．SK131 下層の状況（南から）



３．SK164（南から）

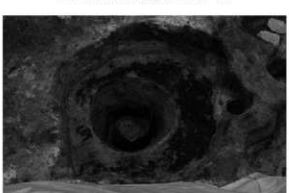
４．SK151（北から）

５．SE155 井筒上層（南から）



６．SE155 井筒検出（南から）

７．SE155 井筒（南から）



８．SE155 井側掘削状況（南から）

１．SE155 井筒掘削状況（南から）

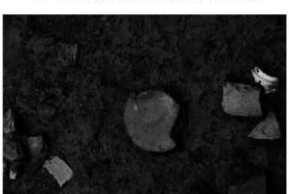
２．SE155 井筒下層礫出土状況(南から)

３．SE155 木製品出土状況（南から）

４．SK147 上層板碑出土状況（南から）

５．SK147 上層板碑出土状況（西から）

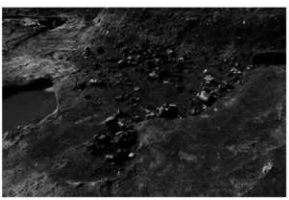
６．SK147 上層火舎出土状況（南から）



７．SK147 上層「大乗寺」瓦出土状況（北から）

１．SK147 上層北側（北から）

２．SK147 上層（北から）



３．SK147 上層南側（南東から）

４．SK147 上層南側（南から）

５．SK147 第１面（北西から）

６．SK147 第１面（東から）

７．SK147 第３面（北から）

８．SK147 第３面（東から）

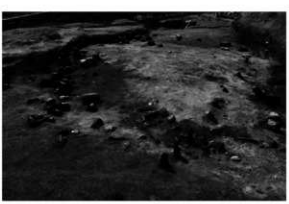
図版７（Ⅱ区）

１．SK147 第５面（北から）

２．SK147 第５面（北西から）

３．SK147 第６面（北から）

４．SK147 第６面（東から）

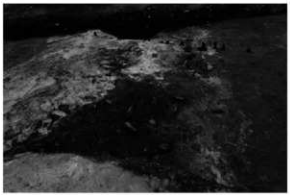


５．SK147 第７面（東から）

６．SK147 第７面（南から）

７．SK147 ベルト土層（東から）

８．SK147 遺物出土状況（南から）

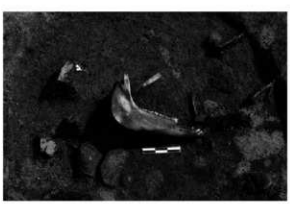


１．SK184 上層（南から）

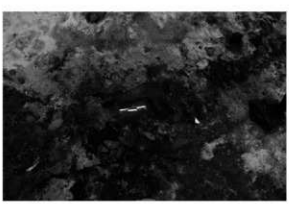
２．SK184 上層西側（東から）

３．SK184 下層獣骨出土状況（東から）

４．SK184 下層獣骨出土状況（西から）



５．SK184 下層獣骨出土状況（西から）



６．SK184 下層獣骨出土状況（南から）

７．石積み遺構検出状況（南西から）

８．石積み遺構検出状況（西から）

図版９（Ⅱ区）

１．調査区周辺遠景（南東を望む）

２．調査区周辺遠景（東を望む）

３．調査区周辺遠景（北東を望む）

４．調査区周辺遠景（北西を望む）

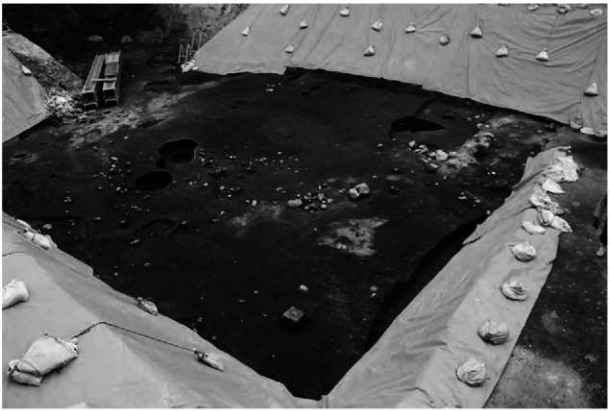
５．調査区遠景（北東から）

1．Ⅱ区第１面（北東から）

2．Ⅱ区第１面（南から）

1．Ⅱ区第１面（西から）

2．Ⅱ区第１面（南西から）



1．Ⅱ区第 1 面下（南東から）

2．Ⅱ区第 1 面下（北東から）

1．Ⅱ区第２面遠景（北東から）

2．Ⅱ区第２面（北東から）

1．Ⅱ区第２面（西から）

2．Ⅱ区第２面（南から）

1．Ⅱ区第２面と遠景（西から）

2．Ⅱ区第２面（西から）

1．SX01（南東から）

2．SX01 検出状況

3．SX01（西から）

4．人物騎馬像（350）出土状況

5．C 区 SD03 全景（北から）

6．A ～ C 区包含層中層中調査風景（南東から）

7．人物騎馬像（350）国重文

8．鹿角製弓筈（355）国重文

9．柿釉碗（351）

10．黒釉碗（352）

11．越州窯系青磁壺（270）

12．白磁水注（470）

13．白磁鉄絵坏托（92）

14．白磁碗（354）

15．青白磁合子（263）

16．白磁鉄絵瓶（329）

17．陶器水注（484）

18．褐釉陶器盤（286）

19．褐釉陶器四耳壺（485）

20．墨書陶磁器－1

21．墨書陶磁器－2

22．墨書陶磁器－3

23. 金銅製飾金具（34 次）

24. 墨書陶磁器 1（34 次）

26. 土坑 P07 出土白磁碗（34 次）

25. 墨書陶磁器 2（34 次）

28. 耀州窯碗（54 次）

27. 青銅製小仏像（2 次）

29. 磁竈窯盤（54 次）

Ⅵ　博多遺跡群第221次調査区周辺の調査

１．博多遺跡群第２次調査

調査番号　7928　所在地　福岡市博多区店屋町99　調査面積　100㎡
調査・報告担当　山崎龍雄　調査期間　1979年４月11日～18日

調査の概要

1970年代後半は、博多遺跡群の調査が始まったばかりで、文化財の事前審査体制は整備の途上だった。第２次調査は、ビル建設工事が既に着手されたところだったが、協議のうえ、立会調査という形で実施した。調査は短期間で、土層図作成と、記録写真の撮影と遺物の採集にとどまる。出土遺物の所在は永らく不明となっていたが、今回存在が確認された主要遺物について報告を行うものである。

調査地周辺では３か所の調査が行われている。南側の第135次地点（福岡市埋文年報VOL.16）は、地山砂丘面まで、古代末から近世にかけて８面の遺構面を調査した。調査では井戸・土坑・柱穴のほか、１～３面の近世遺構面で鋳造関連遺構を検出した。東側の第159次地点（市報告946集）は中世後期から近世にかけての３面の遺構面を調査した。調査地は旧河川内に位置するため、基盤砂丘面が確認されず、埋立て整地生活面としている。14世紀代の遺構が最も古く、16世紀になると道路や建物、溝、井戸、石積み土坑が造られるなど広く利用されていることが明らかになった。第238次地点（市報告1454集）は道路を挟んで北側にある。中世後半から江戸・明治初めまでの３面の調査を行った。第１面では井戸と鋳造関連遺構、中世後半の第２面では土坑、井戸、石積み遺構を検出し、下面の第３面では大溝や土坑・柱穴などを検出した。この調査地点も砂丘面は確認されず、水成堆積層であった。

出土遺物（図１）

調査は地表面下3.8m辺りまで行った。採集遺物はコンテナ６箱である。包含層とした暗青灰色砂質層、暗青灰色褐色砂質層、暗青灰色粘質砂質層、黒褐色土、黒褐色粘土層、近世以降の攪乱土、井戸遺構と認識した部分から採集したものである。採集した遺物は古墳時代・古代の須恵器、中世国産の土師器、瓦質土器、中国龍泉・同安窯系青磁、白磁、朝鮮王朝陶磁器、江戸時代の肥前陶磁器などがある。遺物の時期は16世紀から近世のものが多い。周辺でも中世後期の遺構・遺物が多く、当地点もその時期の遺構が中心であったと思われる。

おもな出土遺物を紹介する。１～５は暗青灰色砂質層出土。１は景徳鎮の白磁皿1/4片。復元口径12.0cmを測る。高台は露胎で黒く焦げ砂粒が付着する。２・３は土師器杯か皿。口縁が直に大きく開く器形。３はロクロ挽き痕が段々に強く残り、焼成は非常によい。２は口縁部内外面が青黒く焦げ、灯明皿に用いられたのか。２の口径は13cm、器高2.9cm、３は11.0cm、器高2.6cmを測る。いずれも大内系の土師器である。４も土師器で台付の坏か。底部は高く縊れる。焼成は良好。底径は4cmほど。２～４はいずれも外底部は回転糸切。５は朝鮮王朝刷毛目陶器の小碗。口径11.4cm、器高3.7cmを測る。内外面白粘土の刷毛目、見込内面に砂目痕が４か所残る。見込は鉄漿が塗られ赤い。６は暗灰色砂質層出土。青磁皿1/2片。復元口径12.2cmを測る。高台部露胎で凸状に削る。見込は円形状に無釉である。７～10は攪乱層出土。７は瀬戸・美濃の灰釉陶器折縁皿。復元口径10.8cmを測る。大窯Ⅳ期頃、16世紀後半から末頃か。８～10は明時代青花皿。小野編年の染付皿B1群。口径は12.0～12.1cm。11は青銅製小仏像（図版４）。黒褐色土層出土。蓮華座上に座しており、総高3.4cm，仏身高2.8cmを測る。蓮華座の下には長さ0.6cm、径0.3cmの棒状の突起がある。頭髪は螺髪で、法衣をまとう。背部の銅の付着は、光背などを付していた可能性がある。右手が施無畏印、左手が与願印を

結んでいることから、釈迦如来である。中国銭は６枚出土。12・13は永楽通寶（初鋳1408年）、14は元豊通寶（1093年）で他に１枚ある。15は嘉祐通宝（1056年）。１枚は銭名不明。16は銅製の笄。暗青灰色砂質層出土。全長16.2㎝、幅1.15㎜、厚さ約１㎜で上面に魚子技法を施す。

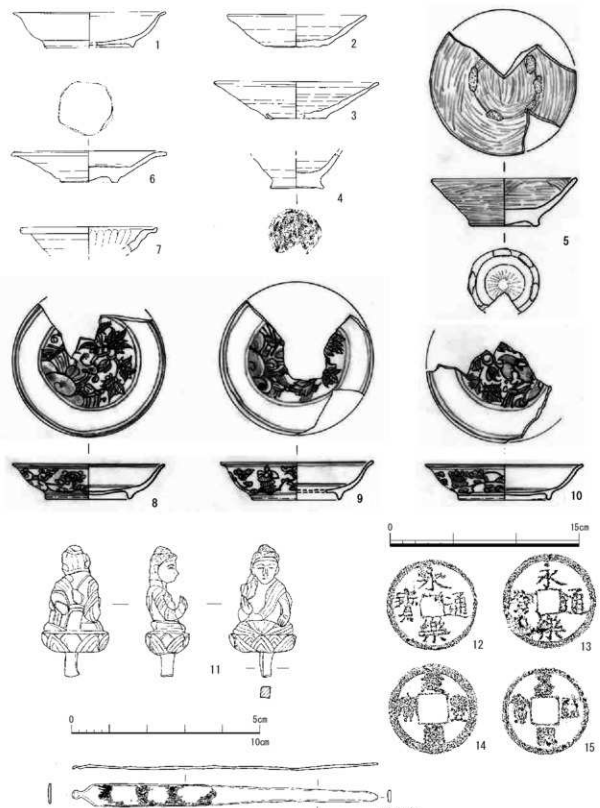


図１　博多遺跡群第２次調査出土遺物実測図（12～15 1/1・16 1/2・1～10 1/3）

2．博多遺跡群第14次調査

調査番号　8129　所在地　博多区店屋町4-15　調査面積　255㎡
調査・報告担当　池崎譲二（当時、地下鉄調査班）　調査期間　1981年７～８月

1．調査に至る経緯

中世都市博多の歴史的重要性については広く認識されていたが、中世以降博多の中心市街として継続し、長年の都市開発で大きな影響を受けていると考えられ、その地下に眠る遺跡としての認識は長い間見過ごされていた。1977年６月、地下鉄工事に先行して実施された埋蔵文化財の試掘調査によっ

図１　博多遺跡群第２・14次調査区の位置（1/1,000）

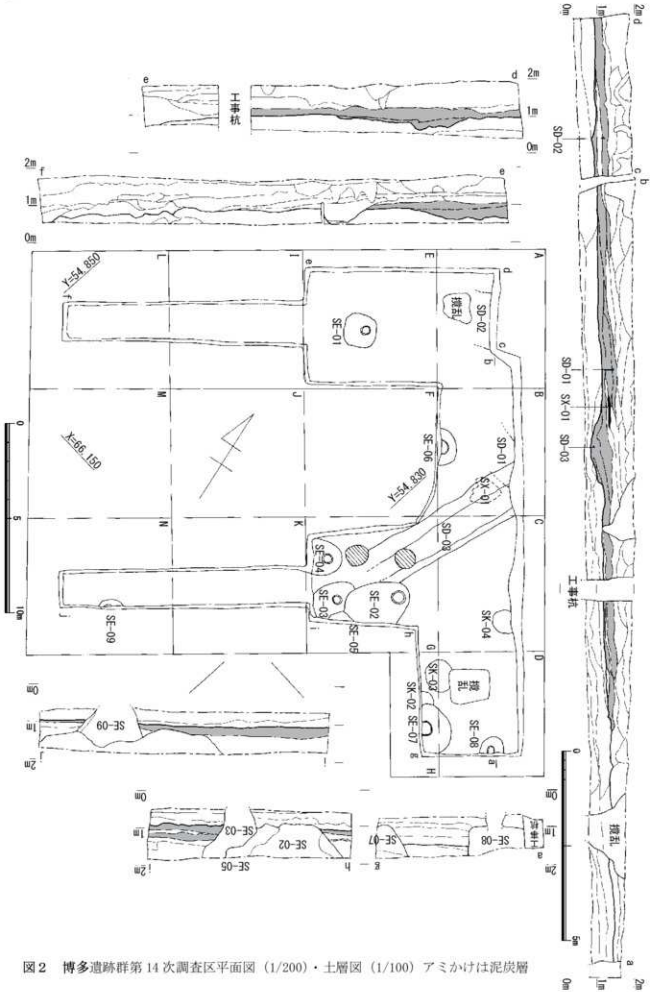


図2　博多遺跡群第14次調査区平面図（1/200）・土層図（1/100）アミかけは泥炭層

て、遺跡の遺存が確認され、同年12月から開始された地下鉄工事に伴う発掘調査で本格的な考古学的メスが入ることとなり、その成果によって広く注目を集めることとなった。当時、遺跡の範囲も明確でなく、調査地点の町名を付し「祇園町遺跡」と呼んでいた（池崎 1978）が、これを機に市街地再開発事業（ビル建設等）についても文化財行政側の対応が必要となり、1980年、市内の文化財分布地図の作成に際し、旧博多部全体が中世都市遺跡「博多遺跡群」と設定された。当時、開発に対する文化財側の事前審査システムは整っておらず、工事着工直前、着工直後に周辺住民からの連絡で開発を知る例が多く、本調査地点もこのような工事着工後という状況の中での対応が迫られた。当時（1981年）、調査事例も地下鉄工事周辺部が殆どで、冷泉公園の東部に隣接する当地、即ち博多の西域周辺部の調査も少なく、遺跡群内における遺跡の広がりと状況を知るためのデータ収集も重要なことであり、ビル建設主体興和新薬（株）、施工業者清水建設（株）と協議の上、6月8日現地立会調査を行った。その結果、地表下約2ｍは近現代撹乱で、その下面に泥炭層を含む良好な包含層が確認され、要調査と判断された。施工側との協議の結果、理解を得て本調査を実施することとなった。但し、既に着工している工事行程に対する影響を最小限にとどめるため、工事と一部並行しつつ発掘調査を実施することとなった。

2．調査の概要（図2）

対象地面積810.8㎡　建設面積607.2㎡　発掘調査面積255㎡

1981年7月10日に博多遺跡群14次調査として発掘調査に着手した。対象地は既に工事用のH鋼杭が設置されており、調査区は工事に伴うH鋼の梁桁を基準としてA～N区の区画を設けた。F・J・M区は工事用車両の進入路として覆甲板が設置され、調査対象とはできず、先ずA～D区・E・G区を調査対象とした。立会調査の情報をもとに、近現代撹乱層と考えられる現地表下約2ｍまでを掘削機によって掘り下げ、以下の調査を実施した。現地の地表面標高が約4ｍ強であり、標高約2ｍ以下の層位の調査となった。その結果、標高1ｍ前後のレベルに広範囲に泥炭層が広がっており（図3）、そのなかに予想を大きく上回る量の陶磁器類をはじめ木質、骨角類などの有機物資料が包含されていた。この泥炭層を持つ層を包含層中層とし、その上に堆積する層（人為的堆積）を包含層上層、泥炭層の下に堆積する砂質層（自然堆積）を包含層下層とし、特に包含層中層は上・中・下に分けて遺物の取り上げを行った。

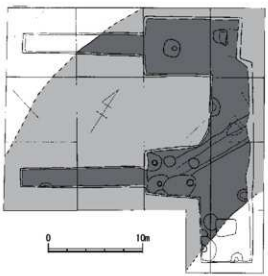


図3　博多遺跡群第14次調査区泥炭層の範囲（1/400）

先ず包含層上層では、当地が居住地として使用されたことを示す井戸遺構が9基検出された。中層泥炭層では上部でA区とB区に遺物の集中部が見られ、当初溝状遺構と把握しSD-01,02の遺構番号を付したが、下面に明確な掘方は見られず、泥炭の自然堆積ブロックの可能性が高い。その下面（包含層中層中）では、白磁の一括廃棄ブロック（SX-01）が検出され、その下部で幅約2ｍ、深さ0.6ｍ程の溝（SD-03）が検出された。その溝の埋没後、廃棄されたものである。この中層の泥炭層内には多量の遺物が包含されているものの、居住域を示す

遺構は認められず、波打ち際及び旧那珂川（博多川）氾濫原の自然堆積層であることは明らかである。この泥炭層の下は自然堆積による砂層であるが若干の遺物も包含され、図22-360のように弥生時代あるいはそれ以前の石器も含まれており、砂丘形成当初の時期を知る資料となっている。A～D区・E.G区の調査は８月３日に一応終了したが、その西側に遺構の広がる可能性は低く、泥炭層の広がり等を確認する目的でI.L区とK.N区に２本のトレンチを設定し、８月10日より土層確認調査を行なった。その結果、この泥炭層は図３のように調査区を斜断するように幅広く堆積しており、当地が博多浜砂丘の北西端部に相当すると考えられ、これらのデータが以後の旧博多浜西岸部の調査に活かされることとなった。

しかしながら調査着手までの経緯等から、報告書作成に予算的、体制的不備があり、地下鉄関係調査、整理の片手間で整理が行われたが40年余報告書未刊のままであった。ただ、その重要性から「貿易陶磁研究No.8」に調査成果の一部を紹介している（池崎・森本　1988）。一部の遺物が重要文化財に指定されたり、博物館等で展示されたりしているものの、ほとんどの資料は埋蔵文化財センターでの仮収蔵状態であった。今回、隣接する221次調査の報告書作成に際し、関連する調査地点として収録されることとなり、機会を作っていただいた関係者の方々に謝意を表します。

３．遺構・出土遺物

SX-01（図版１－１～３　図４～６）

本調査地点では、上層から掘り込まれた井戸を除いて遺構の密度は薄かった。その中でもB区の包含層中層中泥炭層（標高約1.2m）で検出した白磁の一括廃棄ブロック（SX-01）は特筆すべき発見であった。1.5×1.5mほどの範囲に、白磁碗を主とした破片が堆積していたのである。それまでの調査で、生活什器として使用されたと思われる陶磁器が、一つの土壙などからまとまって出土する例はあったが、器種の限られた磁器破片が水際の泥炭層部分に一括廃棄されたものとしては初例であった。その状況は砂丘西端部の居住区域と水際との境界付近であることから船着場、或いは中国商人居住区の倉庫近辺と想定され、日宋貿易の隆盛を知る例として注目された。惜しむらくは、工事工程との時間的調整が困難で、詳細な実測図をとる時間的余裕がなく、写真撮影だけの記録で遺物取り上げを行わざるを得なかった。以後、報告書は未刊であったが、この出土状況写真は中世博多の日宋貿易の具体例を示すものとして博多遺跡群に関する諸刊行物に掲載、紹介されている。

出土遺物には完形品は含まれておらず、全てが破片であり、使用された痕跡もなく、また二次的な被熱も受けていない。器種も白磁碗Ⅱ類（図４）、Ⅳ類（図５）、V類（図６）、白磁平底皿Ⅱ類（図６、47～49）と単純で、その破片数は碗Ⅱ類　1206点、Ⅳ類　153点、V類　77点、平底皿類　196点である（表３参照）。この他若干の陶器破片もみられるが混入したものであろう。この中には土師皿等は見られず、また、外底に墨書のある例も見られない。

これらの状況からこの白磁群は一括商品であり、船による搬送時或いは倉庫保管時のアクシデントで破砕し、商品価値を失った物を廃棄処分したものであろう。このような状況は決して特異なものではなく、近隣の港湾周辺部でもこのような状況が想定され、近年の調査でも同様の出土状況が見られるようになった。

時期は後述する泥炭層中層中も含め11世紀後半～12世紀初頭に位置づけられる。

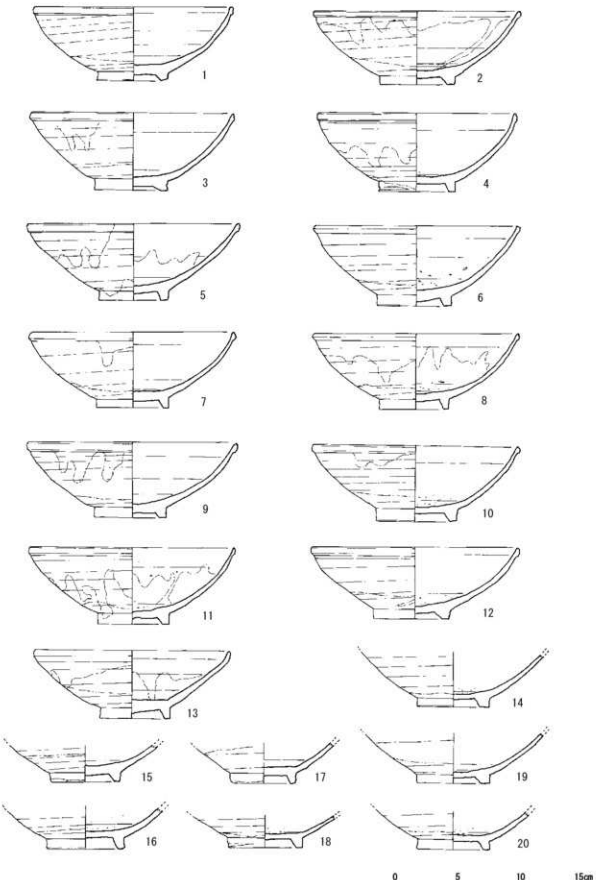


図4　博多遺跡群第14次調査区 SX01 出土遺物1 (1/3)

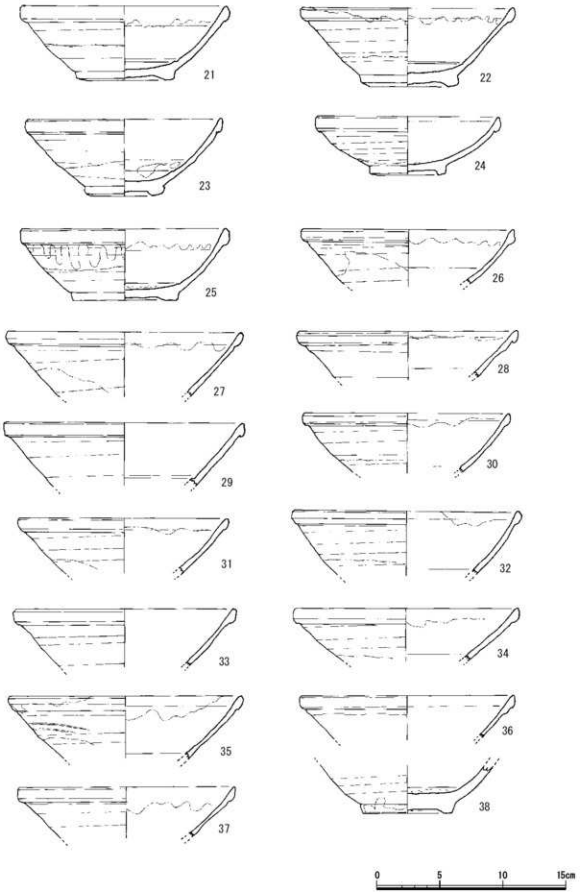


図5　博多遺跡群第14次調査区 SX01 出土遺物2 (1/3)

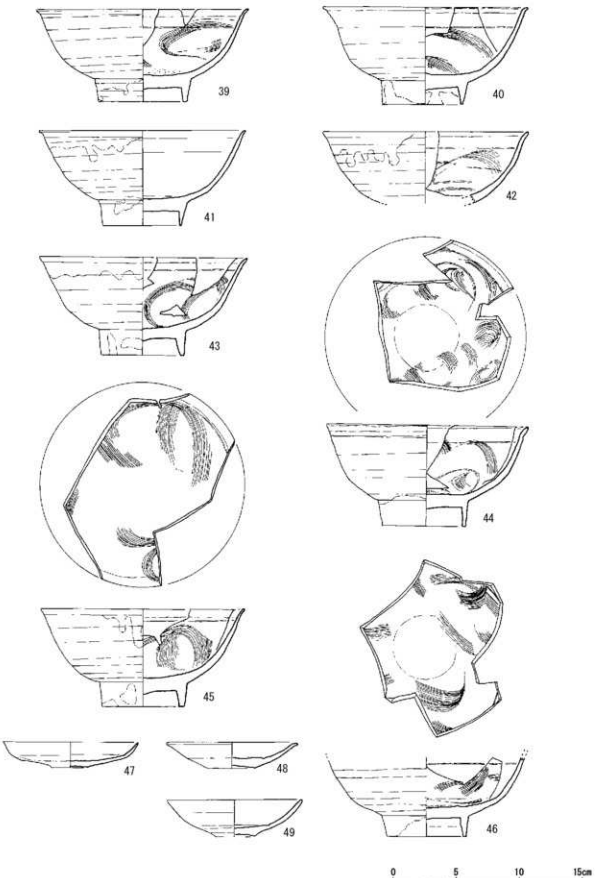


図6　博多遺跡群第14次調査区 SX01 出土遺物3 (1/3)

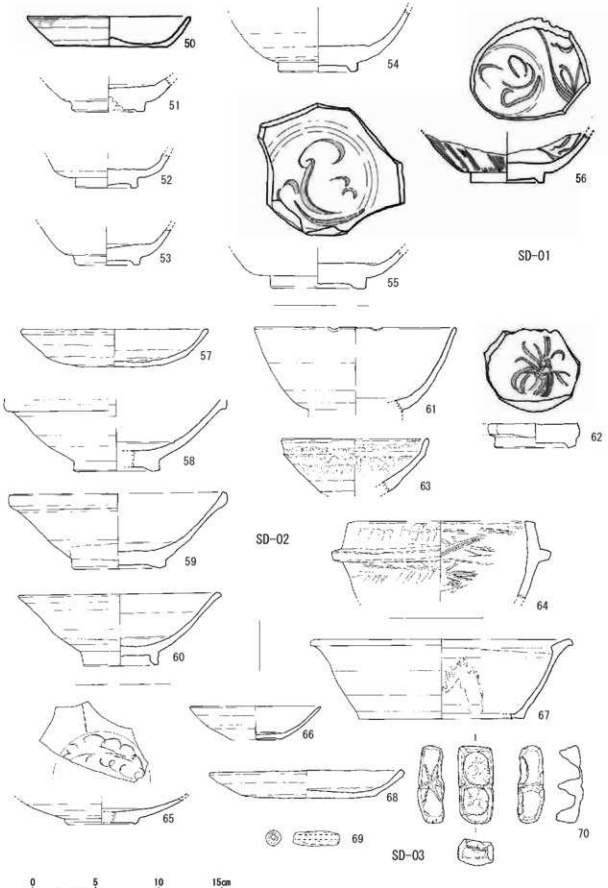


図 7　博多遺跡群第 14 次調査区 SD01・02・03 出土遺物（1/3）

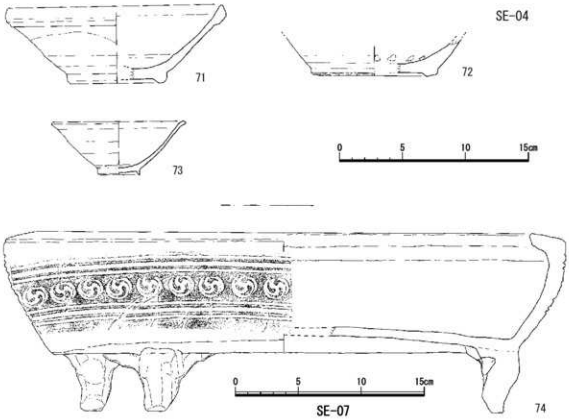


図 8　博多遺跡群第 14 次調査区 SE04・07 出土遺物（1/3）

SD-01（図７　50～56）

B区包含層中層上の泥炭層最上面で検出したが、遺物がややまとまって出土したものの、下面に掘方は確認できず、泥炭層の広がりの一部を溝と誤認したものと思われる。50は糸切底の土師器灯明皿、51～56は龍泉窯系の青磁碗である。

SD-02（図７　57～64）

A区包含層中層上の泥炭層最上面で検出したが、SD-01同様に下面に掘方は確認できず、泥炭層の広がりの一部を溝と誤認したものと思われる。57は回転ヘラ削り土師皿、58・59はⅣ類白磁碗、60はⅥ類白磁碗である。61は龍泉窯系青磁碗で、口縁部にヘラ削り込みがあり輪花をなす。62は龍泉窯系青磁碗底部で、内底にヘラ描き花文を施し、体部を打ち欠く円盤状加工品である。63は天目碗で、赤濁した釉が見られる。64は滑石製石鍋である。

SD-03（図版１－５　図７　65～70）

B･C区からG区にかけて検出された。泥炭層堆積前に掘り込まれた溝である。幅約2.5m、深さ0.4mほどの浅い皿状の断面である。北から南に向け緩やかに傾斜する。泥炭層の堆積に伴い機能は失われる。65･66は白磁皿、67は陶器盤である。68は底部回転ヘラ削りの土師皿、69は土錘である。70は滑石製品で、長軸を削りによって二つに区画し、同一面にそれぞれ窪みを設け、側面の片側に星様の文様がけずりこまれている。用途不明。

SD-01・02は泥炭層最上面で検出したものであり、出土遺物には包含層上層の遺物の混在の可能性がある。

本調査地点では９基の井戸が確認されているが、いずれも当地が居住地化された後に上層から掘り込まれたもので、出土遺物には時期的な混在が大きく、今回は一部についてのみ紹介する。

SE－04（図８　71～73）

G区検出の井戸で井戸枠は木桶組である。71は白磁碗Ⅳ類、72は内底と高台畳付に重ね焼き痕が残るやや粗製の越州窯系青磁碗で、73はⅤ類の白磁小碗である。

SE－07（図８　74）

H区検出の井戸で井戸枠は木桶組である。図示した74は瓦質土器火舎で、復元径44.3㎝の大型である。外面体部に３条の沈線で文様帯を作り、そこに三つ巴の文様を施す。

４．遺構外（包含層）出土遺物

先述したように本調査地点では広範囲に広がる泥炭層を一つの基準とし、泥炭層の上に埋め立て造成した層を包含層上層、泥炭層を包含層中層、その下面の自然堆積砂層包含層下層とし、特に中層は上・中・下に区分して遺物の取り上げを行った。出土遺物の量は多く、その一部しか掲載できないことをお断りしておきたい

包含層上層　（図９～11　75～135）

この層の出土遺物には、井戸掘方などの影響で下層から掘り出された遺物の混在が多くみられる。

75～92はいずれも白磁で、75～82・86が碗、83・84は小碗、85・89～91は皿、92は磁州窯系白地鉄絵の坏托小破片である（図版2-13）。77・82・83・84・86・88・91には外底に墨書が残る。93～97・99・100は青磁で、93・94は耀州窯系の碗、95は越州窯系の皿、96は龍泉窯系の碗で外底に「上」の墨書がある。100は初期高麗青磁の平底皿で、内底に印花文を施す。98・101～107は青白磁で、98・103が蓋、101は灯火具、102・104が合子身、105が小壷肩部、106が鉢、107は小壷の口頸部である。108・109は天目碗である。110～113は陶器で、110が四耳壷、111が水注、112が燭台、113が小型の円盤状加工品である。114は白磁の大型鉢である。以上が舶来遺物である。

115は玄武岩礫を球状に加工したものである。116～131（121・122欠番）は土師器皿で、116～126の小皿の大半は糸切底で、124～126がヘラ切底である。127～131の皿・坏も大半は糸切底で、130がヘラ切底である。131の外底に墨書痕跡が見られるが判読はできない。132～135は高台付き碗で、135は高台縁辺を打ち欠いた円盤状加工品である。

包含層中層上　（図12～14　136～199）

泥炭層上層部分に当たる。包含層上層と接しているため一部上層遺物の混入や、遺物取り上げ時に層位の判断が優柔であった可能性もある。

136～150は白磁碗である（144欠番）。136～143はⅡ類、145はⅣ類、146はⅨ類、147～150はⅥ類に分類される。外底に墨書の残るものも多く、143は「郷」という姓、142・148・149には花押が見られる。151～159は白磁皿で、160は白磁小壷の蓋である。151・158・159には外底に花押と見られる墨書がある。161～167は青磁で、162は龍泉窯系小碗、163は同安窯系碗、164・165は耀州窯青磁碗である。167は龍泉窯系皿である。168～175は青白磁である。168は外面にヘラ切り蓮弁文を施した碗である。169は小碗の底部で、内底に草花文の浮文を施す。170は細い高台の薄手の碗で、171は内底に片切彫文を施した皿である。172～174は合子の蓋と身で、173の外底露胎部には「合子記」の陽印刻が見られる。175は小壷蓋で、176は白磁小壷の身である。177～181は天目碗であるが、180

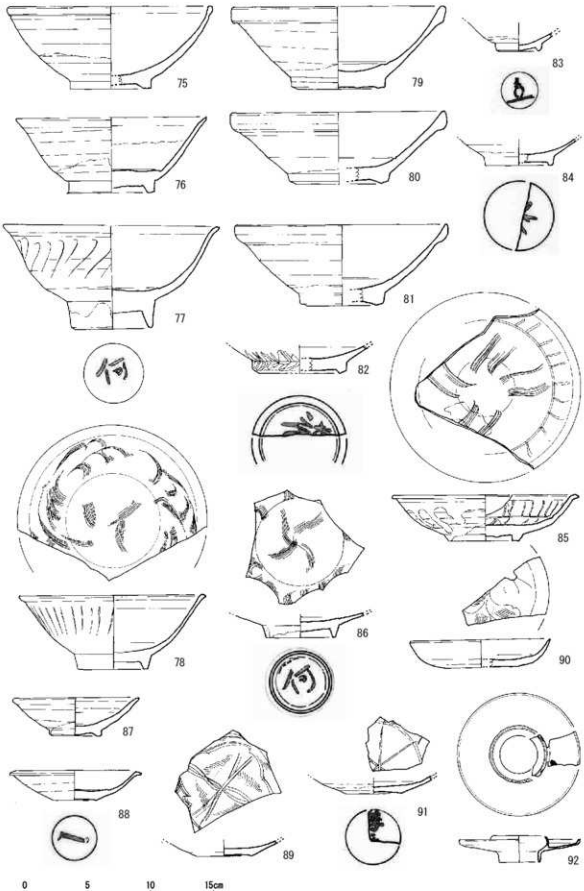


図 9　博多遺跡群第 14 次調査区包含層上層出土遺物 1 （1/3）

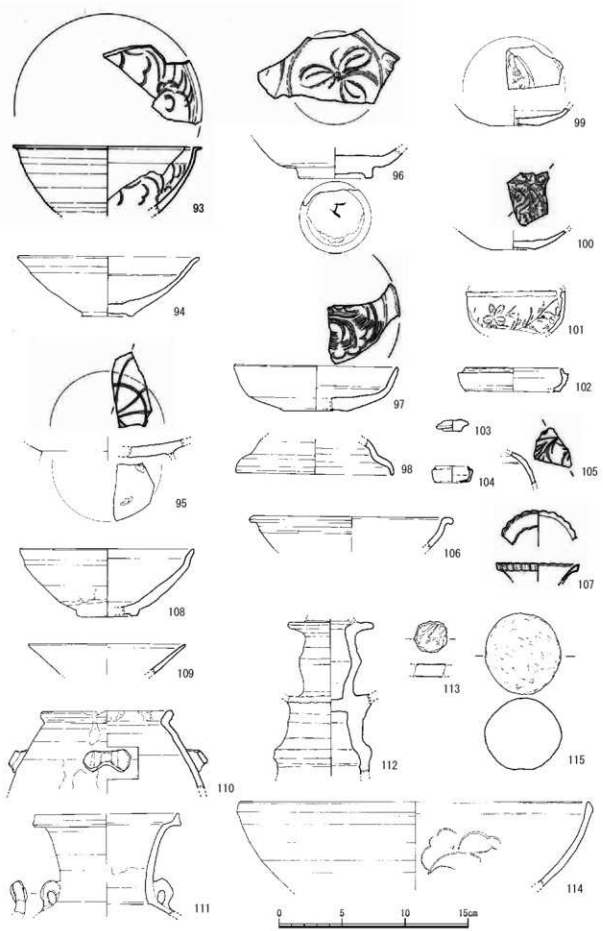


図 10　博多遺跡群第 14 次調査区包含層上層出土遺物２（1/3）

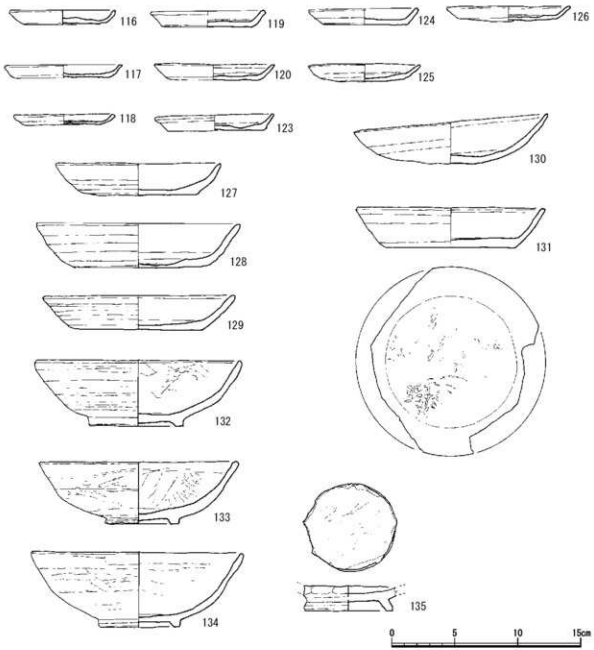


図 11　博多遺跡群第 14 次調査区包含層上層出土遺物 3 (1/3)

は黒釉の表面が完全に茶色に覆われた柿釉天目である。182は緑釉陶器で、陶枕破片と思われる。183～189は陶器である。183は頸部のない大型の四耳壺である。184は四耳壺上半部で、185はそれと同形の壺底部であろう。186は薄胎の小口瓶の下半と思われる。187・188は盤である。189は陶製円盤で、ハマとして使用された可能性が強い。製品に紛れて持ち込まれたものであろう。以上が舶来遺物である。

190～196は土師皿で、196を除き糸切底である。196はヘラ切底で、底部に一ヶ所穿孔が施してある。197・198は土錘である。199は滑石製品破片で、平坦面の片側に3カ所の窪みが彫り込まれている。

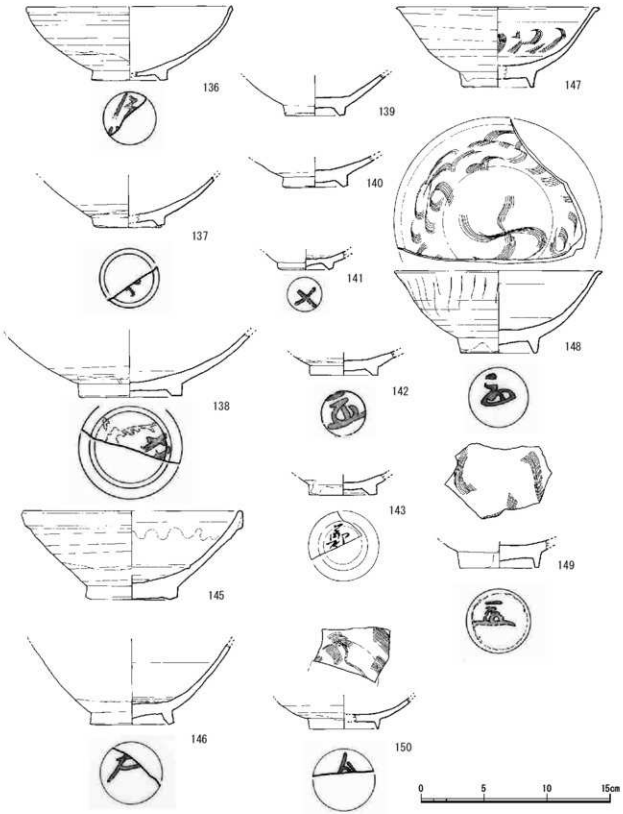


図 12　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層上出土遺物 1 （1/3）

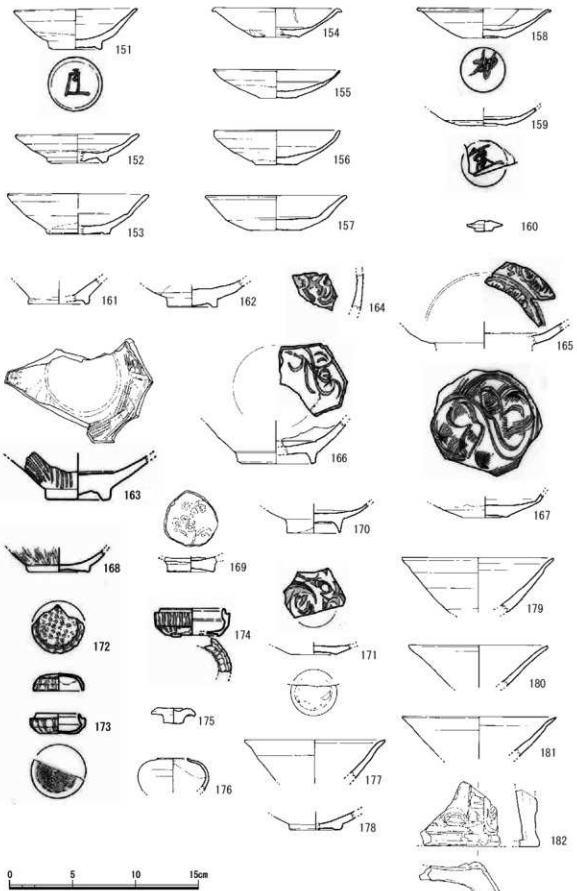


図 13　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層上出土遺物 2 （1/3）

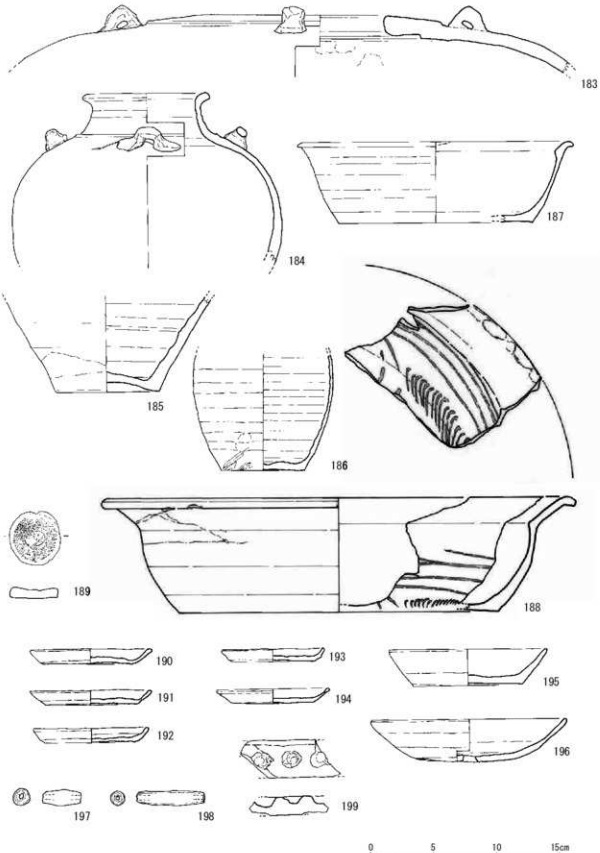


図 14　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層上出土遺物 3 (1/3)

包含層中層中　(図15～19　200～305)

泥炭層の中層部分に当たり、ここでは多量の遺物が出土している。包含層上層と接していないため上層遺物の混入が比較的少ない。おなじ泥炭層の中層部分で検出された白磁一括廃棄遺構SX-01と形成時期はほぼ同時期である。SX-01の遺物は一括廃棄された後、流水などの影響を受けずにそのままで残ったと思われるが、単発で少量ずつ廃棄されたものは泥炭層の形成時に散乱していったものと思われる。また、出土遺物の種類もSX-01の遺物に類似する。

200～249・251～259は白磁で、200～215は碗Ⅱ類、216～230は碗Ⅳ類、231・232・234・235は碗Ⅴ類、233はⅥ類、236～240は小碗である。239・240には外底に花押と思われる墨書が残る。241は鉢、242～248は平皿、249・251～253は高台付き皿、254～257は外底に墨書がある皿で、255は「何」、他は花押かと思われる。258は壷口縁部、259は小杯である。250は初期高麗、青磁碗である。260は緑褐釉磁器の小壷口縁部である。261～263は青白磁合子である。263は内底に小さな杯状の器を貼り付け、外底露胎部には「汪家合子記」の陽印刻がある（図版2-15）。265～269は天目碗である。270は越州窯系青磁の壷胴部破片である（図版2-11）。271～288は陶器である。271・272は茶釉の四耳大壷である。273は横耳の付く四耳壷、274は同形の底部とみられる。275～277は褐釉短頸壷上半と下半である。278は皿で、279～285は黄釉盤である。280は内面に釉下鉄彩が見られる。281～285は黄釉盤の口縁部破片で、そのバリエーションを示す。286は褐釉陶器盤の底部で、内底に草花文の印文を施す（図版3-18）。287・288は粗胎の捏鉢である。以上が舶来遺物である。

289～302は土師器皿と坏である。289～291と291・299は糸切底、292～297と300～302はヘラ切底で両者が混在する。また、297は炭化物が付着しており灯明皿として使用されている。303・305は石製品で、303は打痕、磨痕が残り、蔵き石，磨り石として使用されたものであり、304は小型の磨り石である。305は瓦破片をサイコロ状に二次加工をしたものである。

包含層中層下　(図20　306～333)

泥炭層の下層部分に当たる。ここでも多数の遺物が出土しているが、その量は中層中にははるかに及ばない。

306～311は土師器皿で306～308は糸切底、309・310はヘラ切底で両者が混在する。311は外底ヘラ削り調整の丸底大皿である。312～319・321・323は白磁で、312・313は碗、314～318・323は皿、319は鉢、321は合子身である。318の外底に判読できないが墨書があり、319の外底にも不明瞭であるが墨痕が残る。320・322は青白磁合子蓋である。324は上質精良な耀州窯系青磁鉢で、オリーブ色透明釉が施釉され、内面にヘラと櫛描きの花弁文が施されて外面体部には縦方向のヘラ彫文がある。接合しないが図28-474と同一個体か。325～328は天目碗で、328の外底部には花押と思われる墨書がある。329は磁州窯系白地鉄絵瓶の頸部破片である（図版2-16）。330は陶器四耳壷、331は精良胎の硬質の陶器で、注口と把手を各一ヶ所に持つ雪平鍋形である。332は長沙窯系水注の胴部破片である。333は石鍋破片を二次加工した滑石製品で、一部に穿孔がある。

包含層下層　(図21　334～349)

泥炭層が堆積する以前の、砂質の堆積層である。遺物量は上部層に比較するとはるかに少ない。

334はヘラ切底の土師器皿である。335は糸切底の瓦器坏で、口縁部と内底にタール状付着物が見られ、灯明用に使用されたものである。336～342は白磁碗で、342の外底に墨書があるが小破片のため判読できない。343は白磁皿で外底に墨書があるが小破片のため判読できない。344は白磁小碗である。345・346は越州窯系青磁碗で、345はやや粗質で内外底に重ね焼きの目跡が残る。347は初期高麗青磁碗で内外底に重ね焼きの目跡が残る。以上が舶来遺物である。

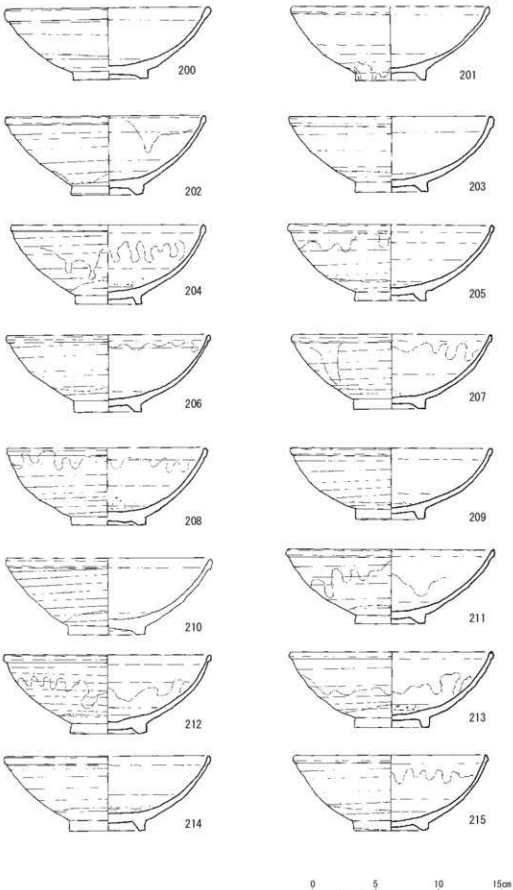


図 15　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層中出土遺物 1 （1/3）

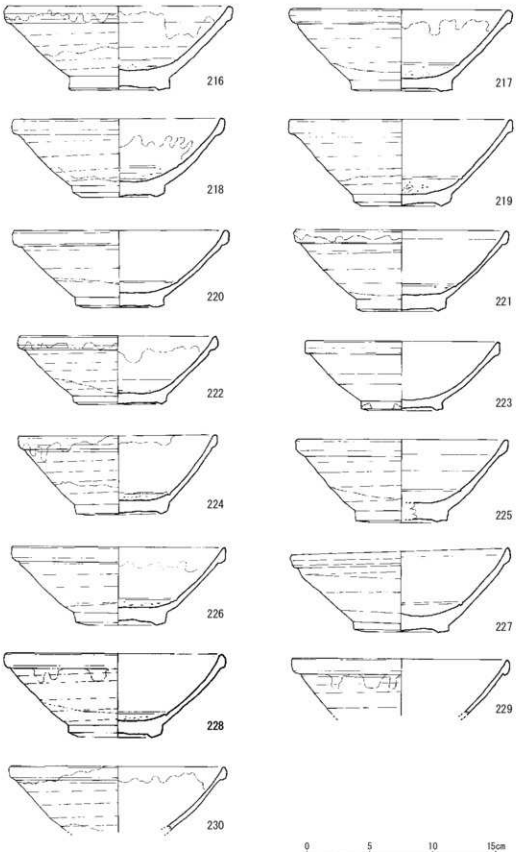


図 16　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層中出土遺物 2 (1/3)

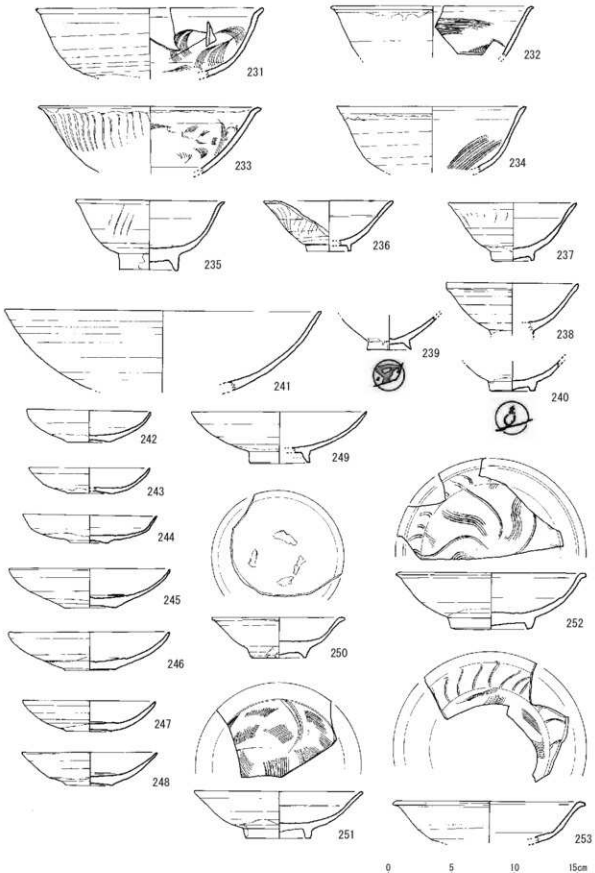


図 17　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層中出土遺物 3 （1/3）

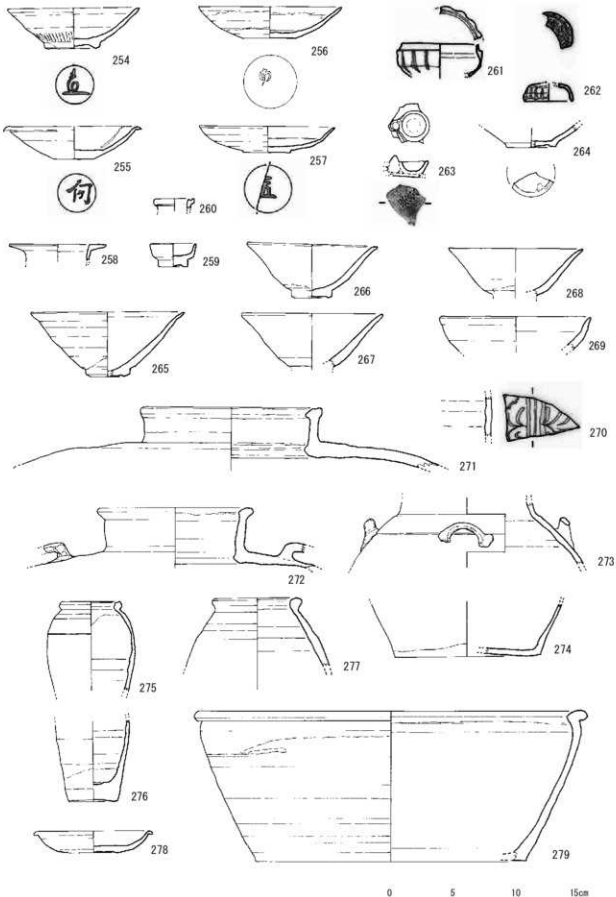


図 18　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層中出土遺物 4 （1/3）

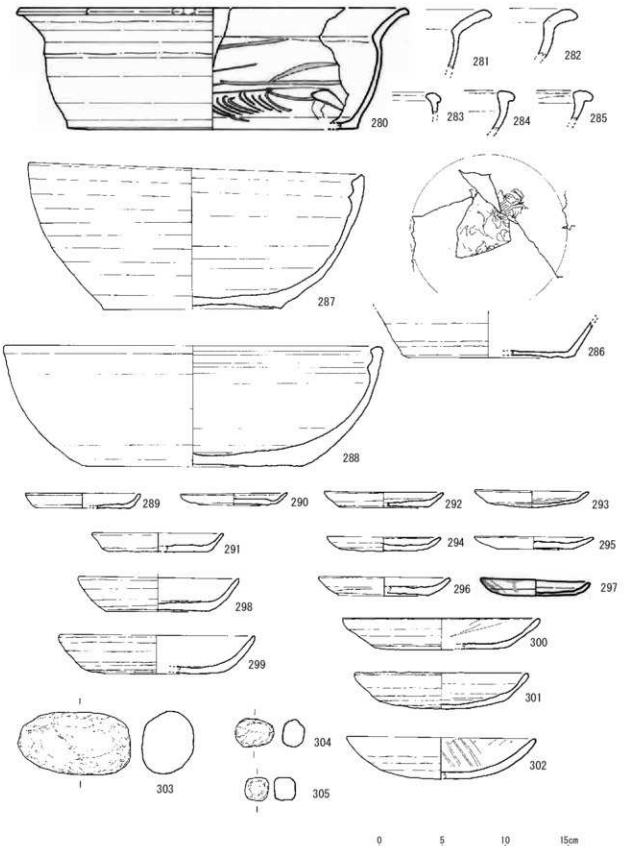


図 19　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層中出土遺物 5 (1/3)

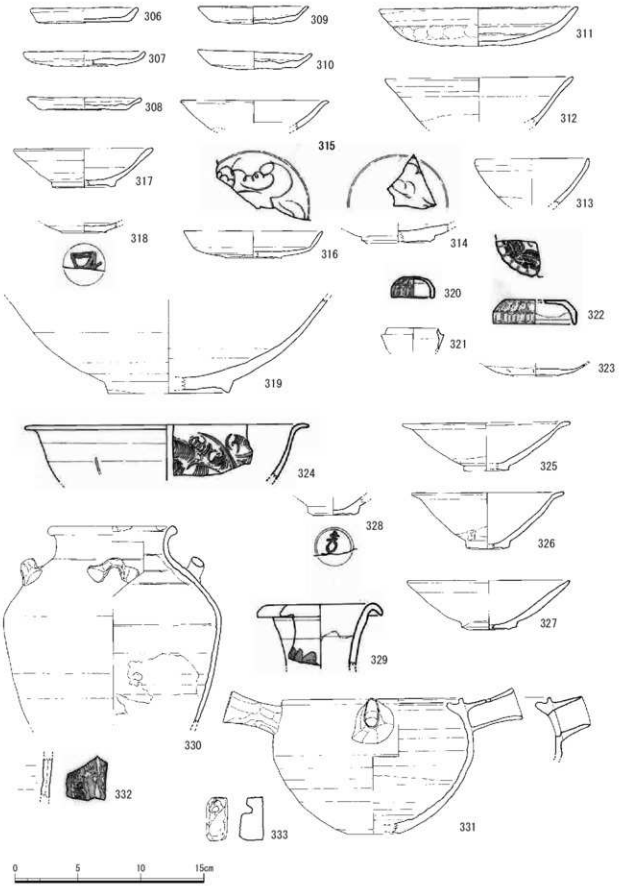


図 20　博多遺跡群第 14 次調査区包含層中層下出土遺物（1/3）

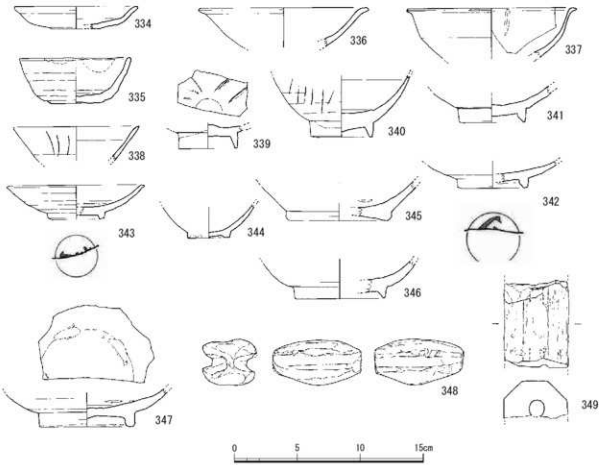


図 21　博多遺跡群第 14 次調査区包含層下層出土遺物（1/3）

348は両側面に溝を作った土錘である。349は土製品で、四角柱の角を面取りした八角形の断面で芯の部分に空間を作った管状である。焼成良好で硬質であることから、鞴の羽口の一部であろう。

5．別途紹介遺物（図22　350～360）

14次調査の出土遺物の中には、稀少で国内ではまだ知られていなかったものもあり、中国の研究者の訪問時の指摘で、新しい知見を得ることも多かった。ここでは特殊なものとしてこの項で紹介する。

350はB区包含層中層下で出土した人物騎馬像である（図版2-7）。体長5.1cm、高さ4.4cmを測る。頭部をやや右に傾けた馬に、乗った人物が左手で馬の首に触れている。胎土はやや茶色味をおびた灰色で、焼成は良好で堅緻、馬の脚部と腹部を除いた上半に暗茶褐色釉が掛けられている。両耳端部が欠損している。中国の研究者の教示によると山西省臨汾・龍祠窯の産ということである。2017年に重要文化財に指定された。351はK区土層確認トレンチで出土した精良磁胎の薄手の柿釉碗の口縁部破片である（図版2-9）。352も同様の精良磁胎の薄手の碗口縁部の破片で、こちらの釉は黒釉である（図版2-10）。いずれも磁州窯系の仿定製品の可能性も指摘されている。C区包含層上層の出土である。353はC区包含層上層出土の土製鋳型で、中世博多の金属生産を知るうえで重要な資料である。354はG区包含層中層中泥炭層出土の白磁碗小片で、福建省閩清義窯産とされる。内外面に線描き文

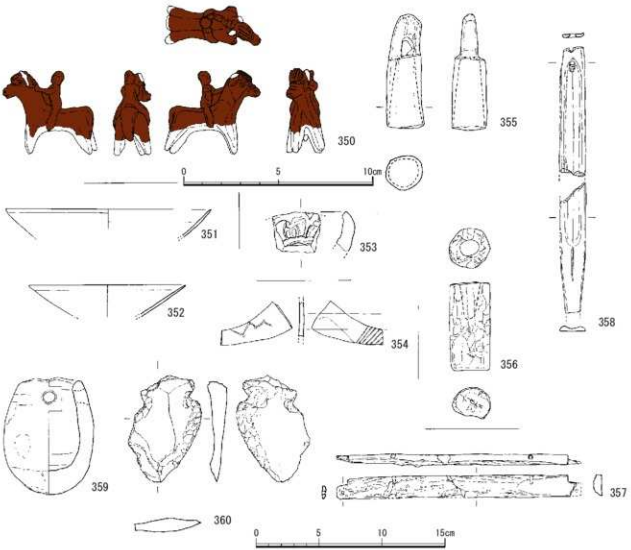


図 22　博多遺跡群第 14 次調査区別途紹介遺物
(350・353・355・356・368　1/2) (351・352・354・357・359・366　1/3)

様があり、特に内面を北斗七星と見る説がある（図版2-14）。355はE区包含層中層中出土の鹿角製の弓筈である（図版2-8）。350と共に重要文化財に指定された。356はB区包含層中層中出土の鹿角製品で、外面を削って円柱状に整形し、芯部の約半分まで穿孔がされている。刃物等の柄であろう。357はA区SD-02出土の鹿角製品で、板状に薄く成形し、両端に突起部分を作り穿孔がある。また片側側面に２カ所の穿孔があり、おそらくは箱等の組み合わせ式の外装材であろう。358は笄と思われる鹿角製品で、上半部と下半部の破片である。出土位置は上半がSD-02、下半がSD-01で接合はしないが、形状から同一個体の可能性がある。上下面を丁寧に研磨し、上面を浅い溝状に削り込み、上端に２カ所の穿孔を施す。359はA区包含層中層中出土の土製品、イイダコ壷の完形品である。分厚い胎であるが焼成良好、硬質である。時期は明確にしがたいが中世初頭であろうか。他に漁網用土錘も多くみられ、往時の沿岸部の生活を知るうえで重要な資料である。360はK.N区トレンチの泥炭層の下の自然堆積による砂層（包含層下層）出土のサヌカイト製スクレイパーである。剝片の上部２カ所に抉り加工を加え、一側面に上下からの丁寧な剥離を加え両刃の刃部を作っている。明確な時期は把握できないが、少なくとも弥生時代以前の遺物であろう。博多浜砂丘の形成時期を知るうえで重要な資料であろう。

6．墨書陶磁器（図版２−20～22　図23～26　表１）

博多遺跡群では、これまでの発掘調査で相当数の墨書陶磁器が出土しており各報告書に掲載されているが、博多研究会ではそれらを集成し「博多遺跡群出土墨書資料集成1996」、「博多遺跡群出土墨書資料集成２　2003（博多研究会誌第11号）」等で紹介している。14次調査でも100点に近い墨書陶磁器が出土しているが未報告であったためにこの資料集成には掲載はされてない。今回墨痕は残るものの不明瞭なものを除き87点を表・図に示す。全体の陶磁器の傾向と同じく、白磁碗・皿が大半を占め、青磁・陶器は微量である。また、墨書も「綱司」や「九綱」等「綱」銘を持つもの、「李」・「張」・「楊」・「鄭」などの姓や名、「十」・「一」などの数字、花押或いはくずし字で判読できないものなどがある。また、高台内に墨書される例がほとんどのために、円盤状加工品となっている例も多い。

表１　墨書陶磁器一覧

番号	地点	層位	遺構	種類	器形	墨書銘	備考	
図23 361	G区	中層下	SD-03	白磁	碗Ⅳ類	綱司	円盤状加工品	
362	K区	南側トレンチ		白磁	碗Ⅳ類	綱司		
363	参考資料			白磁	碗	九綱	地下鉄関係調査出土資料	
364	C区	中層		白磁	碗	九綱？		
365	E区	北側セクション		白磁	碗	王□	円盤状加工品	
366	G区	上層下		白磁	皿	李□		図９ 91
367	L区	上層		白磁	碗	陳？		
368	G区	中層中	SD-03 上面	白磁	碗	趙の一部？		
369	B区	中層中　泥炭層		陶器	壺 or 水注	毛	潮州窯系	
370	B区	土層確認トレンチ		白磁	碗	周？□		
371	G区	中層下	SD-03	白磁	碗Ⅴ類	楊工		
372	E区	上層		白磁	碗Ⅴ類	何	(綱の略字体？)	図９ 77
373	G区	南側セクション		白磁	碗	何	円盤状加工品	
374	B区	中層下		白磁	皿	何		
375	E区	上層		白磁	碗	何		図９ 86
376	A区	中層中　泥炭層		白磁	皿	何		
377	B区	中層中　泥炭層		白磁	皿	何？		
378	A区	中層中　泥炭層		白磁	皿	何		
379		排土		白磁	碗	盧？	円盤状加工品	
380	B区	中層中　泥炭層		白磁	碗Ⅱ類	鄭＋花押		
381	E区	中層上		白磁	碗Ⅱ類	鄭		図 12 143
382	G区	中層上		白磁	碗Ⅴ類	鄭＋花押？		
383	B区	上層下		白磁	碗Ⅱ類	張□		
384	E区	上層中		陶器	壺	唐？		
図24 385	I区	上層		白磁	碗Ⅴ類	上		
386	E区	上層下		青磁	碗	上	龍泉窯系	図 10 96
387	B区	土層確認トレンチ		白磁	皿	上		
388	A区	中層上	SD-02	白磁	皿	大		
389	B区	土層確認トレンチ		白磁	碗	大四		
390	E区	土層確認トレンチ		白磁	碗Ⅳ類	十		図 28 390
391	D区	中層		白磁	碗Ⅷ類	十		
392	E区	中層上		白磁	碗	十		図 12 141
393	E区	中層上		白磁	碗Ⅱ類	?		図 12 140
394	E区	上層中		白磁	皿Ⅳ類	一		図９ 88
395	B区	中層中		白磁	碗Ⅵ類	船？□		
396	C区	中層中　泥炭層		白磁	皿	?		
397	E区	上層中		白磁	碗Ⅳ類	?		

398	C区	土層確認トレンチ		白磁	碗	犬□	円盤状加工品	図 9 82
399	K区	上層		白磁	皿	花押？		
400	K区	南側トレンチ		白磁	碗Ⅴ類	？	円盤状加工品	
401	A区	中層上	SD-02	白磁	皿	江□		
402	L区	北側トレンチ		白磁	碗Ⅱ類	？		
403	B区	中層上　泥炭層		白磁	碗Ⅴ類	？		
404	A区	土層確認トレンチ		白磁	皿Ⅲ類	唐？		
405	G区	中層		白磁	碗Ⅴ類	？		
406	C区	中層中		白磁	皿Ⅴ類	？		図 18 256
407	A区	中層上	SD-02	白磁	皿Ⅳ類	花押？		
408	C区	中層中		白磁	皿Ⅴ類	花押？		
409	E区	中層上　泥炭層		白磁	皿	花押？		図 13 159
図 25 410	E区	中層上　泥炭層		白磁	碗Ⅴ類	花押		図 12 148
411	E区	中層上		白磁	碗Ⅴ類	花押		図 12 149
412	E区	中層上		白磁	碗Ⅱ類	花押		図 12 142
413	C区	中層中		白磁	皿Ⅵ類	花押？		図 18 257
414	G区	中層上		白磁	碗Ⅴ類	花押		
415	G区	中層下		陶器	天目碗	花押		図 20 328
416	排土			白磁	皿Ⅵ類	花押		
417	E区	中層上		白磁	皿Ⅲ類	花押		
418	G区	上層下		白磁	小碗	花押		
419	G区	中層中		白磁	小碗	花押		図 17 240
420	B区	中層中		白磁	碗Ⅴ類	花押		図 17 235
421	G区	中層上　泥炭層		白磁	皿Ⅱ類	花押		
422	B区	中層下	SD-03	白磁	皿Ⅳ類	花押		
423	B区	中層中		白磁	小碗	花押		
424	B区	中層中　泥炭層		白磁	皿Ⅲ類	花押		図 18 254
425	L区	上層		青磁	碗	花押	龍泉窯系	
426	排土			白磁	皿Ⅱ類	花押		
427	G区	上層下		白磁	皿	花押		図 9 90
428	E区	北側トレンチ		白磁	碗Ⅱ類	花押		
429	G区		SE-02 堀方	白磁	皿	花押？		
430	G区	中層中　泥炭層		白磁	小碗	花押		図 17 239
431	C区	中層中		白磁	碗Ⅴ類	花押		
432	G区	中層下		白磁	皿	花押		図 20 318
図 26 433	E区	中層上		白磁	大碗	花押？		図 12 138
434	B区	中層中		白磁	碗Ⅳ類	花押		
435	G区	中層上		白磁	碗	？	円盤状加工品	
436	B区	中層　泥炭層		白磁	碗Ⅳ類	花押？		
437	L区	北側トレンチ		白磁	碗Ⅴ類	？		
438	B区	中層中　泥炭層		白磁	皿	花押？		
439	B区	中層中　泥炭層		陶器	壺 or 水注	花押	磁竈窯系	
440	G区	中層中	SD-03 上面	白磁	碗Ⅳ類	？	高台上部外面に墨書	
441	C区	上層		白磁	皿	花押？		図 9 85
442	試掘			青磁	皿	？	龍泉窯系　側面二次加工	
443	E区	中層上		白磁	皿Ⅳ類	花押		図 13 158
444	M区	上層		白磁	皿Ⅲ類	？		
445	B区	中層中　泥炭層		白磁	皿Ⅵ類	？	呪符？	
446	A区	土層確認トレンチ		陶器	盤	？	広東産（奇石窯）	
447		中層下		陶器	盤	？	広東産（奇石窯）	

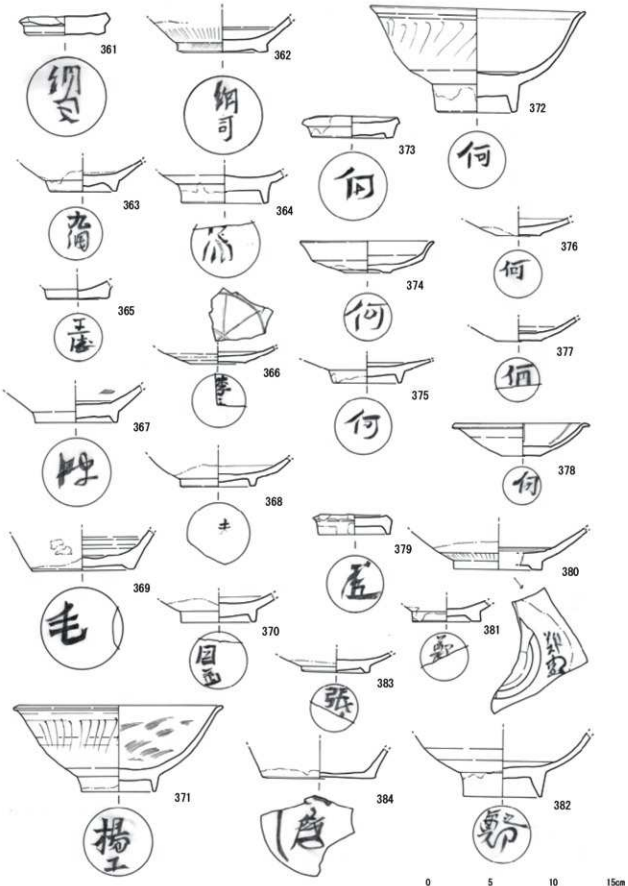


図 23　博多遺跡群第 14 次調査区墨書陶磁器 1（1/3）

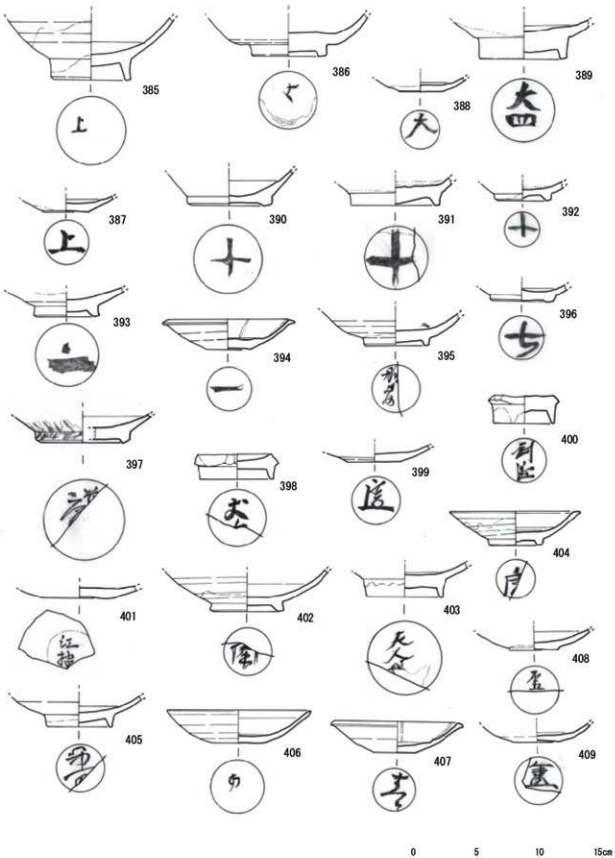


図 24　博多遺跡群第 14 次調査区墨書陶磁器 2（1/3）

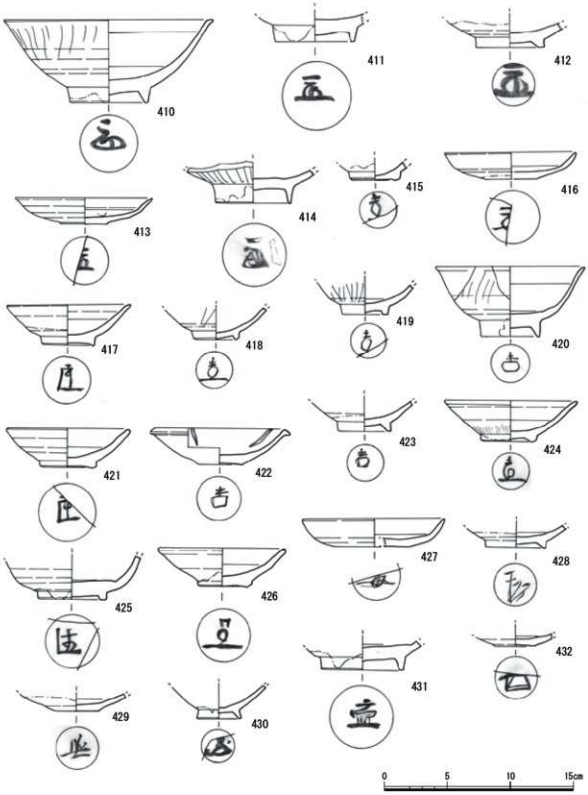


図 25　博多遺跡群第 14 次調査区墨書陶磁器 3（1/3）

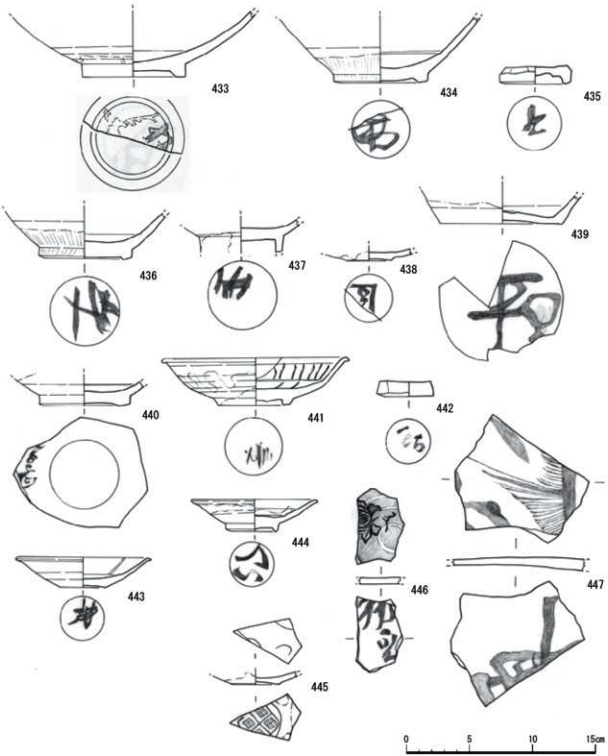


図 26　博多遺跡群第 14 次調査区墨書陶磁器 4（1/3）

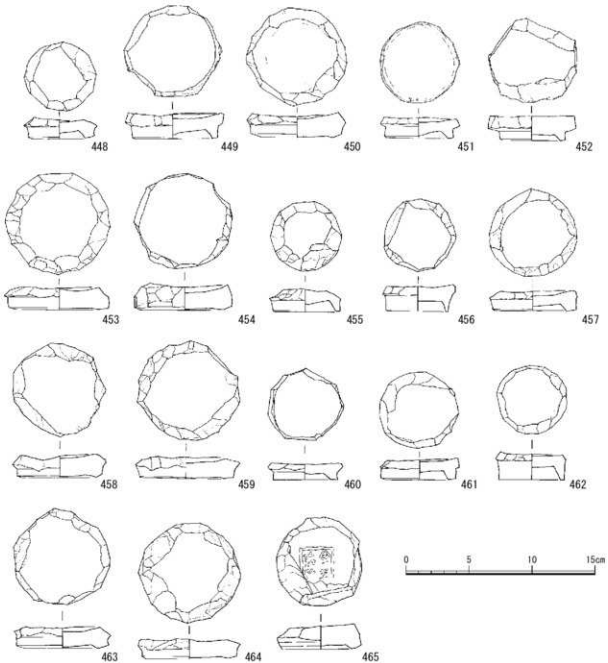


図 27　博多遺跡群第 14 次調査区円盤状加工品（1/3）

7．円盤状加工品（図27　表２）

磁器碗の体部高台直上を、高台を意識して打割することによって、整った円盤状に成形したものである。遺跡群内の調査ではどの地点でも出土しているが、中でも道路遺構が検出された35次調査（「博多47　福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集1995　付編」）では655㎡の調査面積で、瓦を円盤状に加工したものも含め533点が出土している。そのうち約2/3が道路部から出土しており、石蹴り等の遊具として使用されたものと想定し、磁器・瓦製全体を「瓦玉」と称している。磁器の円盤状加工品を「瓦玉」と称することには違和感がある。また、通常生活面ではなかったと思われる14次調査でも、量こそ多くないがまとまって出土しており、その製作の目的、用途の再検討も必要ではないか。

表２　円盤状加工品一覧

番号	地点	層位	遺構	種類	器形	備考
図 27 448	E区	上層下		白磁	碗	
449	D区	上層下		白磁	碗	
450	E区	中層上		白磁	碗	
451	B区	中層上		白磁	碗	
452	E区	中層上		青磁	碗	龍泉窯系
453	B区	中層泥炭層		白磁	碗	
454	B区	中層中泥炭層		白磁	碗	
455	B区	中層中泥炭層		白磁	碗	
456	C区	中層中		白磁	碗	
457	C区	中層中泥炭層		白磁	碗	
458	B区	中層下		白磁	碗	
459	B区	中層下		白磁	碗	
460	G区	中層下		白磁	碗	
461	G区	中層下		白磁	碗	
462	B区	土層確認トレンチ		白磁	碗	
463		試掘		白磁	碗	
464		試掘		白磁	碗	
465		試掘		青磁	碗	龍泉窯系　見込み「金玉滿堂」押印
図 7　62	A区	中層上	SD-02	青磁	碗	龍泉窯系
図 11 135	B区	上層		黒色土器	碗	
図 13 169	B区	中層上		青白磁	小碗	
図 23 361	G区	中層下	SD-03	白磁	碗Ⅳ類	墨書「鋼司」
365	E区	北側セクション		白磁	碗	墨書「王□」
373	E区	上層		白磁	碗Ⅴ類	墨書「何」
379		排土		白磁	碗	墨書「盧？」
図 24 398	C区	土層確認トレンチ		白磁	碗	墨書「大□」
400	K区	南側トレンチ		白磁	碗Ⅴ類	墨書「？」
図 26 435	G区	中層上		白磁	碗	墨書「？」
図 28 472	E区	北側セクション		青磁	碗	龍泉窯系　見込み「河濱遺範」押印

８．土層確認トレンチ等の出土遺物（図28　466～490）

出土層位の不明瞭なものであるが、その中で特徴的な遺物についてこの項で紹介する。

466は、細く高い高台を持つ白磁碗で、広東省潮州窯の製品とされる。467は白磁小碗でⅣ類に近い高台を持ち、外底に「王□」の墨書が残る。円盤状加工品である。468は白磁Ⅳ類碗底部で、外底に「十」の墨書がある。469は白磁壺の頸部口縁部破片である。470は水注と思われる白磁の頸部破片で、小さな縦耳の外面に「吉」の陽文が捺されている（図版2-12）。福建省閩江下流域の製品とされる。471は白磁皿である。472は龍泉窯系青磁碗底部の円盤状加工品であり、内底に「河濱遺範」の押印がある。473は越州窯系青磁皿で、内面に篦片切彫りの花文が施されている。474はG区中層上・中層中で取り上げた破片が接合したもので、内面に精緻な篦片切彫りと櫛描きの花卉文を施した耀州窯系の青磁鉢で、外面には縦方向のヘラ彫文がある。図20-324と同一個体と思われる。475は青灰緑色の釉が厚くかかり、内面に刻花が施されている大ぶりの碗であるが、系統不明の青磁である。476は外形型押し成型の青白磁壺である。477は型押し成型の青白磁合子身で、内面と外面体部下半は無釉である。478は緑釉陶器皿の小破片で内面に型押し菊花文が施されている。479は鮮やかな水色の釉を厚くかけた青白磁で、接合しないが同一個体と思われる２点の破片がある。上面には厚く釉の溜った受け部があ

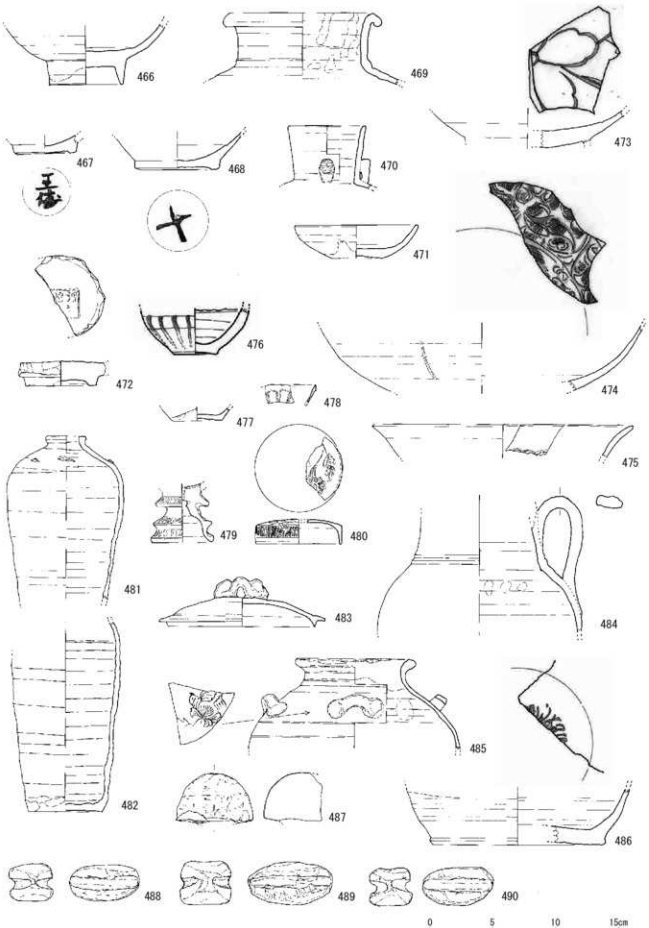


図 28　博多遺跡群第 14 次調査区土層確認トレンチ等出土遺物（1/3）

り、高い脚部を持つ灯火具である。480は精良陶胎の合子蓋である。型作り成型で外面上部に繊細な花弁文様があり、外面に褐釉が掛けられている。481・482は同形で細長い徳利型の薄胎陶器小口瓶である。口縁部から肩部にかけて濃褐色釉が施釉され、肩部には重ね焼きの目跡が残る。483は精良灰色胎の薄手の硬質陶器蓋で、上部に紐付き把手が付けられ、外面上部に緑褐色透明釉が施釉されている。484は無釉陶器水注の把手と頸部・体部の付着部分の破片で、頸部・体部の接合部分に２条の突帯を巡らす。把手部分の胎土は体部に比べはるかに精良で故意に土を使い分けたと思われる（図版2-17）。485は褐釉陶器四耳壺破片で、接合しないが同一個体と想定される３点を合体させて図化した。精良胎で硬質、横耳貼り付け部分の側面に花弁文が押印され、口縁部には重ね焼きの目跡が残る（図版3-19）。486は厚い底部の小ぶりの陶器盤で、見込みに花弁押印文を施し、内面と外面上半に緑褐釉を施す。485・486共に広東省奇石窯の製品である。以上が舶載遺物である。

487～490はいずれも側面に溝をもつ土錘で、487は大型品の半折されたものである。当時の生活の一面を支える漁業を知るうえで重要な資料である。

９．まとめ

以上、博多遺跡群14次調査について述べてきたが、これまで様々な各機会を得て部分的には調査結果の紹介をしてきたものの、調査後40余年、総体としてのまとめは未報告の状態であったことを心よりお詫び申し上げる次第である。

本調査地点の調査面積は、調査開始時の経緯から開発対象面積810㎡のうちわず^{2}か255㎡にとどまった。しかしながら出土遺物は多量かつ多岐にわたる。先ず特筆すべきは中層泥炭層における中国陶磁の量の多さと種類の特異さ、そして出土陶磁器中に占める割合の異常な高さである。上層から掘り込まれた井戸とその掘方からは青磁及び土師皿等が出土するが、中層では出土陶磁の70～80％が中国陶磁で占められており、その大半は白磁で青磁はごく少量である。他に褐釉陶器、黒釉磁、褐釉騎馬像、緑釉陶器、白地鉄絵などがある。それらは11世紀末から12世紀前半に位置づけられる。これらの中には非常に珍貴な資料が含まれており、調査終了の翌月に、九州歴史資料館で開催された第１回日本貿易陶磁研究会に参加された、中国歴史博物館研究員の李錫経、李知宴氏の鑑定によって、黒釉磁の中には河北省定窯産の「柿釉碗（紫定）」１点、「黒釉碗（黒定）」２点、褐釉騎馬像は山西省臨汾龍祠窯産とされ、北宋末期の陶磁器流通の広がりを知るうえで重要な資料となった。

また、図２・３に示す通り、地山砂層（包含層下層）が北側と西側に徐々に傾斜し、その波打ち際に堆積した泥炭層も調査区を斜断するように広がっており、当地が12世紀前半頃の博多浜北西端部にあたることが明らかになり、旧地形を復元する上でも重要な成果を得ることができた。

更に、狭小な面積であったが200点近い中国人名を含む墨書陶磁器が出土しており、また、白磁の一括廃棄遺構SX-01の存在、出土陶磁器中に占める中国陶磁の出土量と割合を勘案すると、中国貿易商人の拠点が近辺に存在し、その交易拠点である港湾施設も近辺にあったことが想定され、以後の博多遺跡群調査の大きな道標になったと考えられる。

また、包含層中層は泥炭層が形成されており、有機質の遺物も大量に遺存しており、下駄、板草履、脇息、箸状木製品、陽物状木製品、櫛、漆器等が含まれている。今回は骨角器、動物遺体等については掲載できたが、木製品等については遺存状態の問題から掲載できなかった。改めて機会を見つけて紹介したい。

本調査地点の整理と報告書作成に当たっては、以下の方々の御指導と御尽力を頂きました。末文ながら、心より感謝申し上げます。また、調査終了後から出土遺物の整理、実測等に関わっていただいた方々には、長期間未報告の状態であったことを心からお詫び申し上げます。

貿易陶磁　中国：　憑先銘、李鍋経、李知寛　日本：　三上次男、亀井明徳、森田　勉、鈴木重治、田中克子　**動物遺体**　新美倫子、木村幾多郎　**墨書資料**　石黒ひさ子　**遺物実測**　森本朝子、谷　正俊、平川敬冶、山崎加代子　（敬称略）

参考　B区出土陶磁器数量表（表３）

これまで紹介してきた通り14次調査地点は博多浜砂丘の北西端部にあたり、泥炭層はその潮間帯の干潟部分にあたる。泥炭層出土陶磁器と居住地化した上層部分の出土陶磁器とは、図４～21に示す通り、時間的経過でその種類や数量が変化している。港の荷揚場の廃棄物処理の結果と思われる本地点泥炭層出土陶磁器の破片数量表を、参考として紹介する。この表は北宋後半期の貿易陶磁を特集した「貿易陶磁研究No. 8　1988」に掲載したものである（池崎・森本　1988）。全体の遺物量が多く予備的整理段階であったため、B区に限って、上層遺物の混入の可能性がある中層上を除き、中層中・下、下層、SX-01を数量化している。

B区中層中、中層下、下層、SX-01（白磁溜）陶磁数量表

遺物の種類		参考図番号	中層中	中層下	下層	合計	SX-01
白磁碗	Ⅱ類　玉縁口縁	図４１～12	690	33	19	742	1,121
	直口	図12 136	1	3	2	6	10
	広平玉縁口縁		13	5	1	19	1
	ひねり口縁	図４13	2			2	
	Ⅱ類の小片		7		11	18	74
	Ⅳ類	図５	383	95	14	519	153
	Ⅴ類　無文	図６41	8	14	24	56	9
	内面櫛描文	図６39	37	1		38	77
	外面縦線文	図９77	12	7	1	20	
	Ⅵ類　無文		17	11		28	
	内面櫛、外縦線	図17 233	7			7	
	Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ類小片		100			100	
	0類		4		2	6	
	その他（不明小片）		11	9	2	22	
白磁小碗		図17 235～240	6	7	11	24	
白磁高台付皿	Ⅲ類	図17 235～241	9	1	4	14	
	但白磁碗0-Ⅱ類	図17 251	7	3	2	12	
	蕎麦文				1	1	
	Ⅰ類	図13 153	11			11	1
	その他		1	2	2	5	
白磁平底皿	Ⅱ類　見込小、直口	図６49	214	34		248	40
	口縁内角	図13 156	142			142	66
	口縁外反	図17 244	32			32	96
	0-Ⅰ類　蕎麦文		4			4	1
	曲線文	図20 316	3			3	1
	Ⅳ-2類	図６48	17			17	1
	その他		1		2	3	2
白磁鉢		図10 114	22	2		24	
白磁四耳壺	無文		15	1	6	22	
	縦線入り		2	1	1	4	
白磁小壺		図13 176	3		1	4	
青白磁	合子	図13 172～173	3	4		7	
	碗・皿	図13 168	15	2		17	
	瓶・壺		14	2		16	

黒釉碗	茶碗		10	2		12	
青磁	越州窯系　碗		14	2	4	20	
	瓶			10		10	
	壺	図18 270		9		9	
	遺江窯小碗		1			1	
	窯不明玉縁碗		7			7	
	古相同安・龍泉窯系碗		7			7	
	龍泉窯系１類　碗		4			4	
	皿		1			1	
	同安窯系　碗		5			5	
	皿		1			1	
	その他		8			8	
越州窯白釉黑花瓶		図20 329		1		1	
他釉酸焦入後		図22 350		1		1	
高麗青磁	良質碗	図21 347	2		3	5	
	粗質碗		10			10	
陶器　A群	甕	図19 280					
	壺		32	6	3	41	
	小口瓶	図28 481・482	3			3	
	行平鍋	図20 331	8	12		20	
	小片						3
B群	四耳壺（青釉系褐釉）	図14 184	22			22	
C群	無釉盤口水注		2			2	
	無釉壺		4			4	
	無釉擂鉢	図19 287・289					3
	小片						3
陶器大型壺	無釉四耳長壺						6
	茶釉四耳長壺	図18 271・272	151	19	1	171	
	短頸壺		12	1		13	
	無釉壺	図14 183	21		9	30	
土師器	ヘラ切丸底坏		19	33	45		
	糸切丸底坏		30	6			
	不明丸底坏片		5				
	糸切坏		11	1			
	ヘラ切小皿		41	27	1		
	糸切小皿		35	5	2		

陶磁器の分類は「博多出土貿易陶磁分類表　福岡市教育委員会　1984」を基準としている。

参考文献

池崎謙二1979「中世の博多 - 祇園町遺跡の調査」『月刊文化財192号』

池崎謙二・森本朝子1988「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」『貿易陶磁研究No. 8』

太宰府市教育委員会2000「大宰府条坊跡Ⅳ－陶磁器分類編－」

福岡市教育委員会1995「博多47　福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集　付編」

福岡市教育委員会1984「博多出土貿易陶磁分類表」福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ別冊博多研究会1996「博多遺跡群出土墨書資料集成」

博多研究会2003「博多遺跡群出土墨書資料集成２」『博多研究会誌第11号』

3．博多遺跡群第34次調査

調査番号　8645　所在地　福岡市博多区冷泉町238-2他　調査面積　150㎡
調査担当　力武卓治・常松幹雄　調査期間　1986年10月28日～11月15日

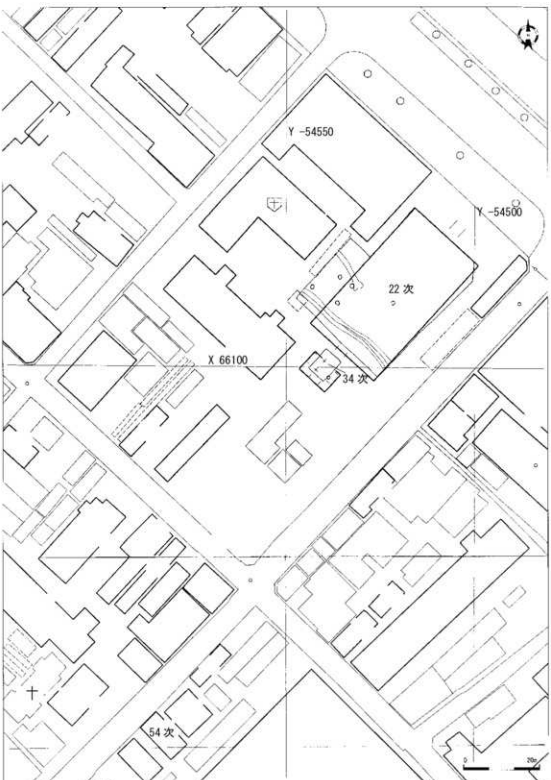


図1　博多遺跡群第34・54次調査区の位置（1/1,000）

検出遺構（図１～５）

調査地は博多遺跡群の南西部、大博通に面した22次調査区（柳沢・杉山1985）の西に接している。立体駐車場の建設に伴い1986年10月28日～11月15日にかけて発掘調査を実施した。調査地は地表面の標高は約5.0m、井戸の掘り方や白磁碗がまとまって検出された標高2.6mを第１面とし、溝や井戸の井筒が検出された標高2.1mを第２面として調査を行った（福岡市埋蔵文化財課1988）。

第１面では自然礫で根固めにした柱穴P02や白磁碗を一括廃棄した土坑P07が検出された。井戸P12の掘り方では第２面は砂質を多く含む土壌で、幅50cmの溝SD01（N45°E）が検出された。また井戸P12の第２面で確認された井筒から金銅製飾金具が検出された（比佐氏の論考参照）。

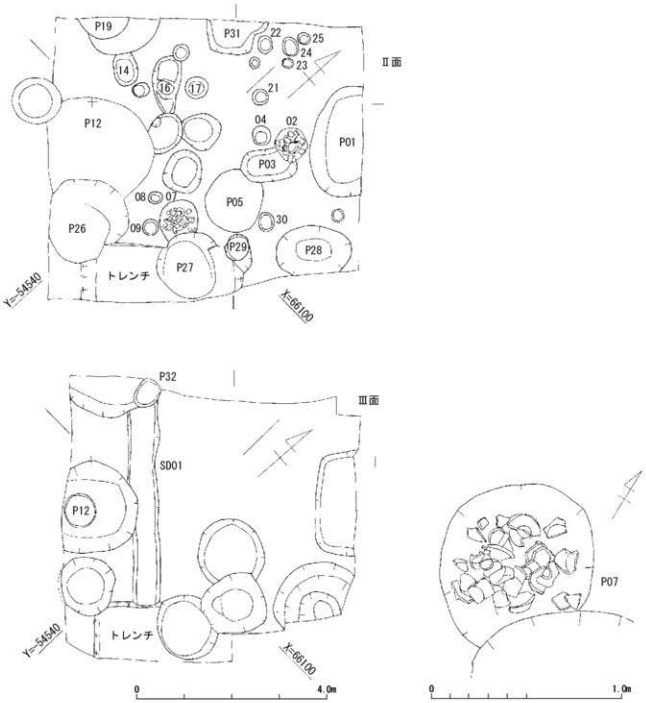


図２　博多遺跡群第34次調査区遺構配置図（1/80・1/20）

図 3　博多遺跡群第 34 次調査区上層（南東より）

図 4　博多遺跡群第 34 次調査区下層（南東より）

出土遺物（図６～11）

土坑P07では白磁碗がまとまって出土した。碗は肉厚な玉縁で、底部内面には沈線がめぐり、高台の削り出しが浅い白磁Ⅳ類で占められている。図化した16点を含め、完形に復元できるものは皆無だったことから破損した白磁碗を遺棄したと推定される。閩清義窯（福建省）産の11世紀後半～12世紀前半の標識資料である。このほか土錘１点が出土した。

井戸P12では白磁の碗類や皿が出土。18～23は白磁Ⅳ類碗で12世紀中頃～後半、24・26は白磁Ⅳ類の碗で11世紀後半～12世紀前半の標識資料である。25・30は高台付皿Ⅱ類で、25は見込みを輪状釉剥ぎする。30は焼成時に最上段に置かれたとみられ、釉剥ぎされていない。12世紀中頃～後半に比定される。いずれも閩清義窯産。27は古代の須恵器の高台付き盤である。28は糸切底の土師器皿。29は篦切底の皿である。31～33は桶巻造りの平瓦で内面に布目圧痕、外面に縄目叩きの痕跡がみられる。寧波系の中国瓦に分類される。このほか弥生土器の口縁部と底部の破片が出土した。

東接する22次調査では弥生中期の甕棺墓が検出されており、本調査区でも弥生中期～後期の土器が確認された。34は後期前葉の「く」字口縁の甕。35は焼成後穿孔がある壺の底部。内面に器壁の剥落が目立つ。

36はP01出土の白磁Ⅳ類の碗。37はP11出土の高台付の坏。褐色で硬質である。39、40、41は土師器の坏で底部は篦切である。38はP27で出土した白磁Ⅴ類の碗。「西甫」の墨書がある。高台を細く高く削り出し、内面に櫛目で花文を描く。閩清義窯産で12世紀中頃から後半に比定される。

図５　博多遺跡群第34次調査区土坑P07（北より）

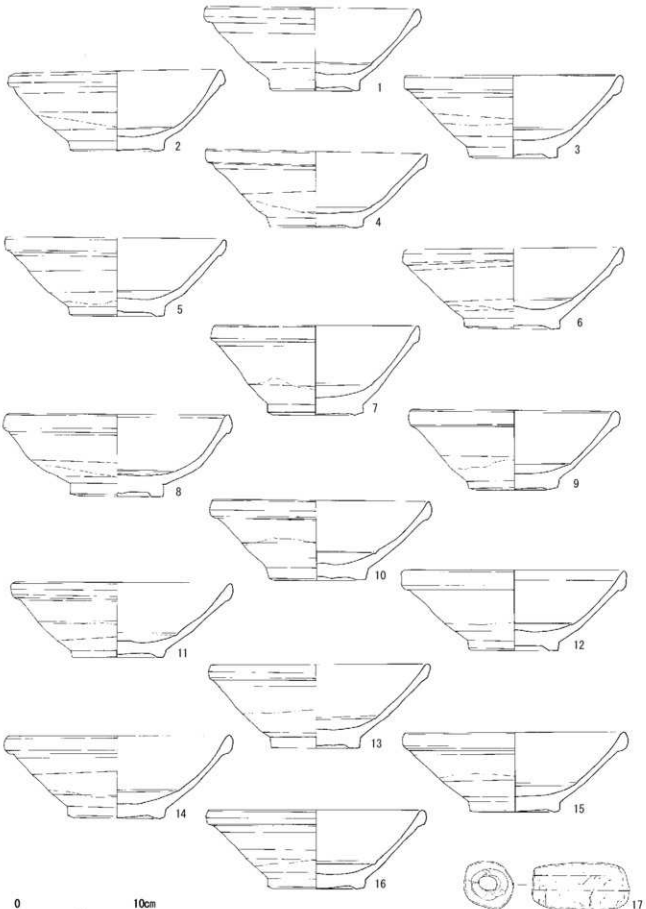


図6　博多遺跡群第 34 次調査区土坑 P07 出土遺物実測図（1/3）

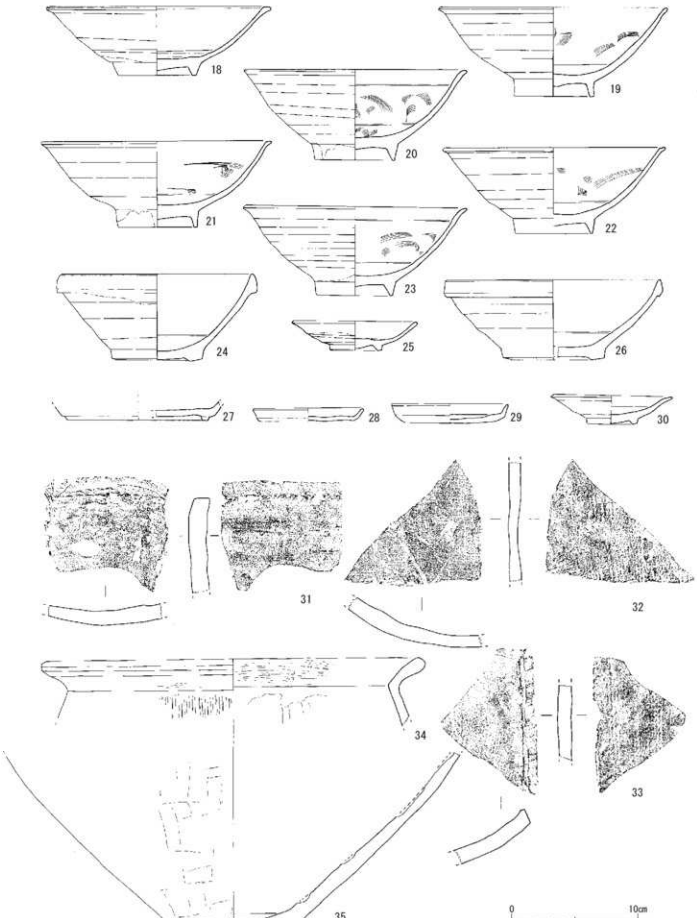


図７　博多遺跡群第 34 次調査区土坑 P12 出土遺物実測図（1/3）

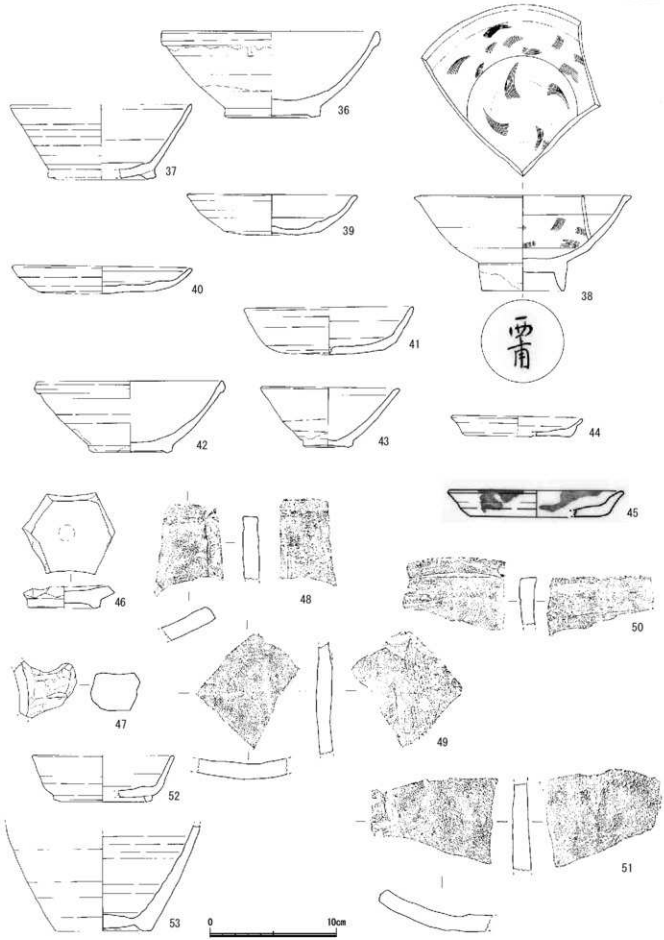


図8　博多遺跡群第 34 次調査区土坑出土遺物実測図（1/3）

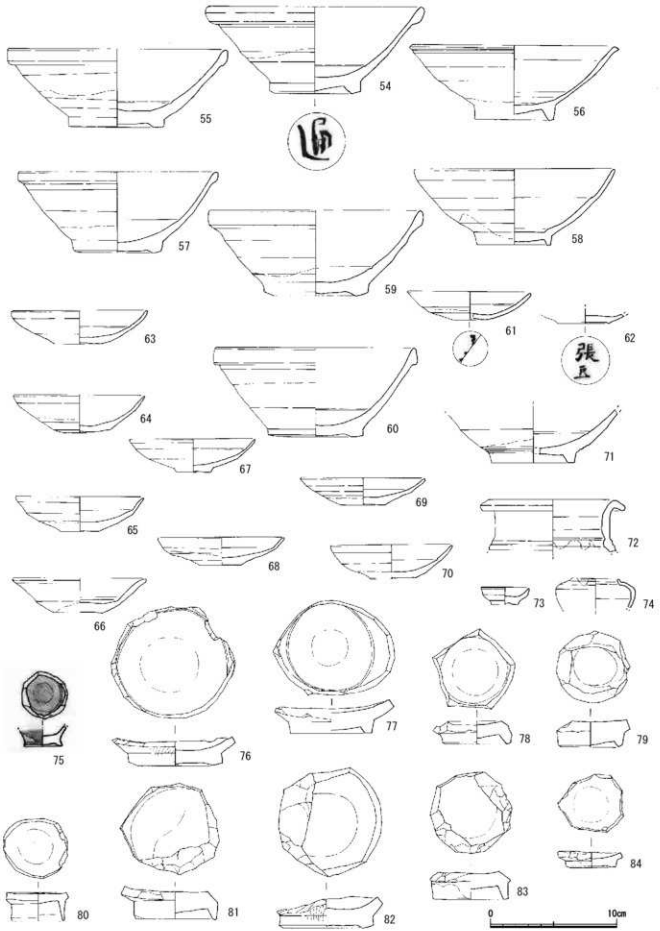
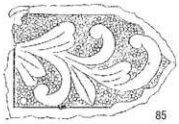


図９　博多遺跡群第 34 次調査区土坑 P07 出土遺物実測図（1/3）

北側の土坑P19出土の遺物。43は天目碗、胎土は粗く、色調はこげ茶色を呈する。11世紀後半～12世紀前半の初期の天目碗で閩江下流の東張窯産とみられる。44は糸切の土師器皿。45は箆切の燈明皿。46は白磁碗の底部に調整を加えたもの。47は古代の甑の把手。52は古代の高台付き坏。53は褐釉の壺底部，博多B群とよばれる四耳壺にあたる。48～51は桶巻造りの平瓦で内面に布目圧痕、外面に縄目叩きの痕跡がみられる。寧波系の中国瓦に分類される。

つづいて２面の出土遺物について紹介する。54は白磁Ⅳ類の碗。54には「通」を走り書きしたような墨書がみられる。56は白磁Ⅵ類の碗、見込みの釉は輪状に掻き取られている。閩清義窯産。61・62皿Ⅵ-1類は、11世紀半～12世紀前半の製品である。一部に墨書の痕がみられる。62には、「張□」の墨書がある。□は花押の類であろうか。

59・60は白磁Ⅳ類の碗。見込みに明瞭な段をもつ。11世紀後半～12世紀前半。皿63～70の多くは平底皿Ⅱ・Ⅲ類に分類される。潮州窯（広東）産の標識磁器で11世紀後半～12世紀前半とされる。71は光沢のある釉で見込みに段をもつ。72は白磁壺の口縁部。73は白磁小坏。74は白磁小壺の破片で潮州窯産とみられる。75は褐釉陶器の底部、76～84は福建産白磁の底部の破片で割れ口に調整が加えられている。高台が高い80は景徳鎮産。



85

86

87

図 10　博多遺跡群第 34 次調査区出土金属器実測図（1/1）

井筒（P12）から出土した金銅製飾金具85は、今回資料整理の過程で確認された（比佐2023）。蹴彫りで表現された植物文様と周縁部の間を魚々子で埋めている。向かって左を植物文様の基部とすると基部に径２㎜の孔２と、先端の小孔１は、荘厳具を留めるための孔の可能性がある。このほか井筒からは開元通宝（唐845年初鋳）86と政和通宝（北宋1111年初鋳）87が伴出した。

まとめ

34次調査は限られた面積の調査であったが一括性のたかい白磁碗の廃棄土坑や墨書陶磁器、さらに博多遺跡群でも希少な金銅製飾金具が確認された。

井戸や柱穴のほか陶磁器の廃棄土坑が検出された。白磁Ⅳ類の碗が出土したP07は、欠損した白磁碗をまとめて土坑に遺棄したとみられ、大量の白磁碗の選別が調査区付近で行われたことを彷彿させる資料である。

【参考文献】

柳沢一男・杉山富雄1985「博多Ⅲ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第118集　福岡市教育委員会
福岡市埋蔵文化財課1988「福岡市埋蔵文化財年報　1986年度」　福岡市教育委員会
比佐陽一郎2023「博多遺跡群出土資料の保存科学的調査について」『博多190』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1467集　福岡市教育委員会

図 11　博多遺跡群 34 次調査　土坑 P07 出土の白磁碗

4．博多遺跡群第54次調査

調査番号　8941　所在地　福岡市博多区冷泉町2丁目128-2　調査面積　調査面積99㎡
調査担当　横山邦継・常松幹雄（事前審査）調査期間　1989年7月10日～7月11日

検出遺構

調査地は博多遺跡群の南西部、大博通と櫛田神社を結ぶ参道に面している。開発地が狭小であることから杭打ちを先行し、根切りにあわせて1989年7月10～11日にかけて立会調査を実施した。調査地の地表面の標高は約4.5m、根切りは地表下250cmが予定されていた。地表下130～150cmで白磁碗がまとまって出土した。東壁に断面U字形の溝が確認された（福岡市教育委員会1991）。

出土遺物（図1～3）

出土遺物は、コンテナ3箱のほか板碑11点にのぼる。1は磁竈窯系の鉄絵黄釉盤。竜の顔の部分の破片である。底径32cmほどに復元される。2は燿州窯青磁の小碗で、櫛描文を加えた後片切彫りによる施文を加えている。3は青白磁の合子の身部である。4は「楊綱」の墨書のある白磁碗である。5は白磁碗で、外反する口縁をもつ浅い器種で、内面に蕉葉文が施されている。11世紀後半から12世紀前半の潮州窯産に比定される。6は緑釉陶器で焼成前に「＋」の線刻が加えられている。

軒平瓦については年報と埋蔵文化財調査報告で紹介した（常松1992）。瓦当部は偏行唐草文を主文様とする老司式に分類される。段顎式で上縁に珠文、下縁と側部に鋸歯文を配しているが、版木にズレがみられる。灰白色を呈し、焼成は良好である。11世紀後半から12世紀前半の溝にともなって出土した。

溝を中心に白磁碗や皿がまとまって出土した。8の白磁碗は、小さな玉縁口縁をもち、内湾気味に立ち上がり、見込みに段をもたない。9は白磁碗Ⅳ類。10は白磁碗Ⅱ類で見込みに段がつく。11は白磁皿Ⅱ類、小さな玉縁と見込みに段がないのが特徴。

12は白磁碗Ⅱ類。13は白磁碗Ⅴ類、釉は高台の部分に及んでいる。15は白磁碗Ⅴ類。14は、Ⅴ類で見込みに段がめぐる。16は白磁碗Ⅴ類。18は、白磁碗Ⅴ類。17は、白磁碗Ⅴ類。20は白磁碗Ⅴ類。19は白磁碗Ⅴ類。21は、白磁碗Ⅴ類。22は白磁碗Ⅴ類で見込みの段が顕著である。

23は白磁平底皿Ⅱ類。25は白磁平底皿Ｏ類、内面に篦描きの花文を施す。26は白磁平底皿Ⅳ類、口縁部に輪花、内面に白堆線を有する。24は白磁平底皿Ⅱ類。

8・10・11は潮州窯（広東）産。9・12～22は閩清義窯（福建省）産。23・24・25は潮州窯（広東）産。26は景徳鎮産と推定される。

調査区の南西隅で出土した板碑11点については「福岡市の板碑」に報告された（三木1992）。今回4点の拓本を紹介する（図3）。27は連碑式の板碑で、右碑面に「カ」地蔵菩薩、左碑面に「バン」金剛界大日如来を薬研彫する。28は上部下部を折損する。中央に法名「妙祐」、左上に紀年の一部「卯」を刻む。29は上部を折損する。上方に「バン」金剛界大日如来を薬研彫する。連碑式の10号板碑には側面に文明八（1476）年の紀年をのこしている。30～33は白磁の底部の破片で割れ口に調整が加えられている。

まとめ

調査地は博多浜の中央部にあたり遺構密度の濃い一帯にあたる。今回の調査では、東西方向の溝が確認され、古代の瓦や白磁を主体とする陶磁器類など出土遺物には希少な陶磁器や墨書陶磁器が含まれていた。

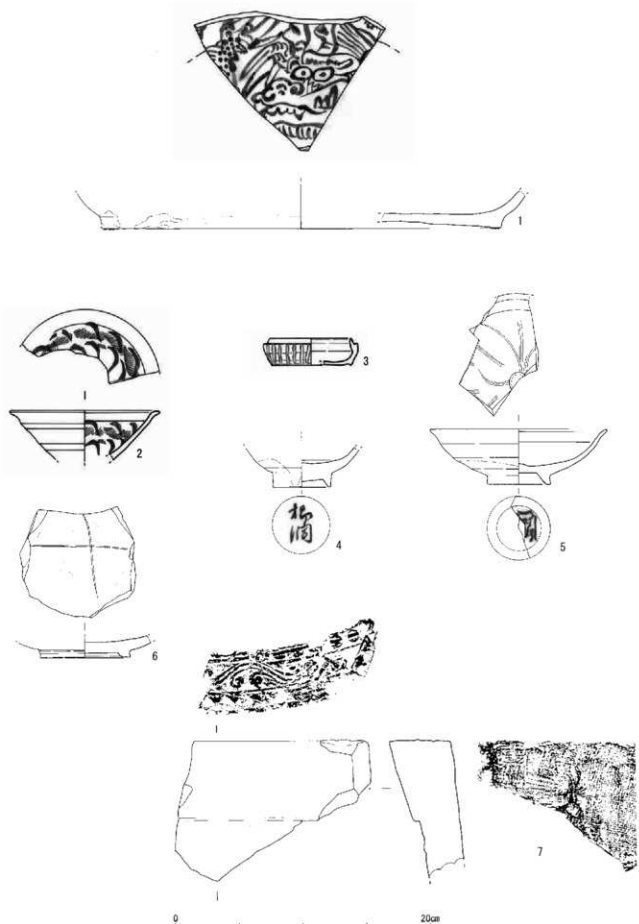


図１　博多遺跡群第 54 次調査区出土遺物実測図１（1/3）

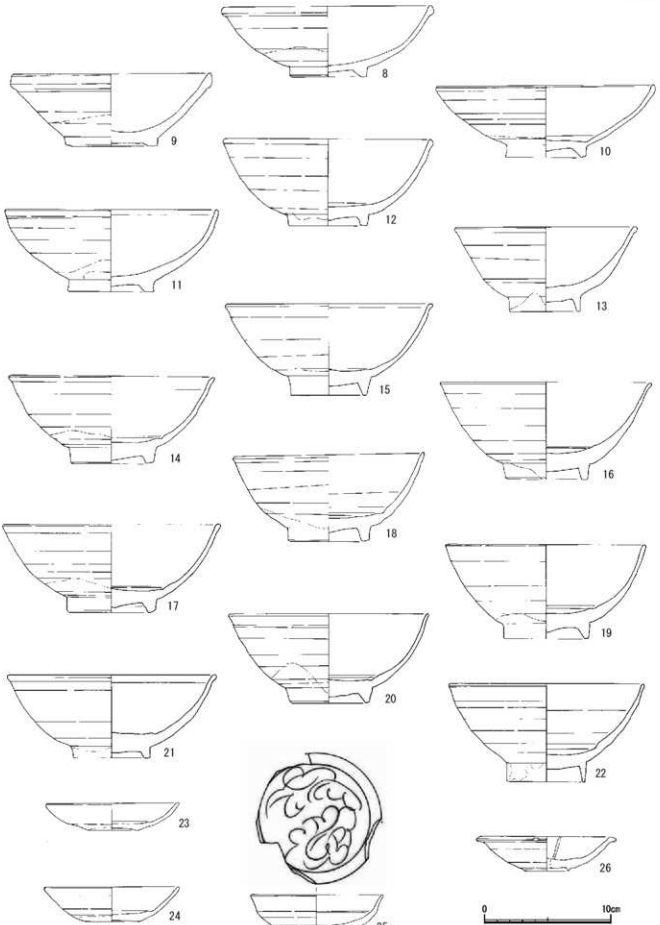


図 2　博多遺跡群第 54 次調査区出土遺物実測図 2　(1/3)

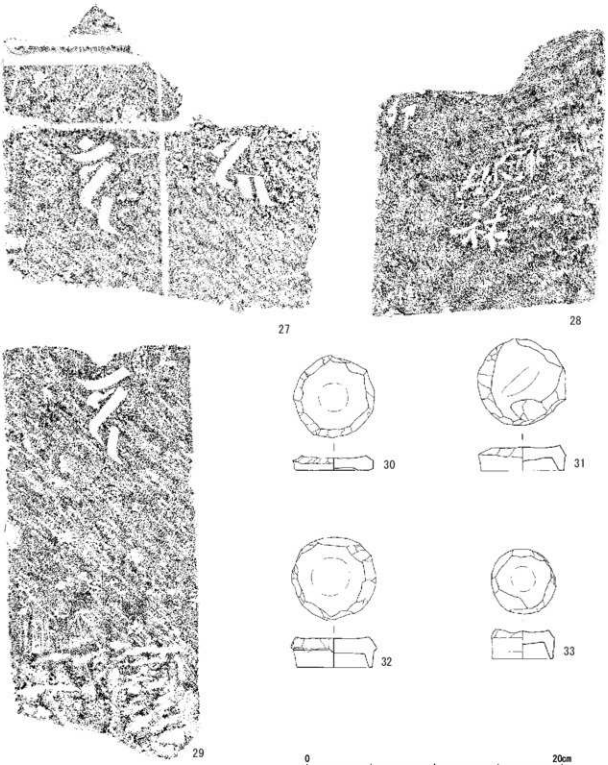


図３　博多遺跡群第 54 次調査区出土遺物実測図３（1/3）

【参考文献】

三木隆行（編）1992「福岡市の板碑」福岡市教育委員会

常松幹雄（編）1992「大橋E遺跡３次調査の報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第279集　福岡市教育委員会

福岡市教育委員会1991「福岡市埋蔵文化財年報vol.4　1989年度」

Ⅶ　自然科学分析報告

１．博多遺跡群第221次調査北側壁面の自然層所見

下山正一（佐賀大学理工学部非常勤講師）

2018年９月11日と10月３日に博多遺跡群第221次調査の北側壁面を中心に壁面土層を観察したので所見を述べる。遺跡周囲の道路面の標高は約４ｍである。この発掘調査地点は旧冷泉小学校の校舎があった場所で、発掘地表面は道路とほぼ同じ約４ｍの標高となっている。地表面下（GL）約２ｍまでは小学校跡地の整地に伴う埋め土＝人工攪乱土となっている。このため、埋蔵文化財調査の発掘対象土層はGL－２ｍ以下である。発掘対象土層の最上部は中世の人工埋積土層、泥混じり砂層、成層した砂層、細礫混じり粗粒砂層、最下部に大礫混じり粗粒砂層、という順に重なっている（図１、２）。

地層説明

１）人工埋積土層

小学校跡の整地埋め土層の下にある、14世紀頃の文化層を主体とする「中世の埋立て土層」で、淡褐灰色の砂質土からなる。基底は標高1.2m付近であるが部分的に0.7m付近まで土地区割りとなる空堀などの溝が更に下位に掘り込まれている。中世の埋立て土層からは井戸や溝の堀込みなどの生活遺構や中世の遺物が多く出土する。

２）泥混じり砂層

泥混じり砂層は基本的に泥と砂の薄い互層からなるが上部は泥が、下部は砂が多い。自然堆積した海成層の最上部だが、上部には12世紀の溝跡や同時期の掘り返し痕が多く見られる。下部では砂が多く、砂層は断面がレンズ状で斜層理が見られるので、リップルマークの断面と考えられる。マッドドレイプなどの潮流堆積物が見られる。マッドドレイプとは潮流で運び込まれた泥粒子が１日２回の潮流停止時に沈泥（がた）となって堆積したもので、海水感潮域を示唆する堆積物である。泥混じり砂層では上部ほど砂が少なくなり相対的に泥が多くなるので、上部は下の成層した砂層から続く洪水性堆積ユニットである可能性が高い。砂層の水平掘削面には多くのパイプ状断面の生痕があり、まばらに植物の根茎が観察される。パイプ状断面の生痕には泥の裏打ち構造が見られるので潮間帯干潟に棲息するスナモグリ類の巣穴（オフィオモルファ）、植物の根茎はアシの地下茎の可能性がある。両者の共存は岸辺の干潟環境を示唆する。中世の陶磁器片が出土する。上部には馬の骨と埋葬痕が見られるが解体痕はなく馬の死体を干潟上に仮埋葬した可能性がある。最上部に人の足跡のような踏み抜き痕が認められる。これは下の地層にプリントされたアンダートラックなので活動面は踏み抜き痕より１つ上位の土層と考えられる。

3）成層した細粒砂層

厚さ10㎝ほどの砂層で、斜層理が発達しており、南から北への堆積時の流向が読み取れる。生物擾乱がないため、洪水で急速堆積したイベント堆積物とみられる。連続性がよく、鍵層になる。

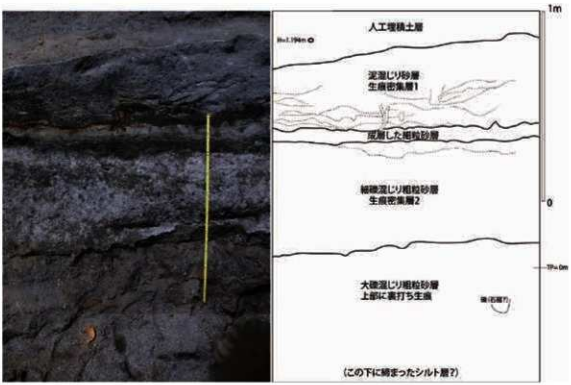


図１　北側壁面の土層説明図（写真の折り尺は１㍍）

4）細礫混じり粗粒砂層

厚さ50㎝ほどの粗粒砂層で、堆積時の成層構造はなく塊状である。泥の裏打ち構造のあるスナモグリの巣穴と見られるパイプ状生痕が無数にある。土層の堆積後に堆積の停滞期間があり、生物擾乱によって堆積構造がなくなり塊状になったと考えられる。河口部の砂質干潟と考えられる。中世の遺物、特に12世紀頃の白磁が出土する。

5）大礫混じり粗粒砂層

大礫を含む粗粒砂層で、砂礫層に近い。やや成層している。西側発掘底の地下水の排水限界付近なので、下限は不明だが、数10㎝下に粘土質の締まった地層があるので厚さは60㎝くらいと推定される。上部に泥の裏打ち構造のある棲管が観察され、スナモグリの巣穴化石と考えられる。上位の細礫混じり粗粒砂層から掘り込まれている。土器片や使用痕のある皿状石器が多数出土する。それらは弥生時代から古墳時代前期のものが多い。大礫混じり粗粒砂層は洪水時に干潟チャネルを充填した河川堆積物と考えられ、河岸や砂丘を破壊して多くの遺物を二次的に混入した可能性がある。

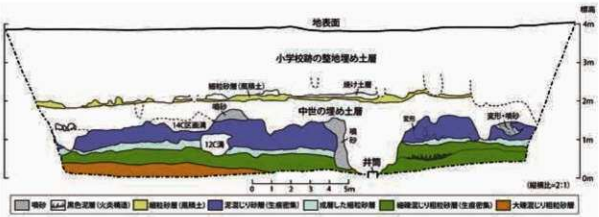


図２　調査区北壁面の土層図中の自然層（着色した部分）
左が西側、右が東側である。図は横方向に圧縮されている（縦横比２：１）

堆積環境の考察

堆積相とスナモグリの棲息環境から堆積環境を推定すると、大礫混じり粗粒砂層と成層した砂層は奈良時代以前に河川河口域に達した洪水性堆積物、細礫混じり粗粒砂層と泥混じり砂層は海成堆積物である。生痕の集中する細礫混じり粗粒砂層は潮間帯中部付近の干潟堆積物、泥混じり砂層は潮間帯上部付近の干潟堆積物と考えられる。成層した細粒砂層は連続性がよく、成層構造が保たれているので急速に堆積した洪水堆積物と考えられる。通常、洪水堆積物の上位には木片を含む泥水が沈積することが知られているので、泥混じり砂層がこれに当たると考えられる。泥混じり砂層中には砂の薄層と泥の薄層が交互に堆積した潮流堆積物（マッドドレイプ）が部分的に見られ、潮流の強弱を示すことから海水（潮汐）の影響が強い場所であったと考えられる。泥混じり砂層の上限付近の＋１ｍ付近には少数のアシの根茎のほか、馬の埋葬跡や人の踏み抜き痕、掘り返しの痕跡が多数存在するので、中世（13世紀？）のはじめまでは自然堆積が認められ、満潮時には海水が満たすが、大潮干潮時には長時間干上がり、人類の立ち入りやすいアシ原のような河口干潟であったと考えられる。

この海成層（自然層）を中世とそれ以降の人工埋め土が広く覆う。中世埋め土層の最下部には泥混じり砂層に掘り込まれた12世紀の遺構がみられる。この場所は博多湾に直結する船溜まりや入り江奥の荷揚場だった可能性がある。中世埋め土層は生活地を拡大するために人為的に干潟を埋めて盛り土、整地した陸域部分と考えられる。14世紀の井戸も掘り込まれている。埋め立て地はその後もさらに拡大されたと考えられる。

脱水変形構造の考察

中世井戸遺構付近とその東側に、自然層の堆積後に生じた、いくつかの脱水変形構造が認められる（写真１）。

写真１　脱水変形構造１（火炎構造、折り尺は１㍍）

写真１の成層した細粒砂層の下部に認められるノコギリの刃のような黒色泥層は、「火炎構造」と呼ばれる脱水変形構造である。これは上位の地層の荷重による間隙水圧の上昇で更に下位の地層から脱水が生じた構造である。細砂とシルトサイズの粒子が水と共に移動するため、泥混じり細砂となる。

もう一つの脱水変形構造が中世埋め土と砂混じり泥層との間に存在する（写真２）。当時の地表や池の底面上に吹き出した噴砂で、椎茸の笠を切ったような、レンズ状断面となる。一緒に泥水も吹き出すので、周囲の泥層も噴砂に伴う堆積物の可能性がある。地層の脱水変形構造は間隙水圧の過剰増大で地層を支えていた粒子間の水の圧力が極度に高まり、圧力の低い地表方向に細砂を含む泥水が移動する現象である。考えられる原因として、地震による液状化や人為的に造られた水圧の差のある堤などからの漏水によるパイピングが挙げられる。脱水変形構造の成因について以下でさらに考察したい。

脱水変形構造の成因が内陸直下の地震だとすると679年（天武７年）の筑紫地震や2005年の福岡西方沖地震が原因となった可能性がある。しかし、調査地点はこれらの断層の直上ではなく、この場所では、開口亀裂や噴砂それに井戸の抜け上がりなどの地盤の液状化を示す顕著な変形は観察されていない。さらに変形が起きた時期は中世から近世と考えられるが博多ではこの頃の地震被害の記録がない。変形が見られる箇所が北壁面の中世井戸周辺及びその東側に限られること、写真２のパイピング変形がトレンチ東端の杭列付近にあることから、当初は地震ではなく局所的な原因、たとえば池の人

為的な埋め立て工事と関係して発生した脱水変形構造の可能性が考えられた。

しかし、その後、より海側に離れた博多遺跡群第225次調査の露頭でもさらに大規模な脱水変形構造が発見された。しかも脱水変形構造の形成時期は15世紀以降近世までの間と両地点共通している。したがって、離れた複数箇所の脱水変形構造は局部的な原因ではなく広域的原因によって形成された可能性が高くなった。そうなると両地点に共通する広域原因は地震による地盤の液状化ということになる。博多では該当期間に地震の被害記録がないので、液状化を生じた地震のゆれは建物被害を伴う内陸直下の地震の可能性は乏しい。2011年３月の東北地方太平洋沖地震では長周期震動のゆれによって震源から遠く離れた千葉県幕張の埋め立て地で地盤の液状化が多数発生した。この事例を参考にすれば、今回観察された土層の脱水構造は遠く離れた南海トラフの巨大地震による地盤の液状化かも知れない。相当大きな規模の海溝型巨大地震の長周期地震動ならば震源が遠くであっても減衰しにくい。もし長周期地震動が長時間継続したとすれば、ゆれが小さくて（地震被害記録がなくて）も「埋め立て直後のゆるい地盤のみ脱水変形した」、という両地点の土層変形の特徴を説明しやすい。

写真２　脱水変形構造２（レンズ状の噴砂断面、折り尺は１㍍）

風積土層

上の土層区分には入っていないが、旧冷泉小学校整地埋め土と中世埋め土の土層境界には、中世埋め土の上部を覆う成層した薄い細粒砂層がある（写真３）。細粒砂層はごく薄いがよく成層しており、当時の地表断面に調和的に堆積しているので、当時の地表面上に堆積した砂質の風積土と考えられる。近隣に存在した海浜や浜堤（砂丘）から強風時に風下側に供給された可能性がある。その上には褐色の焼土の層があり、福岡市教育委員会によれば、焼土層は大火の痕跡と考えられている。

写真３　風積土層
真ん中の灰白色で成層した薄い砂の層が風積土層、その上の褐色層が焼土層

2．博多遺跡群221次・14次調査出土の動物遺体

新美倫子（名古屋大学博物館）

1、221次調査の動物遺体

博多遺跡群の221次調査では遺構埋土や包含層から動物遺体512点が出土した。これらはいずれも調査時に取り上げられたもので、貝類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が含まれていた。資料のほとんどは哺乳類であり、貝類・魚類・爬虫類・鳥類は計７点とわずかである。多くの資料が中世～近世のものであり、そのうち大部分の所属時期は13世紀～15世紀である。ただし、Ⅱ区の石組遺構と遺構131・164から出土した資料は11世紀後半～12世紀前半に、遺構141の包含層出土資料は12世紀後半に属するとのことである。これらの出土種名を表１に、出土内容を表２～11に、資料の計測値を表12に示した。なお、福岡市埋蔵文化財課の常松幹雄氏と井上繭子氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。また、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、琵琶湖博物館の高橋啓一先生にはノロの現生標本を見せていただいた。ここに感謝いたします。

①貝類・魚類・爬虫類・鳥類

７点の資料すべてがⅡ区で出土している。貝類は遺構147（以後「遺構」の記載は省略）から種不明巻貝の小さな蓋が１点出土した。魚類は124で大きなタイ類の椎骨１点と、147で焼けた種不明椎骨が１点見られた。爬虫類は147でスッポン腹甲破片が２点見られ、鳥類は147でニワトリ？上腕骨遠位部１点と184で種不明の頭蓋骨破片１点が出土した。ニワトリ？上腕骨遠位部は関節部分が一部破損しており、大きさも現生キジ雄標本と同程度だったため、ニワトリかキジ類かを確定できなかった。

②哺乳類（表２～12）

505点が出土した。このうち、陸獣で種を同定できた資料は、ウマ116点・ウシ88点・シカ類56点・イノシシ類18点・イヌ12点・ヒト11点・カモシカ１点であり、海獣類はクジラ類など26点が出土している。これらの出土状況には地区によって偏りが見られ、Ⅰ区ではウマが主体となっており他の種の出土量はわずかである。Ⅱ区ではウシとシカ類の出土量が多く、ウマも比較的多く出土した。イノシシ類・イヌ・ヒト・海獣類も出土している。

ａ．ウマ（表２・12）

Ⅰ区で71点、Ⅱ区で45点が出土した。Ⅰ区SX31では成獣の左下顎骨と若獣の左右の下顎骨（同一個体）が出土した。成獣下顎骨（写真1-3）は第３後臼歯の最後部の咬頭まで摩滅が及ぶが、比較的若い。現生ヨナグニウマ標本と比較すると歯は少し大きく、骨体はひとまわり大きい。犬歯部分の骨体が残存しないために性別は不明である。下顎枝には穿孔が見られる。若獣下顎骨（写真1-2）では第３後臼歯が萌出途中であり、３～４歳頃の個体である。現生ヨナグニウマ標本と比較すると歯は少し大きい。犬歯部分の骨体は残っていないため性別は不明である。成獣下顎骨を①、若獣下顎骨を②として、表12に前臼歯・後臼歯の長さと幅を示した。SX31ではこれらとは別に同一個体に属する左右の下顎切歯６点が出土しており、これらの第１・第２切歯は萌出完了し、第３切歯は未出でおそらく萌出直前である。これらの切歯はその萌出状況から見て、上述の若獣下顎骨と同一個体かもしれない。他には左中手骨と下顎右犬歯が出土した。この下顎右犬歯には摩滅は見られず、上述の若獣下顎骨あるいは成獣下顎骨と同一個体の可能性もある。もし同一であればその下顎骨は雄である。

Ⅰ区SX36では同一個体の椎骨・肋骨・寛骨・後肢が交連状態で出土したが、保存状態が悪いために

取り上げることのできなかった資料もある。もとは上半身の骨も存在した可能性が高いが、後に失われたと推測される。また、Ⅰ区遺構外の上層では、２m×0.5mほどの範囲内で近接して上顎の左右の切歯部分、下顎の左右の切歯部分と左右の下顎骨の前臼歯・後臼歯部分が出土している。これらは同一個体のものかもしれないが、保存状態が悪くてよくわからなかった。下顎骨の前臼歯・後臼歯の計測も不可能であった。Ⅱ区で出土した資料の多くは上下顎の遊離歯である。

b．ウシ（表３）

Ⅰ区で10点、Ⅱ区で78点が出土した。出土資料を現生改良和種標本と比べると、この標本よりもひとまわり小さなものからひとまわり大きなものまで見られ、ウシの大きさには幅があった。Ⅱ区131では43点と多くの資料が出土したが、この中には同一個体の上腕骨・橈骨・尺骨や大腿骨・脛骨など、四肢骨がある程度のまとまりを持ってつながったまま廃棄されたと思われる資料も見られた。Ⅱ区184で出土した中手骨（写真2-5）は近位と遠位の骨端部を切り取られており、加工品の原材であろう。

なお、Ⅱ区1-2面出土の左上腕骨は現生改良和種標本よりかなり大きく、その大きさは現生ホルスタインに近い。所属時期が新しいものかもしれない。

c．シカ類（表４）

Ⅰ区で５点、Ⅱ区で51点が出土した。出土した資料は現生ニホンジカ標本（愛知県産）と比べて同程度の大きさかそれよりやや小さい資料が多いが、Ⅱ区021・石積遺構・147や1-2面ではこれらよりさらに小さく愛知県産現生標本の2/3程度の大きさ（長さは８割程度）の距骨も見られた。これら小型の資料は、形はニホンジカと同じであったが、その大きさがニホンジカの範囲に含まれるのか否かが問題となる。日本に生息するシカ科はニホンジカのみであるが、中国大陸には大きさの異なるさまざまな種が生息しており、ニホンジカより少し小型の種としてはノロがある。しかし、これらの資料を現生ノロ標本（琵琶湖博物館蔵）と比較すると、それよりはかなり大きかった。また、ニホンジカはサイズの変異が大きく、最小の個体と最大の個体では体重が４倍近く異なる（盛他2000）。骨の大きさも、例えば中手骨の長さを筆者所有の現生ニホンジカ標本で比較すると、北海道産では223.4mmであるが、愛知県産では198.5mm、大分県産では175.0mmと大きな差がある。これらの点から見て、上述の小型の資料はニホンジカの変異に含まれると考えてよいであろう。

147では25点がまとまって出土しているが、加工品作成の過程で切断されたと思われる痕が残る資料も複数見られた。5-6面出土の右前頭骨は頭蓋骨正中線あたりで切断され、角突起も切り取られてその断面がきれいに丸められている（写真2-1）。同じく5-6面出土の左中足骨近位端は骨幹部から割り取られており、加工の残片だと思われる。

なお、ニホンジカよりも明らかに大きいため、表４で「大型シカ」とした資料が２点出土している。１点はⅡ区079出土の右蹠静脈突起であり、もう１点はⅡ区147出土の左踵骨（写真2-4）である。いずれも日本列島に生息するニホンジカの中で最大の現生北海道産標本よりもかなり大きく、踵骨の長さは124.3mmであった。これらはシフゾウやスイロクなどの中国大陸に生息する大型のシカと思われ、その骨などが加工品の原料として輸入されたのかもしれない。

d．イノシシ類（表５）

ここでイノシシ類とした資料は「ブタ」と「イノシシかブタかを確定できない資料」の両方を含み、18点はすべてがⅡ区から出土した。164出土の下顎骨は第３後臼歯の後半部が欠損しているため、その萌出が完了しているか否かが確認できず、萌出途中の若獣かもしれない。骨体は肥大して下顎角部分も厚く、ブタと思われる。

147出土の右脛骨１点を除いて、出土した四肢骨は現生野生ニホンイノシシ標本（岐阜県産）と比べてかなり大きく肥大したものが多く、ほとんどの資料は野生イノシシではなくブタと思われる。なお、147出土の脛骨のみは他資料と比べてかなり小さく、現生リュウキュウイノシシ（西表島産）と同程度の大きさであり、沖縄など南方の地域産の小型のブタである可能性もある。

ｅ．イヌ（表６）

Ⅰ区で１点、Ⅱ区で11点が出土した。保存状態の良い頭蓋骨・下顎骨が出土せず、完存の四肢骨もないので、形質や体高についてはよくわからないが、現生柴犬標本よりもひとまわり大きな資料が多い。

ｆ．ヒト（表７）

Ⅰ区で１点、Ⅱ区で10点が出土した。Ⅱ区144で出土した下顎骨（写真2-3）はほぼ完存で切歯と左犬歯・第１前臼歯は脱落しているが、第２後臼歯までのすべての歯が萌出完了している。第１後臼歯はある程度摩滅が進んで咬合面が平坦になりかけており、第２後臼歯ではわずかに摩滅が見られる。しかし、この段階で第３後臼歯の歯槽が開いていないので、第３後臼歯が萌出しない個体なのかもしれない。右第１後臼歯の歯槽骨には歯周病が見られる。

ｇ．海獣類（表10）

Ⅰ区で１点、Ⅱ区で25点が出土した。クジラ類とわかる資料はクジラ類と記載し、それ以外の資料は小さな破片なので鰭脚類の可能性も否定できないことから海獣類としたが、これらも大部分はクジラ類と思われる。Ⅰ区上層出土のクジラ類椎骨は体長７～10m程度の個体と思われ、一部分が削られている。海獣肋骨片にも、削ったり切ったりした加工痕の残る資料が見られた。Ⅱ区124出土のクジラ類若獣椎骨は、小型のゴンドウクジラ類程度の大きさである。

ｈ．その他（表８・９・11）

他にはウシまたはウマの破片が96点、シカ類またはイノシシ類の破片が24点、陸棲哺乳類とのみ判別できる陸獣破片が19点、保存状態が悪く陸獣か海獣かも判別できない骨片が37点出土した。

表２～11の出土内容に含まれない資料としては、Ⅱ区２面でカモシカの下顎右第３後臼歯１点と、Ⅱ区147で種不明とした左下顎骨（写真2-2）が１点出土した。この下顎骨は第３後臼歯以外の歯や骨体の形状はシカに似ており、前臼歯３本・後臼歯３本が萌出完了し成獣である。大きさは愛知県産現生シカ標本よりひとまわり小さい。歯の長さは、第１後臼歯が13.9mm、第２後臼歯が17.4mm、第３後臼歯が19.2mmである。ただし、シカと大きく異なるのは第３後臼歯の最後部の咬頭が非常に小さい点である。この第３後臼歯の形状から見て当資料はシカ属ではなく、ノロ・カモシカ・ヤギ・ヒツジでもない。

表１　出土動物種名

Ⅰ．貝類	Ⅳ．鳥類	
１　種不明	１　ニワトリ？	５　クジラ類
		６　イヌ
Ⅱ．魚類	Ⅴ．哺乳類	７　ウマ
１　タイ類	１　イノシシ類	８　ブタ
	２　ニホンジカ	９　ウシ
Ⅲ．爬虫類	３　シカ類	10　ヒト
１　スッポン	４　ニホンカモシカ	

表 2　ウマ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	SX28		14 世紀頃	歯破片 1	1	71
	SX31	下層	12 世紀後半～14 世紀頃	下顎骨左（P234M123）関節突起なし、穿孔あり① 下顎骨 ┌ 左（P234M12 ③）M3 萌出途中、関節突起なし 　　└ 右（×× P4M12 ③）M3 萌出途中、関節突起あり② 下顎右 C、中手骨左中～下 1 一部焼 下顎右 I ③未出、萌出直前 ┐ 下顎左 I12 ③　I ③は未出、萌出直前　同一 下顎右 I12 ┘	10	
	SX32	―	14 世紀頃	上顎左 M1	1	
	SX36	下層	13 世紀頃	上顎右 I2 寛骨破片 3、大腿骨左下破片 2、右下 1、脛骨右下 1 焼 ┐ 中足骨右上～中 1 焼、中足骨？中 1 焼？、中破片 1、距骨左 1 焼　同一 右 1 焼、手足根骨 3 焼、四肢骨破片 3、椎骨？破片 1、肋骨片 17 ┘	37	
	SX39	―	13 世紀頃	大腿骨左中 1	1	
	SX46	―	13 世紀頃	大腿骨右中 1、中足骨左？中 1	2	
		下層	13 世紀頃	下顎右 M1 ？破損	1	
	SX46 掘り方	―	13 世紀頃	大腿骨左中 1	1	
	SE47 掘り方	上層	中世後半	下顎骨左（P234）	3	
		―	中世後半	上顎左 M1、下顎左 M2 老		
	包含層	上層	中世後半	上顎骨 ┌ 左（I123） 　　└ 右（I123）同一 下顎骨 ┌ 左（I12） 　　└ 右（I123）同一 下顎骨右（P234M123）関節突起あり 下顎骨左保存悪いがおそらく P2 ～ M3 あり、関節突起あり 軸椎 1	5	
	サブトレ南	―	中世後半	下顎左 M1 若	1	
Ⅰ-5 区	包含層	上層	中世後半	上顎右 M1	1	
Ⅰ-2 区	包含層	中層	15 世紀頃	上顎右 I3	1	
Ⅰ-3 区	包含層	中層	15 世紀頃	上顎左 P3、寛骨右坐 1、脛骨左下 1	3	
Ⅰ-5 区	包含層	中層	15 世紀頃	上顎左 M2	1	
Ⅰ-2 区	包含層	下層	中世後半	下顎左 P4 ？	1	
Ⅰ-3 区	検出面	―	不明	歯破片 1	1	
Ⅱ区	021	下層	中世前半	上顎臼歯破片 2、下顎臼歯破片 1	3	45
	070	3-4 面掘り方	近世	寛骨右腸 1 一部焼	1	
	106	―	不明	下顎左 P3orP4、右 P2	2	
	124	上層	中世後半～近世	下顎右 I2	9	
		―	中世後半～近世	上顎臼歯破片 7、寛骨右坐 1		
	石積遺構	前面	中世後半～近世前半	下顎左 M3	1	
	141	包含層	12 世紀後半	下顎左 P4 ？破損	1	
	147	5-6 面	中世前半～近世	上顎右 M1 ？老、摩滅進み歯冠部なし	8	
		6 面	中世前半～近世	下顎左 M3、上腕骨右中 1		
		6-7 面	中世前半～近世	下顎左 m4、距骨右 1、手足根骨 1 一部焼		
		南落ち付近	中世前半～近世	上顎臼歯破片 1		
		―	中世前半～近世	中節骨上 1		
	154	―	中世～近世	下顎臼歯破片 1	1	
	184	南側下層	中世前半	下顎右 I1	2	
		―	中世前半	脛骨左中～下 1		
	ベルト 1	上層砂質土	中世～近世	上顎左臼歯破片 1 一部焼	1	
	1-2 面	1 層	中世前半～近世	上顎左 P3、右 M3、上顎臼歯破片 8	10	
	2 面	―	中世前半～近世	中手足骨下 1 ＋基節骨 1 ＋中節骨 1 ＋手足根骨 1 同一	4	
	南壁トレンチ	石積背面側	中世前半～近世	上顎左 P4	1	
	検出面	―	中世前半～近世	上顎右 M2 老	1	
計						116

註　I：切歯、C：犬歯、P：前臼歯、M：後臼歯、m：乳臼歯、I・P・M・m に伴う数字は歯の順番を示す。
　　（　）は顎骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。○のついた歯は未出または萌出途中であることを示す。
　　腸：腸骨部分、坐：坐骨部分、恥：恥骨部分。焼：焼けた資料。上：近位部、中：中間部、下：遠位部。
　　上・中・下のないものは完存。ハズレなし：成長途中であるため骨端が分離して、かつ残存していないことを示す。
　　ハズレあり：成長途中であるため骨端が分離しているが、残存していることを示す。幼：幼獣、若：若獣、老：老獣、
　　幼・若のないものは成獣。同一：同一個体。下顎骨の No. は表 12 の計測値に対応する。

表３　ウシ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	SX31	下層	15 世紀頃	尺骨右破片 1	2	10
		—	15 世紀頃	肩甲骨左 1		
	SX39	—	13 世紀頃	脛骨右中～下 1	1	
	SX46	下層	13 世紀頃	肩甲骨左 1、橈骨左上破片 1	2	
	SK25	—	15 世紀頃	下左 M3 破損	1	
	SE26 掘り方		中世後半	踵骨左破片 1	1	
	SE47 掘り方		中世後半	中足骨右上～中 1 一部焼	1	
Ⅰ-2 区	包含層	中層	中世後半	上顎左 M3、右 P3	2	
Ⅱ区	013	下層(粗砂層)	中世～近世	下顎右 M3	1	78
	079	—	中世～近世	上顎右 M3	1	
	124	上層	中世後半～近世	下顎左 M1・M2・M3 同一	3	
	130	一段下層	中世前半	大腿骨右下破片 1 下ハズレなし若	2	
		—	不明	上顎左 M3		
	131	—	11 世紀後半～12 世紀前半	肩甲骨左破片 1、上腕骨左上 1、下 1 半欠一部焼、橈骨左下 1 尺骨左上 1、上腕骨左下 1＋橈骨左上 1＋尺骨左破片 2 同一 中手骨左上 1 半欠、左右不明下 1、中手足骨下 1 半欠 大腿骨左上 1、下 1＋脛骨左上 1 同一、下 1、下破片 1、右中破片 1 基節骨 4、上 1、下 1、中節骨上 1、中節骨上 1 半欠 末節骨 1、基節骨下 1＋中節骨 1＋末節骨 1 同一一部焼 中節骨 1＋末節骨 1 同一、種骨 3、手足根骨 8	43	
	147	4-5 面	中世前半～近世	上顎右 m3、尺骨左 1	13	
		5 面	中世前半～近世	中手骨左上～中破片 1、脛骨右中～下 1		
		5-6 面	中世前半～近世	上腕骨右中破片 1 一部焼、手足根骨 1		
		6 面	中世前半～近世	踵骨左 1 若一部焼		
		6-7 面	中世前半～近世	上顎左 M1		
		7 面	中世前半～近世	脛骨左中 1、右下 1 下ハズレなし若		
		7 面下	中世前半～近世	上顎左 M 破片 1		
		ベルト上層	中世前半～近世	上顎左 M2		
		南落ちぎわ下げ	中世前半～近世	歯破片 1		
	149	—	中世～近世	橈骨左中破片 1	1	
	154	—	中世～近世	下顎右 M3	1	
	175	—	中世～近世	踵骨右 1	1	
	184	—	中世前半	下顎骨┌左（P123M123）連合部あり、筋突起・関節突起なし └右（P123M123）連合部あり、筋突起・関節突起なし同一 脛骨右上破片 1、中手骨右中 1 上下切断	3	
	1-2 面	1 層	中世前半～近世	上顎右 M3、下顎右 P3、下顎骨破片 5 上腕骨左下破片 1、寛骨右腸 1	9	
計						88

註　表２参照。

表 4　シカ類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	S339	—	13 世紀頃	上腕骨左中～下 1	1	5
	S346	下層	13 世紀頃	上腕骨右中 1、大腿骨右上 1	2	
	SE38 井筒	—	15 世紀頃	大腿骨左上 1 上ハズレなし若焼	1	
Ⅰ-1 区	包含層	中層	中世後半	距骨右 1	1	51
Ⅱ区	147	6-7 面	中世前半～近世	上腕骨左下 1	1	
	021	下層	中世前半	距骨左 1	1	
	064	—	中世～近世	橈骨右中 1、脛骨左下 1 下ハズレなし若、踵骨右 1 若	3	
	079	—	中世～近世	大型シカ頭静脈突起右 1	1	
	106	—	中世～近世	中手骨中破片 1	1	
	124	上層	中世後半～近世	距骨右 1 半欠	3	
		ベルト 2	中世後半～近世	椎骨破片 1 焼		
		—	中世後半～近世	下顎右 M1 一部焼		
	130	一段下げ	中世前半	大腿骨右上破片 1 焼	1	
	石積遺構	—	11 世紀後半～12 世紀前半	大腿骨左上 1、距骨右 1、角破片 1	3	
	147	4-5 面	中世前半～近世	椎骨 1 半欠	25	
		5-6 面	中世前半～近世	前頭骨右 1、環椎 1、上腕骨右中～下 1 下ハズレなし若 橈骨左中～下 1 下ハズレなし若焼、中手骨中 1 中足骨左上 1、距骨左 1、踵骨右 1、1 一部焼 角破片 1		
		6 面	中世前半～近世	下顎骨右（P234M12 ③）M3 萌出直前若 大腿骨右中 1 若、脛骨左上 1 若上ハズレなし一部焼 大型シカ踵骨左 1		
		6-7 面	中世前半～近世	脛骨左中 1、踵骨右 1 焼、中手足骨中破片 1 焼、中節骨 1、角破片？1		
		7 面	中世前半～近世	右前頭骨一部＊角突起＊角、中手骨中～下 1、角破片 1		
		—	中世前半～近世	上顎臼歯破片 1、踵骨右 1 若		
	164	上部	11 世紀後半～12 世紀前半	中手骨中 1、脛骨右下 1 半欠	2	
	184	南側下層	中世前半	下顎左 M2	3	
		掘り下げ	中世前半	基節骨下 1		
		—	中世前半	中手骨左 1		
	ベルト 1	1-2 面	中世～近世	上腕骨左下 1 焼	1	
	1-2 面	1 層	中世前半～近世	肩甲骨右破片 1 一部焼	2	
		2 層	中世前半～近世	距骨左 1		
	2-3 面	トレンチ B	中世前半～近世	脛骨左中～下 1 一部焼、右下 1 一部焼	2	
	5 面	—	中世前半～近世	中足骨左中～下 1　下は半欠	1	
	5-6 面	—	中世前半～近世	基節骨 1	1	
計						56

註　表 2 参照。

表 5　イノシシ類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
Ⅱ区	106	—	中世～近世	上腕骨左下破片 1、椎骨 1	2
	124	2 層	中世後半～近世	上顎骨左（P34M1）	1
	石積遺構	青面粗砂	11 世紀後半～12 世紀前半	肩甲骨右 1 大	1
	141	包含層	12 世紀後半	尺骨右 1	2
		—		上顎右 M3 未出破片 1	
	144	—	中世	肩甲骨右破片 1	1
	147	5-6 面	中世前半～近世	肩甲骨右 1 一部焼、脛骨右中 1 一部焼	4
		6-7 面	中世前半～近世	上腕骨左中 1 一部焼、右中破片 1 一部焼	
	164	上部	11 世紀後半～12 世紀前半	上顎右 I1	2
		白砂層	11 世紀後半～12 世紀前半	下顎骨左（P34M123）＊M3 半欠若？一部焼	
	184	—	中世前半	頭蓋骨破片 1、下右 I2 一部焼 肩甲骨左 1 大、上腕骨左中～下 1 大	4
	6 面	—	中世～近世	肩甲骨左 1 半欠	1
計					18

註　表 2 参照。大：大型の資料。

表６　イヌ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	SE38 掘り方		15 世紀頃	大腿骨左中～下１	１	１
Ⅱ区	021	下層	中世前半	上顎骨左（×××）P3 ～M1 部分	１	１１
	石積遺構	—	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	尺骨左１	１	
	144	—	中世	中手足骨上１	１	
	147	６面	中世前半～近世	上顎骨右（××××）I1 ～３部分、椎骨１	７	
		６面下	中世前半～近世	上腕骨左中１		
		７面	中世前半～近世	脛骨右中～下１		
		トレンチ暗灰褐色土	中世前半～近世	上腕骨左下１、中手足骨１		
		—	中世前半～近世	上腕骨左上～中１		
	164	上部	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	仙骨１	１	
計						１２

註　表２参照。

表７　ヒト出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	SX33	—	14 世紀頃	脛骨右中１	１	１
Ⅱ区	124	２層	中世後半～近世	寛骨臼破片１	１	１０
	石積遺構	—	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	橈骨左？中１、四肢骨破片１	２	
	144	—	中世	下顎骨 左（××××P2M12） 右（××CP12M12）	１	
	ベルト１	１面	中世～近世	脛骨左中１	１	
	2-3 面	トレンチ A	中世前半～近世	四肢骨破片５	５	
計						１１

註　表２参照。

表８　ウマ or ウシ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	SX31	—	15 世紀頃	肋骨片２	２	１０
	SX36	—	13 世紀頃	四肢骨？破片１、破片３	４	
	SX39	—	13 世紀頃	椎骨破片１	１	
	SX46	下層	13 世紀頃	破片２	２	
Ⅰ-4 区	包含層	中層	中世後半	四肢骨破片１	１	
Ⅱ区	114	—	中世	四肢骨破片１	１	８６
	124	２層	中世後半～近世	破片１	３	
		落ちぎわ礫群	中世後半～近世	破片１		
		—	中世後半～近世	破片１		
	130	一段下げ	中世前半	破片１	１	
	131	—	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	寛骨破片１、四肢骨破片２、椎骨破片 13、肋骨片 14、破片 25	５５	
	141	—	中世	破片１	１	
	147	5-6 面	中世前半～近世	破片１	９	
		6-7 面	中世前半～近世	四肢骨破片３、２焼、肋骨片１、破片１		
		—	中世前半～近世	破片１		
	154	—	中世～近世	破片７	７	
	182	炭化層上面まで	中世前半	肋骨片２	２	
	183	—	中世前半	四肢骨破片３	３	
	184	南側下層	中世前半	破片１	１	
	ベルト１	1-2 面	中世～近世	破片１	１	
	1-2 面	１層	中世～近世	破片２	２	
計						９６

註　表２参照。

表１２　ウマ前臼歯・後臼歯の計測値

	下顎骨①		下顎骨②	
	長さ	幅	長さ	幅
第２前臼歯	30.2	13.2	28.6	12.2
第３前臼歯	25.6	14.5	26.8	13.5
第４前臼歯	24.6	14.5	25.1	11.5
第１後臼歯	22.7	13.3	24.6	12.2
第２後臼歯	22.8	12.7	26.2	10.6
第３後臼歯	28.1	11.8	－	－

註　表２参照。計測値の単位はmm。

表 9　シカ類 or イノシシ類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
Ⅱ区	106	—	中世～近世	椎骨 1 半欠	1
	石積遺構	—	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	四肢骨破片 1、肋骨片 1	2
	147	4-5 面	中世前半～近世	四肢骨破片 2	15
		5-6 面	中世前半～近世	脛骨右中破片 1、四肢骨破片 1、肋骨片 1	
		6-7 面	中世前半～近世	四肢骨破片 6、1 一部焼、肋骨片 1、椎骨破片 1	
		ベルト上層	中世前半～近世	四肢骨破片 1	
	184	南側下層	中世前半	肋骨片 1	1
	1-2 面	1 層	中世～近世	四肢骨破片 5	5
計					24

註　表 2 参照。

表 10　海獣類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ-1 区	包含層	上層	14 世紀頃	クジラ類椎骨 1	1	1
Ⅱ区	124	上層	中世後半～近世	海獣肋骨片 3	7	25
		2 層	中世後半～近世	海獣破片 1		
		3 層（暗褐色土）	中世後半～近世	クジラ類椎骨破片 1		
		—	中世後半～近世	クジラ類椎骨 1 若、海獣破片 1		
	131	2 層	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	海獣破片 1	1	
	147	5 面	中世前半～近世	クジラ類破片 1	3	
		5-6 面	中世前半～近世	クジラ類破片 1 一部焼		
		—	中世前半～近世	海獣破片 1		
	184	南側下層	中世前半	クジラ類破片 1 一部焼	1	
	1-2 面	1 層	中世～近世	クジラ or イルカ頭蓋骨？破片 1 海獣肋骨片 6、破片 2	9	
	南壁石積背面	トレンチ上層	中世	海獣肋骨片 1	1	
	不明	—	不明	クジラ類破片 3	3	
						26

註　表 2 参照。

表 11　その他出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計	
Ⅰ区	SX31	—	15 世紀頃	骨片 1	1	16
	SX36	—	13 世紀頃	陸獣破片 1、骨片 10	11	
	SX46	下層	13 世紀頃	骨片 1	1	
Ⅰ-3 区	杭側	—	中世後半	陸獣破片 3	3	
Ⅱ区	059	上層	中世～近世	骨片 1	1	40
	071	—	中世～近世	骨片 1	1	
	124	2 層	中世後半～近世	陸獣破片 1	5	
		—	中世後半～近世	陸獣四肢骨破片 2、骨片 1、焼骨片 1		
	131	—	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	骨片 3	3	
	石積遺構	裏込め	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	陸獣破片 3	4	
		—	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	骨片 1		
	147	5-6 面	中世前半～近世	陸獣四肢骨破片 1	6	
		6-7 面	中世前半～近世	陸獣破片 1		
		8 面検出	中世前半～近世	焼骨片 1		
		トレンチ東側上層/南側	中世前半～近世	陸獣破片 1		
		ベルト下層	中世前半～近世	陸獣四肢骨破片 1		
		—	中世前半～近世	骨片 1		
	184	掘り下げ	中世前半	陸獣破片 3	3	
	1-2 面	1 層	中世～近世	骨片 15	15	
	2-3 面	トレンチ A	中世～近世	陸獣破片 2	2	
計						56

写真1　ウシ・ウマ（約 1/2）
1．ウシ（成獣）下顎骨左　2．ウマ（若獣）下顎骨②左　3．ウマ（成獣）下顎骨①左
①②の数字は出土内容表を参照

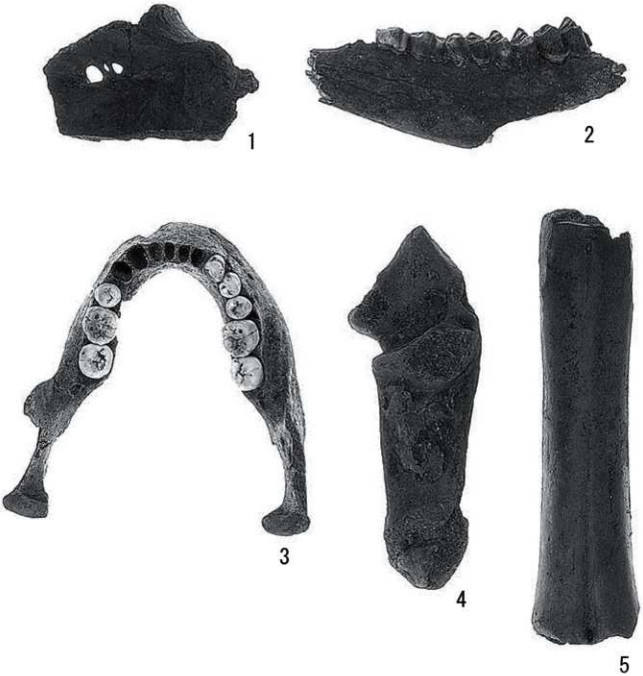


写真２　シカ類・ヒト・ウシ・その他（約 2/3）
１．ニホンジカ前頭骨右　２．種不明下顎骨左　３．ヒト下顎骨　４．大型シカ踵骨左
５．ウシ中手骨右

２、14次調査の動物遺体

博多遺跡群の14次調査では遺構埋土や包含層から動物遺体1018点が出土した。これらはすべて調査時に取り上げられたものであり、その内訳は魚類３点、爬虫類123点、鳥類20点、哺乳類872点であった。これら資料の所属時期は、包含層については上層が12～13世紀、中層は11世紀後半～12世紀前半、下層は11世紀前半以前である。遺構については溝・土坑の中層が11世紀末～12世紀前半、上層が12世紀後半以降で、井戸が12～13世紀以降であるが、新しい資料であっても中世の範囲には収まるとのことである。これらの出土種名を表１に、出土内容を表２～13に、資料の計測値を表14～18に示した。なお、福岡市埋蔵文化財課の常松幹雄氏と池崎譲二氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。また、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、琵琶湖博物館の高橋啓一先生にはノロの現生標本を見せていただいた。ここに感謝いたします。

①魚類・爬虫類（表２）

魚類はサワラ類？の椎骨２点と種不明の椎骨１点が出土した。サワラ類？は体長１ｍ前後と思われる個体であり、種不明とした資料も大型の個体である。サワラ類？のうち１点と種不明椎骨には切断痕が見られた。爬虫類ではウミガメ類の甲羅破片が計123点出土した。背甲の破片と判別できた資料もあるが、多くの破片は細かく割れていたため、背甲か腹甲かはわからなかった。

②鳥類（表３・14）

出土した20点のうち種を同定できた資料は13点であり、これらはすべてニワトリであった。上腕骨が１点、尺骨２点、大腿骨１点、脛骨５点、中足骨４点が見られたが、このうち少なくとも７点が包含層の上層下部から中層上部で出土しており、12世紀頃の資料が多いと思われる。完存で長さを計測できる部位については表３中でNo.をつけ、表14に計測値を示した。上腕骨①（写真1-1）は長さ64.4㎜で、現生キジ雄標本よりも短い。尺骨は２点のうちの１点が完形（写真1-2）で長さ72.0㎜であり、これは現生オナガドリ雄標本とほぼ同じであった。大腿骨（写真1-7）は遠位端が破損しており計測できなかったが、上述のオナガドリ雄より少し長いと思われる。脛骨では３点を計測することができたが、３点とも近位端が若干破損しているので長さは推定値である。①（写真1-8）の108.6㎜は上述のキジ雄より若干短いが、②（写真1-9）の122.0㎜は現生白色レグホン雌標本と同程度であり、③（写真1-10）の129.0㎜は同じく白色レグホン雌より少し長い。中足骨４点はすべて雄でケヅメがあり、①（写真1-3）の81.6㎜は上述のオナガドリ雄より少し長く、③（写真1-5）の84.1㎜は上述の白色レグホン雌と同程度である。

③哺乳類（表４～13）

出土資料872点のうち、陸獣で種を同定できたのは、シカ類221点、イヌ135点、イノシシ類108点、ウマ72点、ウシ61点、ヒト23点、クマ１点、ウサギ１点の計622点である。海獣類ではクジラ類・イルカ類など５点が出土した。

ａ．シカ類（表４）

哺乳類の中で最も多い221点が出土した。出土した資料は現生ニホンジカ標本（愛知県産）と比べて同程度の大きさのものもあったが、それより少し小さな資料もあり、さらに現生標本よりひとまわり小さな資料まで、大きさの変異が見られた。この変異は雌雄差と個体差の両方を含むのであろう。これらはいずれもニホンジカと思われるが、その範囲から明らかに外れる小型の資料も２点見られた。１点は表４で小型シカと記載したG区中層上部出土の左脛骨中間部～遠位部（写真2-12）で、もう１点はG区中層中部出土の右中足骨近位部（写真2-14）である。この２点は関節部・骨幹部の幅が上述のニホンジカ標本よりかなり小さく、現生ノロ標本（琵琶湖博物館蔵）とほぼ同じであるので、ニホ

ンジカより小型の種と思われる。これら以外に、G区中層中部出土の小型シカ？とした右距骨（写真2-15）は長さ31.6㎜で、大分県産ニホンジカ現生標本の距骨長さは35.8㎜、現生ノロ標本は29.5㎜であることから、ノロ標本よりはわずかに大きいが、これもニホンジカより小型の種である可能性が高い。また、G区中層下部出土の小型シカ？とした左上腕骨中間部は、骨幹部中央あたりで切断され、遠位端はイヌ等にかじられて消失しており、骨幹部だけなのではっきりしたことはわからないものの、成獣であるとすれば大きさ・幅がノロと同一であり、ニホンジカより小型の種ということになる。若くてまだ小さいニホンジカのものかもしれないが、骨体はかなりしっかりしており、成獣のものであってもおかしくない。一方、221次調査では出土したニホンジカよりも明らかに大きく「大型シカ」としたタイプは出土しなかった。

ニホンジカの下顎骨から見た最小個体数は、幼獣１個体、若獣１個体、成獣３個体の計５個体であるが、四肢骨で見ると最も多い脛骨遠位端から、若獣３個体、成獣11個体の計14個体であった。解体痕の見られる資料が多く、特に上腕骨に多く残っていた。骨を加工しようとした跡の残る資料もあり、溝２出土の左脛骨遠位端では骨幹部から関節部分を切り取った跡が見られ、遠位端が骨製品作成過程での不要部分であったのかもしれない。B区中層出土の脛骨左中間部～遠位端も関節部分を切り取ろうとした痕が見られ、同様の加工であろう。B区上層出土頭蓋骨では角突起が角座の下でたたき切られていた。なお、縄文時代の遺跡ではシカ四肢骨は斜めに割れた状態で出土するのが一般的であるが、中世の当遺跡では四肢骨は長軸と直行する横方向に切断されているケースが多かった。

b．イヌ（表５・15・16）

135点すべての資料が散乱した状態で出土し、解体痕の残る資料も複数見られた。発掘時に埋葬状態で出土した個体は見られなかったとのことであるが、溝３では同一個体に属すると思われる若獣の上下顎骨や四肢骨の一部が出土しており、もともとはほぼ１個体分の各部位が存在したのかもしれない。出土した成獣の頭蓋骨と下顎骨には表５中でNo.をつけ、これらの頭蓋骨の計測値を表15に、下顎骨の計測値を表16に示した。計測点は斎藤（1963）に従った。出土最小個体数は、下顎骨で見ると幼獣１個体、若獣２個体、成獣10個体の計13個体となった。

欠損のためにすべての頭蓋骨で最大頭蓋長は計測できなかった。そのため、表15では推定体高を示していない。完存の資料はないが、比較的欠損部分が少ない頭蓋骨①（写真1-11）では、現生柴犬標本の頭蓋骨と比較すると、全体形は少し長いがやや細い。この資料のストップはややはっきりしており、頬骨弓もやや張り出すが、その張り出しは柴犬よりは弱い。頭蓋骨③は現生柴犬よりも全体がやや小さいと思われ、頭蓋骨⑤はひとまわり大きいと思われる。頭蓋骨④ではストップははっきりしており、後頭部が斜めに切断されていた。

また、表16では10点の下顎骨の計測値と、下顎骨全長から復元した９点の推定体高を示した。体高の復元は、山内（1958）による。これら10点の下顎骨は形態から見て互いに別個体である。特に下顎骨③と下顎骨⑩は計測値が近似し、推定体高も近接しているが、第１後臼歯や第２後臼歯などの形態が少し異なり、やはり別個体と思われる。下顎骨から復元した推定体高には、最小の37㎝から最大の48.3㎝までと差があった。37㎝は現生柴犬程度の大きさであるが、それ以外はすべて40㎝を超えていた。下顎骨の形態については、下顎底が下顎骨⑨（写真1-13）はかなり平らであったが、その他の資料はやや丸く、骨体の高さは平行に近い資料の方が多かった。歯列の湾曲はいずれも現生柴犬より若干大きい。

c．イノシシ類（表６）

ここでイノシシ類とした資料108点には、「ブタ」と「イノシシかブタかを確定できない資料」の両

方が含まれている。出土した四肢骨の大部分は、現生野生ニホンイノシシ標本（岐阜県産）と比べて長さも幅もかなり大きい。また上述の現生標本と関節面の幅は同程度であるものの、明らかに太く肥大している資料も見られた。下顎骨も骨体が厚く肥大したものが多い。下顎連合部下面が残存し観察可能な資料は、B区中層出土の左右下顎骨とC区上層出土の下顎連合部破片の２点であるが、いずれも連合部下面は凹んでいた。また、B区中層出土左下顎骨（写真2-2）では、下顎連合部下面は大部分が欠損しているのでその状況はよくわからないものの、左右の下顎骨体のなす角度は野生イノシシよりも大きい。これらの資料には明らかに家畜化現象が認められることから、いずれも野生イノシシではなくブタと思われる。ただし、E区中層で出土した肩甲骨は上述の現生ニホンイノシシ標本と同程度の大きさで骨体もひきしまっており、ブタかもしれないがイノシシであってもおかしくない。また、同じE区中層で出土した上腕骨（写真2-3）は現生リュウキュウイノシシ標本（西表島産）と同程度の大きさであり、沖縄産などの小型のブタかもしれない。解体痕の残る資料も多く見られ、その他で出土した橈骨（写真2-5）は病変で骨幹部が幅広に変形していた。

最小個体数は下顎骨で見ると、幼獣１個体、若獣３個体（雄１・雌２）で成獣は出土していないが、上顎骨で見るとB区中層で雌成獣１個体が出土している。この右上顎骨（写真2-1）は顎だけでなく右の側頭骨・前頭骨・鼻骨の一部が残存しており、頭蓋骨は正中線で割られている。前頭骨から鼻骨にかけての部分は凹んでおらず、現代のブタほどは頭蓋骨が短縮化していない。けれども、歯は上述の現生ニホンイノシシ標本よりもひとまわり大きく、第２・第３後臼歯間の歯槽骨には歯周病が見られ、ブタであると思われる。第３・第４前臼歯と第１後臼歯は摩滅が著しく進んで歯冠部が残存せず、第２後臼歯も摩滅のために歯冠部の半分以上がなくなっている。最後に萌出する第３後臼歯も一部で歯頸線下まで摩滅が及んでおり、これらの摩滅状況からはかなり高齢の個体であると思われる。種ブタとして飼育されていたのかもしれない。

d．ウマ（表７・17・18）

14次調査出土動物遺体のうちで、体積では最も多くを占めたのがウマであるが、出土点数は72点と意外に少なかった。骨端の状態などから若獣と判断できる資料は、E区中層で出土した脛骨と中足骨の２点のみで、ほとんどの資料は成獣と思われる。ただし、溝１ではウマ？の胎児で同一個体と思われる資料が出土しており、中手骨・寛骨・大腿骨・脛骨・中足骨？が見られた。骨端部がない状態で、大腿骨の長さは41.0㎜で、脛骨の長さは43.2㎜であった。寛骨の腸骨と坐骨はまだ癒合しておらず、分離していた。なお、E区下層で出土した寛骨には解体痕が見られた。

下顎骨と完存の四肢骨には表７でNo.をつけ、下顎骨については歯の計測値を表17に、四肢骨については長さとそこから復元した体高を表18に示した。体高の復元は林田他（1957）による。なお、脛骨のうち①左脛骨と②右脛骨は同じA区下層から出土し、表17でもデータが一致しており、同一個体かもしれない。また、他にも表17には異なる部位同士でも同一個体の組み合わせが含まれている可能性がある。表17で復元された体高を見ると、最小が115.8㎝で最大が142.2㎝であり、110～120㎝台のものが多い。筆者所蔵の現生ヨナグニウマ雌の体高が約110㎝であり、現代の木曽馬の体高が約135㎝程度とされているので、上腕骨②の142.2㎝以外は日本在来馬の範囲に収まっているが、出土したウマの大きさにはかなりバラエティがあったと言える。

e．ウシ（表８）

ウシもウマと同様に体積が大きいわりに出土点数は61点と少なかった。出土資料は現生改良和種標本と比べると少し小さいものが多いが、同程度のものやひとまわり大きなものも見られた。解体痕の見られる四肢骨も複数見られた。また、角芯が土層確認トレンチとB区中層とその他でそれぞれ１点

ずつの計３点出土したが、いずれもナタ状の刃物で何度もたたいて、根本から切り取られていた。南側トレンチで出土した頭蓋骨も、角芯は切り取られており、角が加工品の材料とされたのであろう。

C区中層で出土した下顎骨は現生改良和種標本より歯も骨体もかなり小さく、第１後臼歯の長さは20.5㎜、第２後臼歯の長さは22.6㎜だった。また、溝３から出土した下顎骨は、第４前臼歯の後半から第１後臼歯にかけての摩滅が他の歯種に比べてひどく進んでいた。

ｆ．ヒト（表９）

頭蓋骨の一部や四肢骨とそれらの破片23点が散乱状態で出土した。四肢骨では骨端部がイヌなどに激しくかじられて消失しているものが目立ち、遺体が動物の餌になっていた状況がうかがわれる。B区中層で出土した後頭骨・右側頭骨は乳様突起が大きく、男性の可能性が大きい。また、溝３出土の大腿骨は現代日本人男性標本よりも長さ・幅共にひとまわり大きかった。

ｇ．その他（表10～13）

その他の種が判明した陸獣には、クマの上腕骨中間部１点とウサギの上腕骨１点がある。表13で種不明陸獣とした下顎第３後臼歯は、形状はシカに近いものの第３後臼歯の最後部の咬頭が非常に小さい点が大きく異なり、先に述べた221次調査出土の種不明下顎骨と同じ種と思われる。この資料はシカ属ではなく、ノロ・カモシカ・ヤギ・ヒツジでもない。また、中小陸獣とした椎骨は、形状はキツネに近いが少し異なる資料で、大きさはホンドギツネよりもやや大型の現生キタキツネ標本と同程度である。海獣類では、イルカ類の後頭骨破片１点とクジラ類破片３点、海獣破片１点が見られた。

上述の資料以外には、表10～12に示したように、ウマまたはウシの椎骨とその破片・四肢骨破片・肋骨片などが67点、シカ類またはイノシシ類の椎骨とその破片・四肢骨破片・肋骨片などが130点、陸棲哺乳類としか判別できない陸獣破片が43点と、保存状態が悪く小片のため陸獣か海獣かも判別できない破片が３点出土している。

＜引用文献＞

斎藤弘吉1963『犬科動物骨格計測法』
盛和林・大泰司紀之・陸厚基2000『中国の野生哺乳動物』中国林業出版社
林田重幸・山内忠平1957「馬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報告６、146-156頁
山内忠平1958「犬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報告７、125-131頁

表１　出土動物種名

Ⅰ．魚類
　１　サワラ類？
Ⅱ．爬虫類
　１　ウミガメ類
Ⅲ．鳥類
　１　ニワトリ
Ⅳ．哺乳類
　１　ノウサギ
　２　ツキノワグマ
　３　イノシシ類
　４　ニホンジカ
　５　シカ類
　６　クジラ類
　７　イルカ類
　８　イヌ
　９　ウマ
　10　ブタ
　11　ウシ
　12　ヒト

表２　魚類・爬虫類出土内容

発掘区	遺構・層位		種	部位・点数	計
A	溝２	中層	サワラ類？	椎骨１	3
C	包含層	上層下部	サワラ類？	椎骨１	
M	包含層	上層下部	不明大型魚類	椎骨１	
A	溝２	中層	ウミガメ類	背甲片１	123
G	溝３	一括	ウミガメ類	背甲片３	
C	土層確認トレンチ		ウミガメ類	甲羅片３	
	包含層	上層	ウミガメ類	背甲片 22、甲羅片 94	

表３　鳥類出土内容

発掘区	遺構・層位		種	部位・点数	計
G	溝３	一括	種不明	四肢骨中１	1
ACG	土層確認トレンチ		ニワトリ	脛骨右１①、中足骨左１♂③、右上～中１♂	4
			種不明	四肢骨破片１	
L	北側トレンチ		ニワトリ	脛骨左１③	1
A	包含層	中層上部	ニワトリ	大腿骨左１	1
B	包含層	上層下部	ニワトリ	中足骨右１♂①	2
			種不明	四肢骨中１	
		中層上部	ニワトリ	中足骨右１♂②	2
			種不明	四肢骨中１	
		中層中部泥炭層	種不明	四肢骨中１	1
		下層	ニワトリ	尺骨左１①	1
C	包含層	上層下部	ニワトリ	尺骨左上１、脛骨右１②	3
			種不明	四肢骨中１	
E	包含層	中層上部泥炭層	ニワトリ	上腕骨右１①	1
H	包含層	中層上部	ニワトリ	脛骨左下１	2
			種不明	四肢骨中１	
その他			ニワトリ	脛骨左下１	1
計					20

註　上：近位部、中：中間部、下：遠位部、上・中・下のないものは完存。
　　計測可能な四肢骨には No. をつけ、対応する計測値を表 14 に示した。

表 4　シカ類出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
B	溝 1	一括	橈骨左上 2	2
A	溝 2	中層	橈骨左下 1 若下ハズレなし、中破片 1、大腿骨左中 1 脛骨左下 1、右下 1、中足骨右 1、落角座＋角一部右	7
BCG	溝 3	一括	前頭骨一部＋頭頂骨一部＋側頭骨一部（眼骨突起あり）左②、下顎筋突起右 1 上腕骨左中～下 1、右上～中 1、右 1 一部後、橈骨左上～中 1、右 1、尺骨左 1 中手骨左 1、左右不明中 1、寛骨左坐 1、大腿骨左下破片 1 若ハズレ後、右上 1 脛骨右中破片 2、踵骨左 1、基節骨 3、中節骨 1、末節骨 2	22
G	井戸 3		橈骨左 1	1
	井戸 3 掘り方		中手骨右中～下 1 若下ハズレなし	1
B	井戸 6		上腕骨右下 1 半欠後、脛骨右中～下 1 若下ハズレなし	2
	井戸 6 掘り方		橈骨右中～下 1	1
D	土坑 2		基節骨 1	1
	土坑 3		脛骨左下 1	1
ABCG	土層確認トレンチ		下顎骨左（×P34）成か、下顎関節突起＋筋突起右 1、肩甲骨右 1、上腕骨右下 1 尺骨左 1、中手骨中破片 1、寛骨左臼破片 1、大腿骨左上～中 1 若上ハズレなし 下 1、下骨塊のみ 1 若ハズレ、中 1、右 1 若上下ハズレなし解体痕あり、中 1 脛骨左中 1、右下 1、下 1 若下ハズレなし、中足骨左 1、右中 1、左右不明中破片 1	19
IL	北側トレンチ		上腕骨左中～下 1 解体痕あり、中手骨右 1、上～中 1、大腿骨左上 1、中 1、脛骨右下 1 解体痕あり	6
BK	南側トレンチ		下顎骨左（×××××）成 P2～M3 脱落、M12 部分病変 軸椎 1 半欠、橈骨左 1、尺骨左 1、中足骨左中 1	5
C	東側セクション		橈骨右上 1	1
G	南側セクション		橈骨左上～中 1、脛骨右上～中 1、下 1	3
A	包含層	上層	脛骨右上～中 1 若上ハズレなし	1
		中層上部	下顎枝左 1	1
		中層中部泥炭層	基節骨 1	1
		下層	軸椎 1、中手骨右 2	3
B	包含層	上層下部	前頭骨一部＋角突起左、中手骨下 1、寛骨右臼 1、大腿骨右上 1 中足骨左上 1 半欠、右下 1 若下ハズレなし、基節骨 1	7
		中層上部	橈骨左下 1 半欠、脛骨左中～下 1	2
		中層中部泥炭層	上腕骨左（P234）、下顎骨左（P4M123）成、右（×P34M1）、軸椎 1/3 肩甲骨右 1、上腕骨右下 1 若下一部ハズレなし、橈骨左上～中 1 中手骨左上～中 1、右 1、中手骨中破片 1、寛骨左臼＋坐 1、右臼破片 1 大腿骨左上 1、右中 1、脛骨右中 1、中破片 1、踵骨右 1、中足骨左 1 基節骨 4、1 若上ハズレなし、橈骨 1	24
		下層	肩甲骨右破片 1、脛骨左下 1 若下ハズレなし	2
		不明	橈骨右上 1、距骨右 1、基節骨 1	3
C	包含層	上層	橈骨左下 1	1
		上層下部	側頭骨一部（下顎関節窩あり）右、中手骨中 1、肩甲骨左 1 大腿骨右上～中 1 若上ハズレなし下切断、脛骨右上 1 若上ハズレあり、中 1、踵骨右 1、角破片 2	9
		中層	中手骨右上～中 1	1
		中層上部	脛骨右下 1	1
		中層中部泥炭層	下顎骨右（m234M1 ②）M3 M2 未出歯槽閉ぐ、肩甲骨左 1、右 1 上腕骨右上～中 1、下 1 解体痕あり、中 1、橈骨右 1、寛骨右 1、脛骨右上 1 中足骨右上～中 1、中破片 1	11
		中層下部	肩甲骨左 1、脛骨右下 1	2
		下層	肩甲骨右 1、上腕骨右下 1、脛骨右下 1、中足骨右中～下 1 若下ハズレなし	4
D	包含層	中層	上腕骨右中 1、脛骨右中 1	2
E	包含層	上層	下顎骨右（P234M123）成 M3 半欠、肩甲骨左 2、脛骨右上 1	4
		上層中部	下顎骨左（×P34M123）成、脛骨左下 1、中 1	3
		上層下部	脛骨左下 1、右上 1、下 1、中足骨左上 1、右下 1	5
		中層上部泥炭層	下顎骨左（××××P2 ×）、肩甲骨右破片 1 中足骨左中～下 1 若下ハズレなし、基節骨 1 若上ハズレなし、中節骨 1	5
		中層中部	脛骨左上～中 1	1
		中層下部	大腿骨右中 1	1
G	包含層	上層下部	下顎骨右（P34M123）成、上腕骨右下 1 半欠、中手骨下 1、踵骨右 1、手足根骨 1	5
		中層上部泥炭層	下顎骨右（m234M1 ②）若 M2 萌出途中、右（P234M123）M3 ほぼ萌出完了 橈骨左下 1 解体痕あり、寛骨右坐 1、坐破片 1、脛骨左中～下 1 中足骨下 1 若下ハズレなし、小型シカ脛骨左中～下 1	8
		中層中部泥炭層	橈骨左 1、尺骨右 2、中手骨下 1、脛骨右下 1、小型シカ距骨右 1、小型シカ中足骨右上 1	7
		中層下部	上腕骨左中～下 1 解体痕あり、橈骨左上～中 1、中手骨左 1 脛骨右 1 若上下ハズレなし、小型シカ下上腕骨左中 1	5
		不明	脛骨左中～下 1 解体痕あり	1
H	包含層	中層上部	中手骨中破片 1	1
		不明	中足骨左 1 若下ハズレなし	1
K	包含層	上層	下顎骨左（××××P234M123）成	1
N	包含層	上層	肩甲骨右 1、大腿骨左 1、脛骨左中～下 1	3
その他			前頭骨一部＋角突起右、上顎骨左（P234M12）＋切歯骨左 下顎関節突起＋筋突起右、橈骨 1/2、肩甲骨左 1、右 1 上腕骨左 1 若上ハズレあり解体痕あり、中～下 1 解体痕あり 橈骨左上～中 1 解体痕あり、尺骨左 1、右破片 1、中手骨左中 1、右上～中 1 左右不明中 1、大腿骨右下 1、脛骨左中 1 右上～中 1、上 2 若上ハズレなし、下 1、距骨左 1、中足骨左中 1、基節骨 1	23
計				221

註　表 3 参照。I：切歯、C：犬歯、P：前臼歯、M：後臼歯、m：乳臼歯、I・P・M・m に伴う数字は歯の順番を示す。
（　）は顎骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。○のついた歯は未出または萌出途中であることを示す。
橈：橈骨部分、坐：坐骨部分、寛：寛骨部分、後：後付け資料、ハズレなし：成長途中であるため骨端が分離して、かつ残存していないことを示す。
ハズレあり：成長途中であるため骨端が分離していなが、残存していることを示す。幼：幼獣、若：若獣、成：成獣。幼・若のないものは成獣。

表５　イヌ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
BC	溝１	一括	肋骨片１、腓骨１若	2
BCG	溝３	中層中部	椎骨２	49
		一括	類骨左１＋上顎骨左（P ②③×××）若 P234 萌出途中、M2 も萌出途中か 下顎骨右（©×× P ③×× M2 ③）若 C 萌出途中、P34 途中、M3 未出 上腕骨左１若上下ハズレなし、尺骨左１若、寛骨左坐１ハズレ 大腿骨左１若上下ハズレなし、脛骨左１若上下ハズレなし 脛骨右１若上下ハズレなし、橈骨２若、肋骨 20 頭蓋骨①頭頂～後頭部以外ほぼ完存 　上顎骨左（×××× P4M12）＋右（I123 × P12 × P4M12） 頭蓋骨②吻部と右類骨弓なし 下顎骨右（×××× m23 ×）幼すべて乳歯、M1 未出歯槽開く 軸椎１、橈骨左１、尺骨右破片１、寛骨左１病変・解体痕あり 大腿骨左１、左１解体痕あり、中～下１、中１ 椎骨破片１、肋骨片５	同一
G	井戸３		下顎骨右（××× C × P234M12 ×）⑨、脛骨右１、四肢骨破片１	3
	井戸４		大腿骨左１	1
C	ピット２		頭蓋骨⑤左右前頭～頭頂部と右類骨弓なし 　上顎骨左（I12 × CP1234M12）＋右（I12 ×× P12 × P4M12）	1
ABG	土層確認トレンチ		頭蓋骨③吻部と左右類骨弓なし 下顎骨左（×××××××）若 P1 ～ M3 部分、P234 は萌出途中 下顎骨右（×××××× P34M1 ××）⑧ 大腿骨右中１、脛骨左中１、右１若上ハズレなし、肋骨片１	7
I	北側トレンチ		頭蓋骨④左右類骨弓と右側頭部と左右後頭部なし 　上顎骨左（××× C × P23 ××）＋右（×× I3C ××）	1
BKN	南側トレンチ		頭蓋骨破片１、上顎骨左（m23 ×）幼すべて乳歯 下顎骨左（×××××××× M12 ×）⑤、大腿骨左１、脛骨右中～下１	5
E	北側セクション		下顎骨左（××× C × P234M12 ×）①、椎骨１	2
G	南側セクション		脛骨右１	1
A	包含層	中層下部	上腕骨右１	1
B	包含層	上層下部	上顎骨左（×××× P4）C ～ P3 脱落	1
		中層上部	下顎骨右（× I2 × C × P234M12 ×）⑩	1
		中層中部泥炭層	側頭骨類骨突起右１、下顎骨左（××× C ×× P34M123）③ 肩甲骨右１、上腕骨左中～下１、脛骨左１	5
		中層下部	下顎骨左（©× m 2P ③④× M2 ③）若 C 萌出途中、P34 萌出始め、M3 未出 環椎１	2
		下層	下顎骨左（×××× P1234M123）④、肩甲骨右破片１、上腕骨左中～下１ 右中～下１若下ハズレなし、橈骨左中１、大腿骨左１、右１、肋骨片１	8
		不明	橈骨左１	1
C	包含層	上層下部	上腕骨右中～下１解体痕多い、肋骨片２	3
		中層中部泥炭層	上腕骨右中～下１解体痕あり、橈骨上～中＋尺骨右１、中手足骨１	3
		中層下部	脛骨左１、椎骨２、肋骨片３	6
		下層	肩甲骨右１、上腕骨左１	2
E	包含層	上層下部	四肢骨破片１	1
		中層上部	下顎骨左（××× CP1 × P34M12 ×）② 下顎骨右（××× C ×× P34M12 ×）P4 奇形⑦、脛骨右１解体痕あり	3
		下層	脛骨右１	1
G	包含層	上層下部	大腿骨右１	1
		中層上部泥炭層	肋骨片２	2
		中層中部泥炭層	橈骨左１	1
		中層下部	下顎骨右（××××× P234M12 ×）⑥、肩甲骨右１ 上腕骨左中～下１、大腿骨右中１、中手足骨１	5
K	包含層	上層	椎骨１	16
その他			肩甲骨左１、上腕骨左１、右１、尺骨右２、大腿骨左１、右１ 脛骨右１、下１解体痕ゥ多い、踵骨右１、椎骨１若、肋骨片４	
計				135

註　表３・４参照。同一：同一個体。計測可能な頭蓋骨・下顎骨には No. をつけ、対応する計測値を表 15・16 に示した。

表6　イノシシ類出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
B	溝1	一括	上腕骨右下1解体痕あり	1
AB	溝2	中層	中手足骨1、2若下ハズレなし	4
		一括	中手足骨1若下ハズレなし	
BCG	溝3	上中層	下顎骨右（M1②）幼M2未出歯槽開く	12
		一括	下顎骨左（© m234M1）幼M2未出歯槽開く、C未出、肩甲骨左1 橈骨右1若下ハズレなし、上～中1、大腿骨左下1切断 脛骨右中～下1、中1、距骨左1、中手足骨1、上1、側指1若下ハズレなし	
G	井戸3		中手足骨下1、中1	2
	井戸	一括	上腕骨左中1	1
AB	土層確認トレンチ		頬骨左1、上顎骨右（CP1234M12）♀若～成、肩甲骨左破片1、右1 橈骨左上1大、尺骨右1若、脛骨右中1、中手足骨上1、下1大、基節骨1	10
IL	北側トレンチ		上腕骨左下1解体痕あり、橈骨左1若下ハズレなし 脛骨右上～中1若上ハズレなし	3
A	包含層	中層上部	中手足骨1	1
B	包含層	上層下部	上腕骨右上1、橈骨右上～中1＋尺骨右1、尺骨左破片1、中手足骨1、側指1	5
		中層上部	寛骨左1、踵骨右1若、中手足骨上1	3
		中層中部泥炭層	側頭骨＋前頭骨＋鼻骨一部右＋上顎骨右（P34M123）♀老 下顎骨左（112×C欠×）＋右（112××）♀若～成 下顎骨左（× m4M1②×）♀？若M2萌出途中、M3未出歯槽開く 上腕骨左中1、中手足骨1若下ハズレなし	5
		中層中部白磁溜	中手足骨（側指）上1	1
		中層下部	中手足骨上1	1
		下層	下顎骨右（P234M12③）♀若M3萌出途中、下I2右1 上腕骨右上1、橈骨左上～中1	4
		不明	寛骨左腸破片1	1
C	包含層	上層	末節骨1	1
		上層中部	脛骨右中～下1	1
		上層下部	下顎連合部下面破片1♂若、肩甲骨右破片1、橈骨左1若下ハズレあり 中手足骨1	4
		中層	側頭骨頬骨突起左1	1
		中層中部泥炭層	肩甲骨右破片2、上腕骨右下1解体痕あり、下1、脛骨左中1一部焼、右中1	6
		中層下部	大腿骨右中～下1若下ハズレあり、踵骨左1、中手足骨1	3
		下層	寛骨右1	1
D	包含層	上層上面	踵骨左1	1
E	包含層	上層	尺骨右下1、大腿骨左下1解体痕多	2
		上層下部	下顎C左1雄一部焼	1
		中層上部泥炭層	下顎C右1雄、肩甲骨右1、上腕骨右下1解体痕あり、下1 大腿骨左下1解体痕多、距骨右1半欠、膝蓋骨右1	7
		下層	下顎C右1雄一部焼、上腕骨左下1解体痕多	2
G	包含層	上層中部	側頭骨頬骨突起左1	1
		上層下部	上腕骨右下1若下ハズレなし解体痕あり、中手足骨1若下ハズレあり	2
		中層上部泥炭層	肩甲骨左1、尺骨右下1若、脛骨右上1切断	3
		中層中部泥炭層	前頭骨一部＋頭頂骨＋後頭骨一部左	1
		中層下部	中手足骨（側指）1	1
H	包含層	中層上部	尺骨右破片1	1
K	包含層	上層	尺骨左下1	1
M	包含層	中層上部	中手足骨（側指）1	1
その他			頭頂骨右破片1、後頭顆右1、頭蓋骨破片2、上I1右1 肩甲骨右破片2、上腕骨右下半欠1一部焼、中1、橈骨右上～中1病変あり 脛骨右中～下2、中1	13
計				108

註　表3・4参照。老：老獣。大：大型の資料。

表７　ウマ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
B	溝１	一括	中手骨左右不明１、寛骨左腸＋坐１、大腿骨左１、右１ ┐胎児同一 脛骨左１、右１、中足骨右？１ 中手骨中１、中足骨左上～中１	9
BCG	溝３	一括	頭蓋骨破片１、上顎左 I2、右 I1、P3、下顎骨左（P234M123）① 上腕骨右中～下１、右破片１、大腿骨左中～下１、中破片１、末節骨１	10
G	井戸２掘り方		軸椎１	1
ACG	土層確認トレンチ		環椎１、肩甲骨左１、上腕骨右１①、末節骨１	4
I	北側トレンチ		下顎関節突起左１、橈骨＋尺骨左１①、中手骨左１③ 大腿骨右中１、中足骨右１②	5
BK	南側トレンチ		下顎骨右破片１、肩甲骨左１、上腕骨左中～下１、寛骨左１、中足骨左１③	5
E	北側セクション		寛骨左腸破片１	1
G	南側セクション		脛骨右１③	1
A	包含層	上層	中節骨１	1
		中層上部	上腕骨右１②、橈骨＋尺骨右１③、中手骨右１①、基節骨１	4
		中層下部泥炭層	橈骨＋尺骨左１②	1
		下層	脛骨左１①、右１②、中足骨右１①	3
AD	包含層	上層	上顎左 I3	1
B	包含層	中層下部	上腕骨右中～下１	1
		下層	上顎左 M3、右 M3、下顎骨破片１、寛骨左１	4
C	包含層	中層下部	上腕骨左１、中１	2
E	包含層	中層上部泥炭層	上顎左 P3、右 P2、脛骨左１若上下ハズレなし、中足骨左上～中１若	4
		下層	中手骨右１②、寛骨左１解体痕あり	2
G	包含層	中層上部泥炭層	下顎骨破片１	1
		下層	前頭骨一部＋頭頂骨＋後頭骨一部左右	1
K	包含層	上層	上顎左 P4、橈骨＋尺骨右１④	2
		下層	上腕骨左下外側 1/2	1
L	包含層	上層	下顎骨左（××P4 ×）②、寛骨左坐破片１	2
M	包含層	上層	上顎骨破片１、尺骨右１	2
N	包含層	上層	踵骨右内 1/2 のみ	1
その他			上顎左 M1、中手骨右１、踵骨左１	3
			計	72

註　表３・４参照。下顎骨と完存の四肢骨には No. をつけ、対応する計測値を表 17・18 に示した。

表８　ウシ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
G	溝３	一括	下顎骨右（P234M12）、下顎骨破片１、寛骨右腸＋恥１切断痕あり	3
	井戸２掘り方		下顎関節突起右１	1
	井戸３		側頭骨関節突起右１	1
ABD	土層確認トレンチ		角芯右１切断痕あり、下顎歯破片１、軸椎１若、橈骨右上１ 尺骨左１、脛骨左上破片２、中破片１	8
I	北側トレンチ		下顎骨左（P234M123）、橈骨左１若下ハズレなし	2
BK	南側トレンチ		前頭骨一部＋角突起＋頭頂骨一部右、肩甲骨右破片１、中足骨右１ 距骨右１半欠、踵骨右１一部焼解体痕あり、手足根骨３	8
E	北側セクション		中手骨左内側 1/2 若下ハズレなし	1
A	包含層	中層上部泥炭層	橈骨左中１	1
		中層中部泥炭層	基節骨１	1
B	包含層	上層	上顎右 M3	1
		上層下部	軸椎破片１、基節骨１	2
		中層上部	踵骨左１、角芯左１切断痕あり	2
		中層中部泥炭層	上顎骨右（M3）、中足骨右１、距骨右１、手足根骨１	4
		下層	中手骨左１	1
C	包含層	上層	下顎関節突起右１、中手骨左１	2
		中層中部泥炭層	下顎骨左（P4M123）、下顎骨破片１ 大腿骨右下１切断・解体痕あり、脛骨右上～中１	4
		下層	中手骨左上外側 1/2、中足骨中破片１	2
E	包含層	中層上部泥炭層	上腕骨右上破片１	1
		中層下部	中手骨右１、寛骨左腸破片１	2
G	包含層	上層下部	上腕骨右中１	1
		中層中部泥炭層	大腿骨右上１一部焼	1
N	包含層	上層	頭蓋骨破片１	1
その他			角芯右１切断痕あり、上顎右 M2、M3、下顎骨右（M3） 下顎左 I2or3、肩甲骨左破片１、橈骨左中１若、中手骨右１ 脛骨右下１、中足骨左１、踵骨左１若前端部分切断	11
			計	61

註　表３・４参照。

表9　ヒト出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
A	溝2	中層	橈骨左中1	1
C	溝3	一括	大腿骨右中1	1
ABC	土層確認トレンチ		上腕骨左中2、大腿骨左中1、脛骨左中1	4
I	北側トレンチ		上腕骨左中1	1
B	包含層	中層下部	後頭骨＋右側頭骨、頭蓋骨破片1	2
C	包含層	上層	寛骨左腸破片1、脛骨左中1	2
		上層下部	橈骨左中1	1
		中層下部	頭蓋骨破片2	2
E	包含層	上層黄緑砂層	四肢骨破片1	1
		上層中部	頭蓋骨破片1	1
		中層上部	橈骨左中1	1
		中層中部	四肢骨破片1	1
G	包含層	中層上部泥炭層	尺骨左破片1	1
H	包含層	中層上部	四肢骨破片1	1
その他			頭蓋骨破片1、脛骨右中1、腓骨右中1	3
			計	23

註　表3・4参照。

表10　ウマ or ウシ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
A	溝2	中層	椎骨1若、四肢骨破片1	2
CG	溝3	一括	椎骨破片1、肋骨片4、破片2	7
D	土坑2		四肢骨破片1	1
ABG	土層確認トレンチ		四肢骨破片3、肋骨片3、破片2	8
L	北側トレンチ		肋骨片2	2
B	南側トレンチ		破片1	1
K	西側トレンチ		破片1	1
E	北側セクション		肋骨片2	2
A	包含層	下層	肋骨片1	1
B	包含層	上層上部	肋骨片1	1
		上層中部	肋骨片1	1
		上層下部	四肢骨破片1、肋骨片1	2
		中層上部	椎骨破片1	1
		中層中部泥炭層	上腕骨上破片1、肋骨片1	2
		中層下部	四肢骨破片2、破片1	3
		下層	四肢骨破片2、肋骨片3	5
C	包含層	上層	四肢骨破片1	1
		上層下部	肋骨片2	2
		中層中部泥炭層	四肢骨破片1	1
		中層下部	手足根骨破片1、肋骨片1	2
		下層	肋骨片2	2
E	包含層	上層	椎骨1若	1
		上層中部	四肢骨破片1、肋骨片1	2
		中層上部泥炭層	四肢骨破片1、破片1	2
		中層中部	肋骨片1	1
		下層	肋骨片1	1
G	包含層	中層上部	四肢骨破片1	1
		中層中部泥炭層	四肢骨破片1、破片2	3
M	包含層	上層	肋骨片2	2
その他			四肢骨破片2、肋骨片3、破片1	6
			計	67

註　表3・4参照。

表 11　シカ類 or イノシシ類出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
BC	溝 1	一括	四肢骨破片 9	9
BCEG	溝 3	一括	四肢骨破片 12、椎骨 1 若、肋骨片 5、破片 1	19
G	井戸 4 掘り方		四肢骨破片 1	1
ABC	土層確認トレンチ		四肢骨破片 6、椎骨破片 1、肋骨片 1	8
IL	北側トレンチ		四肢骨破片 1、肋骨片 2	3
G	南側セクション		四肢骨破片 1	1
A	包含層	中層下部泥炭層	四肢骨破片 1	1
B	包含層	上層	肋骨片 1	1
		上層下部	四肢骨破片 5	5
		中層上部	四肢骨破片 3、1 一部焼、肋骨片 2	6
		中層中部泥炭層	四肢骨破片 3、1 焼、肋骨片 2	6
		中層中部白礫層	四肢骨破片 1	1
		中層下部	四肢骨破片 1	1
		下層	四肢骨破片 2、肋骨片 3、破片 1	6
		不明	四肢骨破片 1 一部焼	1
C	包含層	上層	四肢骨破片 1	1
		上層下面	四肢骨破片 8、椎骨破片 2、肋骨片 3	13
		中層	椎骨 1	1
		中層中部泥炭層	四肢骨破片 2	2
		下層	肋骨片 1	1
D	包含層	中層	四肢骨破片 1	1
E	包含層	上層	四肢骨破片 2	2
		上層上部	肋骨片 1	1
		上層下部	四肢骨破片 3	3
		中層上部泥炭層	四肢骨破片 3、肋骨片 2	5
G	包含層	上層	四肢骨破片 1	1
		中層上部泥炭層	四肢骨破片 3、椎骨 1 若	4
		中層中部泥炭層	四肢骨破片 1	1
		中層下部	四肢骨破片 2	2
H	包含層	中層上部	四肢骨破片 1	1
K	包含層	中層上部	椎骨 1 若	1
N	包含層	上層	四肢骨破片 1、椎骨破片 1	2
その他			四肢骨破片 7、椎骨破片 1、肋骨片 11	19
計				130

註　表 4 参照。

表 12　陸獣出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
BG	溝 3	一括	破片 3	3
ABCG	土層確認トレンチ		破片 8	8
B	南側トレンチ		破片 1	1
B	包含層	上層下部	破片 3	3
		中層上部	破片 2	2
		中層中部泥炭層	破片 3、1 焼	4
C	包含層	上層	破片 3	3
		上層下部	破片 1	1
		中層下部	破片 1	1
D	包含層	中層	破片 5	5
E	包含層	上層黄緑砂層	破片 1	1
G	包含層	上層下部	破片 2	2
		中層中部泥炭層	破片 4	4
その他			破片 5	5
計				43

註　表 4 参照。

表 13　その他の哺乳類

発掘区	遺構・層位		種	部位・点数	計
C	包含層	中層	種不明陸獣	下顎左第 3 後臼歯 1	4
		下層	クマ	上腕骨左中 1	
E	包含層	不明	ウサギ	上腕骨左 1	
その他			中小陸獣	椎骨 1	
C	土層確認トレンチ		クジラ類？	破片 1	5
B	包含層	中層上部	クジラ類？	破片 1	
C	包含層	上層下面	海獣	破片 1	
E	包含層	上層	イルカ類	後頭骨破片 1	
G	包含層	上層上部	クジラ類	破片 1	
C	包含層	上層	陸獣 or 海獣	破片 2	3
G	包含層	上層下部	陸獣 or 海獣	破片 1	

註　表 3 参照。

表 14　ニワトリ各部位の長さ

部位	長さ
上腕骨①	64.4
尺骨①	72.0
脛骨①	108.6 ±
脛骨②	122.0 ±
脛骨③	129.0 ±
中足骨①	81.6
中足骨②	82.5
中足骨③	84.1

註　表 3 参照。計測値の単位は㎜で、± 付きの数値は近似値を示す。

表 15　イヌ頭蓋骨計測値

頭蓋骨 No.	最大頭蓋長 I ～ P	基底頭蓋長 B ～ P	顔長 P ～ N	吻幅 7 ～ 7	前頭幅 Ect ～ Ect	最小眼窩幅 Eat ～ Eat	最小前頭幅 fs ～ fs	頬骨弓幅 Zy ～ Zy	頭蓋幅 au ～ au	頭蓋幅 eu ～ eu	後頭部長 I ～ Br	後頭部高 B ～ Br	脳頭蓋長 I ～ N	前頭部長 Br ～ P	P4 長さ
①	—	141.4	81.1	30.7	37.4	27.5	27.8	90.1	56.5	54.8	—	—	—	—	16.5
②	—	—	—	—	43.3 ±	31.0 ±	32.0 ±	—	62.1	57.1	50.6	65.2	94.5	—	—
③	—	—	—	—	39.2	—	30.5	—	54.4	51.1	44.3	59.3	80.8	—	—
④	—	—	80.8	32.3 ±	—	—	—	—	—	—	—	—	—	125.4 ±	—
⑤	—	—	—	37.9	—	—	—	—	60.5	—	—	—	—	—	18.7

註　表 5 参照。計測点は斎藤（1963）に従った。計測値の単位は㎜で、± 付きの数値は近似値を示す。—：欠損のため計測不可。
5 個体とも最大頭蓋長は計測不可能だったため、推定体高は算出していない。

表 16　イヌ下顎骨計測値

下顎骨 No.	歯式	P2P3 間の高さ	P3 中央部での高さ	M1 中央部での高さ	M1M2 間での高さ	P3 中央部での厚さ	M1 中央部での厚さ	M2 中央部での厚さ	M1 長さ	下顎骨全長１	下顎骨全長２	推定体高（cm）
①	L（×××C×P234M12×）	20.5	22.4	25.4	24.8	12.5	13.3	13.9	20.0	135.7	135.5	47.7
②	L（×××CP1×P34M12×）	19.4	21.6	24.4	22.9	10.0	11.6	11.4	19.1	128.0	127.5	45.5
③	L（×××C××P34M123）	17.0	18.0	20.5	19.6	9.0	10.9	10.0	19.2	114.6	112.2	40.4
④	L（××××P1234M123）	18.5	20.6	24.3	24.7	9.6	11.4	11.8	20.2	—	—	—
⑤	L（×××××××M12×）	15.8	17.2	18.9	17.9	8.6	9.9	9.7	17.4	—	103.6±	37.0±
⑥	R（×××××P234M12×）	19.2	21.3	24.5	23.4	10.8	11.4	12.8	18.6	—	138.1	48.3
⑦	R（×××C××P34M12×）	18.6	20.9	23.9	24.0	10.2	12.4	13.2	20.1	134.4	134.4	47.4
⑧	R（××××××P34M1××）	19.5	21.6	25.4	24.8	10.9	12.6	12.3	19.7	132.9	132.8	47.0
⑨	R（×××C×P234M12×）	16.7	18.4	20.8	20.0	8.9	9.8	10.3	18.1	—	118.2	42.6
⑩	R（×I2×C×P234M12×）	16.8	17.8	17.8	18.9	8.6	11.1	9.8	19.1	115.6	113.2	40.8

註　表５・15 参照。計測値の単位は mm，推定体高の単位は cm で、± 付きの数値は近似値を示す。—：欠損のため計測不可。推定体高は下顎骨全長２の計測値から山内（1958）により算出した。

表 17　ウマ前臼歯・後臼歯の長さ・幅

	下顎骨①		下顎骨②	
	長さ	幅	長さ	幅
第２前臼歯	28.2	12.8	—	—
第３前臼歯	26.4	14.6	—	—
第４前臼歯	25.6	14.3	26.8	15.3
第１後臼歯	23.5	13.4	—	—
第２後臼歯	22.9	12.1±		
第３後臼歯	27.8	11.8		

註　表７参照。計測値の単位は mm で、± 付きの数値は近似値を示す。

表 18　ウマ四肢骨の長さと復元体高

	上腕骨	上腕骨から復元した体高	橈骨	橈骨から復元した体高	中手骨	中手骨から復元した体高
①	26.1	130.3	29.4	116.9	21.4	130.9
②	28.3	142.2	29.2	115.8	20.4	124.2
③	—	—	31.7	128.8	20.6	125.6

	脛骨	脛骨から復元した体高	中足骨	中足骨から復元した体高
①	31.7	122.5	23.6	117.5
②	31.7	122.5	27.1	134.4
③	30.9	118.1	23.7	118.0

註　表７参照。計測値と体高の単位は cm。体高復元は林田他（1957）による。

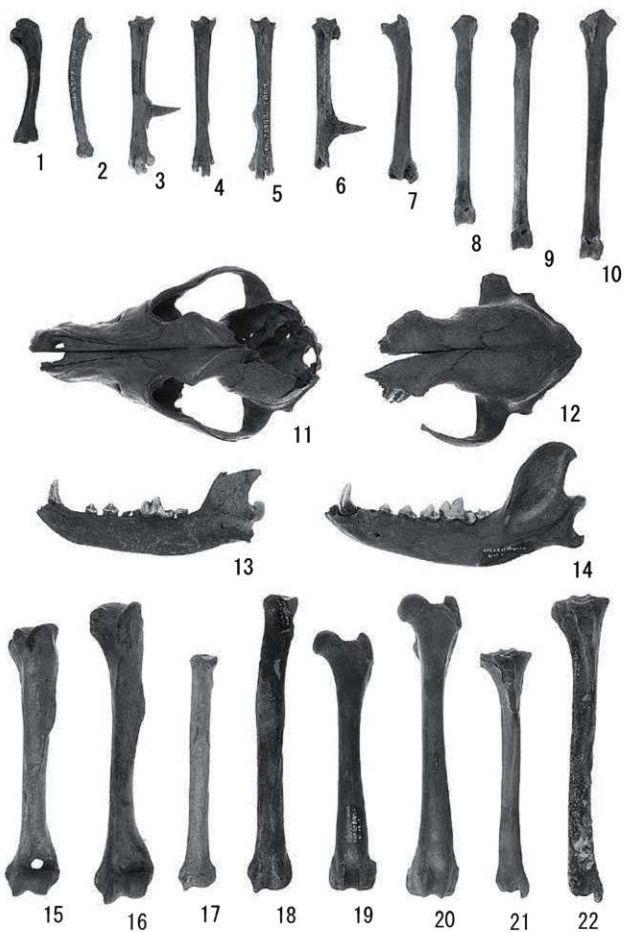


写真１　ニワトリ・イヌ（約 1/2）

１～10. ニワトリ（１. 上腕骨①、２. 尺骨、３. 中足骨①、４. 中足骨②、５. 中足骨③、６. 中足骨、７. 大腿骨、８. 脛骨①、９. 脛骨②、10. 脛骨③）　11 ～ 22. イヌ（11. 頭蓋骨①、12. 頭蓋骨②、13. 下顎骨⑨、14. 下顎骨①、15・16. 上腕骨、17・18. 橈骨、19・20. 大腿骨、21・22. 脛骨）　２・５・７・10・14 ～ 20 は左側、１・３・４・６・８・９・13・21・22 は右側　①～⑨の数字は出土内容表を参照

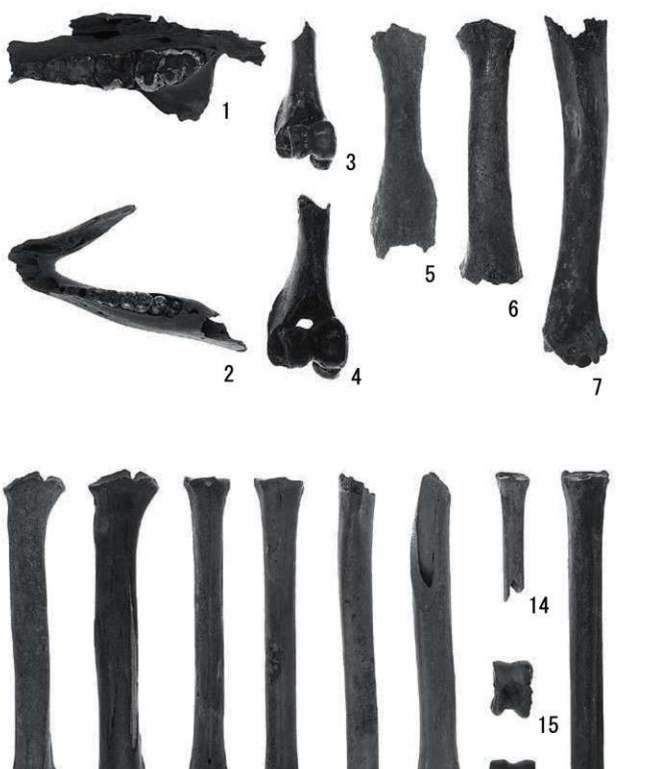


写真２　イノシシ類・シカ類（約 1/2）
１～７. イノシシ類（１. 上顎骨、２. 下顎骨、３・４. 上腕骨、５・６. 橈骨、７. 脛骨）８～17. シカ類（８・９. 橈骨、10・11. 中手骨、12・13. 脛骨、14・17. 中足骨、15・16. 距骨、12・14 は小型シカ、15 は小型シカ？、８～11・13・16・17 はニホンジカ）　８～13・16・17 は左側、１・３～７・14・15 は右側

写真３　ウシ・ウマ（約 1/2）
１～３．ウマ（１．下顎骨①左、２．上腕骨②右、３．中足骨②右）４・５．ウシ（４．中足骨右、５．脛骨右）
①～③の数字は出土内容表を参照

3．博多遺跡群出土資料の保存科学的調査について

比佐陽一郎

1．はじめに

博多遺跡群の発掘調査で出土した資料について、材質分析や製作技法推定のための保存科学的調査を行ったので、その結果を記す。保存科学的調査とは、考古資料を含む文化財に対して行われる自然科学的手法を用いた調査を指す。外形や色調といった肉眼観察で得られる情報の他に、材質分析の装置を用いた調査や顕微鏡あるいは透過X線観察によって、資料を構成する元素組成や製作技法などを知ることができる。その情報は、製品の産地や時代、更には流通などの検討に有益なものとなる。

今回対象とした資料は、博多遺跡群221次調査で出土した八花鏡、不明石製品、34次調査で出土した金銅製飾金具の３点である。鏡と石製品は12世紀後半と見られる遺構からの出土。金銅製品は井戸からの出土で、11世紀後半を上限とする中世前半の時期と推定されている。

2．調査の方法

調査は大きく観察と分析に分かれるが、それぞれ独立したものではなく各資料に対して連動して行い、情報を連携させながら資料に対する理解や同定（推定）の精度を高めることになる。

まず観察には構造調査と、細部の拡大調査がある。それぞれ透過X線撮影装置と、実体顕微鏡やレンズで拡大した像をデジタルのCCDカメラで捉えるデジタルマイクロスコープを使用した。分析は、画像によって結果が得られる観察とは異なり、波長や数値で解析を行うものである。今回行ったのは材質を知るための分析で、蛍光X線分析とX線回折分析である。

蛍光X線分析は、試料にX線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素に特有のエネルギー値を持つ二次X線＝蛍光X線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。ただし含まれる元素の量を正確に知るためには、あらかじめ分析対象となる元素を含む組成比の明らかな標準資料を分析し、対象資料の分析結果を校正する必要がある。更に埋蔵文化財の場合、埋蔵環境下で腐食などの要因によって組成比が変化したり、あるいは埋土など周辺環境の影響を受けて変質することが想定されるため、非破壊による表面分析の場合、資料本来の組成を正確に示しているとは限らない。これらのことから、得られた結果の取り扱い、解釈には注意が必要となる。分析可能な元素はナトリウム（Na）からウラン（U）までで、自ずと無機物、文化財では主に金属や鉱物、ガラスが対象となるが、金属に関してはその中でも非鉄金属の同定に有効である。

X線回折分析は、試料にX線を照射し、試料を構成する結晶から得られる回折X線を検出器で捉えピークとして表すものである。蛍光X線分析が含有元素の同定を行うのに対し、X線回折分析は結晶の種類や状態を知ることができる。ピークの同定は既知試料のデータベースと照合することで行う。

作業は福岡市埋蔵文化財センター設置の装置を用いて行った。使用した装置とその仕様は以下のとおりである。

- 透過X線撮影装置（YXLON・MG226）：出力10～225kV／焦点寸法：0.4mmφ／検出器：フラットパネル（有効寸法409.6×409.6（mm））
- 実体顕微鏡（Leica・MZ-6）：倍率6.3～40倍
- デジタルマイクロスコープ（Hirox・KH-8700）：倍率20～160倍

・エネルギー分散型微少部用蛍光X線分析装置（AMETEK・EDAX Orbis）：対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：30kV（石材）、50kV（金属）・電流値：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜、１㎜、２㎜φ（資料の状況によって使い分け）／測定時間180秒

・X線回折分析装置（Bruker-AXS・D8-DISCOVER）：対陰極：銅（Cu）／検出器：リアルタイム二次元検出器／印加電圧：40kV・電流値：40μA／測定角度13～107°／測定範囲0.5㎜φ／測定時間900秒

３．調査の結果

（１）八花鏡…221次調査出土

鏡は出土当初、埋土を取り込んだ固い錆に全体が覆われ、文様はほとんど見えなかった。メスを使って錆を剥がし取る物理的なクリーニングによって、ある程度の文様は観察できるようになったが、詳細な観察は困難な状況である。そのため、文様は透過X線撮影による把握が有効である。画像は図版１に示すとおりである。またクリーニング作業では、一部、本来の表面層が露出した部分もあり、やや沈んだ黄銅色を呈している。

蛍光X線による材質調査は、付着埋土の影響が少ないと見られる部分や特徴的な箇所、計３カ所を対象に行った。分析結果は、今回、標準資料を用いておらず、また腐食による組成の変化や埋土による影響が想定されることから定性的な表記にとどめる。３カ所とも共通して検出される元素としては、銅が最もピークが高く、次いで鉛、鉄、ヒ素が挙げられる。ヒ素は鉛と主要なピークが重複するが、Kβ線のピークからその存在を知ることができる。他に軽元素領域でアルミニウム、珪素、カルシウムといったピークも見られるが、これらは錆や埋土が多い部分でピークが明瞭で、付着物の無い鏡面部分ではほとんど検出されておらず、埋土に由来するものと判断できる。鉄も付着物の多い部分でピークが高くなるが、鏡面部分の分析でも明瞭に検出されており、元々の鏡の成分としても存在するものと考えられる。

（２）不明石製品…221次調査出土

色調は赤色の濃淡で構成され、形状も含め類例が無い。この資料については石材種の同定を目的として、蛍光X線分析、X線回折分析を行った。蛍光X線では検出ピークの高い順に珪素、アルミニウム、鉄、ストロンチウムとなっており、他に微弱なカルシウムも見られる。X線回折分析では、検出されたピークは既知のデータベースのカオリナイト（Kaolinite／$Al_2O_3 \cdot 2SiO_2 \cdot 2H_2O$）のデータとほぼ一致している。この結果は蛍光X線で検出された元素と矛盾するものではない。

（３）金銅製飾金具…34次調査出土

文様のある表面は金色、裏面は緑青色を呈しており、銅もしくは銅合金に金を加飾したものであることが推測される資料である。

顕微鏡による拡大観察では、文様の直線は毛彫りもしくは滑刻（なめくり）、曲線は蹴り彫り、円文は魚々子鑿によるものであることが分かる。材質については表面２カ所と裏面１箇所の蛍光X線分析を行った。表面の加飾部分では強い銅のピークと、他に金、鉛、更には鉄、ニッケル、珪素、カルシウムなどが見られる。裏面では金が検出されない他は共通する元素が多いが、金のピークが出ない分、ヒ素のKβ線が明瞭に見られるようになっている。この内、珪素とカルシウムは埋土の影響が想定される。鉄は地金、付着埋土、どちらにも含まれる可能性がある。これらの結果から、地金は銅を主成分として鉛、ヒ素、鉄、ニッケルが含まれる。加飾は金によるものであることは分かるが、伝統技法であるアマルガム鍍金を示す水銀が検出されていない点は大きな特徴として挙げられる。鍍金以外の

加飾方法としては、薄板を被せる、あるいは箔を漆で接着するなどの方法が考えられるが、観察では加飾と地金は一体化している様に見え、少なくとも金薄板被せの可能性は排除すべきと考える。しかしそれ以上の絞り込みは現状では行い得ない。

４．若干の考察

八花鏡は銅を主成分に鉛、ヒ素（、鉄）を含む合金であった。古代の唐式鏡の組成は、成瀬正和氏が正倉院に伝世する鏡の蛍光Ｘ線分析結果から、これらを次の３つの群に分類した。

Ａ群鏡：銅約70％、スズ約25％、鉛約５％からなる鏡。

Ｂ群鏡：銅約80％、スズ約20％、ヒ素１～３％からなる鏡。

Ｃ群鏡：銅、スズを主成分とし、ほかに鉛、ヒ素を少量含む鏡。化学組成的にはあまりまとまりがない。

その結果から、Ａ群鏡は唐からの舶載品、Ｂ群鏡は国産官営工房製鏡、Ｃ群鏡は国産私営工房製鏡と推定している。更に正倉院以外の鏡の分析結果から、Ａ～Ｃ群とは別に、アンチモンを多く（３～４％）含むもの（第４のタイプ）と、銅と鉛と若干のヒ素からなり、スズは意識して添加したとは思えないほどわずかに含むもの（第５のタイプ）を見出している（成瀬1999）。

これに当てはめると、博多221次出土の八花鏡は第５のタイプになる。このタイプは皇朝十二銭の隆平永宝（796年初鋳）の化学組成に共通することから、成瀬氏は銭貨を原料に鋳造された可能性を指摘している。

赤色の不明石製品は、カオリナイトで構成される石材という結果になった。カオリナイトは陶石の主成分であり、白色を呈するものが一般的である。形状や石材の特殊性は、中世博多の性格から考えると、本製品が海外からもたらされたものである可能性を示しているのかもしれない。

金銅製飾金具は、銅に鉛、ヒ素、ニッケル（、鉄）を含む地金に金を加飾したものであった。ニッケルは出土銅合金にはほとんど見られない元素であるが、ごく稀に検出される事例もある。原材料の特殊性を反映したものである可能性もあるが、現状、解釈に必要な手掛かりがほとんどない状況である。その評価は事例の増加や研究の進展を待ってすべきであろう。

また今回の調査では金加飾方法の解明には至らなかった。博多遺跡群では79次調査の536号遺構で同じように文様を彫った薄い銅合金の板に金を加飾した資料が２点出土している（大庭1996）。これら資料の蛍光Ｘ線分析も行ったが、地金は銅に鉛（、鉄）を含み、加飾は金であるものの、やはり水銀は検出されていない。79次の資料は13世紀後半の遺構からの出土である。このような資料が中世に一般的なのかも含め、当該期の金銅製品の加飾技法解明については、今後、更なる詳細調査や類例の調査が必要と考える。

（参考文献）

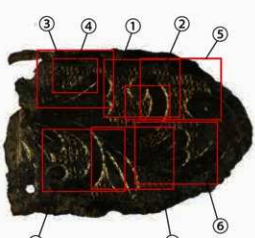
成瀬正和1999「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『日本の美術２　No. 393　古代の鏡』至文堂

大庭康時（編）1996『博多50－博多遺跡群第79次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第447集　福岡市教育委員会

（1）221次出土 八花鏡
（左下は透過X線像）

（2）221次出土 不明石製品

（3）34次出土 金銅製飾金具



（4）同左　デジタルマイクロスコープ画像撮影箇所

図版1　調査対象資料の画像（（4）以外は概ね実寸大）

①

②

③

④

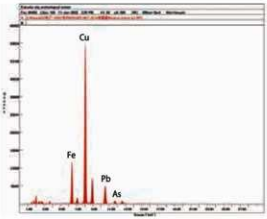
⑤

⑥

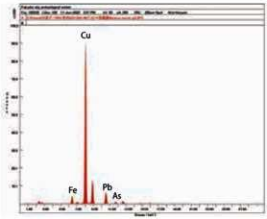
⑦

⑧

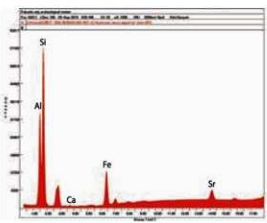
図版２　34次調査出土金銅製飾金具のデジタルマイクロスコープ画像



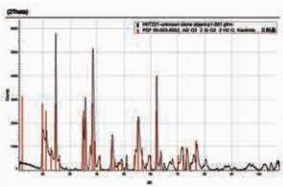
221次調査出土八花鏡　鏡背面（XRF）



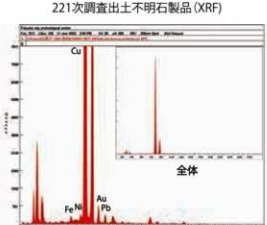
221次調査出土八花鏡　鏡面（XRF）



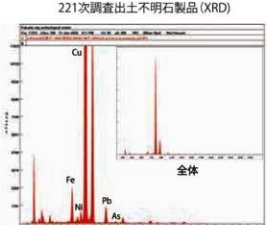
221次調査出土不明石製品（XRF）



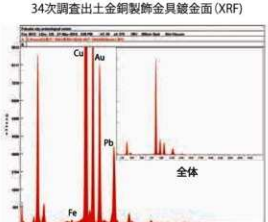
221次調査出土不明石製品（XRD）



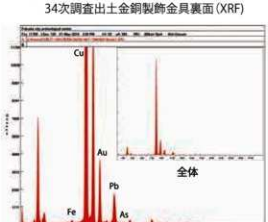
34次調査出土金銅製飾金具鍍金面（XRF）



34次調査出土金銅製飾金具裏面（XRF）



（参考）博多79次出土金銅製品925904050（XRF）



（参考）博多79次出土金銅製品925904051（XRF）

図版３　蛍光X線（XRF）・X線回折分析（XRD）の結果

Ⅷ　まとめ

中国の書にみられる法哈嗹、花旭塔津などは、博多（津）や博多湾岸をさす表記とされる。長元元（1028）年、博多湾の西北、北崎に着いた周良史『小右記』や永保二（1082）年、北崎浦で風待ちをした劉琨の記事『渡宋記』からは、博多津にかかわる宋商人の往来の一端が伺える。

11世紀中頃の永承二（1047）年、鴻臚館の故地にあったとされる「大宋国商客宿坊」の焼失を境に、宋商人の拠点が城内から博多遺跡群の南部、博多浜に移ったことが中国陶磁の分布から推察される。

靖康の変（1126年）を機に華北を失った宋は、杭州に都を遷した。12世紀中頃になると、博多出土の陶磁器の構成は白磁から青磁へと推移した。そして博多に居留した華僑のなかから綱首とよばれる有力商人が生まれた。

「太宰府博多津居留」ではじまる「寧波の三石碑」には、乾道三（1167）年、博多に居留する明州（寧波）に所縁のある丁瀾、張寧らが寺院の石敷道建設のため多額の銭を寄付した事跡が刻まれている。一方、博多で出土する寧波産の中国瓦は、彼らの精神的な拠所としての祠堂の存在を示唆する。「寧波の三石碑」は、宋人の功徳の背景に故郷への思いを彷彿させるものである。

2018年度の調査では博多浜の護岸とみられる石積の一部が検出された。11世紀後半に築かれた石積遺構が確認されたのは、今回がはじめてである。石積が築かれたのは、対外的に港の威容を示す目的と考えられたが、調査地を北東から俯瞰すると石積遺構の西側は那珂川の浸食を直接うける氾濫原であるため護岸の築造は港湾を維持管理する上でも必要だったことが伺える（巻頭図版３・４）。一方の櫛田神社一帯は、那珂川の延長上から外れるため直接水害をうけにくい立地を呈している（Ⅱ章図２）。

221次北東部に位置する14次調査では中国からもたらされた白磁の廃棄遺構が検出された。白磁廃棄遺構の画像は、その臨場感から中世博多繁栄の象徴として展示やメディアをとおして広く知られるようになった。221次調査では石積遺構上部の標高が1.6mで基底部の平坦面が1.3m程度であることが確認された。14次調査南東部では泥炭層（海側）と砂層（陸側）の境目が標高約1.3m～1.4mにあたることから北側にかけて汀線は連なっていたとみられる。

14次調査の泥炭層で検出された白磁廃棄遺構は、上面レベルは約1.2mであることから、廃棄遺構が泥炭層のとぎれる付近に位置していること、砂層の立ちあがりと石積遺構の基底部のレベルがほぼ一致することが今回の調査によって追認された。石積遺構は221次と14次調査地点の間のどこかで陸側に屈曲して完結すると推定するが、いずれ石積遺構北端の状況が明らかになることが期待される。

11世紀代から12世紀初頭にかけて機能した港湾施設は青磁が主体となる12世紀後半には主体を移している。その候補として那珂川河口近くの息浜西岸付近をあげることができる。155次調査では磁竈窯の盤や龍泉窯の双層碗が確認されている（市報告944集）。また232次調査では螺足文の脚をもつ梅園石系の石材を用いた石製台座が出土しており（市報告1421集）息浜において積荷の上げ下ろしや宋人の拠点があったことを示唆している。

本調査区で検出された港湾施設として機能した石積遺構は12世紀後半には洪水で埋没し、12世紀後半から13世紀にかけて陸地化が進んでいく。港に係る海浜祭祀が営まれ、生活域が形成され始め、13世紀ごろには安定した陸地となっている。この前後に大乗寺の寺院域に取り込まれたと考えられる。17世紀ごろ、寺院域にあった池は埋め立てられたが、寺院そのものは存続していった。

大乗寺は法皇山宝珠院と号する。寺伝によると大同元（806）年空海による開基といわれ、健治３（1277）年奈良西大寺の叡尊が再興し、亀山上皇の勅願寺となった。永禄８（1565）年頃に浄土宗、寛永21（1644）年福岡藩二代藩主黒田忠之が真言宗（京都仁和寺末）に改めた。寺地は東西五二間余・

南北四〇間と広大であった。門は初め東側大乗寺前町にあったが、天明６（1786）年御霊屋・観音堂の造替に際し堂宇を西向きとし、表門を新川端町の方に設けた。この様子は「筑前国続風土記附録（1795年ごろ）」や「筑前名所図会（文政４（1821）年）にも描かれている。大乗寺はこの後、大正９（1920）年に現中央区大手門１丁目の長宮院境内に合併され、移転した。現在は、冷泉小学校跡地に康永四（一三四五）年六月二四日銘がある地蔵菩薩像板碑や蒙古碇石が残っており、これらは福岡県指定文化財になっている。

以上のとおり、13世紀に西大寺の末寺として再興され、17世紀に黒田忠之により真言宗に改められた寺院の転機が遺跡の事象に合致すると思われる。

このように、鴻臚館から博多へと対外交流の場が移行し、港湾施設が築かれて宋人たちの往来が盛んになっていった様相から、亀山上皇の勅願寺を端緒とする寺院が築かれた過程の一端が今回の調査で明らかになった。石積遺構及び他の調査区の所見については今後の報告にて行う。

（参考文献）
「大乗寺跡」『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41巻、2004年
「博多出土の双層碗について」『MUSEUM』第694号、東京国立博物館、2021年

息浜（博多155次調査）出土の双層碗

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はかた 190
書　　名	博多 190
副　書　名	―博多遺跡群第 221 次調査報告(1) ―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1467 集
編 著 者 名	常松 幹雄（編）、井上 歯子、三浦 萌、下山 正一、新美 倫子、比佐 陽一郎、山崎 龍雄、池崎 謙二
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒 810-8621　福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
発 行 年 月 日	2023 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘 面積 ㎡	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群 221 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくかみかわばたまち 博多区上川端町	40132	0121	33°35′38″	130°24′34″	20180426 ～ 20180331	700	跡地活用事業
はかたいせきぐん 博多遺跡群 2 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくてんやまち 博多区店屋町 99	40132	0121	33°35′43″	130°24′34″	19790411 ～ 19790417	100	立会調査
はかたいせきぐん 博多遺跡群 14 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくてんやまち 博多区店屋町 4-15	40132	0121	33°35′42″	130°24′34″	19810710 ～ 19810813	255	記録保存調査
はかたいせきぐん 博多遺跡群 34 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくれいせんまち 博多区冷泉町 238-2 外	40132	0121	33°35′40″	130°24′44″	19861028 ～ 19861115	150	記録保存調査
はかたいせきぐん 博多遺跡群 54 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくれいせんまち 博多区冷泉町 2 丁目 128-2	40132	0121	33°35′38″	130°24′43″	19890710 ～ 19890711	99	立会調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 221 次調査	集落	中世・近世	石積護岸遺構、井戸、区画溝、土坑	中国陶磁・瓦・銅鏡・宋銭	Ⅰ区は那珂川の沿亀原。東側のⅡ区では石積の護岸遺構が検出された。
博多遺跡群 2 次調査	集落	中世後半・近世	井戸、包含層	中国陶磁・青銅製小仏・銅製箸	16 世紀の中国明王朝や朝鮮王朝の陶磁器がまとまって出土した。
博多遺跡群 14 次調査	集落	中世	溝・井戸・白磁廃棄遺構	白磁・中国陶磁・動物遺体・木製品	大量の白磁が出土した調査として知られる。博多浜北西隅部。
博多遺跡群 34 次調査	集落	中世	土坑・井戸・溝	白磁・金銅飾板	白磁の廃棄土坑。
博多遺跡群 54 次調査	集落	中世	溝	白磁・陶磁器・古代瓦・板碑	東西方向の溝。板碑がまとまって出土。

要　約

博多遺跡群は、博多浜と北側の沖ノ浜が大博通と明治通が交差する付近でつながっている。調査地は、博多浜の北西部、西側に緩やかに傾斜する標高1～2mの地点にあたる。

Ⅰ区：標高2mの第1・2面では近世の廃棄土坑と中世後半の東西方向に軸方向をもつ土坑が検出された。第3面では14世紀頃の区画溝が検出された。第4面でまとまって出土した動物遺体は、13世紀頃、調査区が陸化する段階で埋没したものとみられる。最終面の5面の粗砂層では弥生中期から古墳前期、古代の須恵器などが出土した。東側のⅡ区では11世紀後半に築かれた石積の護岸遺構の一部が検出された。

調査地周辺の様相を知るうえで注目される14次調査の所見をあわせて掲載した。221次調査で得られた所見から、中世博多の成立を解明するうえで貴重な所見を得ることができた。

博多 190
—博多遺跡群第 221 次調査報告(1) —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1467 集

令和 5 年 3 月 23 日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷　ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社

The General Report on the 221 Survey of Hakata Ruins

花卉双蝶文鏡

2023 Mar.

Board of Education of Fukuoka City

頁	行/図	誤	正
抄録		発掘期間　20180426~20180331	発掘期間　20180426~20190331